

ディドロの『セネカ論』(下)

—— 初版と第2版とに表現された著者の意識の構造にかんする考察 ——

中 川 久 定

序 論

1. 目的と方法
2. 研究史的回顧

本 論

第一部 テクストの批判

第Ⅰ章 原稿断片と諸版本

付論 翻 訳

第Ⅱ章 『セネカ論』初版—第2版比較テキストの編纂

第二部 『セネカ論』初版の意識の構造

第Ⅰ章 初版の成立

第Ⅱ章 セネカのための弁明

1. 告発された事実の否認(一)——事実の吟味
2. 告発された事実の否認(二)——告発者の人格の信憑性の吟味
3. 人間性のための弁明(一)——人間的弱点の容認
4. 人間性のための弁明(二)——裁かれる人間への自己投入

第Ⅲ章 セネカとの対話

1. 道 徳
2. 政 治
3. 過去の批判を媒介とした現在の批判と未来への期待

第Ⅳ章 ディドロの方法とモンテーニュの伝統

(以上前稿)

第三部 『セネカ論』第2版の意識の構造——初版の意識の構造との一致と差異

第Ⅰ章 第2版の成立

1. 初版の最初の反響
2. フロレンの攻撃
3. 第2版の出版

第Ⅱ章 セネカのための弁明から自己自身のための弁明へ

1. 初版の弁護原則の反復強調
2. 第2版固有の弁護原則——初版の弁護原則の精密化
3. 自己批判を媒介としたセネカ弁護から自己弁護への転化

第Ⅲ章 セネカとの対話から「後世」との対話へ

1. 道徳の探求と真理の認識
2. 政治的改革への幻滅
3. 過去を媒介とした現代の諷刺，同時代人への賛辞と攻撃
4. 永遠の秩序のなかへ

第四部 デイドロの生涯におけるソクラテスと「後世」の意味

第Ⅰ章 デイドロ訳プラトン『ソクラテスの弁明』，および『クリトン』（冒頭の一節）の校訂テキストの編纂

第Ⅱ章 徳行の模範としてのソクラテス

第Ⅲ章 作品にあらわれたソクラテスのイメージ

1. 哲学者としてのソクラテスのイメージ
2. ソクラテスの死のイメージ

第Ⅳ章 「後世」の意味

1. 『百科全書』の項目《不死》
2. ファルコネとの書簡論争における「後世」の意味

結 論

付 録 『セネカ論』第2版の反響

写 真 版

1. 『セネカ論』初版（全1巻），『セネカ論』第2版（全2巻）の各扉ページ
2. 『セネカ論』原稿断片（N. a. fr. 24932）
（15.5×20cm） p. 1
3. 同 上 p. 2
4. 同 上 p. 9
5. 同 上 p.10
6. デイドロ訳『ソクラテスの弁明』第1写稿M
（N. a. fr. 13753）（17×26.5cm） p. 1
7. 同 上 第2写稿V
（N. a. fr. 24937）（同 上） p. 1
8. 同 上 第3写稿D
（同 上 ）（同 上） p. 1

2 から 8 までの原稿を、『京都大学文学部研究紀要』に複写することを許可された、パリ国立図書館写真部にあつく感謝する（1973年8月30日付許可、参照番号 2096）。

引用した主要著作略号表

（前号への付加）

- DF : DIDEROT et FALCONET, *Correspondance—Les six premières lettres*, texte en partie inédit, établi et présenté avec variantes, notes et introduction par H. Dieckmann et J. Seznec, Frankfurt am Main, Vittorio Klostermann, 1959.
- ENC : *Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers par une société des gens de lettres*. Mis en ordre et publié par M. Diderot... et quant à la partie mathématique, par M. d'Alembert..., Paris, Briasson, David, Lebreton, Durand, 1751-1765, in-fol., 17 vol. (plus les planches).
- INV : *Inventaire du fonds Vandeul et inédits de Diderot*, publiés par H. Dieckmann, Genève, Librairie Droz, 1951.
- L : D. DIDEROT, *Œuvres complètes*, édition chronologique, introduction de R. Lewinter, Paris, Le Club français du livre, 1969-1973, 15 vol.
- NR : D. DIDEROT, *Le Neveu de Rameau*, édition critique avec notes et lexique par J. Fabre, Genève, Librairie Droz, 1950.
- QC : D. DIDEROT, *Quatre Contes*, édition critique avec notes et lexique par J. Proust, Genève, Librairie Droz, 1964.
- SAL : D. DIDEROT, *Salons*, texte établi et présenté par J. Seznec et J. Adhémar, Oxford, Clarendon Press, 1957-1967, 4 vol.
- SM : D. DIDEROT, *Lettres sur les sourds et muets*, édition commentée et présentée par P. H. Mayer, avec préface de Otis Fellows et Georges May, *Diderot Studies VII*, Genève, Librairie Droz, 1965.
- SV : D. DIDEROT, *Lettres à Sophie Volland*, textes publiés d'après les manuscrits originaux avec une introduction, des variantes et des notes par A. Babelon, Paris, Gallimard, 10^e édition.

第三部 『セネカ論』第2版の意識の構造

——初版の意識の構造との一致と差異

第1章 第2版の成立

1. 初版の最初の反響

紹介と賛辞 『セネカ論』初版が、1778年12月に出版されるや、ディドロの敵と味方の両陣営からたちまち大きな反響がまきおこった。

『文芸通信』のメーステールの紹介記事——『セネカ論』初版が出版されるまでに、すでに校正刷を読了していたメーステールが、まず、最初の好意的な紹介を『文芸通信』1778年12月号に発表する。すなわち「ディドロ氏著『哲学者セネカの生涯と著作、およびクラウディウスとネロの治世論』。故ラ・グランジュ氏の新訳セネカ著作集、編者ネジョン氏による『注釈』付き。パリ、全1巻、12判型」である¹⁾。

メーステールは、この紹介文の冒頭で、『セネカ論』初版の意図を次のように説明している。——この作品は、元来、ラ・グランジュ訳『セネカ著作集』の序文として書かれるはずだったのであるが、主題の重要性にひきずられて一冊の本にまでふくれあがってしまったのである。第一部（「セネカの生涯と公的活動」）と第二部（「彼の著作のもっとも興味深い分析」）を通して、著者は「時代の精神や風俗と戦う」セネカの姿を描きだす。著者の意図は、この描写を通して、セネカを「弁護」することであるが、どうしても「弁護」しきれないところは、少なくとも「読者に容赦させ」ようと試みている、と。

ついでメーステールは、この作品から、次の3つのかなり長文の引用をおこなって、ディドロの発想、文体の特徴の実態を読者に示している。——第1、セネカがネロの名で執筆したアグリッピーナ殺害弁明書にかんして、セネカの立場を弁護した一節、第2、ディドロが、自分の文体の特徴について語った、作品冒頭のネジョンへの献辞の一節。彼はそこで、自分の文章は一見支離滅裂な印象を読者に与えるかもしれないが、内面の思考は一貫した連続性をもっていると強調している。

第3、最後に筆者メーステールは『セネカ論』初版のテキストに編者ネジョンがつけたひとつの「長い平凡な注」に婉曲な批判を加えている。彼はいう。ネジョンは、この注において、J.-J. ルソーの「文学的才能」を、もっぱら「詭弁家、美辞麗句を並べたてる雄弁家の、軽蔑すべき才能」に還元しようとやっきになっているが、これはルソーを「足で蹴とばす」ようなやり口ではなからうか、と。

このメーステールが引用した3つの箇所がそれぞれはらんでいる中心問題——ディドロの特異な書き方（外面的な脈略の欠如と内面的な筋の統一）、アグリッピーナ殺害の弁明者セネカのための

1) CORR LIT, t. XII, pp. 194-198. グリムは、1733年以来、『文芸通信』の編集をメーステールに譲っている。

弁護、ルソーへの非難——は、やがてディドロの敵方のはげしい非難にさらされることになる。

ネッケル夫人の感想——メースタールの『文芸通信』の記事のほぼ前後、とヴァルロットが推定する時期（ただし正確な日付は不明）に¹⁾、ネッケル夫人は、次のような『セネカ論』初版の読後感を残している²⁾（『ネッケル夫人雑録』所収）。

私は『セネカの生涯』を夢中になって読んだ。〔……〕この哲学者〔セネカ〕の文体には輝きと色合いとが欠けていた。彼の歴史家〔ディドロ〕は、セネカの文体にこの欠けていたものを付与したが、そのために結局彼の文体の真の姿を消しさることになってしまった。それは、セネカの文体をよみがえらせるかにみえて、結局それを滅すことであった。ところでこの2人〔セネカとディドロ〕の比較によって、セネカはわれわれの眼に新たな価値を獲得する。すなわち、毎日、諸世紀の遺産をむさぼり食う寄食者の大群〔天才の能力を酷使する編集者たち〕から、ディドロ氏の時間と思想の一部をもぎとったという価値である。

ネッケル夫人の感想は、『セネカ論』初版にかんする一般的評価であって、その具体的な内容にはほとんど触れていない。

『メルキュール・ド・フランス』のマルモンテルの紹介文——ついで、ディドロと百科全書派の擁護者であるマルモンテルの手になる『セネカ論』初版の好意的紹介文が、『メルキュール・ド・フランス』1778年12月15日号、同月25日号に掲載される³⁾。すなわち「『哲学者セネカの生涯と治世、およびクラウディウスとネロの治世論』（12判型、パリ、フレール・ド・ビュール書店発行）抄録」（25ページ）、および「『セネカの生涯と治世論』続篇」（20ページ）がこれである。（これとは別に、マルモンテルは当時のジャーナリストたちのさまざまな『セネカ論』初版非難に反駁する文章をのちになってから執筆する。この反駁文は『セネカ論』第2版第109章に、ディドロの補足的意見を加えたうえで収録されている。後述。）

マルモンテルは、前篇（12月15日号）において、『セネカ論』初版の前半「セネカの生涯論」を、後篇（12月25日号）において、同書の後半「セネカの著作論」をそれぞれとりあげ、長い引用文を随所にまじえながらこの作品を紹介、批評している。前篇、後篇を通じて、書評者の関心は、『セネカ論』初版におけるディドロの意図を擁護することにむけられている。

まず、「セネカの生涯論」の書評のなかでは、次のようにいう⁴⁾。「このようにして、セネカの弁護者は、賢者のなかに常に人間を見ている。そして賢者のなかに英雄しか見ようとしないひとたちにむかって、彼を裁くまえに、まず彼の立場に身を置いてみよ、とすすめている。」

1) CORR, t. XV, p. 129, note 9.

2) 引用は、ヴァルロットによる。CORR, t. XV, p. 129.

3) *Mercure de France*, 15 décembre 1778, pp. 136-160 ; 25 décembre 1778, pp. 275-294.

4) *Ibid.*, 15 décembre 1778, p. 143.

また「セネカの著作論」の書評においては、ディドロの弁明にもかかわらず、「財産も生命も、死も軽蔑していた人間〔セネカ〕が、いったいどのようにして、親殺しの暴君〔ネロ〕の奴隷となり、この極悪非道の大罪を糊塗するためにペンを貸したのか」と執拗に問いつめてくる「きわめて気むづかしい批評家」の存在を予想して、こういう¹⁾。「この哲学者〔セネカ〕において、人間としての意志がより強固なこともあれば、そうでないこともあったし、より薄弱なこともあれば、そうでないこともあった。だがいずれにせよ、彼の著作の性格は、彼の人間としての性格からは独立している。〔ディドロが〕われわれにモデルとして提出しているのは、セネカの振舞いではなくて、彼の教えなのだ。セネカはもういないが、著作は残っている。彼について知らねばならないのは、彼が事実有徳であったかどうかということではなく、彼がわれわれに有徳であれと教えたかどうかということである。」

マルモンテルは、このように、きわめて好意的な立場から、『セネカ論』の重要箇所を、抜粋によって紹介するとともに、ディドロの意図とその成功に賛辞を呈し、特に前篇の末尾では、こう書いている²⁾。——読者はセネカの「歴史家」ディドロのうちにも、セネカの「弁護者」ディドロのうちにも、ともに、「深みのある人物、感じやすいひと、哲学者、大著作家を発見するであろう」と。

当時のディドロにかんする記録（ガラのディドロ会見記）——ヴァルロットの推測によれば、ほぼこの頃（1778年12月前後）、ガラが、ディドロをはじめて訪問する³⁾。ガラによるディドロ会見記は、『メルキュール・ド・フランス』1779年1月15日号に発表される。この記事は、当時のディドロの精神的・肉体的状況のみならず、彼の気質の基本的な特徴——ある問題に精神が触発されると、すぐに忘我的な精神の高揚にとりつかれるという特徴——を示す貴重な記録であるから、ここで一瞥しておこう⁴⁾。

その当時ガラは、本を執筆するために、あるいなか屋の一室を仕事場に借りて、そこに移った。ところが驚いたことに、すぐ隣の部屋をあの高名なディドロが原稿を書くために使っているというではないか。そこで青年は翌日予告なしに、この老哲学者を訪問する。だがディドロは、初対面のガラを見ても、夜があけて「太陽が昇るのを見たほどにも驚かない」。ガラのほうから訪問の理由をのべたり、文学の話がしたくて伺いましたなどと切りだすまでもなく、老人のほうは一切を察してくれる。

それ〔文学〕が問題になりはじめるや、彼は立ちあがって、視線を私のほうに向けた。だが、私の姿など全然眼にはいっていないことは明らかだった。彼は話しはじめた。ところが最初はあまり低い声で、おまけに早口だったので、彼のすぐそばに、それも体がくつつくほ

1) *Ibid.*, 25 décembre 1778, p. 292.

2) *Ibid.*, 15 décembre 1778, p. 160.

3) *CORR*, t. XV, p. 129.

4) *CORR*, t. XV, pp. 130-131; *AT*, t. I, pp. xxi-xxii.

ど近くにいたのに、話は聞こえず、なにをいっているのかさっぱりわからなかった。しかしすぐに、この場で私が果すべき役割は黙って彼を賛美することだけだということに気づいた。お易い御用だ。やがて彼の声は次第に高まり、歯切れよく、朗々と響きわたりはじめる。最初は身じろぎひとつしなかったのに、やがて身ぶりがはじまり、それがひんぱんになって、活気をおびてくる。彼は、一瞬、ちらっと私に眼をとめただけだった。彼と私が椅子から立ちあがると、彼は私の体に腕をまきつけ、今度は2人が腰をおろすと、彼は私の腿を、まるで自分の腿のように、ぽんぽんと打つのだった。止まることを知らぬ軽やかな話の流れが、法律という言葉が発するや、彼はたちまち、ひとつの立法草案を語ってきかせる。演劇ということばを発するや、たちまち、6篇の喜劇、悲劇の構想を説明して、さあどれがいいかね、という。

こうして、ディドロの話は、連想の糸をたどって、次から次へと発展していく。――演劇における情景描写の必要性を語るや、直ちに「古代における最高の情景描写の名手」タキトゥスと彼の『年代記』、『同時代史』のことを想起する。そしてこう続ける。タキトゥスのこの2大傑作を、古代彫刻の傑作とともに破壊し、埋没させた野蛮人の行為は、なんという極悪非道であろうか。ディドロは、失われた古代の美を愛惜しつつ涙を流す。しかし今や、イタリアではヘルクラヌムの遺跡の発掘がはじまっている。ひょっとするとそこから『年代記』や『同時代史』の散逸した部分が発見されるかもしれない。すると「たちまちこの希望が彼を有頂点にする」。それにしても無知な人間が発掘作業に従事してきたために、どれほど多くの傑作が、今までに傷つけられてしまったことだろう。ディドロはこう憤懣をもらしたあと、まるでイタリア人技師のように、さまざまな発掘技術についての蘊蓄を傾ける。話はイタリアの古代、アテナイの芸術・文化、レリウスとスキピオの時代に飛び、即座にテレンティウスの一場を演じてみせる。ホラティウスの歌を次々とうたったかと思うと、ディドロ自身がある夜会の席で即興につくったという「優雅さと機知にみちた歌」をうたい、そのあときわめて愉快的喜劇のせりふを語ってみせる。その時、大勢のひとたちが、彼の部屋にはいってくる。

「押したり引いたりする椅子の音で、彼は興奮からさめ、独語をやめた。みんなの真ん中に私がいるのに気がつき、まるで昔会って楽しかった人物に再会した時のような様子で私に近づいてきた。」そして急に、今まで法律や演劇や歴史の話をしていたことに気づく。それから、今日の二人の会話はとても有益だった、これからも交際を続けていこうと約束し、最後に「本当の苦悩」にみだされて、握りしめた私の手から、自分の手をもぎはなすのであった。

このガラの記事にたいして、ディドロは、『セネカ論』第2版（第109章、18°）のなかで好意的な感想を発表している¹⁾。

1) CN, t. II, p. 300; HN, t. II, pp. 196-197; AT, p. 392.

われわれの最初の会見にかんするこの面白い話のなかには、真実がある。私はそのなかに自分自身を認め、軽いニスのような詩的諷刺に笑わせられた。彼〔ガラ〕は、このニスを話全体に塗りつけて、その面白味をましている。読者はきっと私が風変わりな人物だと思うだろう。だが次のようなことがいったい、それほど大きな欠点だろうか。ひとびとの集まりのなかで絶えず動きまわりながらも、自然の痕跡をそのまま残してきたということが。あるいはまた、ごつごつしたかどがいくつもあるために、どんな海岸にもごろごろしている、無数の、どれもこれも似たような平たい石ころとすっかり違って見えるということが。

最後にディドロは、今でもやはりガラには親近感を抱いており、もし彼が望むなら、もう一度会見記のモデルになってもかまわないと付言している。（この感想は、ディドロが『セネカ論』第2版で、当時のジャーナリストたちの無礼な批評法を非難した箇所に、彼らの悪意と、ガラの好意的な態度とを対比する形で挿入されている。）

ディドロにたいする攻撃の準備 1779年にはいると、ディドロは友人レナル神父『両インド史』の改訂作業に協力しはじめる（ディドロの協力によって完成したのが、同書1780年版である）。しかしこの間、ディドロの気づかぬうちに、『セネカ論』初版にたいする攻撃が、各方面で準備されはじめていた。

まずメトラ『秘密通信』は、1月9日付の記事のなかで次のように報じている¹⁾。

聖職者たちは、そこ〔『セネカ論』初版〕に、耳ざわりな思想を発見した。そして、ソルボンヌ〔パリ大学神学部〕は、目下問題の書物の検閲に専念しており、著者と検閲官〔コクレ・ド・ジョスピエール〕を雷撃しようと準備している。

ただしメトラは、「現今の哲学者の世紀においては、ソルボンヌのはげしい非難をうければ、〔そのひとは〕確実に有名になる権利をうる」に違いないと、逆説的な憂慮を同時に表明している。（このメトラの記事にもかかわらず、『セネカ論』初版にかんしては、「雷撃」は「準備」だけにとどまり、実現することはなかった。）

さらにメトラは、付言している。「すべてのひと」が、ルソーにかんする注におけるディドロの態度、すなわち「故人を侮辱する卑怯さと卑劣さ」にたいして、「怒りの声」をあげている、と。このメトラのことは、ルソーに同情をよせていた、一部の貴族やブルジョワのサロンの声を代弁したものであった。

2. フレロンの攻撃

『文学年報』1779年、第26巻、「第2信」 『セネカ論』初版にたいする、公然たる、しかも徹

1) 引用は、ヴァルロットによる。CORR, t. XV, pp. 134-135.

底的な攻撃が、スタニスラス＝ルイ＝マリ・フレロンによって開始される。これは、彼が父親エリ＝カトリーヌ・フレロンの死（1776年3月18日）後、編集の責任を引き継いだ定期刊行物『文学年報』1779年、第26巻、「第2信」¹⁾（1月9日号）と同年、同巻「第4信」²⁾（1月17日号）とに分割して掲載された。フレロンは、まず「第2信」において、『セネカ論』初版の主人公セネカに、ついで「第4信」において、その著者ディドロに批判を加えている。以下この2つの書評におけるフレロンの論点を順次検討していこう。

「第2信」の問題は3つに分かれる。――(1)『セネカ論』初版執筆の動機の推定、(2)セネカの言説と行為との間の矛盾の批判、(3)セネカの人間的欠陥の批判、の3つである。フレロンは、上記3点の検討を通して、『セネカ論』初版におけるディドロのセネカ弁護の不当性を立証しようとしている。

(1)『セネカ論』初版の執筆の動機の推定

1778年にラ・グランジュ訳『セネカ著作集』が出版された時、すでにフレロンは『文芸通信』、1778年、第3巻、「第13信」³⁾（日付なし）と同年、第4巻、「第4信」⁴⁾（日付なし）の二度にわたって、その書評を連載していた。

この1778年の書評は、原著者セネカ、翻訳者ラ・グランジュ、編注者ネジョンの3者にたいしてきわめてきびしい評価をくだしていた。すなわち、セネカは、「なるほど、非常に機知があることは確かだが、それにしてもまことに拙劣な作家である。自然さもなければ、優雅さもない。対句、驚句、洒落をつめこんでいる。読むとうんざりしてくるし、単調だ。――一見簡明なようだが実は冗長だ。いつも目立つことだけを気にかけている。思想の表現にこり、それを繊細にしようとする余り、結局はだいなしにしてしまう」と批評されていた⁵⁾。またラ・グランジュの翻訳にかんしては、彼が早世して、十分な推敲ができなかったということ、あるいは翻訳には必ず不注意の誤りがいりこみうる、ということは容認するとしても、「翻訳者が十分なラテン語の知識をもっている時には、この種の〔ラ・グランジュが犯したような〕誤りが起こることは、ほとんどありえない」とまでいいきっていた⁶⁾。さらに編者ネジョンについては、ラ・グランジュの翻訳の「とんでもない大間違い」を訂正するべきであったのに、それをしなかったのは、彼ら「現代の哲学者」は、古代文学のことをほとんど知らず、いわんやラテン語にいたっては、彼らの大半の者には、「高地ドイツ語」のごとく理解不可能な言語であったからであると断定し、さらにこう続けていたのである⁷⁾。

なるほど、彼らが地味で見ばえのしない勉強に専心する暇をほとんどもっていないという

1) *L'Année littéraire*, Paris, Chez Mérigot le jeune, 1779, t. I, «Lettre II», pp. 36-70.

2) *Ibid.*, 1779, t. I, «Lettre IV», pp. 104-136.

3) *Ibid.*, 1778, t. III, «Lettre XIII», pp. 289-327.

4) *Ibid.*, 1778, t. IV, «Lettre IV», pp. 73-112.

5) *Ibid.*, 1778, t. IV, «Lettre IV», p. 111.

6) *Ibid.*

7) *Ibid.*, p. 112.

のは本当だ。自分たちの評判を高めるのにもっとききめのある陰謀にふけったり、社交界にしきりに顔を出したりしては、お偉方や金満家の食卓で名声をあさっている。それというのも、この連中は書斎の仕事によっては、とても名声などえられそうにないからだ。

そして、フレロンはこう結論していた。——彼ら哲学者は少なくとも自分の無知をかくすぐらいの「巧妙さ」をもっていなければいけない。彼らはラテン作家が理解できないのだから、せめて理解できないものだけは翻訳しないという「慎重」さをもつべきであった、と。これが、フレロンのラ・グランジュ訳『セネカ著作集』にたいする1778年の書評の結論であった。

フレロンは、『文学年報』、1779年、第26巻、「第2信」において、まずこの1年前の自分の書評に言及し、ディドロが『セネカ論』初版を執筆するにいたった動機は、この書評にたいする「復讐」心であったと推定している。彼はいう¹⁾。

この批評〔フレロン自身の1778年の書評〕の賢明な判断と公平な立場にもかかわらず、それは現代の思想家の眼に、哲学にたいする、この上ない大逆罪と映ったのである。哲学の元老院〔ディドロとその仲間〕は、この罪に戦慄した。『百科全書』派の雷鳴をとどろかすユピテル〔ディドロ〕は、この犯罪に復讐するために、すべての雷電の槍で武装した。4ページの批評〔ただし、フレロンのこの書評は、実際は、第3巻、「第13信」、第4巻、「第4信」とを合計すれば、79ページであった〕が、1巻の返答、あるいは悪口〔『セネカ論』初版1巻〕を生みだしたのである〔傍点は、原文イタリック体の語〕。

フレロンの今度の書評は、この「1巻の解答、あるいは悪口」に答えることを意図しており、彼によれば、「セネカの血気にはやった弁護者によって積みあげられた詭弁と、誤った申立てと危険な道徳律とのまとまりのない堆積」をひっくりかえすには、わずか数ページの批評で充分である、という。

(2) セネカの言説と行為との間の矛盾の批判

(-)「貧困を説く使徒」でありながら「富の奴隷」であったという矛盾。——フレロンによれば、セネカは財産をふやすためには手段を選ばなかった。「卑しいへつらい、犯罪的な〔ネロへの〕親切、遺言書の詐取〔遺産相続人がないひとの遺言書に相続人としてセネカの名前を記入させること〕、途方もない高利による貸付け」によって、彼は貧困から「現行貨幣にして4億〔フラン〕」の大金持になりあがった、という²⁾。

フレロンも、もちろんこれらの事実の一部は、スイッリウス、ディオソ、クシフィリヌスによってしか確認されていないことは認めている。だが彼らの証言が信用できないと、どうして断言でき

1) *Ibid.*, 1779, t. I, «Lettre II», pp. 37-38.

2) *Ibid.*, p. 38.

のか。ディドロは、彼ら3人を、「人間中最大の極悪人」と称するが、それは彼らがセネカにとって不名誉な事実を後世に伝えたという、ただそれだけの理由によるのではないのか、と反論するのである¹⁾。

フレロンはさらに続ける。スイッリウスが元老院に召喚された時、自己弁護のために猛然とセネカの罪——「相続人のないひとびとの遺言状と財産をまきあげ」、「イタリアと属州〔ブリタニア〕の金をしばりとした」罪——を告発したあの有名な演説はネロとセネカ自身の面前で行なわれたものであった。それにもかかわらず、セネカは、ひと言の釈明すら試みていない。またタキトゥスさえ、このスイッリウスの告発演説を記録するだけで、その内容を否定しておらず、ディオンのように、彼の時代にいたるまで世人の記憶から消えていなかったこれらの事実を、忠実に報告している。フレロンは続けて、かりにセネカの財産が、完全に正当な手段で獲得されたものであったとしても、彼の「巨大な富」と彼の「貧困にたいする誇張した贅辞」とを両立させることは困難だと重ねて強調する²⁾。

もちろんディドロは、最初からこのような反論を予想しており、『セネカ論』初版のなかで次のようにのべていた。「ネロほど絶対的で、残酷な皇帝の意志に逆らうことが、どれほど危険かということを、ひとは考えてもみない。もしも〔ネロの贈物を〕拒否すれば、彼はそれを自分にたいする侮辱ととっただろう」と。すなわちディドロは、セネカが富を軽蔑しながら、ネロの贈物をうけとり続けたのは、もっぱら「死の恐怖」からであると説明していたのである³⁾。

これにたいしてフレロンは、次のように反論する。——第1、ネロが「狂暴な本性」をあらわすのは、即位後5年たってからである。それまでの4年間に、セネカは「化金石」の秘密を発見して「3億セステルス」を貯めこんだのだろうか。（フレロンは、この「化金石」の秘密は、「一部分彼〔セネカ〕の後継者」に伝えられている、とここで付言している。いうまでもなく、エカテリーナ2世から年金をえているディドロや、フリードリヒ2世から援助をうけているダランベールへのあてこすりである。）第2、ネロの贈物を断わって殺されたひとが今までにいたのだろうか。逆にネロは、財産を奪わんがために、無実のひとを殺しているではないか。第3、ネロの宮廷を凌駕するほど豪荘な「4軒の別荘」を所有し、無数の奴隷を「もっとも絢爛たる衣服」でよそおわせ、妻の耳には、「大金持の一家の財産に相当するほどに高価な耳飾り」をつけさせ、家具と食事に贅沢の限りをつくし、食卓の肉を切りわけするためだけに、肉切の名人を多数集めたのは、「死の恐怖」からだったのか⁴⁾（フレロンは、これらの事実を、すべてセネカ自身の書物のなかに記録されていると強調する⁵⁾）。

事実はディドロの主張の逆である、とフレロンは断言する。まさにセネカの富こそが、彼の死を招き寄せたのである。フレロンはさらにいう。ディドロは、タキトゥスに依拠して、ネロに贈物を

1) *Ibid.*, p. 39.

2) *Ibid.*, pp. 39-41.

3) *Ibid.*, pp. 41-42.

4) *Ibid.*, pp. 42-43.

5) *Ibid.*, p. 43, note(*). セネカ『幸福な生活について』第XVIII章—第XXI章。

返そうとするセネカと、セネカに贈物をうけとらせようとするネロとの間に生じた「争」の場面をもちだし、これを証拠にしてセネカの「無欲」をいい張るだろう。しかし、セネカが突如として富への嫌悪を示しはじめたのは、彼に敵対するひとびとが、彼の巨大な富は犯罪的であるとネロに訴えたからである。もしセネカの財産嫌いが真実のものであるなら、なぜそれを貧民に分ち与え、自分の道徳律の模範を身をもって示さなかったのか。ド・サン『名誉論』が正当にも主張するように、「自分の意志に反して、巨富を手に入れ、ためこみ、保持することはいえぬ」と¹⁾。

(二)『ヘルウィア慰藉文』と『ポリュビウス慰藉文』との間の矛盾。——フレロンは、「人間性を越えて見えるほどの力」と「堅忍不拔の精神」を誇示した前者と「子どもの弱さと奴隷の卑しさ」とをむきだしにした後者との間の矛盾をどう理解すればいいのか、とディドロに問いかける²⁾。

弟の死を悲しむポリュビウスをなぐさめて、セネカはこういっている。「なんということでしょう。神〔クラウディウス帝〕をすぐまえに見ながらポリュビウス様の御眼の涙は、乾かないのでございましょうか。」このことばを読んだフレロンは、現存の皇帝クラウディウスを「神」と呼ぶとは、なんという卑しいへつらいであろうか、と驚きあきれる³⁾。

確かにディドロは、この矛盾を回避するために、さまざまな論拠をあげて、『ポリュビウス弁護論』が、「セネカの敵の詐欺師の作品」であることを証明しようとするのであるが、フレロンはこれにたいして逐一反駁を加えていく。——第1、ディドロは、この作にはセネカの「趣味と天才」とが認められないという。しかし、フレロンは反論する。1600年間、あらゆる権威ある専門家からセネカの著作であると承認されてきたこの書を、ラテン語の正しい読解力さえもないディドロが否認したところで、そんなことをいったい誰が信用しようか、と⁴⁾。（なお、フレロンはこの書評の続篇において、ディドロのラテン語読解力の有無を具体的に検討している。後述。）

第2、ディドロはまたいう。セネカは、皇帝クラウディウスの死後、辛辣な諷刺文『〔クラウディウスの〕かぼちゃへの変貌』を書いてこの皇帝を愚弄した。だから彼はあの卑屈な『ポリュビウス慰藉文』の作者であるはずがない、と。しかし、これにたいしてもフレロンは反論する。ディドロは、セネカが悲劇『メディア』のなかで、ブリタンニアの征服者クラウディウスを称え、「地上の神」と呼んでいたことを忘れている。また、『クラウディウスの追悼の辞』のなかで、彼を神格化していたことを無視している。このように、ことあるごとにクラウディウスを神とあがめたセネカが卑屈な『ポリュビウス慰藉文』を執筆したということは、なんら不思議でない、とフレロンは断定する⁵⁾。

第3、ディドロは『セネカ論』初版のなかで次のように書いていた。セネカは「波濤に洗われたコルシカの島と岩礁の上で、皇帝の憐みをひくために、自分の悲惨さを誇張した」。それなのに、「鳥の綿毛でふかふかしたクッションに、なんのくったくもなく身を横たえて、腹ごなし」をしな

1) *Ibid.*, pp.43-45.

2) *Ibid.*, pp.45-46.

3) *Ibid.*, p.46.

4) *Ibid.*, p.47.

5) *Ibid.*, pp.48-49.

がら、「われわれはセネカを裁くのだ」。「批評家諸氏よ。そんなにきびしい態度をとってはいけない。」なぜなら諸氏がセネカ以上に立派であるとは思えないからだ、と¹⁾。

これにたいしてフレロンは、ディドロの上のことばをそのまま引用したうえ、こう反撃する。「それならばいったい、あの賢者の堅忍不拔の精神はどこへいったのか。」「われわれの古代・近代のセネカたち」は、「ばらの花を敷きつめたベッドか、鳥の綿毛でふかふかしたクッションに、なんのくったくもなく身を横たえて、腹ごなし」をしている時にしか、「忍耐と勇気の模範」になりえないのか、と²⁾。

(三)『かぼちゃへの変貌』と『クラウディウス追悼の辞』との間の矛盾。——フレロンはいう。セネカは、『かぼちゃへの変貌』のなかに「もっとも毒のある諷刺」をぶちまけながら、『クラウディウス追悼の辞』においては、「もっともでたらめで卑しい」へつらいを露骨に示している。怒りの情念を否定し、侮辱には許しをもってせよと美しい教訓を説いた哲学者が、陰では敵の死体を鞭打ち、そのあと公衆の面前ではこの敵を神と称えるとは、なんと卑怯な態度だろう、と³⁾。

ディドロ自身、作中でこうのべていた。「2種類の卑怯者がいる。称賛演説をする雄弁家と辛抱強く傾聴する民衆である。もし民衆が少しでも魂をもっていれば、雄弁家の体も、先帝の墓もこなごなにってしまったことだろう」と。だがフレロンは、このディドロのことばは、そのままセネカにふりかかるといふ。もしローマの民衆が「少しでも魂をもっていれば」、『クラウディウス追悼の辞』の作者を、「こなごなに」してしまったにちがいない、と⁴⁾。

他方ディドロは、『かぼちゃへの変貌』に触れながら、こう語っていた。『ポリュビウス慰藉文』と『かぼちゃへの変貌』とを比較したひとは、セネカに対して軽蔑をいだくだろう。だが、——とディドロはここで結論を逆転するという——セネカは卑怯な人物ではありえないから、『ポリュビウス慰藉文』の筆者であるはずがない、と⁵⁾。

この主張にたいして、フレロンは反駁する。セネカは、あのいとわしい『クラウディウス追悼の辞』を書いた人物である。だからひとは、この追悼の辞と『かぼちゃへの変貌』を比較して、彼に深い軽蔑をいだくのである、と（フレロンはさらに、この軽蔑は、セネカの賛美者すべてのうえにふりかかるだろうと付言している）⁶⁾。

(3) セネカの人間的欠陥の批判

フレロンは、このあとひき続き、具体的諸事件を例にとりながら、セネカの性格的弱さ、人間的欠陥を追求していく。

(一) アグリッピナ殺害事件のあと、「アグリッピナの死は、神々の正当な復讐の結果である」という元老院あての手紙をセネカが執筆したこと。——ディドロはこの件にかんして、「人間的弱

1) *Ibid.*, pp.49-50.

2) *Ibid.*, p.50.

3) *Ibid.*, p.52.

4) *Ibid.*, p.53.

5) *Ibid.*, pp.54-55.

6) *Ibid.*, p.55.

点」を容認せよという立場からセネカを弁護していた。すなわち、セネカは死の恐怖にさらされて「心ならずも筆をまげた」というのである。これにたいしてフレロンは、もし哲学が危険な試練にたえられないものであるなら、それを称えることをやめよ、という。皇帝カラカラの弟殺しを是認するよう強制されながら、それに応じなかったために殺害されたパピニアヌス——彼は哲学者で wasn't ——のほうが、哲学者セネカよりはるかに立派な存在である、と¹⁾。

しかし、ディドロはセネカを弁護するために、彼の時代に「身を移し」、すべての市民の名で彼に「もっとも感動的な勧告」をおこなう。すなわち、ネロにたいする「場違いな拒否」によって、彼の残虐行為に抵抗しうる「唯一の防波堤を破壊する口実」を彼に与えないようにしてほしい、という勧告である。そしてディドロによれば、セネカはこの勧告通りの行為をしたがゆえに、「パピニアヌスよりもはるかに偉大」なのである²⁾。

だが、フレロンは、これこそ詭弁であると力説する。セネカは、自分をコルジカ島から呼び戻してくれた恩人アグリッピナの命を、自分の教え子ネロの手からすら守ろうとは欲しなかった。さらに、ネロに親叙しの後悔を忘れさせ、民衆の怒りの声を押し殺した。フレロンはいう。「諸国の王よ、今後は望むままのことをされるがよい。」なぜなら、哲学者のなかから、あなたの犯罪をほめ称える「卑しい奴隷」が必ずあらわれてくるにちがいないから、と³⁾。

(二)教育者としてのセネカは、ネロの意を迎えることしか行なわなかったこと。——なるほど、セネカが若いネロに立派な教育をほどこそうと努力したことは事実であろう。だがフレロンは、反問する。弟子を腐敗させないように努めることが、それほどの手柄だろうか、と。フレロンによれば、ネロが成人して、その欲望をむきだしにして以来、セネカは一度も彼の行為に反対せず、ひたすら彼に迎合し続けたという。第1、ネロが貞淑なオクタウィアを妻としていながら、女奴隷アクテに「罪深い情欲」を燃やした時、セネカは「教え子の不義の愛の取持役」になって、お返しに「たっぷりとした贈物」をもらった。第2、ネロが舞台にでて、「もっとも卑しい道化役者」と演技の腕を競おうとした時、セネカは「彼の才能をおだてあげ、彼の成功に拍手喝采」した。第3、アグリッピナが「政治的支配権を回復するために」、実子ネロを肉体で誘惑して、彼にとりいろうとした時、セネカは「徳の魅力」、あるいは「雄弁」によってネロを危険から救おうとはせず、「美しい女奴隷〔アクテ〕の魅力」をかりた。第4、ネロがブリタンニクスを殺害し、急遽遺体を埋葬させた時、それを弁明する勅令を作製し、そのなかで、今後は「カエサル家の血を伝える唯一の後裔である」ネロは、ローマ市民にとって一層尊いものになったと書いて、報酬にブリタンニクスの別荘数軒をえた。第5、ネロによるアグリッピナ殺害の計画を早くから知っていながら、彼女を訊問して、のちの彼女の運命を決定した。また殺害の具体的計画にかんして、ネロから意見をきかれた時も、まったく反対意見をのべず、大罪が犯されたあとは、先にものべたようにその弁明者とな

1) *Ibid.*, pp.55-57.

2) *Ibid.*, p.58.

3) *Ibid.*, pp.59-60.

った¹⁾。

以上のように、セネカが経験した諸事件を検討したうえで、フレロンはいう。要するに、ネロが犯したすべての罪のうちで、セネカが公然と反対したものは1件もない。「もしひとつでもあれば、ディドロ氏よ、どうかあげてみるがよい。」ディドロは、セネカが早くから教え子の残虐性に気づいていたとのべていた。それならセネカは、いずれ苦しい二者択一——耐えられない責苦か、犯罪の是認かという二者択一——に追い込まれることを察知していたはずだ。ではなぜ早くから逃げなかったのか。少なくともアグリッピーナ殺害後に宮廷を去らなかったのか（トラセアはこの時、生命を賭して元老院を離れている）²⁾。

理由は次のことしか考えられない、とフレロンは断定する。第1が富への渴望であり、第2が帝位への野望である。「私はセネカが自白した陰謀計画の詳細をもはや躊躇なく信じたいと思う。この詳細はディオンのによって伝えられており、タキトゥスもそれと反対のことはのべていない」とフレロンはいう。（しかし、このフレロンの主張には無理がある。なぜなら、タキトゥスのテクストを忠実に読む限り、そこでは、逆にセネカがピーソの反皇帝陰謀事件には関与していなかったことが示唆されているからである。）

結局セネカは、いかなる人物だったのであろうか。これにたいして、フレロンは答える。セネカは、ティゲッリーヌス、ナルキッスス、パッラスのような犯罪者ではない。しかしまた、ブルスや、トラセアのような英雄的な人物でもない、と³⁾。

なるほど彼は心のなかに徳の胚種をもってはいた。だが宮廷の楽しみごと、富への執着、名誉への渴望、えせ哲学にたいする誇りが、まもなくこの貴重な種子を殺してしまった。

フレロンは、最後に「セネカの哲学よりも千倍も危険な哲学の狂気じみた使徒」ディドロに、次のように呼びかけて、この書評を終わっている。——君が「人民の防壁」として「暴君」の前に置いたのは「卑怯な哲学者たち」だ。だが「宮廷のなかにはいりこんで、暴君の心のなかに恐るべき良心の声を呼びさます」のは「哲学」ではなくて「宗教」なのだ。「君は、宗教の基礎を掘りくずして、暴政に抵抗する唯一の根拠をうちこわしたのだ」と⁴⁾。

『文学年報』1779年、第26巻、「第2信」の総括的検討 以上に紹介した、フレロン「第2信」の書評は、そのまま承認しうるものであろうか。その点を、(1)『セネカ論』初版の執筆の動機の推定、(2)『セネカ論』初版の内容の批判、の2面から検討してみよう。

(1)フレロンによる『セネカ論』初版の執筆の動機の推定の是非

フレロンによれば、ディドロが『セネカ論』初版を執筆した動機は、この哲学者が『文学年報』

1) *Ibid.*, pp. 60–64.

2) *Ibid.*, pp. 64–66.

3) *Ibid.*, pp. 67–68.

4) *Ibid.*, pp. 68–69.

1778年、第3巻、「第13信」および、同年、第4巻、「第4信」——ラ・グランジュ訳『セネカ著作集』にかんするフレロンの書評——を読んだ時に感じた、怒りと「復讐」心であるという。このフレロンの意見は、はたして正当であろうか。

『文学年報』1778年度の通信は、1信（第1巻、「第11信」、2月9日付）を除いて、すべての日付がついていないが、この年度内に印刷された131信が、すべて等間隔の日付で発表されたものと仮定して計算すると、第3巻、「第13信」と第4巻、「第4信」の発行時期は、それぞれ5月初旬前後（誤差を見込むとすれば4～5月）、および5月下旬前後（誤差を見込むとすれば5～6月）であると推定される。したがって、もしフレロンの主張を認めるとすると、ディドロの『セネカ論』初版の執筆開始の時期は1778年4月以降に置かざるをえなくなる。これは可能であろうか。

まず、ディドロの『セネカ論』初版執筆開始の時期から考えてみよう。すでに本論第二部、第I章（「『セネカ論』の執筆」の項）で検討したように、ディドロは早くも1777年には、『セネカ論』の執筆を始めており、この事実は彼の書簡によって確定できる。

また、ヴァルロットの推測によれば、『セネカ論』初版の大部分が完成したのは、1778年6月6日以前であり、巻頭のネジョンへの献辞（「N***氏へ」）が書かれたのは同年10月下旬、あるいは11月上旬であるから、ディドロの直接的執筆動機を、フレロンの攻撃への復讐心に求めるフレロンの説、すなわちこの作品の執筆開始の日付を『文学年報』、1778年、第3巻、「第13信」と同年第4巻、「第4信」におけるラ・グランジュの翻訳の書評以後（1778年4月以後）の時点に求める説は支持しがたいことになる。

では、フレロンの書評は、『セネカ論』初版の内容に、間接的な影響すら与えていないのだろうか。すなわち、ディドロは、作中にフレロンにたいする怒りの文言——フレロンへの反批判——を挿入してはいないだろうか。確かにディドロは、この作品の執筆から印刷への過程でフレロンの書評に眼を通し、この書評への怒りを『セネカ論』初版の原稿、または校正刷に付加することは時間的に可能であった（1778年4月から、同年12月近くまでの期間）。しかし、『セネカ論』初版中には、フレロンの書評にたいする反応と推定しうような文言は発見できない。（フレロンの攻撃の対象がセネカ、ラ・グランジュ、ネジョンの3人であって、ディドロへの直接的言及はなされていないから、あえて反撃の必要を認めなかったのかもしれない。）

したがって、ディドロの「復讐」心が『セネカ論』初版の執筆動機であるとするフレロンの主張は、直接的にも、間接的にも容認しがたいことは明らかである。

(2)フレロンの『セネカ論』批判の内容の検討

ところで、フレロンの書評の真の目的は、『セネカ論』初版の執筆動機の推定にあるのではない。彼の中心課題は、「セネカの生涯の諸事実」を逐一検討して、彼がなんら称賛に値する人物ではなかったということ、したがって、彼の生き方を賛美する『セネカ論』初版のディドロの立場は、まったく是認しがたいということ、を、立証するところにあった。

そのために、フレロンが列举、検討した「事実」は、ほぼ次のようなものであった。まずセネカの言説と行為との間の矛盾を示す「事実」としては、——第1、貧困をひとびとに説きながら、莫

大な財産を貯めこんだこと（ネロの治世初期の善政の4年間——すなわちネロの贈物を拒否しても、なんら危険でなかった時期——だけで3億セステルティウスを貯めこみ、その私生活は華美を極めていた）、第2、不撓不屈の精神を示す『ヘルウィア慰藉文』を一方で書いているかと思えば、他方ではポリュビウスとクラウディウスへの阿諛にみちた『ポリュビウス慰藉文』を書いていること（ディドロは、ある所では『ポリュビウス慰藉文』はセネカに敵対する「詐欺師」が、セネカの名声をおとしめるために、彼の作と称して作製したものであると主張し、また別の所では、かりにこの作がセネカの手になるものであったとしても、セネカの状況に身を置いてみれば、彼がこの文書を書いたことは非難できないと主張している）。第3、『かぼちゃへの変貌』のなかではクラウディウスを愚弄しているくせに、『クラウディウス追悼の辞』のなかでは彼を神と称えていること。

また、セネカの人間的欠陥を示す「事実」としては、次のものがある。——第1、ネロのアグリッピーナ殺害のあと、その弁明文を執筆したこと、第2、ネロの教師でありながら、彼に訓戒を与えるどころか、ひたすらその意に迎合することしかしなかったこと（女奴隷アクテをとりもち、ネロが俳優のまねをすればそれに喝采し、アグリッピーナとの近親相姦の危険が生じると、道德的説得によってではなく、アクテの魅力によって彼の関心を母からそらし、ネロがブリタンニクスを暗殺して、急遽遺体を埋葬するや、直ちにその弁明書を作製し、そればかりか恩人アグリッピーナを死に導くことになった訊問を、自ら主宰した）。

フレロンが列举して、順次攻撃を加えていった上記の諸「事実」は、はたして真実であったろうか。確かに、フレロンが列举した諸「事実」は、——セネカの内心の「意図」を問題にせず、結果としてあらわれた「事実」だけをとらえる限り——ほぼそのまま承認しうるであろう（フレロンの申し立てのうちで、若干留保をつけるべきものもあるが、それについてはすでに小論中で指摘した通りである）。

しかしそのことから直ちに、フレロンの書評におけるセネカ非難が、妥当であったと結論することはできない。なぜならフレロンは、書評のなかで、セネカの生涯において絶対に無視することができない——そしてディドロにとっては、もっとも根本的な——ひとつの「事実」にかんして、故意に沈黙をまもっているからである。そしてこのひとつの「事実」の無視によって、フレロンが列举した諸「事実」は、ディドロにとって「事実」としての価値を失うのである。『文学年報』1779年、第26巻、「第2信」中でフレロンが故意にとりあげなかったこのひとつの「事実」、それはセネカが強制された死を、従容として死んだという出来事であった（第三部、第Ⅱ章、3の「老ディドロの自己批判」の項参照）。

フレロンは、先に発表した『文学年報』1778年、第3巻、「第13信」——ラ・グランジュの翻訳の書評——のなかで、すでにセネカの人間的欠陥を示す諸「事実」を列举して、それに非難を加えていたが、これらの諸「事実」のなかには、彼の「虚栄心」にみちた「死」も含まれていた。だが、いま問題にしている『文学年報』1779年、第26巻、「第2信」——『セネカ論』初版の書評——においては、先の書評中に列举されたすべての「事実」がもう一度とりあげられ、敷衍されているのに、ただこのセネカの死という「事実」だけは、故意に——としか考えられない仕方——無視さ

れている。なぜだろうか。

このセネカの死という事件は、フレロンの1778年、第3巻、「第13信」では、次のように語られていた¹⁾。

彼が、自殺の命令を〔ネロから〕受けた時、遺言状に新しい条項を付け加えることは許されないのを知って、周りの友人たちにこういった。「私は現在自由に〔諸君に贈ることが〕できるただひとつの、もっとも貴重な宝物を諸君に遺贈したいと思う。それは私の人生という実例だ」と。これこそ、虚飾と傲慢さにみちたことばだ。断末魔の苦悩と痙攣のただなかで、彼はいわば虚栄心によって生気をかきたて、数人の秘書を呼んで、幾つかの考えを口述した。その写しはやがてローマの町中にひろめられた。彼の最後の瞬間は、うぬぼれの満足以ちげられた。彼はまさに死に絶えんとしながら、ひとびとが自分のことを語り続け、自分の臨終の雄弁の、このたぐい稀な、崇高な努力を賛美し続けてくれるだろうと考えて、心の慰めをえたのであった。

もしフレロンが、上のように考えているのなら、なぜ『セネカ論』初版の書評のなかで、このストア哲学者の「虚飾と傲慢」、「虚栄心」、「うぬぼれ」を示す恰好の「事実」として、上記の事件をさらに詳しく語らなかったのだろうか。もちろん、もしディドロがこの作品のなかでセネカの死について、ほんの少ししか触れていないというのなら、フレロンのこの態度も理解できよう。だが、事情はまったく逆であって、彼はタキトゥス『年代記』（第15巻、62～64節）に依拠しながら、セネカの最後の記述に7ページを費しているのである。

ディドロが描きだすところによれば、セネカはピーソを中心に計画された、皇帝暗殺計画に参加した、という無実の罪をきせられる。彼はその時、ローマ市外の別荘で、妻パウリーナおよび数人の友人たちと食事の最中であつたが、百人隊長の口から、ネロによって与えられた死の命令が伝えられると、「泰然自若」とした態度をくずさず、以前からしたためてあつた遺言にいくつかのことばを書き加える許可を求める。しかしその要求が拒絶されると、友人たちのほうをふりかえって、次のように語りはじめた²⁾。

「私は、諸君の世話に感謝を表明することを禁止されている。だがそれでも、諸君に遺贈しうる贈物すべてのうちで、ただひとつの、もっとも貴重なものが残されている。それは私がこの世で生きた姿だ。もし諸君がこれを記憶のうちにとどめておかれるなら、諸君はきっと、正しい知識への愛と不変の友情のゆえに、ひとびとの称賛を獲得するにちがいない。」こう語るとともに、あるいはくだけた会話調で、あるいははげしい力をこめて、友人たちの涙をおしとどめる。それから、次のように問いかけながら、彼らの気力を奮いたたせた。

1) *Ibid.*, 1778, t. III, «Lettre XIII», pp. 297-298.

2) S, pp. 194-200; CN, t. I, pp. 202-206; HN, t. I, pp. 133-135; AT, pp. 140-144.

「知恵の教えは、いったいどこにいったしまったのか。今にも襲いかかってくる人生の危難について、絶えず考えぬいてきたことは、いったいなんの役に立つのだ。ネロの残忍さを知らない人間がどうか。母と弟とを殺したあとで、ネロに残されていることといえば、自分の心と精神を育てることに専念してきた男〔家庭教師セネカ〕の血潮に両手をひたすことしかないではないか。」

このセネカの死の場面は、『セネカ論』初版中に記述された、セネカの一連の言行のなかで、ディドロにとってもっとも根本的な意味をもつものであった。なぜなら、第1に、ここではセネカの平素の哲学、すなわち「今にも襲いかかってくる人生の危難について、絶えず考え」続けるという彼の哲学と、従容として死を受けいれるという彼の態度とが完全に一致している。（たとえフレロンのように、セネカの「意図」のうちに、この時「見せかけと傲慢」、「虚栄心」、「うぬぼれ」だけしか存在しなかったと解釈するにしても、少なくとも「事実」の次元においては、彼が最後に、言説と行為の一致のうちで、泰然と死んでいったことは否定できないからである。）

第2に、このセネカの死は、ソクラテスの死と基本的な類似を示している。すなわち、2人はともに、他者（ネロとアテナイ市民）が善のうちに生きることを願い、そのように他者を教化することに努めながら一生を送ったのであった（ディドロは、ここに彼ら2人の人生と自己の生涯との類似を認めたに相違ない）。それにもかかわらず、2人はともに、相手から不当にも死を命ぜられている。そればかりではない。タキトゥス『年代記』が伝えるセネカの死の場面そのものもまた、プラトン『パイドン』が語るソクラテスの死の情景と驚くほどの一致を示している。（この一致を中心として、ディドロの意識のうちに、ソクラテスの生涯のイメージと、セネカの生涯のイメージとが重ねあわされ、ディドロのソクラテス崇拝がセネカのうちに投影されて、セネカ崇拝に転化するのであるが、この問題は小論の結論でとりあつかう。なお、セネカの死の意味にかんしては、第三部、第Ⅱ章、3、「自己批判の意味」の項参照。）

『セネカ論』初版における、ディドロのセネカ解釈——「言説」と「行為」の解釈——は、すべてセネカの生涯の最後におけるこの「言説」と「行為」との一致という「事実」を基点として、そこから出発する。すなわち、暴君から不当な死を命ぜられても、いささかもたじろかず、恐れなかったセネカである以上、どうして他の危険のまえでおののく必要があるのか、とディドロは考える。ここからディドロのセネカ弁護論の基本的主張——セネカがネロのまえで妥協して生きのびたのは、自分の命が惜しかったからではなく、他の正しいひとびとの命を守る防波堤になるためだったという主張——がうまれてくる。

だが、フレロンのセネカにたいする認識はディドロのそれとまったく逆である。セネカはあくまで「言説」と「行為」とが乖離、矛盾した人物として把握されている。したがって、このストア派哲学者の生涯の諸「事実」は、すべてこの立場から統一的に解釈されなければならない。だからこそ、フレロンは1778年の書評では、セネカの死に触れながら、その時の彼の態度を、「言説」と「行為」の一致としてではなく、その分裂を表面的に糊塗する「虚飾と傲慢」、「虚栄心」、「うぬ

ばれ」のあらわれとして解釈したのであった。フレロンにとって、セネカのうちに「言説」と「行為」の一致を確認することは、彼自身のセネカ認識の瓦解を意味する。

けれども彼は、『セネカ論』初版を読んだあとでは、セネカの死の場面にかんしてまでも自説——セネカにおける「言説」と「行為」との乖離、矛盾の主張——に固執することに困難を感じたものと思われる。なぜなら、そこでは、死にゆくセネカが示した「言説」と「行為」の一致という「事実」が否定しようのない力強さで示されているからである。これが彼が1779年の書評のなかでは、セネカの死について故意に沈黙をまもった理由であると考えられる。こうして、おなじセネカの生涯をまえにしながらも、ディドロとフレロンは、2種類のことになった「事実」を見ていたというべきであろう。

『文学年報』、1779年、第26巻、「第4信」 フレロンは、「第4信」冒頭で、『セネカ論』初版が冗長であると攻撃する。まず作品前半「セネカの生涯論」については、こう概評する。「第一部の目的である、ネロの家庭教師への賛辞は、歴史的事実、あるいは批判的反省の寄せ集めの山の下にすっかり埋もれてしまっているのです、読者は、絶えず主人公の姿を見失い、注意はもっぱら称賛者のいらいらした気持の上にひきつけられるばかりである」と¹⁾。

またたとえば、セネカとユーリアとの姦通問題の取扱いについては、こう批判する。ディドロは、「この事実を解明するためには、クラウディウス帝の治世と彼の性格とを一瞥しておくことが適当である」という。だがなぜこんな余談が必要なのか。それは、クラウディウスとネロの治世を語ることを口実にして、自分の身を危険にさらすことなく、諸国の王と人民に「ためになる教訓」を与えなかったからなのである、と²⁾。

したがって、「つぎはぎ仕事をふくらます名人として通っている『百科全書』の第一建築士」の520ページにおよぶ作品から、純粋な内容、すなわち「セネカのための弁明」だけをとりだせば、約100ページになってしまう。当然ながら、彼の作品には、「思慮ある歴史家の簡潔さも、哲学論文の著者の厳格さも、公平な批判者の慎み」も期待できないという³⁾。

フレロンは、このように『セネカ論』初版の全体的構成を批判したあと、この作品を通してうかがわれるディドロの「手法と性格の特異性」を、以下の4点に即して検討していく。——(1)ディドロの「熱狂」的な表現、(2)ディドロの「脳髄の興奮」に起因する「誤った判断」、(3)ディドロのラテン語の読解力、(4)ディドロの文体。

(1)ディドロの「熱狂」的な表現

フレロンによれば、ディドロは、平静な散文の文体を知らず、抒情詩または叙事詩のそれしか知らないという⁴⁾。

1) *L'Année littéraire*, 1779, t. I, <Lettre IV>, p. 104.

2) *Ibid.*, pp. 105-106.

3) *Ibid.*, pp. 106-107.

4) *Ibid.*, p. 107.

彼のもっとも重々しい論文すらも、常にピンダロスふうの躍動によって活気づけられている。彼をとらえる熱狂と、彼をつき動かすデモンとは、決して彼を見捨てることがない。彼は、三脚床几にいつも坐っている巫女ピュティアである。利害関係とはまったくかわりがない、もっとも冷やかな歴史の話の最中に、突如としてきびしい呼びかけの声があがるのをきいて誰もが驚く。この呼びかけは、読者に強烈な衝撃を与える。

「熱狂」した精神の「呼びかけ」の例として、フレロンは、次の3つの場合をあげている。

第1、カラカラ帝が、セネカの雄弁を認めていないという事実を紹介したあと、ディドロは突如この皇帝にむかって怒りの叫び声をあげる。「おお、無分別で気違いの怪物よ。おまえは、セネカの著作を軽蔑するふりをしている。彼の著作を、セメントをまぜない砂利の山と呼んでいる、云々。」¹⁾

第2、タキトゥスが、詩人ルーカーヌスの『パルサロスの戦い』をほめているという事実に触れた途端、ディドロは叫びだす。「おお、タキトゥスよ。おお、才能と行為のあれほど厳格な批判者よ。『アエネーイス』を読んだあとで、『パルサロスの戦い』について、こんなふうに語るべきなのだろうか。あなたは、最大の侮蔑をこめてピーソの陰謀の加担者を取り扱った。それなのに、母親を密告した男〔ルーカーヌス〕は許してやるというのか。」²⁾

命を助かるために、陰謀の仲間の名をもらし、母親アキーリアを密告したルーカーヌスのことを考えると、それだけで「われわれの熱狂者の脳髓は、興奮の絶頂にまで登りつめ、憤激のあまり叫びだす。『おお、ルーカーヌスよ。たとえおまえがホメロスよりすぐれていても、おまえの作品をこの耳で聞くことはないだろう。私はおまえなど大嫌いだ。心の底から軽蔑している。これからも決しておまえを読むことはないだろう』」と³⁾。

第3、ディドロの学生時代、教師たちはセネカの魅力を教えないで、もっぱらキケロを彼に読ませようとした。そのことを思い出しただけで、彼は「深い心の痛み」に襲われて叫びだす。「ああ、あの先生連中は、私にたいして、なんとひどいことをしてくれたのだろう。私を立派な作家にするために、私が立派な人間になることを妨げたのだ」（傍点は原文イタリックの語）⁴⁾。

フレロンは、ディドロの「熱狂」的表現について、このように実例に即して検討したあと、次のように結論する⁵⁾。

われわれのお説教屋の哲学者たちが、自派の作品について語る時、雑録と称しているのは、この種の〔『セネカ論』初版のような〕、途方もないジャンルの混淆であり、熱情と称して

1) *Ibid.*, pp. 107–108.

2) *Ibid.*, p. 108.

3) *Ibid.*, p. 109.

4) *Ibid.*, pp. 109–110.

5) *Ibid.*, pp. 110–111.

いるのは、心情からではなく、全体的に興奮した脳髓から生みだされる偽善的な悲嘆の声や、怒りの声である〔傍点は原文イタリック体の語〕。

(2)ディドロの「脳髓の興奮」に起因する「誤った判断」、理解できない表現

フレロンによれば、ディドロの「脳髓の興奮」，「はげしい，自然に反した〔精神の〕動揺」は，物事を正しく判断しうる状態ではない。そこからは，次のような，「多数の奇妙な判断」が生まれてくる，という¹⁾。

第1，ネロによる母親の殺害と，ルーカーヌスによる母親の密告とを「哲学的に比較し」，後者にくらべれば前者は「微罪」にすぎないと結論する「誤った判断」。——フレロンは，次のように批判する。タキトゥスは，両者の罪の軽重を比較する意図など毛頭もっていないのであるが，ディドロはローマの歴史家が自分の結論に反対するものと勝手に想定して，こういう見当違いの抗弁をする。「おお，タキトゥスよ。〔……〕帝国を失うことを恐れて親殺しになったネロに，怪物の名前を与えるのなら，自分の命を助けてもらうことを当てにして，おなじように親殺しになったルーカーヌスには，どんな名前を与えるつもりなのか」と²⁾。

このディドロの主張にたいして，フレロンは，次のように反論する。——ディドロの考えは「なんという無分別，なんという精神の退廃」を示していることだろう。ルーカーヌスの罪は，母親のために自分の命を犠牲にする「勇気がなかった」という点だけだ。だがネロの母親殺しは違う。それは周到に準備された計画的犯罪である。しかも彼は，母親が息をひきとる直前に，その裸体の美しさを称賛し，死体になるやそのまえで酒を飲んだ。それなのにディドロは，ネロの罪のほうが，ルーカーヌスのそれよりも軽いという。これこそディドロの「哲学的錯乱」である，と³⁾。

第2，セネカがアグリッピーナ殺害の実行をネロから命令された時，その実行責任をブルスにおしつけようとしたのに，ディドロはこのセネカの卑怯な態度を弁護したこと。——フレロンは，この事件におけるセネカの態度と，それを擁護するディドロの主張とを順次検討していく。——アグリッピーナ殺害事件にかんしては，今日幾人かの歴史家の記録が残されている。まずディオンのよれば，多くの証言が，セネカこそこの犯罪を指咍した責任者であると語っているという。だがディドロは，ディオンを「ペテン師，卑しい中傷家」と呼んで，その申し立てを却下してしまう⁴⁾。

では，タキトゥスのテキストを調べてみよう。彼は，ネロが母親殺しにかんして，セネカとブルス2人の意見を徴した時の情景を報告している。それによれば，この時セネカが沈黙を破り，ブルスにむかって，護衛隊兵士たちに「殺害役を命じるべきだろうか」と尋ねる。「立派な哲学者にしては，非常に卑怯な質問だ」とフレロンは断定する。もちろんディドロ自身もセネカの卑怯さに気づいている。だからこそ彼は，「この時の状況」，すなわち，「話者の語調，眼差し，挙動」，

1) *Ibid.*, p.111.

2) *Ibid.*, pp.111-112.

3) *Ibid.*, pp.113-114.

4) *Ibid.*, pp.115-116.

セネカの「驚愕」とブッルス「憤慨」などを思い浮かべなければ、セネカの態度の正しい意味が理解できないと付言しているのである。(このディドロの付言にたいして、フレロンは、辛辣な口調で次のような皮肉をのべている。ディドロは「哲学の秘密古文書館」から、この時の状況の「秘密の記録」を発見したのか、それとも、「セネカの語調、眼差し、挙動、驚愕」を刻みこんだ彫刻を見つけたのに相違ない。「こんなに説得的な証拠」があるのなら、自分としてはもはやなにもいうことがない、と。)¹⁾

フレロンはさらに反駁を続ける。ネロのまえで、巧妙なセネカから返答の責任を押しつけられたブッルスは、「私の指揮下にあるのは、勇敢な兵士たちであります。もし暗殺者がご入用なら、ほかの所でお探し下さい」と答えたのであるが、この「勇敢な返答」が原因になって、ブッルスは命を失うにいたったのである、と²⁾。

ところが、『セネカ論』初版のディドロはこう主張している。「ブッルスのこのぶっきらぼうなことばが、彼の悲劇的最後を招いた」という事実を承認する以上、どうしてこの事件において、セネカを非難することができようか、と。だがフレロンはこれにたいして、ディドロとおなじ事実に立脚しながらこう反論する。ブッルスの「断固とした」——ディドロのいうように「ぶっきらぼうな」ではない——「返答」と、それが招いた「死」という事実こそが、セネカの「いとわしい沈黙」と、それに続く「もっといとわしい〔ブッルスへの〕問いかけ」を告発しているのである、と³⁾。

第3、ネロの母親殺しを正当化したセネカを弁護したこと。——フレロンの攻撃は、さらに事件後、この殺害の弁明書を作製したセネカにも向けられていく。ディドロによれば、セネカが事件後、元老院あてに「見事な弁明書」を書いたのは、ひとたび「大罪」が犯されてしまった以上、「暴動と陰謀によってひき起こされる別の大罪〔皇帝にたいする反乱〕を可能な限り防止する」ことをめざしたからだと説明される⁴⁾。

だが、フレロンはこう反論する。ディドロの主張を容認するとすれば、セネカにとっては結局、全世界を「破廉恥にもだまし」、「恩人を中傷し」、「怪物を犯罪にけしかける」ことが目的だったということになるのではないか。もしアグリッピーナが生きていれば、セネカはいまだに彼女のご機嫌をとり続けていただろう。だが死んでしまった以上、「死体をふみにじらねばならない」。なぜなら、今後はそれだけが富に到る道であるから、と。「これが、今日哲学と呼ばれるものののである」とフレロンは最後に付言する⁵⁾。

第4、ディドロの「哲学」の理念と、セネカ賛美との間に認められる矛盾。——彼は、哲学者にたいして、決して沈黙してはならないといっている。もし語ることを止めれば、哲学者は、「人類の教師という資格」を放棄しなければならない⁶⁾。

1) *Ibid.*, pp.116-117.

2) *Ibid.*, p.117.

3) *Ibid.*, p.117.

4) *Ibid.*, pp.118-119.

5) *Ibid.*, pp.119-120.

6) *Ibid.*, pp.121-122.

君は迫害されるだろう。それが君の運命だ。毒人蔘を飲まされるだろう。だがソクラテスは、君より前にそれを飲みほした。〔……〕君は蒼ざめている。恐怖におそわれている。そんなことで、悪い風習、悪い法、はびこる迷信、暴政を攻撃しようというのか。

哲学者の一生は絶えざる戦いであって、偏見と悪徳を容赦するのは、真理と徳を汚すことである、とディドロは説いている。だがフレロンは、この「美しい道徳律」——彼によれば、「鳥の綿毛でふかふかにしたクッションに、なんのくったくもなく身を横たえ」ながら、ディドロが思いついたことば——は、ディドロのセネカ賛美とは完全に矛盾していると主張する。なぜなら、ディドロが描きだすセネカは、「哲学は国民の風習を攻撃してはならず、特に権力者の怒りをさげねばならない」と考えている人物だからである、という¹⁾。

第5、まったく理解できないディドロの表現。——フレロンはまず「セネカ論」初版中にあらわれる、次の相反する3つの主張はどう理解していいかわからないという。すなわちディドロはある所で、「人民はあらゆる人間のなかで、もっとも愚かで、もっとも邪悪である」と主張し、他方で「人民の声に逆らう哲学者の声は理性の声である」と主張し、同時にまた「人民の声に逆らう君主の声は、狂気の声である」と主張している。これについて、フレロンは「巫女の託宣以上に謎めいた」託宣をのべるこの「哲学者の声」は、ひょっとすると「狂気の声」なのではあるまいか、と皮肉をのべている²⁾。

フレロンはまた、ディドロの狂気の表現の一例として、ピーソが些細な原因で部下を死刑にした事件を紹介しながら、ディドロが示した怒りのことばをあげている。ディドロは、この事件について語りながら、突如としてピーソにたいする憤怒に燃えあがり、さあ、あいつに飛びかかって、短剣で刺し殺そう、と読者に呼びかける。彼は2000年前に処刑された兵士たちと、「情念」で「連帯」する。そして「たとえ私が気違いだとしても、誰が私の狂気を非難できよう」という。だがこれにたいして、フレロンは、誰も「こんな狂気の発作にとりつかれた人間」を非難しはしない、と辛辣にやり返しているのである³⁾。

(3) ディドロのラテン語の読解力

フレロンによれば、ディドロはラテン語にかんする無知からよりも、むしろこの「絶えざる血の煮えたぎり」のせいで、しばしばラテン語を誤訳するという。そのことを証明するために、彼はタキトゥス『年代記』第14巻、第55節——セネカがネロに、今までに贈与された財宝の返却を申し出、ネロがこれに答えたことば——の原文とディドロ訳とを対照して検討している。（なおフレロンは、ディドロ訳の全体的欠陥として、訳文の「平凡」さ、「観念をつなぐ小辞」を訳文中で省略したことからくる、原文の豊かさの消失をあげている。）

1) *Ibid.*, p. 122.

2) *Ibid.*, pp. 123–124.

3) *Ibid.*, pp. 125–126.

以下にまず、タキトゥスの原文を示し、その次にディドロ訳（左欄）とフレロン訳（右欄）——フレロン訳が示されていない場合には彼が名訳として引用しているドットヴィル神父訳——とを並列してかかげる¹⁾。

タキトゥス原文

Quod meditatæ orationi tuæ statim occurram, id primum tui muneris habeo, qui me non tanium prævisa, sed & subita expedire docuisti. Avus meus Augustus Agrippæ & mæcenati usurpare otium post labores concessit; sed in ea ipsa ætate cujus autoritas tueretur quidquid ille & quaecumque tribuisset. Attamen neutrum datis à se præmiis exuit. Bello & periculis meruerant. Nec mihi tela & manus tuæ defuissent, in armis agentis. Sed quod præsens conditio poscebat, ratione, consilio juventutem meam fovisti... quæ à me habes, horti, & fænus & villæ casibus sunt obnoxia, ac licet multa videantur, plerique, haud quaquam artibus tuis pares, plura tenuerunt... Quin, si quâ in parte lubricum adolescentiæ nostræ declinat, revocas, ornatumque robur subsidio impensius regis... Non tua moderatio si reddideris pecuniam; nec quies si reliqueris principem, sed mea avaritia, meæ crudelitatis metus in ore omnium versabitur.

デ イ デ ロ 訳²⁾

Ce que votre discours prémédité offre d'abord à mon esprit, c'est qu'une des premières obligations que je vous ai, est de m'avoir appris à me tirer également & des choses attendues & des inattendues. Agrippa & Mécène obtinrent de mon ancêtre, le repos après les travaux; mais Auguste étoit dans un âge où son autorité suppléoit à la variété de leurs instructions, & il ne dépouilla ni l'un ni l'autre de ce qu'ils tenoient de sa munificence. Ils en avoient bien mérité par leurs services à la guerre; & je crois qu'en pareille circonstance ni votre bras, ni

ドットヴィル神父訳³⁾

Si je réplique sur-le-champ à ce discours préparé, j'observerai d'abbord que je vous en suis redevable. Vous m'avez appris à parler aisément, non-seulement après m'être préparé, mais même sur les affaires imprévues. Auguste mon bisaïeul consentit qu'Agrippine & Mécenas jouissent du repos après leurs travaux. De quelque nature qu'eût été cette permission, son âge suffisoit pour l'autoriser; & cependant il ne dépouilla ni l'un ni l'autre des récompenses qu'il leur avoit données; ils les avoient méritées à la guerre & dans les dangers. Votre bras

1) *Ibid.*, p. 126.

2) *Ibid.*, pp. 127-128.

3) *Ibid.*, pp. 131-132.

vos armes ne m'auroient manqué. Vous avez prêté à ma jeunesse votre raison, vos conseils & vos préceptes... Ces jardins, ces campagnes que vous tenez de moi sont choses casuelles; & quel que soit le prix qu'on y mette, des hommes dont le mérite n'étoit pas à comparer au vôtre auront été mieux gratifiés... S'il vous paroît que dans les sentiers glissans je cède à la pente de la jeunesse, que ne m'arrêtez-vous? Cette vigueur d'une ame exercée, que ne la déployez-vous toute entière à mon secours? Ce ne sera point de votre modération, si vous me restituez mes dons, ni de votre repos, si vous quittez votre prince; c'est de mon avarice, c'est de l'effroi de ma cruauté que le peuple s'entretiendra.

m'auroit défendu de même au besoin; mais de la prudence, des avis, des préceptes étoient tout ce qu'exigeoient les conjonctures. Vous avez d'abord formé mon enfance, ensuite ma jeunesse; les bienfaits que j'ai reçus de vous dureront autant que ma vie. Ceux que vous avez reçus de moi; des jardins, des revenus, des maisons de campagne, son sujets aux coups du sort. Quelques grands que ces biens paroissent, plusieurs, dont le mérite n'approchoit pas du vôtre, en ont possédé davantage... Bien plus, si ma jeunesse m'entraîne à quelque écart, vous me rappelez dans la route; votre secours, après m'avoir éclairé, me règle sur l'emploi de mes forces. Le public ne s'entretiendra pas de votre modération, si vous rendez votre argent, ni de votre loisir si vous abandonnez le prince; mais de mon avarice & des suites cruelles qu'elle fera craindre.

第 1 例¹⁾

デ イ ド ロ 訳

Ce que votre discours prémédité offre d'abord à mon esprit, c'est qu'une des premières obligations que je vous ai, est de m'avoir appris à me tirer également & des choses attendues & des inattendues.

(あなたがあらかじめ準備していた談話を聞いて、まず私の心に浮かんだ考えは、私があ

フ レ ロ ン 訳

Si je suis en état de répondre sur-le-champ au discours étudié que vous venez de prononcer, c'est une première obligation que je vous ai.

(あなたが今のべられた、念入りに準備された談話にたいして、私が即座に返答できるというのは、私あなたがうけた第1の恩恵である)。

1) *Ibid.*, pp. 128-129.

なたからうけた第1の恩恵は、予期していた
ことから、予期しなかったことから、
ともにうまく切り抜けるすべを教えてください
ったことである)。

上の例文にかんして、フレロンはこう批判する。——ディドロ訳は、セネカが、ネロにたいして、
「準備なしにでも、威厳をもって答えるすべを教えるだけの才能があった」ことをほのめかしてい
るが、原意は自分の訳のとおりであって、ディドロは間違っている、と。

第 2 例¹⁾

ディドロ訳

dans un âge où son autorité suppléoit à
la variété de leurs instructions.

(彼ら〔アグリッパとマエケナス〕のさまざ
まな命令のかわりに、自分の權威を押しつけ
うようになった年齢)

フレロン訳

dans un âge qui autorisoit ce prince à
donner telle permission qu'il lui plaisoit
sans qu'on pût l'en blâmer.

(この皇帝が、誰からも非難されることなし
に、望むがままの許可を与えて、それが正当
化されるほどの年齢)

上の例にかんして、フレロンは、ディドロ訳は完全な誤りであって、この訳に相当することばは
原文のどこにもない、という。

第 3 例²⁾

ディドロ訳

quelque soit le prix qu'on y mette
(どれほどの価格をそれ〔ネロの贈物〕につ
けようとも)

フレロン訳

quelques grands qu'ils puissent paroître
(それら〔ネロの贈物〕が、どれほど莫大に
見えようとも)

上の例にかんして、フレロンはネロは価格について語っているのではなく、贈物の大きさについ
てのべているのである、と指摘する。

第 4 例³⁾

ディドロ訳

que ne m'arrêtez-vous ?

ドットヴィル神父訳

vous me rappelez dans la route.

1) *Ibid.*, p. 129.

2) *Ibid.*

3) *Ibid.*, pp. 129-130.

(なぜ私をひきとめてくださらぬのか)

(私を正しい道に呼びもどして下さった)

フレロンは、ディドロ訳は誤りで、ネロのことばはセネカの忠勤への賛辞を表わしているという。だがこの点にかんしては、フレロン(ドットヴィル神父)の解釈は納得できない。<quin revocas> は、ディドロが理解しているように、「ネロによる非難」のニュアンスを含んでいるであろう。

第 5 例¹⁾

ディドロ訳

cette vigueur d'une âme exercée, que ne la déployez-vous toute extière à mon secours?

(経験をつんだ魂のその強い力を、すっかり発揮して、私を救ってやろうとはなさらぬのか。)

ドットヴィル神父訳

votre secours, après m'avoir éclairé, me règle sur l'emploi de mes forces

(あなたの助力が、私を迷いからさまし、私の精力の使い方を導いてくださる。)

最後の例文にかんして、フレロンは次のように批判する。——ディドロは、<Ornatum robur (meum) subsidio (tuo) regis impensius?> (「はげしい、〔私の〕精力を、〔あなたの〕助力によって、〔あなたは〕導くか、一層熱心に?」=「あなたは、あなたの助力によって、私のはげしい精力を一層熱心に導いてくださるか?」)と理解すべき箇所を、<Ornatum robur (tuum) subsidio (meo) regis impensius> (「はげしい、〔あなたの〕精力を、〔私の〕援助に、〔あなたは〕向けるか、一層熱心に?」=「あなたは、あなたのはげしい精力を、一層熱心に私の援助に向けてくださるか?」)と理解している。だから、このディドロの訳は「不条理のきわみ」である。と。(フレロンは、このほか、ディドロがタキトゥス『年代記』のローマの大火の記述を翻訳した部分にも無数の誤りがあるが、それを指摘するだけで1巻の本になってしまうから、この書評では触れない、と断わっている。²⁾)

結論としてフレロンは、次のように主張する。ディドロの翻訳のなかには、「小学生でも避けられそうなひどい間違いが多数」ある。そのディドロが日夜アウグストゥ時代の作家の研究に没頭している著名な学者たちの定説をくつがえし、キケロから「雄弁家の王者」という称号を奪いとって、それを「屁理屈屋の詭弁家」セネカに与えようとしている。そしてあの「趣味の不滅の神託」クインティリアヌス——ラ・アルプによれば、その教えは「あらゆる時代の理性とよい趣味の規範」である——に、大胆にも異議を唱えようとしている。だが、「批評、趣味、ラテン語の問題にかんして、

1) *Ibid.*, p.130.

2) *Ibid.*, p.130.

ディドロ氏対クインティリアヌスというのは、ピグミ対ヘラクレスではないのか」と¹⁾。

(4) ディドロの文体

ディドロの文章の特徴はなんだろうか。フレロンが指摘するところによれば、それは「語法の誤り、奇妙な言い廻し、大げさな表現にみちた文章の寄せ集め」である。ディドロの頭脳は、絶えざる「興奮」にとりつかれており、決して冷静になる時がないから、一度表現したものに「訂正」を加えたり、荒っぽい言い廻しを訂正して「優雅」にしたりすることは不可能なのである。だから『セネカ論』初版中には、次のような奇妙な表現が充満しているという。

A. L'homme dont j'oserai éclairer le fond de la caverne sans sentir vaciller le flambeau dans ma main...²⁾ (手のなかで松明の光がゆらめくのも 気にかけてないで、私はじっとその男の洞窟のなかを照らしだすつもりだが、その男は……)

B. Le philosophe apprend à se roidir contre le torrent des mauvais raisonnements qui l'assaillit & entraîne autour de lui la masse générale de la nation...³⁾ (哲学者は自分に襲いかかってくると同時に、自分の傍では、国民大衆を押し流していく誤った考えの奔流に抵抗することを学ぶ……)

C. L'homme éloquent s'occupe à déchirer le crêpe qui voile le ciel aux regards du malheureux, & à rendre la sérénité du spectacle de la nature...⁴⁾ (雄弁な人間は、不幸なひとの眼から大空をかくしている薄い覆いをひき裂き、自然の景観に晴朗をかえすことに専心する……)

では、フレロンは、『セネカ論』初版中にすぐれた部分は皆無だと結論するのだろうか。そうではない。作中には「活気と熱気——少なくとも頭脳の熱気にみちた部分」が若干はあるという（ただし内容は「誤っている」とは付言しているが）。それは、次のものである。——第1, ルソーにかんする2つの注, 第2, 「技巧的にはすばらしい」が「いとわしいへつらい」にみちたヴォルテールへの賛辞, 第3, セネカにたいして、アグリッピーナ殺害の弁明書を執筆するようにうながすディドロの呼びかけ（内容のいとわしさにもかかわらず、「技巧と雄弁」が読者を楽しませる）。これら大部分は、いずれも「危険な」内容を含んでいるが、それにもかかわらず、そこには著者の「才能と、非常なエネルギー」が認められるとフレロンは指摘する。そして彼は、最後にこう結んでいる。「以上が、世間では非常な反響を呼んだが、著者にとっても哲学者一派にとっても、大して名誉にならない作品についての、最大限に公平な感想である」と⁵⁾。

1) *Ibid.*, pp.132-134.

2) *Ibid.*, p.134.

3) *Ibid.*, pp.134-135.

4) *Ibid.*, p.135.

5) *Ibid.*, pp.135-136.

『文学年報』、1779年、第26巻、「第4 信」の総括的検討 以上に紹介したフレロン「第4 信」の書評を、どう評価すればよいであろうか。彼の4つの論点について、順次考察していこう。

(1)フレロンによるディドロの「熱狂」的な表現にたいする批判の検討

フレロンは、ディドロの表現のうちには、「常にピンダロスふうの躍動によって活気づけられる」傾向、あるいは、すぐに「興奮の絶頂にまで登りつめ」て、作中の人物に「呼びかけ」る傾向が存在していると指摘している。また、ディドロは平静な散文の文体を知らぬ、ともいう。

フレロンは、さらにディドロの作品中に充満しているこの種の、「熱狂」的表現——「われわれのお説教屋の哲学者たちが、〔……〕熱情と称している」表現について、それは「哲学者たち」の「心情から」生みだされたものではなくて、「全体的に興奮した脳髓から」生みだされた「偽善的な」悲嘆や怒りの声であると主張している。

このフレロンの主張には根拠があるだろうか。——まず、ディドロが平静な散文の文体を知らず、彼の文章は、「常にピンダロスふうの躍動によって活気づけられ」ているという指摘に堪えていえば、これはディドロの文体の特徴を正確についているであろう。また彼がすぐに「興奮の絶頂にまで登りつめ」て作中人物に呼びかけるという指摘も正当であって、この傾向については、すでに小論第二部で詳しく分析したとおりである。

しかし、ディドロのこれらの表現を「心情」からではなく、「興奮した脳髓」からでた「偽善的な」悲嘆や怒りの声、と断定することは、はたして妥当であろうか。——「脳髓」の「偽善」は、まず利害得失の計量を予想するであろう。だが、これに反して、セネカの雄弁を認めないカラカラ帝への怒りの叫び、母親の密告者ルーカーヌスの詩をほめるタキトゥスへの憤慨の叫び、セネカを読ませないで、キケロを読ませようとした学校時代の教師への恨みの叫び——これらはすべて、すでに小論第二部で検討したように、損得の客観的計量を無視した、ディドロの「心情」の直接的・反射的表出であった。「心情」の真理の「論証」の真理にたいする優越性を確信している晩年のディドロにとっては、このフレロンの批判点は承認しがたいものであったに相違ない。

(2)フレロンによるディドロの「誤った判断」の批判の検討

フレロンは、ディドロが次の5つの「誤った判断」をくだしたとあって、攻撃していた。——第1、母親の殺害を実行したネロの罪と、母親を密告して死に追いやったルーカーヌスの罪とを比較して、前者は「微罪」と断定したこと。第2、セネカがアグリッピーナ殺害の実行をネロから命令された時、その実行責任をブルスにおしつけようとしたのに、ディドロはこのセネカの卑怯な態度を弁護したこと。第3、ネロの母親殺しを正当化したセネカを弁護したこと、第4、迫害に抗して、ソクラテスのように真理を説くという「哲学」の理念を一方で主張しながら、他方で権力者と妥協したセネカを賛美したこと。第5、「人民」は「愚か」で「邪悪」とであると一方で書きながら、他方で「人民」に逆らう「哲学者」は理性的であると語り、また同時に「人民」に逆らう「君主」は狂気であると矛盾したことをのべたこと。第6、またピーソにたいして怒ったディドロが、読者にたいして、ピーソに飛びかかって彼を刺し殺そうと「狂気」じみた呼びかけを行なったこと。

以上6点におよぶフレロンの批判は、すべてディドロの「判断」に——ディドロの事実の認識にではなくて、事実の解釈に——かかわっている。したがって、ここで私が、2人の「判断」のどちらが正しくどちらが誤っているか、という形で問いをだすことは、ほとんど意味をもたないであろう¹⁾。むしろ問題なのは、フレロンとディドロが人間的事象を解釈する際に示す、それぞれの立場の差異を考察することである。

先の『文学年報』「第2信」の場合とおなじく、ここでもまたフレロンの視点は、歴史的事実の解釈にかんしても、ディドロのテキストの解釈についても、常に結果として表現された文言の上だけにそそがれている。歴史的状况のなかに生きる個人、あるいは作品を書きつづる筆者の、逡巡しつつある内面的心情は問題ではない。ただ、結果としてあらわれている事象間だけの因果関係、あるいは整合性を問題にし、その点についての責任を問うこと。これがフレロンの立場なのである。

これに反してディドロは、『セネカ論』初版では、常に歴史的状况内の行為者、あるいは言説の発言者の立場に——その意識の内面に——身を置くべきことを主張していたのである。ディドロとフレロンのこの立場の対立は、したがって、ここで融和しがたい形で、露呈せざるをえない。ただディドロは『セネカ論』第2版においては、このフレロンの結果責任論に対抗するために、彼の初版の主張を、さらに精密化して、裁かれる人間の、行為の内面的意図、あるいは内面的動機を洞察すべきであるという論拠を展開している。この点にかんしては、あとで詳しく検討する（第三部、第II章、2）。

(3)フレロンによるディドロのラテン語読解力の批判の検討

ディドロの誤訳にかんするフレロンの指摘は、すでに説明した第4例の場合を除けば、ほとんど当たっているであろう。ただし、ディドロに誤訳が多いという事実から、直ちに彼には「趣味の不滅の託宣」クインティリアヌスに異議を唱える権利がないという結論をひきだすことは、困難であるが。

(4)フレロンによるディドロの文体の批判の検討

フレロンは、『セネカ論』初版の文章を、「語法の誤り、奇妙な言い廻し、大げさな表現にみちた文章の寄せ集め」と規定する。確かにディドロの表現は、古典主義的——分析的、論理的——規準から、大きく逸脱していることは事実である。したがって、古典主義的文章理念に立つフレロンが、上記のような評価をくだすことは、当然といえよう。だが、このフレロンすら容認せざるをえなかったように、『セネカ論』初版には、読者を感動にひきずりこむ「活気と熱気——少なくとも頭脳の熱気にみちた部分」、あるいは「才能と非常なエネルギー」にみちた部分が存在している。

1) フレロンの上記6点の批判のうち、第2から第6までにかんしては、すでに小論第二部でそれぞれ詳しく説明してあるから、ここでは第1の非難——母親の殺害を実行したネロの罪と、母親を密告して死に追いやったルーカヌスの罪とを比較して、前者は「微」罪であると断定したこと——に触れておこう。ディドロは、なぜこのように断定したのだろうか。——彼がこのように断定したのは、ネロは、「帝国を維持するために」母親を殺したのに反して、ルーカヌスは、「自分の生命を維持するために」母親を殺した、という両者の動機の相違による。S, p.189; CN, t.I, pp.198-199; AT, p.137. ここでもまた、ディドロの動機理解論と、フレロンの結果責任論とが対立している。

われわれとしてはただ、『セネカ論』の魅力の中心がディドロのこの特異な文体であり、この作品が今日なお読者をひきつけているのは、主としてこの特異な文体の力——ディドロの意識の内面を、非常な「活気と熱気」とともに表出している文体の力——であるという事実をここで確認しておきさえすればよいであろう。

3. 第2版の出版

第2版の準備 1779年のディドロの動静にかんして、同時代人は完全な沈黙をまもっている。「彼は今でも、王宮広場にしげしげ足を運んでいるだろうか。〔……〕当時パシーに住んでいた、ベンジャミン・フランクリンや、テッシェンの和議のあと、ヴェルジェンヌと同盟条約の下相談をしていたロシアの大臣とは会見しただろうか。『セネカ論』に挿入したジャン＝ジャックにかんする注がまきおこした論争に、彼個人はどの程度関与していただろうか」(ヴァルロット)¹⁾。今日では、これらの一切が不明である。

1780年になると、ディドロの書簡(グット神父あての手紙, 1780年1月25日付)のなかに、体力の衰弱にかんする最初の言及があらわれてくる²⁾。「私は病気です。体が衰えているにもかかわらず、先にのばすことができない、いまましい仕事のために、ほとんど昼夜兼行で働かされています。」(ヴァルロットは、この「いまましい仕事」が、レナル神父『両インド史』改訂への協力をさすのか、それとも『ディドロ全集』のための準備作業をさすのか、不明であると書いている。³⁾)

トゥルヌーも、『ディドロとエカテリーナ2世』のなかで、この時期のディドロの衰弱に言及している⁴⁾。「1780年頃、ディドロはさまざまな内臓疾患に苦しんだ。これが、不治の病気の先駆症状だった。」

1780年7月中旬、『セネカ論』初版の改訂が完了し、ディドロは一通の手紙を付けて、原稿をネジョンに送付する。この手紙は現在消失しているが、次のネジョンの返書から推定すると、その内容が彼にたいして、冷やかなものであったことは確実である。1780年7月27日(推定)の返書は次のようなものであった⁵⁾。

友よ、非常に注意深く、御本を読ませていただきました。ここに御返送いたします。御本についての細かい批判的意見を書きこんだ、きわめて長文の手紙を、いったんあなたあてにしたためました。しかし、よく考えたあとで〔……〕3つの理由から、その手紙はださないほうがよいと判断しました。第1の理由は、あなたがわざわざ、私の助言は求めない、私の助言はほしくないと書いてこられたからです。それなのに意見を申しのべたりすることは、正しい意見にせよ、間違った意見にせよ、無益で見当はずれな仕わざになることでしょう。

1) CORR, t. XV, p. 166.

2) *Ibid.*, pp. 168-169.

3) *Ibid.*, p. 169, note 4.

4) DC, p. 516.

5) CORR, t. XV, pp. 175-176.

第2の理由は、私の考察は、恐らくあなたのお気にいらないでしょうし、また多分あなたを悲しませるばかりだろうからです。そしてあなたを納得させることも、あなたのお考えを変えることも、できないに違いありません。第3の理由は、御本をそのままの形態で出版するという計画は、すでにずっと以前からあなたの頭のなかでは決定されていたように思えたからです。それを妨げようとしても、ただ無駄な努力を繰り返すことになるだけでしょう。ですから私は沈黙します。そして今後も沈黙をまもり続けましょう。

ついでネジョンは、この本の出版後のディドロの「名声」と彼の生活の「平穩」とを祈ったあと、『セネカ論』第2版が好評裡に迎えられて、「あなたの友人たちの助言が、完全に無用であったということ」が証明されることを望むと書き加えている。

これにたいして、ディドロは、1780年7月28日（推定）、ネジョンにたいして、苦渋にみちた返事を送る¹⁾。

友よ、お元気ですか。私の作品に不満だということを遠まわしに知らせる手紙を書こうとして、結局最後は思いとどまれたものの、そのために2週間も費されたとのこと、まことにお気の毒に思います。ですが、私としては全力を尽したのです。これ以上のことはとうていできません。疲労と倦怠から、すぐれた作品が生みだされたためしがないというのに、私は疲れきって、うんざりしています。それに、私は作品〔『セネカ論』初版〕中のよい部分はそのまま残したうえ、それと同程度によく表現し、よく考えぬいたと思っている、50、ないし60の章句〔第2版への挿入章句〕を付加したのに、作品が悪くなったとは、とても考えられないのです。こう書いても、あなたはきっと意外には思われまいでしょう。この作品は、そのままの形でだしてください。私としてはもう一度読み直して、段落の区切りをちゃんとつけましょう。冗長な部分、間違っていたり、杜撰だったりする部分は省略しましょう。できることは、それだけです。私は名声などほとんど気にかけていません。たとえ称賛をうけても、うぬぼれることはないでしょうし、逆に非難されても、少しも悲しむことはないでしょう。。私は68歳で、8～9年もまえから、他人の世話になって暮しています。自然の元素と埃にかえるまえに、もはや数年の命しか残されていません。そのような時になるとなにかもどうしてもよくなってしまうのです。そのことをよくわかっていただければよいがと思います。私の生活の平穩〔『セネカ論』第2版出版後に、ディドロの生活の「平穩」が乱されないか、というネジョンの心配〕のことですが、それが完全に安全であることは誓ってはいくらいいです。悪口はいわれるでしょう。だが悪口は石ではありません。私の体を傷つけるものはなにもないでしょう。

ディドロは続けて、この作品はグリムにも見せるつもりであるが、恐らくネジョンの場合と同様

1) *Ibid.*, p.177.

の悪評をうけるであろう、だが「なん度鞭うっても、疲れきった馬を駆けさせることはできない」と書いている。

ネジンは、明らかに『セネカ論』初版の改訂原稿に不満であり、ディドロはネジンのこの反応を見て、グリムの悪評をすでに予想しているのである（ただし、グリムのこの時の反応の記録は、今日残されていない）。

『レナル神父弁護の手紙』 1781年、ディドロは多年の友人フレデリック＝メルキオール・グリムにたいして絶交状をしたためる。そのきっかけになったのは、この友人がジェルメーヌ・ド・ヴェルムヌウ夫人のサロンで、レナル神父にたいして行なったディレンマ（両刀論法）による攻撃であった。

これより先、レナル神父は1772年（ただし1770年と印刷されている）に『両インドにおけるヨーロッパ人の植民事業と通商にかんする哲学的・政治的歴史』の初版を、アムステルダムから匿名で出版し、ついで1774年には、第2版をおなじく匿名で刊行した。しかし、1781年3月の第3版にいたって、著者は今までの仮面を脱ぎ捨て、巻頭にはギョーム＝トマ・レナルという名前と自分の肖像とを印刷させた。さらに内容にも全面的な改訂がほどこされ（これには主として協力者ディドロの手が加わっている）、今までの客観的歴史家の観点は、被抑圧民族の立場に身を置いて、ヨーロッパ列強諸国の植民主義を弾劾する、主体的政治批判者の視点に転換したのであった。レナル神父の身に危険が迫るのは当然であったろう。

ド・ヴェルムヌウ夫人邸においてグリムがレナル神父を非難したのは、このような状況においてであった。そのサロンの席で、グリムはレナル神父にこういったという。「もしあなたが攻撃している相手が、あなたに復讐できないと思っている場合に、相手を攻撃するのは卑怯な振舞いです。また逆に、もし相手が復讐しうる能力をもち、またそれを望むだろうとあなたが思っている場合に、相手の恨みに身をさらすのは狂気の沙汰です」と。この時「あわれな神父」はひとことも答えず、「ばか」のようにつつあったままであったという¹⁾。

ディドロは、ヴァンドゥル夫人の家でグリムに会った時、彼の口からド・ヴェルムヌウ夫人邸で起こった上の一件を聞かされる。その時、ディドロの内部で怒りが爆発する。家に帰った彼は、直ちに『グリム氏にあてたレナル神父弁護の手紙——グリム氏が、ド・ヴェルムヌウ夫人邸でレナル氏に答えを迫り、またわが娘ド・ヴァンドゥル夫人邸で私にも繰りかえしたディレンマにたいする返答』（1781年3月25日付）を執筆したのであった。

約2ヵ月後の5月21日、「高等法院の法廷は、判決をくだし、次の処置をとるように命令した。すなわち前記書物〔『両インド史』〕の扉ページに記名されているギョーム＝トマ・レナルなる人物が逮捕され、拘束されて、パリ裁判所付属監獄に連行されること、前記監獄において、高等法院検事から、前記書物にかんして事情を聴取され、訊問されること、云々。ただし、本人の身体検査を行ない、2週間の拘束を宣告し、必要物件を押収、記録したのち、前記ギョーム＝トマ・レナル

1) <Lettre apologétique de l'abbé Raynal à M^r Grimm>, INV, pp. 236-253; CORR, t. XV, pp. 210-217; OPH, pp. 627-644; TP, pp. 189-212.

は、拘束をとかれるべきこと」（『文芸通信』1781年6月号¹⁾）。

ディドロは、5月25日、「〔書斎の〕窓の下から、神父の有罪判決を大声で知らせるのが聞こえてくる」なかで、『レナル神父弁護の手紙』の最後に、数行の重要な追伸を書き加えている²⁾。

（この手紙は、最初3月25日に書かれているが、少なくとも2カ月間は発送されなかったことが確実である。しかしその後も、結局グリムには送りつけなかったらしい。なぜなら、ディドロとグリムの外面的な関係は、その後も依然として続いているからである。）

ディドロは、『レナル神父弁護の手紙』のなかで、グリムのディレンマにたいして、次のように神父を弁護する³⁾。

これらの稀有のひとつと〔「天才の持主、勇気あるひとつと、徳高いひとつと、大勢の卑怯者がありがたがってひれふしている偶像を軽蔑するひとたち」が、泣き言をもらさずに、財産、自由、名誉、生命を捨てることを辞さない場合、私はそのひとを気違いと呼ぶでしょうか。〔……〕虚偽と圧政に対する誠実で勇敢な反対者は、一時の激昂がおさまったあとで、きっこう気づくでしょう。もし自分が今大胆なことばをはけば、今まで不寛容と狂信の生贄になった多数の犠牲者の数のうちに、さらにもうひとり自分を加えることになるのだ、と。だがその恐怖が、このひとをおしとどめるでしょうか。おしとどめるべきでしょうか。いやいや、グリム君、そんなことはありません。人民はいいます。「まず生き、それから哲学する」と。しかし、ソクラテスのマントを身にまとい、生命以上に真理と徳とを愛する人間は、こういうでしょう。「まず哲学し、それから、可能であれば、生きる」と。〔……〕

それならソクラテスが、30人の独裁政権に勇敢にも立ちむかった時、また彼が自分の毎日の生活は、アテナイの青年にさずけている大胆な教えのゆえに、ただ死期をはやめるのに役立っているにすぎないと認めた時はどうだったのですか。このソクラテスが気違いだった、というのですか。〔……〕

〔追伸〕私の部屋の窓の下から、神父の有罪判決を大声で知らせる声が聞こえてきます。この恥じ知らずのやからと、彼らが仕えた年よりのばか〔当時、政府の実権を握っていた國務大臣モールパ〕の頭上に、かつてソクラテスに毒人參を飲ませたアテナイ市民の頭上にふりかかったのとおなじ恥辱と呪咀がふりかかるがよい。

哲学者は、「虚偽と圧制」にたいする、絶えざる批判者であらねばならないこと、「まず生き、それから哲学する」という「人民」に反して、「ソクラテスのマントをまとい、生命以上に真理と徳とを愛する人間」は、「まず哲学し、それから可能であれば生き」ねばならないこと。——これ

1) CORR LIT, t. XII, p. 518.

2) INV, p. 253; CORR, t. XV, p. 217; OPH, p. 644; TP, p. 212.

3) INV, pp. 240-241, p. 243, p. 253; CORR, t. XV, p. 213, p. 216, p. 217; OPH, p. 629, p. 632, p. 644; TP, p. 191, p. 195, pp. 211-212.

らはすべて『セネカ論』初版においてディドロが主張していた原則にほかならない。特に、「人民」の考え方と、ソクラテスの徒（「賢者」）の考え方との対比は、ほぼそのままの形で、初版中に見いだされるであろう。（本論第二部、第三章、2、「人民への絶望」の項参照）。

したがって、もしここでグリムのディレンマを承認するとすれば、権力者を批判する「哲学者」は——レナル神父も、ディドロも、セネカも、ソクラテスも——すべて「狂人」であらざるをえない。このグリムの結論をまえにして、ディドロの道徳的怒りが炸裂したのである。その意味で、『レナル神父弁護の手紙』は、レナル神父の弁護文であると同時に、ディドロの自己弁明、『セネカ論』初版の擁護である、ということもできるであろう¹⁾。

第2版の出版 ヴァルロットが正当にも主張するように、「レナルの有罪宣告にたいする、ディドロの真の返答は、たとえどれほどの犠牲を払っても『クラウディウスとネロの治世論』〔『セネカ論』第2版〕を出版する決心をもち続け、それを強固にすることであった。」²⁾ 1781年の初夏、ディドロは、出版監督庁長官シュアールに、『セネカ論』第2版の原稿を提出して、出版許可を——やむをえない場合には「暗黙の認可」³⁾ を——とりつけるように働きかけはじめる。すなわち、1781年6月10日付、シュアールあての手紙では、3週間もまえに、原稿を渡してあるのになぜ返事をくれないのか、となじり、「もう少し速く」と出版許可の交付を催促している⁴⁾。

1) この重要な手紙にかんして、諸研究者はいう。ディークマン——「この手紙は、ディドロの晩年の作品のひとつであり、彼の最良の『小品』のひとつである。ここには、ディドロの道徳的人格が、そのすべての力とともに示されている。」INV, 1951, p.5. セズネック——「そして今度はグリムが、もっとも親しい友グリムが、諸国の官廷との親交によって墮落し、哲学を公然と否認し、その名誉を侮辱したのである。レナルを攻撃することによって、彼はソクラテスの死後の名声を汚した。そしてディドロの怒りが炸裂したのは、この瀆聖行為にたいしてである。」Jean SEZNEC, *Essai sur Diderot et l'antiquité*, Oxford, The Clarendon Press, 1957, p.15.

ファブル——「この美事な未刊の手紙は、ディドロの性格と生涯を曇らせるただひとつの疑問点——グリムにたいするディドロの盲目的友情と、そのために彼がまきこまれた妥協という疑問点——をとり除く。グリムの道徳的弱さ、破廉恥、専制君主たちにたいする卑屈な振舞い、不可解な影響力を行使してディドロの献身と才能とを不当に利用する汚いやり方を、それまで批判してきたひとですら、これほど完全な軽蔑をこめて、グリムの人格を攻撃する勇気をもっていなかった。」Jean FABRE, «Deux frères ennemis», *Diderot Studies III*, p.211, note 1; *Lumières et Romantisme*, 1963, p.64, note 102.

これらの議論に反して、ただひとりヴェルニエールは主張する。——「だが、この怒りは、必ずしも神聖な怒りとはいいい切れない。ディドロは、はっきりとは認めていないが、著者〔レナル『両インド史』の協力者〕としての自尊心を傷つけられたのだ。」OPH, p.624.

確かに、ディドロの「著者としての自尊心」は傷つけられたことであろう。しかしその事実のゆえに、ディドロの怒りのもつ道徳的意味を否認することはできない。なぜなら、グリムのディレンマが狙っていたのは、たんに『両インド史』の作者だけではなく、ディドロが『セネカ論』初版を通して擁護しようとしたソクラテス、セネカの生き方——哲学者の生き方——そのものだったからであり、そしてディドロの「怒りが炸裂した」のはまさに彼がそのことを見抜いたためだったのであるから。

2) CORR, t. XV, p.241.

3) 当時の出版認可には、3種類があった——第1, 「書面による認可」。第2, 「暗黙の認可」（この許可は、正式に政府に登録されており、出版監督長官から与えられる）。第3, 出版しても処罰しないというたんなる口頭の約束（これは警視総監から与えられるが、どこにも記録されておらず、そのためいつでも取り消される危険がある）。したがって、この「暗黙の認可」も、正式の出版許可の一種である。

D. DIDEROT, *Sur la liberté de la presse*, texte établi, présenté et annoté par J. Proust, Paris, Editions sociales, 1964, pp.18-19.

4) *Ibid.*, p.243.

ヴァルロットによれば、ディドロが、『セネカ論』初版を改訂し、より大胆な第2版を執筆中であるという情報は、当時、教会の情報網をとおして、故郷ラングルの教会参事会員である弟のディエ・ディドロにまで伝わっていたという。事実ディドロの女婿ド・ヴァンドゥルの母カロワロン夫人からこの長男にあてた1781年7月25日付の手紙にはこう書かれている¹⁾。「当地の噂によると——それをいいたしたのは、教会参事会員さんですが——、ディドロさんは、セネカの伝記の補遺を執筆中とのこと。参事会員さんは、あの兄は、もう近頃は全然仕事をしていないといっていたくせに、実状はこのとおりだ、といっています。」だがディドロは、この頃から次第に気力に衰えを感じはじめており、1780年7月中旬に『セネカ論』第2版の原稿をネジョンに渡してからは、以前の作品（筆記者の手になる、作品の写稿）に手を加えること以外は、なにもしていない²⁾。

1780年夏以来、ディドロが待ちこがれていた『セネカ論』第2版は、1782年についに出版された。フランス国内の検閲の危険を避けるために、発行所には、ベルギーのブイヨン印刷会社を選ばれ、本には著者名をいれず、地名はブイヨンではなく、ロンドンと印刷されている。当時の事情を若干明らかにしうるような1通の手紙が今日残されているが、それは、ブイヨン印刷会社の経営者で、同会社が発行する雑誌『百科評論』の編集者でもあるピエール・ルソーが、共同経営者である義弟のジャルル・オギュスト・ド・ヴァイセンブリュックにあてたものである³⁾。

パリ、1782年1月2日

ちょうどディドロ氏の第2巻〔『セネカ論』第2版〕の刷りあがりページの包みを手にした時に、同氏が家にやってきたので、早速見てもらった。仕上がりには満足したらしかったが、こんな手間どったことには驚いていた。それも当然だ。どうか、大至急仕事を終わらせてほしい。もう販売にかからねばならない。少なくとも600部を、パリの警視総監ルノワール氏あてに送付すること。彼は警視総監名で、この本を〔パリに〕はこびこむことを、著者に許可している。包みのなかに、エルヴェシウス〔1781年発行のエルヴェシウス全集〕を、少なくとも25部、しのびこませてくれたまえ。この点、くれぐれも忘れないように。

3日後、すなわち1月5日付の手紙で、ルソーは、もう一度仕事を急がせるように催促し、「ちょっとした儲けになるだろう。それはほぼ確実だし、私はぜひそうしたい」と書いている⁴⁾。したがって、『セネカ論』第2版は、1782年1月中には、一般に販売されはじめたものと、推定できる。

意図の変化 ディドロが、『セネカ論』初版に改訂を加えて、新たに第2版を出版しようとした時、彼は何を目ざしていたのだろうか。この改訂作業は、初版の意図に変更を加えない範囲で実現された修正にとどまるものだったのか、それとも、初版の意図そのものにまで変更を加える改訂だ

1) *Ibid.*, p.252.

2) *Ibid.*

3) *Ibid.*, pp.285-286.

4) *Ibid.*

ったのだろうか。

初版におけるディドロの意図は、作品全体のいわば序文ともいべきネジョンへの献辞のなかで明確に表現されており、それは「クラウディウスとネロの治世」という歴史的状況の背景のなかで、政治家として行動し、かつ哲学者として思索したセネカの、行為と言説の正しさ、純粹さを読者の前で弁護することであった（第二部、第Ⅰ章、「意図」の項参照）。

第2版においても、この基本的な意図そのものは変わっていない。しかし、同時に、初版では自覚されていなかったディドロのもうひとつの意図が、ようやく明示的にその姿をあらわしはじめる。第2版で新たに付加された次の部分が、この新しい意図を示している。（下の右側に印刷した、第2版からの引用文中、記号〈 〉内のテキストが、「付加文」である。なお第2版中の、たんなる語句の変更部分は、特に表示しなかった。）

初 版¹⁾

しかし、もし読者が、セネカの本と私の本とを同時に比較して読んでくれば、この著者〔セネカ〕と私との間に、多かれ少なかれ類似点を発見してくるにつれて、私の本のうちにより多くの脈絡と、明晰さとを発見するだろう。

第 2 版²⁾

しかし、もし読者が、セネカの本と私の本とを代る代る読みくらべてくれば、〈私の立場により忠実に身を置くにしたがって〉、また、この哲学者と私との間に、多かれ少なかれ類似点を発見してくるにつれて、私の本のうちにより多くの秩序と、明晰さとを認めるようになるだろう。〈そして読者は、私が描いているのが、物語中に姿をあらわすさまざまな人物の魂であると同時に、私自身の魂でもあるということにやがて気付きはじめるであろう。〉

ディドロは、『セネカ論』第2版の冒頭において、はじめて、この作品が描きだす対象が、さまざまな登場「人物の魂」であると同時に、彼「自身の魂」でもあることを、自覚的に主張するにいたる。この主張は当然、ディドロのセネカ弁護が、同時に自己自身のための弁明にほかならないことを内包しているであろう。したがって、「〔読者が〕〈私の立場により忠実に身を置くにしたがって〉、〔……〕私の本のうちにより多くの秩序と明晰さを認めるようになるだろう」とディドロがここで語る時、この新たに付加された部分が、読者にたいするひとつの要請——ディドロ自身の立場に立ってこの作品を読んでほしいという要請——の意味をになっていることは明らかである。

ディドロが『セネカ論』第2版にもりこもうとした新たな意図は、いま引用した箇所にすぐ続く、第2版の改訂・付加部分に、さらに明確に示されている。（記号の表示法は先の例にしたがう。）

1) S, p.(5); CN, t.I, p.4; HN, t.I, p.6; AT, p.10.

2) CN, t.I, p.4; HN, t.I, p.6; AT, p.10.

初 版¹⁾

万人にたいしてどんな証拠も、同一の効力をもつものではなく、どんな考えも同一の魅力をもつものではない。

第 2 版²⁾

万人にたいしてどんな証拠も、同一の効力をもつものではなく、どんな観念も同一の明白さを、またどんなイメージも、同一の魅力をもつものではない。＜だが、私は、はっきりこのことは認めておこう。天才が、私のいくつかの考えのなかに、自己の姿を認めてくれる場合よりも、有徳のひとが、私の意見のなかに、自己の姿を見いだしてくれる場合のほうが、ずっと喜ばしいということ。＞

すなわちディドロは、『セネカ論』第2版にいたって、文学者、あるいは思想家として——ディドロ自身のことばを使えば、「天才」として——自分が評価されることを、もはやほとんど考慮の外にしていると、まず読者に告げるのである。それと同時に、彼は、セネカの行為と言説とを、すべての読者のまえて、弁明するという役割を、もはや断念してしまっている。歴史的「証拠」と論証的「観念」と描写的「イメージ」の説得力に上のような疑いを抱いている時、ひとはどうして忠実な弁護者の役目をはたしえようか。

彼はいまや、一般読者、文学者、思想家にではなく、わずかな「有徳のひと」——言説にではなく、行為に価値をおくわずかな「有徳のひと」——にむかって語りかける。自分が、セネカの立場に身を置いて彼の「魂」を理解したように、あなたがたもまた、私の立場に身を置いて、私の「魂」を理解してほしい。それだけが私の望みである、と。

『セネカ論』初版から第2版にかけて、ネジヨンへの献辞に表明されたディドロの意図は、このようにセネカの弁護から、ディドロ自身の自己告白、自己弁護へと、力点を移行させていくのである。（しかし、その意図が、第2版のディドロの本論のなかで、はたして献辞のことばどおりに実現されているかどうかは、また別箇の問題であり、それについては次章以下で検討する。）

構成の変化 すでにのべたように（第二部、第2章、「Sに加えられた4種類の変更」の項参照）、「セネカ論」第2版は、初版にたいして、語、句、節の付加、削除、変更、および文脈の変

1) S, p.(5); CN, t.I, p.4; HN, t.I, pp.6-7; AT, p.10.

2) CN, t.I, p.4; HN, t.I, pp.6-7; AT, p.10. ただし、この第2版末尾の付加文は、初版末尾(S, p.518)の文章に若干の改訂を加えたうえ、この場所に移されたものである。

第2版付加文

mais je serais, je l'avoue, beaucoup moins flatté que l'homme de génie se retrouvât dans quelques-unes de mes pensées, que s'il arrivait à l'homme de bien de se reconnaître dans mes sentiments,

初版末尾の原文

J'ai écrit ce que j'aurais désiré qu'un Lecteur honnête se dit à lui-même en me lisant ; moins jaloux que l'homme de génie retrouvât en lui quelques-unes de mes pensées, que flatté, si l'homme de bien se reconnoissoit dans mes sentiments.

更が加えられて成立したものであるが、それにともなってテキスト（注も含む）の総量は、約1.7倍増加している。その内訳を巻、章、ページ、注について示すと次のとおりである。

	初 版	第 2 版
判	12 判	12 判
巻	1 巻	2 巻
章	〔献辞〕 + 109 章	総数 〔第 1 巻の献辞〕 + 〔第 2 巻の献辞〕 + 237 章 (第 1 巻 〔献辞〕 + 127 章) (第 2 巻 〔献辞〕 + 110 章)
ページ	総数 535 ページ (XVI+519ページ)	総数 701 ページ (第 1 巻 356ページ) (第 2 巻 345ページ)
注〔ディドロ執筆の注 とネジョン執筆の注〕	各ページ下に印刷 総数 481	巻末に一括して印刷 総数 508 (第 1 巻 394) (第 2 巻 114)

章の編成に加えられた変更は、次のとおりである。

初 版	第 2 版
「N***氏へ」〔ネジョンへの献辞〕 + §. I—§. LXIII 〔セネカの生涯論〕	第 1 巻 「ネジョン氏へ」〔ネジョンへの献辞〕 + §. 1—§. 127 〔セネカの生涯論〕
§. LXIV—§. CIX 〔セネカの著作論〕 §. LXIV 〔セネカの著作論の目的と方法〕 §. LXV 「セネカの手紙について」 §. LXXXI 「マールキア慰藉文」 §. LXXXII 「怒りにについて」 §. LXXXIV 「寛仁について」 §. LXXXV 「摂理について」 §. LXXXVI 「恩恵について」 §. LXXXX 「魂の平静について」 §. LXXXXXI 「幸福な生活について」 §. XCIII 「余暇あるいは賢者の引退について」	第 2 巻 〔ネジョンへの献辞〕 + §. 1—§. 110 〔セネカの著作論〕 〔ネジョンへの献辞。内容は、第 2 巻の目的と方法 (初版と同一テキスト) 〕 §. 1 「セネカの手紙について」 §. 4 「マールキア慰藉文」 §. 45 「怒りにについて」 §. 50 「寛仁について」 §. 54 「摂理について」 §. 57 「恩恵について」 §. 64 「魂の平静について」 §. 67 「幸福な生活について」 §. 73 「余暇あるいは賢者の引退について」

§.XCV「ヘルウィア慰藉文」	§.77「ヘルウィア慰藉文」
§.XCVI「人生の短さについて」	§.79「人生の短さについて」
§.XCVII「賢者の恒心について」	§.85「賢者の恒心について」
§.XCVIII「ポリュビウス慰藉文」	§.88「ポリュビウス慰藉文」
	§.92「断片」
§.XCIX「エピグラム」	§.93「エピグラム」
§.C「かぼちゃへの変貌」	§.94「かぼちゃへの変貌」
§.CI「自然の問題」	§.95「自然の問題」
§.CII—CVII「セネカにたいする非難とディドロの弁護」	§.101—107「セネカにたいする非難とディドロの弁護」
§.CIX「セネカと関係のあるスペインの遺跡」	〔第1巻, §.124へ移行〕
	寓話〔§.109の一節〕
	§.110「結論」

以上で明らかのように、第2版は全体的構成、すなわち章の編成にかんしては、ほぼ初版のそれを踏襲しているといえることができる。

初版への付加文 初版に加えられた変更のうち、もっとも重要なものは付加文であって、その総数は約60である¹⁾（この項の終わりの付表参照）。これらのうち、比較的長い付加文は、それぞれがなんらかの主題を一貫して追求している。この種の付加文のページと主題を表によって示すと、下のとおりである。

なお、参照の便を顧慮して、左欄に番号をつけておく。このなかで付加文（I—1）、（I—2）、（II—3）は初版テキストの数行を——若干の変更を加えたうえで——内部に包摂している。『セネカ論』第2版中の付加文の所在は、初版テキストと第2版テキストとを対照した版本（HN）によってしか明示しえないのであるが、参考のため、『セネカ論』第2版原テキスト（CN）とアセザートゥルヌッ版（AT, t.III）の該当ページ数を付記した（ただし、付表においては、HNのページ数のみを掲げる）。

『セネカ論』第2版中の長い付加文表

1) なお、ヴァルロットは、私が編纂した「『セネカ論』初版—第2版比較テキスト」（HN）に基づいて数えた結果、付加文の総数を「約50」と判断している。CORR, t.XV, p.175 et note 4. 私が数えた「約60」という数と矛盾するようであるが、長い付加文だけを選べば、「約50」という数が妥当であろう。

参照番号	主 題	ペ ー ジ (括弧内は注番号)		
		HN	CN	AT
I-1	セネカ弁護（ネロの宮廷で奉仕を続けたという非難，セレーヌスと協力してネロにアクテをとりもったという非難の批判）	t. I 57-74	t. I 83-109	65-79
I-2	スイッリウス批判	82-83	123-125	88-89
I-3	ルソー批判	84-94	126-140	91-100
I-4	セネカ，ブルス弁護（2人が，アグリッピナ殺害事件に関与したという非難，事件後も2人がネロの宮廷で奉仕を続けたという非難の批判）	100-108	150-163	107-114
I-5	セネカ弁護（セネカと同時代に，彼を非難する者は存在しないという主張）	136-137	206-208	145-146
I-6	セネカ弁護（スイッリウス，ディオソ，クシフィリヌス，および現代の彼らの垂流による，セネカが吝嗇であるという非難の批判）	141-143	215-218	152-153
I-7	セネカ弁護（セネカが吝嗇であるという非難の批判）	144-148	219-226	154-158
I-8	セネカ弁護（セネカを非難したディドロ自身の旧説の否定，セネカにたいするさまざまな非難の批判）	164-179	251-274	176-191
I-9	スイッリウス，ディオソ，クシフィリヌス批判	212-215(191 g)	307-310(191 g)	89-90(1)
I-10	科学における「実験〔観察〕」の重要性の強調（授乳期間中は夫婦関係をもつべきではないとする説の批判）	215-216(191 P)	310-311(191 P)	95-96(2)
I-11	セネカ弁護（セネカの死に方にたいする非難の批判）	233-235(309 h)	327-329(309 h)	144-145(1)
I-12	セネカ弁護（晩年のセネカの失寵と処刑が当然であるとする説の批判）	235-237(309 k)	329-331(309 k)	145-146(1)
I-13	「怪物〔ルソー〕」批判	247-248(259 m) [(359 m)]	341-342(259 m) [(359 m)]	178-179(2)
I-14	ドライデン批判（プルタルコスと比較して，セネカを低く評価するドライデン説の批判）	248-253(259 n) [(359 n)]	342-348(259 n) [(359 n)]	179-181(2)

参照番号	主 題	ペ ー ジ (括弧内は注番号)		
		HN	CN	AT
I-15	ロラン論 (ディドロのロランにたいする留保的評価)	253-254(359o)	348-349(359o)	190(1)
II-1	友情論 (友情への幻滅)	t. II 7-8	t. II 8-10	204-205
II-2	見世物論, 奴隷の反抗論	9-10	10-11	205-206
II-3	セネカ弁護 (文学者としてのセネカの検討)	29-45	40-64	223-237
II-4	『自然の問題』 (セネカの『自然の問題』論, ディドロの晩年の自然科学方法論)	166-174	253-267	358-366
II-5	セネカ弁護, ディドロの自己弁護 (セネカ, ディドロにたいするさまざまな非難の批判)	186-210	283-321	379-405
II-6	「結論」	210-212	321-324	406-407

私は以下, 本論第二部の叙述の順序にしたがって, 『セネカ論』初版と第2版との間に認められるディドロの立論の同一性と差異とを考察していきたい。すなわちまず第II章において, 主として「セネカの生涯論」を, ついで第III章において, 主として「セネカの著作論」を検討する予定である。

付 表

『セネカ論』第2版中の付加文表		
長い付加文の参照番号	ペ ー ジ (括弧内は注番号)	各付加文の総ページ数
	HN, t. I	22
		23
		24
		25
		27
		30
		45
		47
		48
		49

長い付加文の参照番号	ペー ジ (括弧内は注番号)	各付加文の総ページ数
I-1	49-50	0.8
	56	0.7
	57-74	16.5
	75	0.7
	75	0.2
I-2 I-3	77	0.1
	78-79	0.5
	82-83	2.0
	83-93	10.0
	96	0.4
I-4	100-108	9.0
	112	0.8
	122-123	0.6
	128	0.1
	131-132	0.6
I-5 I-6	133	0.1
	135	0.3
	136-137	1.0
	138	0.2
	141-143	1.5
I-7 I-8	144-148	4.0
	153	0.2
	161-162	0.3
	164-179	16.0
	195(63 d)	0.3
I-9 I-10 I-11	197-198(82 e)	0.4
	209(170 f)	0.7
	212(191 g)	3.0
	215(191 P)	1.0
	233(309 h)	1.5
I-12 I-13 I-14	235(309 i)	0.1
	235(309 k)	1.5
	240(324ff)	0.3
	247(259m) [(359m)]	0.4
	248(259 n) [(356 n)]	5.0

長い付加文の参照番号	ページ（括弧内は注番号）	各付加文の総ページ数
I-15	253(359 o)	1.0
II-1 II-2	HN, t. II 5	0.2
	5	0.2
	7	0.5
	7-8	1.5
	9-10	1.0
II-3	13	0.5
	14	0.3
	16	0.4
	17	1.0
	29-45	17
II-4	166-174	9
II-5	186-210	25
II-6	210-212	2

（項目「付加文の総ページ数」における小数点以下の数字は、テキストの行数を基礎とした百分比の概算による。）

『セネカ論』第2版中には、このほかネジョンが執筆した付加文が存在する。それらを示せば次の通りである。

『セネカ論』第2版（注）中のネジョンによる付加文表		
ページ（括弧内は注番号）	各付加文の総ページ数	
201(114)	0.6	
202(118)	0.4	
211(184)	0.4	
219(219)	0.3	
221(235)	0.5	

第Ⅱ章 セネカのための弁明から自己自身のための弁明へ

1. 初版の弁護原則の反復強調

「**事実の吟味**」の**原則の反復強調** 『セネカ論』初版に表現されていた、ディドロのセネカ弁護の主張は、第2版になってどのように変化したであろうか。本章では、まず、第2版中の付加文で反復強調された初版の弁護原則および第2版中の付加文では反復されなかった原則について考察し、ついで、初版の原則をより精密化した第2版固有の弁護原則を調べ、最後に、第2版にあらわれた

ディドロによる昔の自説（セネカ非難）の取消しの意味を考察したいと思う。特に、この最後の考察を通して、『セネカ論』第2版に表現されたディドロの意識の構造と初版のそれとの基本的な差異を明らかにするつもりである。

『セネカ論』初版における第1の弁護原則——セネカを裁くには、告発された罪が歴史的事実であるかどうかを、まず吟味せねばならない、という原則——は、第2版のなかでは次のような形で反復強調されている¹⁾。

偉大な人物を告発するには、反駁できないような事実が必要である。セネカのように生き、書き、考え、そして死んだ人物を弁護するには、彼の罪を晴らしうのような、すべての推測を受け入れることが、——特に、歴史によってそれが容認されうる場合には——妥当であり、正当でさえある。

このように、被告セネカのために「事実の吟味」を要求するディドロは、しかしここで事実の有無にかんする自然科学的、客観的吟味の必要性を説いているのではない。問題は、道徳的世界の事柄に——理性や知性以上に、むしろ心情と魂に——かかわっている。だから彼はいう。「徳高い人物をただのひとりでも告発するくらいなら、100人の偽善者にだまされるほうがましである。ひとりの無実の人物の名声を、ぶしつけにも傷つけるくらいなら、20人の犯罪者を愚かにも見のがすほうがましである。」すなわちディドロは、被告を無罪放免する可能性がある場合には、自分は偽りの証拠によってだまされてもよい、というのである²⁾。

彼はこの原則の正当性を、自己の心情的真理として確信している。「私はこの道徳的原則の不都合な点を、今までに一度ならず経験したし、これからも100度以上経験するだろう。だが私の意見は決して変わらないだろう」と。私はすでに『セネカ論』初版の検討に際して、ディドロにおける「事実の吟味」の原則と、人間性への信頼の立場——「美しい魂」の立場——との内面的結びつきを確認したが、この結びつきは、いま見たように、第2版においてもそのまま維持されているのである。そればかりではない。この結びつきは、具体例に即して、より明確なことばで強調されている。

たとえば、セネカがクラウディウス追悼の辞を執筆し、「悪徳君主」に「賛辞」を呈したという非難にたいするディドロの弁護論を見てみよう。彼は、セネカが、先帝クラウディウスにたいする賛辞をネロに読ませたのは、この演説を通して、彼に皇帝のあるべき姿を教え、たとえ「好みからではなくても、少なくとも羞恥心によって彼を義務にしばりつけようとした」ためである、と弁護したあと、歴史上の人物を判断する一般的原则を、次のように定式化する³⁾。

1) CN, t.I, p.274; HN, t.I, p.179; AT, p.191.

2) CN, t.I, p.331, note (309k); HN, t.I, pp.236-237; AT, pp.144-146, note 1.

3) CN, t.I, pp.71-72; HN, t.I, pp.49-50; AT, p.57.

私には私流の歴史の読み方がある。歴史のなかに、人間性の名誉を傷つける事柄の話が見つかったとしよう。私は最大限の厳正さでその事実を検討する。私がもちうる英知のすべてを発揮して、その事実の信用を失わせるいくつかの矛盾を発見しようと努める。だがある行為が美しく、高貴で、偉大である場合には、事情はまったく異なる。私は、この行為を行なった人物と自分とが、人間の名を共有しているという事実には深い喜びを感じ、この喜びに異議を申し立てる気持にはなれないのである。私は、さらにまたこうもいいたい。すぐれた人物の首尾一貫した生活・教説と、彼が享受している尊敬にたいして異を唱える権威者がいる場合、あえて彼らに反対して、このすぐれた人物の汚名をそそぐ意見をはくということは、私の心情にもかなっているし、恐らくは正義にもかなっているのだ、と。

すなわち、ディドロの歴史の読み方の原則は、次の3点に要約できるだろう。——第1，歴史上の人物が告発されている場合は、まずその告発が事実であるかどうかを最大限の厳密さで調査する。第2，逆に、美しい行為が記録されていれば、そのまま信じる。第3，すぐれた人物に汚名が着せられている場合は、権威者に反対してでも汚名をそそぐように努力する。そしてディドロは、この3原則を、「心情」と「正義」の名において主張しているのである。（彼は、この歴史の読み方を「懐疑主義」(<pyrrhonisme>)と名づけ、これを攻撃することは、容易であるかもしれないが、誠実な態度ではないと付言している¹⁾。)

「告発者の人格の信憑性の吟味」の原則の反復強調 『セネカ論』初版の第2の弁護原則は、セネカにたいする告発内容の信頼性の有無を、告発者の人格的信憑性の有無の観点から吟味することであった。その結果、スイッリウス、ディオソ・カソス、クシフィリヌス3者の、セネカにかんする告発——主として蓄財にかんする告発——は、信憑性のない証言として完全に却下されてしまったのであった。ディドロは、この第2原則を第2版のなかでも、もう一度とりあげて強調する。

ディドロの記述によれば、告発者たちは、次の2つの罪状によってスイッリウスを告発する²⁾。——第1，アジア属州の知事に在職中、「公金を着服、私消した」。第2，卑劣な密告を行なって、そのために、ポンポニウスを内乱にかりたて、ドゥルーススの娘ユーリアとポッパエア・サビーナとを自殺に追いこみ、ヴァレリウス・アシアーティクスとルソウス・サートゥルニヌス、コルネリウス・ルプス、その他多数のローマ騎士の命を失わせた。

スイッリウスはこの第1の告発にたいしては、ひとことも弁解ができない。だが、第2の告発にたいしては、「自分は皇帝〔クラウディウス〕の命令にしたがったにすぎない」といって申し開きをする。これにたいして、ネロは直ちに、クラウディウスが、おまえに告発命令をくだしたという

1) ディドロは、『百科全書』第13巻(1765年)の項目<ピュロンの、あるいは懐疑主義者の(哲学)>のなかで、すでにこの態度を次のように規定している。「一切は連続しているのだから、もし人間が一切を知りつくしているものでなければ[……]彼は必然的になにか未知なものにおつかるはずだ。だから、彼はこの未知な点からさかのぼって、自分の意向にはそまなくても、無知や未知の領域の存在を結論するのが当然であろう。」 ENC, t. XIII, p. 613; AT, XVI, p. 491.

2) CN, t. I, p. 123; HN, t. I, p. 82; AT, p. 88.

事実はない、とスイッリウスに反論したので、後者はさらに、実は「メッサリーナの指示」を受けていたのだ、といい逃れをしようとする¹⁾。

しかしネロは、数ある人間のうちで、スイッリウスだけが「破廉恥な女〔メッサリーナ〕」の手先に選ばれたということ自体がなにより罪の証拠ではないかと追求し、メッサリーナの「残虐行為の手先になった男は、褒賞をもらった犯罪にかんして処罰されねばならない」と断定する。このような情景を描きだしたあとでディドロは問う。一方に、「職業的密告者」スイッリウスを、他方にセネカを置いた場合、前者の証言を信用すべき根拠がいったいどこにあるのか、と²⁾。

なんということだ。極悪人の一貫した行為、性格、生活の実態を知ったうえでも、なおかつ、彼の告発に効力があるというのか。なんということだ。不幸にも告発された有徳者の一貫した行為、性格、生活の実態を知ったうえでも、なおかつ、彼の無罪を推定できないというのか。

ディドロによれば、「世間周知の邪悪さ」と、「万人に認められた誠実さ」とが、正義と良心の秤にかけられて、おなじ重さを示すことはありえないという。「正当で必然的な重みが秤を傾け、まず徳に報い、悪徳を罰するに違いない。」³⁾

では、ディオンのクジフィリヌスについてはどうか。ディドロは第2版に付加した長い注(191g)のなかで、初版の主張を再度反復強調して、次のようにいう⁴⁾。——ディオンのセネカについてのべているのは、すべて虚偽の中傷である。だが、「ポンペーユス、ブルートゥス、カッスゥスなど、ローマのもっともすぐれた人物」を非難攻撃したディオンの、セネカを誹謗したとしても、少しも不思議ではない、と。(ディドロは、さらにこう付言する。このディオンの態度は、ヴォルテール、モンテスキューなど、現代、第一流の人士を中傷して「パリ、宮廷、全ヨーロッパの憤激」をかいながら、まったく平然としている今日の批評家が、「名もないへっぽこ哲学者」〔ディドロ自身を指す反語〕をののしって、いささかも恥じないのと同様だ、と。)

ディドロは続けて、『セネカ論』初版ですでに語った次の事実再度読者の注意を喚起する⁵⁾。——ディオンは、セネカより1世紀あとの歴史家であるから、セネカとはほぼ同時代の歴史家タキトゥス以上の権威はもちえない。セネカの敵たちは、スイッリウス、ディオンのクジフィリヌスを支持しているが、次の2つの理由によって彼らは信用できない。第1、スイッリウスは、タキトゥスによって「極悪人」として描かれ、クジフィリヌスはラ・モット＝ル＝ヴァイエによって、ジュストゥス＝リプシウスは、ペールによってそれぞれ「欠陥のある頭脳」として紹介されているのであるから。第2、しかも、ディオンはスイッリウスの、クジフィリヌスはディオンのそれぞれ模倣者

1) *Ibid.*

2) CN, t.I, p.124; HN, t.I, p.83; AT, p.89.

3) *Ibid.*

4) CN, t.I, p.307, note (191g); HN, t.I, pp.212-213, note (191g); AT, p.89, note 1.

5) CN, t.I, p.308, note (191g); HN, t.I, p.213; AT, p.90, note 1.

にすぎず、このスイッリウスこそ、タキトゥスによって、「金銭次第で動く、恐るべき密告者であり、多数の市民から当然にも蛇蝎のごとく嫌われていた悪漢であり、泥棒であり、汚職者であり、弁護士の職を解任され、イタリアから追放された犯罪者であった」と評された人物なのであるから。

ディドロは『セネカ論』初版において、後世のすべてのセネカ非難の元兇としてスイッリウスを位置づけて、彼の人格に批判を集中し、逆にセネカの徳の最初の顕彰者、スイッリウスの蛮行の最初の記録者としてタキトゥスを提示して、彼に賛美をおしかなかったのであるが、上記の検討によって、第2版においてもまた、この初版とおなじ観点、おなじ主張が反復強調されていることが明らかになったことと思う（タキトゥスの問題は、本節の最後で考察する）。

「人間的弱点の容認」の原則の放棄 ディドロが『セネカ論』初版で主張したセネカ弁護の第3原則は、セネカの犯罪容疑の若干は、それらを事実であると仮定した場合でも、人間性に共通の「弱点」として容赦することが可能であるというのであった。ところが、ディドロは、第2版の付加文のなかでは、初版で主張していたセネカ弁護の4原則のうちの3点——「事実の吟味」、「告発者の人格の信憑性の吟味」、「裁かれる人間への自己投入」——は、反復強調しているのに、ただひとつこの第3原則「人間的弱点の容認」だけは二度ととりあげていない（第3原則に言及していた初版のテキストが、若干の字句の訂正をへただけで、第2版中にそのまま残されたにすぎない。）なぜであろうか。その理由を以下に考えてみたい。

(1)ディドロが、『セネカ論』初版において「人間的弱点の容認」という原則によって弁護したのは、ゲルマニクスの娘でカリグラの妹にあたるユーリアと姦通したという容疑と、卑屈な文書『ポリュビウス慰藉文』を執筆したという容疑にたいしてであった。だがこの2つの容疑は、いずれも公人セネカの経歴の前史に属している。すなわち彼がネロの家庭教師に任命されてローマ史に登場してくる以前の出来事なのである。ディドロは、この点を顧慮して、セネカのまったく私的な過失は、特に重視するにはおよばないと判断したものと考えられる。

(2)すでに明らかにしたことであるが、ディドロは『セネカ論』初版のなかでは、ユーリアとの姦通、『ポリュビウス慰藉文』の執筆という2件の容疑をそれぞれ、2つのあい異なる観点から弁護していた。——第1、この2件が事実ではありえない、という証明によって（第1原則「事実の吟味」）。第2、この事件が、事実であると仮定しても、人間性の立場からは弁護可能であるという主張によって（第3原則「人間的弱点の容認」）。

確かに、ディドロの立場に立てば、セネカ弁護の論証は、第1原則に、第3原則を加えることによって、より強化されるであろう。なぜなら、彼は事実審理に敗れた場合でも、なおかつ酌量すべき情状の申し立てを準備しているのであるから。しかし、ディドロの敵であるセネカ非難者は、まさにこの2段階の弁護のうちにこそ、ディドロの矛盾を読みとるであろう。なぜなら、セネカ非難者の立場に立つ限り——セネカの行為を、その意図によってではなく、もっぱら結果としてあらわれた事実の観点からのみ裁こうとする限り——ディドロは一方でセネカの過失という事実を否定しておきながら（第1原則による弁護）、しかも同時に他方ではこの事実を肯定しているではないか（第3原則による弁護）といって批判することも可能なのであるから。このことが、ディドロに

『セネカ論』第2版中で第3原則による弁護を放棄させたもうひとつの理由であると考えられる。

(3)いま述べた第2の理由と関連するのであるが、犯罪容疑者にたいする弁護法は極限的には、次の2極に分解するであろう。——第1, 容疑内容を事実として否定すること。第2, 容疑内容を事実として認めたとえで、情状を弁護すること。

前者は、『セネカ論』初版中の弁護原則第1と第2に、後者は第4にそれぞれ相当する。これに反して、容疑内容を事実としては否定するが、それを事実と仮定したうえで、情状を弁護する第3原則は、上の両極の中間の領域——したがって、両極に位置する人間から見ればきわめて曖昧な領域——に属している。『セネカ論』初版にたいする批判への反論として執筆された第2版付加文では、当然ディドロは、批判者たちの目に曖昧と映るような弁護法をとることが不可能になる。これが、『セネカ論』第2版において、ディドロが第3原則による弁護を放棄した、第3の理由であるということができよう。

「裁かれる人間への自己投入」の原則の反復強調 ディドロが、『セネカ論』初版で展開した、セネカ弁護の4原則中、もっとも重要な第4原則——セネカの批判者は、セネカの立場に身を置いて彼の行為の意味を理解せねばならないという原則——は、第2版においても、もっともしばしば反復強調されている。

たとえば彼が、第2版中に挿入した、セネカ非難者と彼自身との虚構の対話を読んでみよう。まずこの非難者はいう¹⁾。「それにしても、なぜ〔セネカは、〕野獣〔ネロ〕の巣窟にはいりこむのか。」非難者の考えによれば、ネロの腐敗、墮落がはじまった時に、セネカは宮廷から身をひくべきだったのであって、その後も奉仕を続けることは、許しがたい犯罪なのである。この非難にたいしてディドロは次のように答える。——ネロは、12年の在位期間のうち、「初期の5年間」を名君として統治した。セネカは「野心家の女」アグリッピーナによって、まずネロの家庭教師として登用され、ついでこの弟子が皇帝になるやその大臣に任命されたのであるが、彼はこの間、この君主をひたすら善の道に導こうと努力し続ける。だから、ネロの乱行が始まってからも、彼を「偉大な君主の列に立ち戻らせようと深く心に期し」、決して早急に絶望はしない。

ここでディドロは読者に問いかける²⁾。——セネカの弟子は皇帝であり、彼の手に世界の運命が握られている。そのとき弟子は、母と息子のどちらか一方が必ず滅ぼされなければならぬという「運命的な一連の出来事」にまきこまれて、「最大の罪」（母親の殺害）を犯してしまう。だがこの犯罪は、セネカに教師と大臣の職務を放棄させるに十分な理由となりえただろうか、と。

誠実で感じやすい人間が悲嘆に暮れ、遠ざかり、背後をふりかえり、立ち止まり、いまきた道をまたともにひき返し、余りにも早く身をひきすぎのではあるまいかと恐れているさまが目に見えるようだ。深い洞察力をそなえた人間〔セネカ〕は、〔ネロにとって〕自分の

1) CN, t.I, pp. 83-84; HN, t.I, p. 57; AT, p. 65.

2) CN, t.I, p. 84; HN, t.I, pp. 57-58; AT, pp. 65-66.

存在と忠告が、うるさく思われることを感じている。だが、堅く決意した人間〔セネカ〕は、じっと自分の持場をまもり、破滅が近づいてくるのを見ながら、あえてそれに立ちむかう。彼がようやく自由を回復したのは、その失寵が明らかになった時、すなわち死の前夜だった。セネカがしたのはこういうことであった。〔批評家よ、〕君は、哲学者、教師、大臣の立場に身を置いてみるがよい。そして彼よりも立派に振舞ってみるがよい。

ディドロは、『セネカ論』初版において、セネカを公平に裁くためには、裁き手は安全な「隠居所の奥」や、「書見台」の前ではなく、セネカがふみとどまっていた場所、すなわち、「目を光らせ、爪をむきだし、半ば開いた口からは母親〔アグリッピーナ〕の血をしたたかせた野獣」の「巢窟」に身を置かねばならないと主張していたのであるが、第2版の上記引用箇所もまた、これと同じ原則を繰り返し強調している。しかも彼はこの原則を、抽象的定式としてここに掲げているのではない。彼自身がすでに半ば、セネカの立場に身を投げ入れてしまっている。特に冒頭の一文¹⁾——*«Je vois l'homme honnête & sensible se désoler, s'éloigner, tourner ses regards en arrière, s'arrêter, revenir sur ses pas, & craindre de se retirer trop tôt.»*——が示すセネカの内心の動揺と逡巡のリズム（*l'homme honnête* のあとに継起的に置かれた動詞群）が、ディドロにおけるセネカとの同一化を明白に示しているであろう。

ディドロは、さらに続けて、上の原則を支持する、次のような批判者のことばを引用する²⁾。「岸にいるひとびとが、荒れ狂う風波と戦っている水先案内人をのんびり眺めながら、『あいつは、船の舵をもっと違ったほうに向けなくてはだめだ』などというのは、なんと簡単なことだろう。もし自分たちが舵をとっていれば、きっと途方もなく困惑するか、それとも憐れむべき難破すら経験するだろうに。セネカは書物のなかで哲学を説いているだけだと考えているひとがいるが、セネカの立場に身を置かないからこそ、そんなことがいえるのだ。私の考えでは、セネカは名目において哲学者であるのと同様、実際においても、あるいはむしろ名目以上に実際の哲学者なのである。」

以上が、『セネカ論』第2版の付加文中にあらわれた初版の弁護原則の反復強調である。

タキトゥスとモンテーニュへの敬意の反復強調 『セネカ論』初版においてディドロがもっとも強い信頼をよせていた歴史家はタキトゥスであり、もっとも強い共感を示していた文学者はモンテーニュであったが、第2版になっても、彼らにたいするディドロの信頼と共感は、いささかも変化していない。以下にその点を考察しておこう。

タキトゥス——ディドロは、第2版のなかで、「セネカは要するに、タキトゥスの〔お気にいりの〕英雄なのだ」という批評家の揶揄をとりあげて、猛然とこれに反駁する³⁾。

1) *Ibid.*

2) CN, t.I, p.85; HN, t.I, p.58; AT, p.66.

3) C, t.I, p.109; HN, t.I, pp.73-74; AT, p.79.

これはまた奇妙な非難だ。だがその通りだ。セネカは同時代人タキトゥスの英雄であり、もっともきびしい裁き手タキトゥスの英雄だ。

タキトゥスの友にならねばならない。称賛されねばならないのはタキトゥスのごとき人物によってなのだ。偉人の中傷家たちによって賛美されてはならないし、たとえこういう連中から非難されたとしても、そんなことはまったくどうでもいいことだ。

セネカの非難者たちは、またこういつてセネカとブッルスを攻撃する¹⁾。彼らが、「家族の名誉を救うという口実のもとに、いつまでも暴君の宮廷で奉仕し続けることは、結局「自分自身の名誉を傷つける」結果になるのではないか、と。これにたいしてディドロは、「タキトゥスを読みたまえ。そうすればはっきりわかるだろう……」ということばで応酬する。

初版においてと同様に、第2版においてもまた、歴史家タキトゥスはディドロにとっての絶対的典拠である²⁾。

もしわれわれが、この歴史家の叙述になにかをつけ加えたり、あるいはそこからなにかを削除したりすれば、もはや真実も虚偽もすべてが失われてしまうであろう。

ディドロのなかでは、タキトゥスが描きだした歴史の絶対的価値は、最後まで不変であった³⁾。「もしタキトゥスの確信に異論をさしはさみうるとしたら、いったい歴史の確実性はようになってしまいうだろう。」

モンテーニュ——『セネカ論』第2版において、ディドロは、タキトゥスとならんで、彼がもっとも尊敬する文筆家モンテーニュに加えられた批評家たちの悪意ある攻撃をとりあげ、これらに順次反駁を加えている⁴⁾。

批評家はまずいう。「モンテーニュは、キケロのなかにはただ風を見いだすだけだ、と語っているが、これはガロヌの哲学者の笑うべきほら話だ。」これにたいしてディドロは怒って反撃する。モンテーニュのごとく「偉大な思想家」、「偉大な文筆家」、「独創的な作家」にたいして、なぜもっと「礼儀正しい」態度がとれないのか、と⁵⁾。

これにたいして、批評家はモンテーニュの意見にペールのそれを対置する。後者によれば、キケロの場合は、簡潔な「6行からなる総合文ひとつ」でたりるところを、セネカは「8～9行からなる総合文6つ」を使って、冗長に表現することしか知らない、という。ディドロは、この主張にたいして次のように答える。確かにモンテーニュとペールは、いずれ劣らぬ「2大権威者」であるか

1) *Ibid.*

2) CN, t.I, p.153; HN, t.I, pp.101-102; AT, p.109.

3) CN, t.I, p.225; HN, t.I, p.147; AT, p.157.

4) CN, t.II, pp.59-64; HN, t.II, pp.42-45; AT, pp.234-237.

5) CN, t.II, p.60; HN, t.II, p.42; AT, p.235.

ら、どちらか一方の判断にしたがわざるをえないであろう¹⁾。だが「文学的博識」にかけては、決してベールにひけをとらず、古代語の知識にかけてははるかに彼をしのぐある「学者」は²⁾、セネカの文章の特徴として、「簡潔さ」とともに「豊富さ」を、「流暢さ」とともに「はげしさ」をあげている。だからベールの考えがそのまま正しいかどうかは疑問である、と。

批評家はまた、「モンテーニュ〔の判断〕は疑わしい」と断定する。これにたいしてディドロはいう。モンテーニュは、フランス語同様に古典語を理解し、フランス作家と同様に古典作家の文体と論理を把握しているのだから、この非難は見当はずれである、と³⁾。

批評家はさらに、「趣味判断の領域で、モンテーニュが引きあいにだされたことは一度もない」と批判する。しかしディドロによれば、モンテーニュこそ、「表現が豊か」で、「エネルギーにみち」た「偉大な描写家」、「偉大な色彩家」、力強い「雄弁」家なのであって、彼の時代にふさわしいすべての「趣味」をそなえているという⁴⁾。その実例として、彼は『エッセー』のなかから、次のような箇所をあげている。——「空虚について」の一節、「書物について」の一節（そこには「確実に、しかも繊細な直観的判断力」が認められる）、「ウェルギリウスの詩句について」の一節（そこには「ルクレティウスの数行の美しい詩句の分析」と、すぐれた雄弁論、言語論がある）。「びっこについて」の一節（そこには「奇蹟」の成立過程にかんするきわめて鋭い分析が見いだされる）⁵⁾。

そしてディドロは特にこの最後の「奇蹟」についての文章を引用しつつ、もしこのテキストの「豊かさ」、「熱気」、「生命」が感得できないひとがいれば、そのひとには完全に「趣味」が欠如している、という。「私はモンテーニュのこのページとなら、自分が書いた最良のページとさえ、喜んでとりかえたいくらいだ。」⁶⁾

2. 第2版固有の弁護原則——初版の弁護原則の精密化

責任の吟味 ディドロが、『セネカ論』第2版の付加文で展開しているセネカ弁護は、決して初版の弁護原則の反復強調にとどまるものではない。第2版ではこれ以外に、固有の新しい弁護原則が出現している。しかし、この種の新しい弁護原則は、決して初版中の弁護原則と無関係なものではなく、むしろ初版の弁護原則中に潜在的に内包されていた契機が、顕在化されたものであって、その意味では、初版の原則の精密化といえることができるであろう。

新弁護原則は、セネカにたいする次の3つの非難を反駁するために主張されている。——(一)蓄積した富を、不幸なひとの救済という「善行」のために使用せず、もっぱら贅沢な生活のために費消したという非難、(二)プッルスとともに恩人アグリッピーナを誣問し、それが彼女の死を決定したという非難、(三)アグリッピーナ殺害事件に関与したという非難。以下にこの新弁護原則の具体的展開を検討していこう。

1) *Ibid.*

2) *Ibid.* この「学者」が誰であるか不明。

3) CN, t.II, p.61; HN, t.II, p.43; AT, p.235.

4) *Ibid.*

5) CN, t.II, pp.61-64; HN, t.II, pp.43-45; AT, pp.236-237.

6) CN, t.II, p.64; HN, t.II, p.45; AT, p.237.

ディドロは、『セネカ論』初版において、セネカを弁護するためには、まず告発された罪過にかんする「事実の吟味」が必要であると主張していたのであったが、第2版においては、さらに告発された罪過がかかわっている事件全体において、セネカ個人が負うべき責任の有無を確定することを要求する（初版の第1の弁護原則の精密化）。この原則は、次の2つの事件の弁護に適用されている。

(1) アグリッピーナ訊問事件の弁護

この事件にたいして、『セネカ論』初版は、次のようにのべていた。——アグリッピーナは、年とともに息子ネロにたいする影響力を失ってゆく。事実ネロは、まず母親をだしぬいて解放奴隷アクテを愛人にし、次には、母親の「愛人」であり、「相談相手」であるパッラスを宮廷から追放してしまう。怒ったアグリッピーナは、ブリタンニクスを擁して、息子に抵抗しようとするが、このクラウディウスの血をひく皇子は、逆にネロの手にかかって食卓で毒殺されてしまう。危険を感じた彼女は、ブリタンニクスの姉で、ネロからうとんじられている皇后オクターウィアや、護衛隊副官、百人隊長たちとひんぱんに会合しはじめる。ネロは情勢を察知して、すぐに母親の護衛兵たちを解任し、彼女を離れた屋敷に押しこめて、一味との連絡を絶ってしまう¹⁾。

この状況のなかで、アグリッピーナが、アウグストゥスの血統をひくルベッリウス・プラウトゥスをつぎだして「革命」を企てているという密告が、深夜ネロのもとにとどけられる。激怒した皇帝は、即刻母を殺せ、母のお気にいりのブルスを護衛隊指揮官の職から解任せよ、と命令する。しかし、「セネカは躊躇することなく同僚を弁護して、彼を不名誉な失寵から救ってやる」。ネロはこの時直ちに、セネカとブルスにアグリッピーナの訊問を命じ、「もし〔アグリッピーナの〕犯罪が確認されれば、ブルスが即座に彼女を殺すという条件で、ようやくブルスを許し、母親殺しを思いとどまったのであった²⁾。

セネカとブルスは、早朝さっそくアグリッピーナの前に姿を現わし審問を開始する。だが彼女は2人を前にして、毅然たる態度で、すべての密告に反駁し、ネロが今日皇帝の座にありうるのは、ひとえに自分の努力のたまものであると力説する。「なんということでしょう。ブリタンニクスが帝位について、私が生きのびられるとでもお考えか。プラウトゥスにせよ、誰にせよ、ひとたび支配者の座に座れば、私はきっと敵から告発されるに違いない。それも母親の愛情のあまりもらした小言などを非難するものではなくて、息子のほかには、誰からも許してもらえそうもない罪を告発するでしょう。」この弁明は列席者一同を感動させる。審理の結果、母と子の和解が成立し、「密告者は処罰され、〔アグリッピーナの〕友人たちは褒賞をうけた」³⁾。——以上が、『セネカ論』初版が描きだす、アグリッピーナ訊問事件の全貌であった。

ディドロのこの記述にたいして、フレロンは先述の『文学年報』（1779年、第26巻、「第2信」）のなかで、次のような批判をくだしていた。「ネロが正義の剣をふるって母親を暗殺しようと企て

1) S, pp.102-109; CN, t.I, pp.95-105; HN, t.I, pp.64-77; AT, pp.72-83.

2) S, pp.110-112; CN, t.I, pp.115-116; HN, t.I, pp.77-78; AT, pp.83-84.

3) S, pp.112-114; CN, t.I, pp.116-119; HN, t.I, pp.79-80; AT, pp.84-85.

るや、セネカはまっ先にこの忌わしい計画を知らされる。彼はこの皇太后の運命を決定すべき訊問に立会うであろう。彼女の死刑執行人にはならなかったが、裁判官になろうとしたのである。」¹⁾

ディドロは、『セネカ論』第2版のなかで、このフレロンの非難にたいして、「責任の吟味」という原則に立って、次のようにセネカを弁護する²⁾（フレロンの非難にたいするディドロの反論は、全部で3点からなりたっており、「責任の吟味」は、その第1点である。あとの2点にかんしては、次の「被告発者の人格の高潔さの擁護」の項で触れる）。

2人の人間〔セネカとブッルス〕が君主の命令に服従したこの状況において、彼らを称賛することも、非難することもできない。それはちょうど、今日、大逆事件に際して、国王の取調官を称賛することも非難することもできないのとおなじことである。

すなわち、ディドロは、セネカとブッルスがこの事件で果たした役割は、命令者ネロの意志に服従しただけにすぎず、その点にかんして彼らの責任を問うことはできないとするのである（それと同時に彼は、セネカとブッルスがこの役目を忌避した時に、アグリッピーナにもたらされたに違いない危険を指摘している。すなわち、もし2人が忌避すれば、彼らは「アグリッピーナの首」を確実に失わせたであろう、と³⁾）。

このように、行為者の責任の範囲を確定するという立場に立って、セネカとブッルスの無罪を宣告したディドロは、最後にフレロンにたいして、次のように応酬する。「セネカについて、『皇太后の死刑執行人にはならなかったが、裁判官になろうとした』といったりすれば、それはいまわしいことであろう。また、このおなじ侮辱的なことばをブッルスに浴びせかけないとすれば、それは言語同断な不正であろう。だがひと〔フレロン〕は、両者をおなじように侮辱したのである」と⁴⁾。

(2)アグリッピーナ殺害事件に関与したことの弁護

ディドロは、『セネカ論』初版において、セネカがアグリッピーナ殺害事件に関与した（第1、ネロの殺害計画に反対しなかった、第2、事件後、元老院あてにこの殺害を正当化する手紙を書いた）という非難にたいして、「裁かれる人間への自己投入」という原則に立って弁護を加えてきた。だが第2版では、彼はさらに「責任の吟味」という原則に基づいて、セネカ（およびネロ）の責任の有無を調査しようとする。

(+)殺害の実行責任の有無——セネカには、アグリッピーナ殺害の実行責任があるだろうか。ディドロは、彼の実行責任にたいする確実な反証として、一解放奴隷がアグリッピーナの暗殺をひきうけた時にネロが憤然として叫んだ次のことばを引用する。「今日から私は統治を開始する。だがそれ⁵⁾もひとえに、しがたない解放奴隷〔アネクトゥス〕のおかげなのだ」（傍点は、第2版でイタリ

1) *L'Année littéraire*, 1779, t.I, <Lettre II>, p.63.

2) CN, t.I, p.117; HN, t.I, p.78; AT, p.84.

3) *Ibid.*

4) *Ibid.*

5) CN, t.I, p.150; HN, t.I, p.100; AT, p.107.

ック体の語)。すなわち、実行責任者はアニケトゥスであって、この点にかんしてセネカは無罪である。

(二)殺害を予防しなかった責任の有無——セネカとブッルススの2人が、この殺害を予防することはできなかったのだろうか。なるほど、説得によって、ネロの意志をひるがえさせることは不可能であったかもしれない。だが彼ら2人には、ネロを暗殺するという非常手段が残されていたはずであり、この非常手段によって、彼らはネロの母親殺しを予防すると同時に、ローマ帝国を暴君から解放することができたはずである。その点で2人に責任はないであろうか。

ディドロは、この問責を予想している。そしてこれにたいしては、「鋭い判断力の持主」マルモンテルの次のことばによって答えている。「この恐ろしい状況において、残された唯一のとるべき手段は、世界を怪物〔ネロ〕から解放することであった。〔……〕だがこの世でネロを殺すことが絶対に許されないひと、それがセネカとブッルススだった（『メルキュール・ド・フランス』1778年12月15日号¹⁾）。したがってこの点でもセネカは無罪である。

(三)殺害の発意者ネロの責任の有無——では最後に、アグリッピーナ殺害を発意したネロ自身は、この事件においてどの程度の責任を負うべきであろうか。

ディドロはこの問題を、『セネカ論』第2版に挿入した、仮空のアグリッピーナの擁護者と仮空のネロの擁護者との間の、この事件をめぐる対話によって検討している²⁾。

〔アグリッピーナの擁護者〕——「〔……〕、息子は母親から威嚇されれば、いさぎよく死んでいくべきではないのか。」

〔ネロの擁護者〕——「なんだって、母親だって。むしろ暗殺者と呼ばたまえ。親子の絆は、息子の復讐心に燃えた手さえもおしとどめたかもしれないのに、彼女のほうから先にこの絆を断ち切ってしまったのだから。個人の自己保存の本能は、自然の秩序における、第1の法則ではないだろうか。どんな生物の心のなかでも、この叫び声がかた時でも鳴りやむことがあるだろうか。母親がわれわれを生んでくれた時、われわれは彼女から生命への愛着と死への恐怖をうけとらなかつただろうか。いま問題にしている状況〔自分が死ぬか、それとも母が死ぬかという状況〕のもとで、〔母親を殺すことを〕ためらうような皇帝が、どこかにいるだろうか。あるいはかつてどこかにいたことがあつただろうか。」

〔アグリッピーナの擁護者〕——「君の議論にはまだ承服できない。」

〔ネロの擁護者〕——「君が、公衆の幸福を、そんなに気にしないというのは、実に残念なことだ。」

この対話から明らかなように、ディドロは次の2つの理由によって、ネロのアグリッピーナ殺害の発意を是認している。第1、一般に、「自然秩序」の「第1の法則」である「個人の自己保存の

1) *Ibid.*, *Mercur de France*, 15 décembre 1778, pp.149-150.

2) CN, t.I, pp.150-151; HN, t.I, pp.100-101; AT, pp.107-108.

本能」は、正当防衛行為においては容認されるべきである。ところで、この事件の直前には、ネロとアグリッピーナとの関係は、「母親によって息子が殺されるか、それとも息子によって母親が殺されるかどちらかしかない」という破局にまで到達していたのであるから（ディドロは、タキトゥス『年代記』を典拠にして、こう主張する）、この状況下ではネロの正当防衛——母親殺害——は当然であった、という（個人的行為としての殺害の容認）。

第2、君主の「公衆の幸福」にたいする顧慮は、他の考慮に優先すべきである。すなわちネロは、ひとたび皇帝の座についた以上——即位までのいきさついかんにかかわらず——国民全体の幸福にたいして責任を負っている。したがって、支配者としての権力を維持して、国家の治安を維持するために、秩序の紊乱者を殺すことは、国家的理由として是認しうる、という（国家的行為としての殺害の肯定）。

ディドロは、このようにセネカ、ブッルス¹⁾の責任を解除したあと、最後にこの事件の発意者ネロにたいしてまでも無罪を宣告するにいたる。（では、殺害の下手人アニケトゥスの責任はどうなるのであろうか。ネロとともに免責されるのであろうか。——しかし、ディドロはそこまで問題を追求しようとはしていない。）

被告発者の人格の高潔さの吟味 ディドロは、『セネカ論』初版のなかで、セネカが不正な手段で巨富を蓄積したというスイリウスの告発にたいして、「告発者の人格の信憑性の吟味」という原則に立って、告発者スイリウスに反論し、セネカを弁護してきた。しかしディドロの同時代のセネカ告発者たちは、このローマの哲学者が、莫大な富を贅沢な私生活に浪費するばかりで、貧しいひとびとの救済にあてようとはしなかった、といっ、さらに彼を追求する。この追求にたいして、ディドロは『セネカ論』第2版の付加文のなかでは、「被告発者の人格の高潔さの吟味」という原則に依拠して、セネカの立場を擁護している。

初版における「告発者の人格の信憑性の吟味」という原則と、第2版における「被告発者の人格の高潔さの吟味」という原則とは、ともにセネカの財産問題を係争点にしている（ただし、前者では財産の蓄積法、後者ではその使用法を直接の係争点としている）のであるが、初版の原則が告発者の人格の批判を内容としているのに反して、第2版の原則は被告発者の人格の擁護を内容としているという点で、両者は互いに表裏の関係をなしているといえよう。以下に、第2版中のこの新しい弁護原則を見ていこう。

ディドロによれば、彼と同時代のセネカ告発者たちは、次のようにいってこのローマ人を非難するという¹⁾。「貧困の説教者セネカは、周知のように、そしてあなたも認めるように、4000万〔正しくは3億セステルティウス〕の金をもっていた。だが彼がどんな善行をつんだか、どんな不幸なひとを助けたか、誰も知らないではないか。」

この非難にたいして、ディドロは次の2点の論拠に立って反駁を加える。

(→)ある人間の徳行を称賛する噂が残されていないという事実から、逆に彼が、悪徳の所有者だと

1) CN, t.I, p.215; HN, t.I, p.141; AT, p.152.

いう結論をひきだすことは許されない。すなわちディドロはいう¹⁾。

ある人物にかんして、その生前には、人民が沈黙をまもり、死後には、歴史家が沈黙をまもってきたとしよう。もしこの事実を根拠に、彼を非難することが許されるとすれば、われわれはしばしばもっとも有徳な人物すらも、非難することになってしまうだろう。どれほど多くの優れた人物にたいして、次のような誤った判断をくだしてしまうことだろう。——彼らの勇氣は称賛されていない、だから卑怯者だったのだ。あるいは、彼らの人間味は知られていない、だから血も涙もなかったのだ。あるいは、彼らの感じやすさは知られていない、だから非情な心の持主だったのだ。あるいは、彼らの気前よさは知られていない、だからけちだったのだ。あるいは、彼らの魂の力は知られていない、だから臆病者だったのだ、とかである。

ディドロによれば、このように「同時代人の沈黙」を根拠として、ある人間に「悪徳をなすりつけるという偏執」は、ひとえに「生まれつきの性格の邪悪さ」、あるいはある種の「身分固有の嫉妬心」（いうまでもなく、これは当時のカトリックの僧侶「身分」にたいする、ディドロのあてこすりである）から生ずるものである、という²⁾。

（＝特に、ある人間が公的身分に置かれている場合、彼の私的徳行にたいしては、同時代人も、歴史家もともに関心を払わないのが普通であるのだから、公人の私的徳行の記録が残されていないという事実から、彼に私的徳行がなかったという結論をひきだすことは許されない。すなわちディドロは主張する³⁾。

人民の視線と歴史家の記録は〔ある歴史的人物の〕主要な職分にしか向けられない。だから、皆がカエサルの中に注目するのは將軍〔という職分〕であり、ウティカのカトーのうちに注目するのは共和主義者〔という職分〕であり、検察官カトーのうちに注目するのは、出所進退の厳格さである。他方、私的徳行のほうは、その恩恵にあずかる肉親、友人、陪食者、常客たちのひそかな話題になるだけである。

ディドロは、このように歴史的人物の人格全体のうちに、公人としての側面と私人としての側面をはっきり分離したうえ、さらにこう続ける。「天才は後世のひとびとに知られるが、彼の人間そのもの〔私人としての人格〕は知られずにいる。」そして彼は、次のような実例をあげる⁴⁾。たとえば、ホメロス、アルキメデス、デモステネス、エウリピデス、ソフォクレスという天才たちの私

1) CN, t.I, p.223; HN, t.I, p.146; AT, p.156.

2) CN, t.I, pp.225-226; HN, t.I, p.148; AT, p.158.

3) CN, t.I, p.223; HN, t.I, p.146; AT, p.156.

4) CN, t.I, pp.224-225; HN, t.I, p.147; AT, p.157.

的生活にかんして、われわれは完全に無知である。また、後世がデカルトについて知っているのは、「幾何学者であったこと」と、「狂信家に迫害された大思想家であったこと」だけであり、ニュートンについては、「3大発見を成就し、そのひとつだけでも彼の名を不朽にしたに違いない」ということだけである。

したがってディドロは、セネカの非難者たちは、次のように主張しているに等しいと結論する。クラウディウスとネロの治世下において、重要人物の生活は公私にわたってすべて知られている。それなのに、セネカひとりだけが、自分の私生活について同時代人を欺いているのだから、われわれが彼の仮面をはぎとってやるのだ、と。しかしディドロによれば、この種の非難は、とうてい受け入れることができない。なぜなら、それは歴史のもっとも確実な証言——タキトゥス『年代記』——に反するからである¹⁾。「彼ら〔セネカの攻撃者〕は、この点について、タキトゥスが不公平だといって非難し、無謀にも2人の偉大な人物〔セネカとタキトゥス〕を同時に中傷している。」しかし、タキトゥスの証言を信用しなければ、歴史にかんする議論は、一切崩壊するのである、と。

だが、これほど執拗に、被告発者の人格を擁護しようとするディドロの意識の奥には、なにがひそんでいるのだろう。われわれはここでもまた、ディドロの「美しい魂」の立場を発見する²⁾。

もし次の事実を知らなければ、正義の観念の基本すらわきまえていないことになる。すなわち、ひとを無罪にするには推測で充分だが、疑いをかけるには、明確な証拠が必要だという事実である。批評家氏よ、君たちの役割と私の役割との間には、なんと大きな相違があることだろう。私は無罪の人間を求めている。だが君たちは、絞首台に送るべき被告がいないので、いらいらしながら裁判所から帰っていく、残酷な裁判官とおなじだ。へとへとになって罪人を探し求め、見つけられなかったために悩んでいるのだ。

そして、ディドロは「美しい魂」の対極にあるセネカ告発者の立場に憤激して、こういう。「自分が行なった立派な行為を、同胞の賛美にさらすことをこぼんだ」あの稀有の偉大なひとたちを、「背徳者」のうちに数えるとは、なんという「奇妙な理論」であろうか、と。確かに、「有徳な人間も、邪悪な人間も、ともに暗闇のなかをさぐるものが許されている」。だが両者の「個人的動機」は、それぞれ対極に位置するのである、と³⁾。

副次的原則 上記のようにディドロは、セネカの財産の使用にかんする非難者たちの告発を、「美しい魂」の立場に立脚する「被告発者の人格の吟味」という原則によって反駁するのであるが、同時に彼は次の2つの論拠によって、この反駁をさらに補強している。

第1、徳行の歴史的相対性——ディドロによれば、個人の「徳行」がひとびとの称賛の対象にならない場合が存在する、という。すなわち、ある種の「徳行」が最大多数の国民によって実践され

1) *Ibid.*

2) CN, t.I, p.216; HN, t.I, p.142; AT, p.153.

3) *Ibid.*

ており、それが「国民の習俗」を形成している場合である¹⁾。

たとえば、ポエニ戦争前後の「誓約への忠誠」が、この種の「国民の習俗」と化した「徳行」に属する。だからローマの統領レグルスの行為において称賛すべき点は、カルタゴの捕虜となった彼が、逃亡せぬことを誓約してローマに渡り、捕虜の交換交渉を終えたあと、誓約どおりカルタゴに戻った、という事実ではなくて、むしろ彼が捕虜の交換に反対したという事実なのである²⁾。

いま問題にしているセネカの「慈善行為」もまた、古代ローマ人の間では、「国民の習俗」と化した「徳行」であった。「この善行の精神はセネカ家に代々伝えられてきた。」だから彼は、まったく当然の行為として、——したがって特にひとびとの関心をひくこともなく——慈善を実行した、とディドロは主張する³⁾。

第2、セネカの慈善にかんする歴史的証言——ディドロはまた、セネカの「気まへのよさ」にかんする歴史的証言として、ネロの治世の初期にローマで生活していたユヴェナリスのことばをあげている。この諷刺詩人は、セネカの死の30年後に、けちで、放蕩者のヴィロンに向かってこうのべている。「セネカのようなひとは、ただの知りあいや、不如意な友人にまで贈物を送っていた。だが、誰も君にそれほどの贈物を、要求したりはしない。」この一句に照らしても、セネカの慈善行為は明らかである、とディドロは結論する⁴⁾。

裁かれる人間の行為の動機理解(一) 『セネカ論』初版において、ディドロはセネカ弁護の、最も基本的な原則として、裁き手にたいして「裁かれる人間への自己投入」を要請してきたのであったが、第2版の付加文においては、この原則はさらに精密化され、「裁かれる人間の行為の動機理解」という要請にまで深められている。以下に、この原則が適用された、2つの事件に即して、ディドロの弁護論を考察していこう。

(1)セネカがセレーヌと協力して、ネロにアクテを仲介した事件の弁護

『セネカ論』初版は、この事件の実情を次のようにのべている⁵⁾。——ネロは、正妻オクターウィアが、「あらゆる尊敬すべき美点」をそなえていたにもかかわらず、彼女を毛嫌いして、女解放奴隷アクテを情婦にする。この秘密を知ったアグリッピーナは激怒して叫ぶ。「下賤な女」がわが子を支配して、自分の「競争相手」になり、「女解放奴隷」が正妻をおしのけて、自分の「嫁」になるのか、と⁶⁾。

この状況のなかで、大臣セネカは不可能な二者択一に追いこまれて進退きわまる。「皇帝をオクターウィアのもとに、連れ戻そうと試みることは、正しくはあろうが、成功するはずがなく、他方皇帝のアクテへの情欲を是認することは、セネカの性格にも、職分にも合致しなかった」のである⁷⁾。

1) CN, t. I, pp. 220–221; HN, t. I, pp. 144–145; AT, p. 155.

2) *Ibid.*

3) *Ibid.*

4) CN, t. I, pp. 221–222; HN, t. I, p. 145; AT, p. 155.

5) S, pp. 102–104; CN, t. I, pp. 95–96; HN, t. I, pp. 64–65; AT, p. 72.

6) *Ibid.*

7) *Ibid.*

しかし、セネカは、この「情欲」を利用して、若いネロの「血気にはやった不節制」（ディドロはこのことばによって、ネロの母親にたいする「近親相姦」の欲望を暗示する）を抑制しようと決心する¹⁾。

だが、アグリッピーナにも、オクターウィアにも、ローマ市民にも、ネロの「この卑しい欲望」を隠さねばならない。「そこで、アンナエウス・セレーヌスが奇妙な役割をかってでた。」すなわち自分がアクテの愛人であるかのようにとりつくろって、ひと眼をあざむくことをひきうけたのである。以上がこの事件の大筋であった²⁾。

この事件にかんして、告発者たちは、セネカの役割を、次のように攻撃する。「セレーヌスがセネカの親友であったこと」、セネカが「君主の情欲を是認し」たことは、許しがたい犯罪である、と。この攻撃にたいして、ディドロは次のように反駁する。「セレーヌスがセネカの親友だった」というのは事実である。しかし廷臣セレーヌスの卑しい行為にセネカを巻き添えにし、セレーヌスの汚名をかりて、セネカの名を傷つけるとするのは、不当な「論証法」である。事実最高の歴史的証人タキトゥスですら、決してそのような非難をセネカに加えていないのであるから³⁾。

だが非難者たちは続けて問うであろう。「ではどうしてセネカが君主の情欲を是認しなかったと推測できるのか」と。これにたいしてディドロは、「行為の動機の理解」の要請によって答えている⁴⁾。

ディドロによれば、この事件においてセネカ、セレーヌス両人がはたした役割はそれぞれ完全に異なっており、両者を混同することは許されないという。すなわち、「廷臣」セレーヌスは、「アグリッピーナの嫉妬にかられた眼と、ローマの人民の好奇心にみちた眼とをあざむいた」のであり、他方「哲学者」セネカは「愛妾の仲立ちによって、近親相姦を予防した」のであって、2人は相互に協力してはいてもそれぞれの内面的動機は完全に異なる⁵⁾。

廷臣の振舞と哲学者の振舞とが一致しうるような状況も存在する。その時、廷臣は賢明に身を処し、哲学者は慎重に行動する。動機だけが彼らの態度を区別する。だがいずれにせよ、廷臣が哲学者になるわけでも、哲学者が廷臣になるわけでもないのだ〔傍点中川〕。

セレーヌスの行為の背後には、ネロの情欲を是認して彼に迎合したいという動機が、またセネカの行為の背後には、この情事を、母子相姦というより大きな悪事を防止すべき、最少限度の必要悪として、やむをえず許容し、皇帝一家とローマ帝国の名誉をまもうとする動機が、それぞれ隠されている。ディドロは上記の弁護原則によって、セネカの立場に身を置くと同時に、彼の良心が選択した行為の動機を洞察することによって、この事件における彼の態度は正当化しうると主張して

1) *Ibid.*

2) *Ibid.*

3) CN, t. I, pp. 96-97; HN, t. I, p. 65; AT, pp. 72-73.

4) *Ibid.*

5) *Ibid.*

いるのである。

副次的原則 デイドロは、「被告発者の人格の高潔さの吟味」という原則に立脚した弁護論を展開した際に、この原則を補強する論拠として、「徳行の歴史的相対性」という副次的原則を導入していたのであったが、彼は、「裁かれる人間の行為の動機を理解」という原則を適用した上記の弁護論においてもまた、「道徳的善悪の歴史的・場所的相対性」という副次的原則を導入している（ただし、小論中で付記した、これらの2原則は、ともに『セネカ論』中で展開されたセネカ弁護の基本的諸原則にたいしては、副次的——論証を補強するという技術的な——意味しかもっていない）。

デイドロは、人間の行為の善悪は、彼が生きていた時代と環境に固有の道徳的基準にしたがうべきである、という要請によって、上記の事件におけるセレーヌスの行為そのものまでも弁護しようと試みている¹⁾。

行為を評価するには、われわれの風俗を基準にするのが適当だろうか、それともその時代の風俗にしたがうのが適当だろうか。ある世紀の徳と、別の世紀の徳との間には、また宮廷の徳と修道院の徳との間には、全然差異がないものだろうか。

いうまでもなく、デイドロのこの疑問は、自分たちの道徳的基準を絶対視し、それをあらゆる状況に無限定に適用しようとするカトリックの僧侶たち——特にセネカにたいするもっともきびしい非難者グロジェ神父²⁾——に向けられている。

デイドロは、次のような事例に即して、道徳の基準が相対的に変化するという事実、すなわち、「哲学が、多かれ少なかれ状況の影響をうける」という事実を説明する³⁾。

第1、宮廷の風俗について——君主が後宮に700人の愛妾を所有していた時代には、今日の「姦通」、「不貞」という観念は通用しない⁴⁾。

第2、決闘について——他人から侮辱された場合、決闘によって恥をそそがねばならない国が存在している。この種の決闘において、ひとを殺した場合なら、殺人すらも、「いまわしい性格」をもたないであろう⁵⁾。

第3、インドの婆羅門の教化法について——インドの婆羅門は、信者に請われれば、たとえそれがうら若い女性であっても、彼女の家にあがりこんで道を説くのが慣例である。もしフランスのカトリック僧が、この婆羅門の立場におかれたらどうするであろうか。自分は決してそんなふしだら

1) CN, t.I, pp.97-98; HN, t.I, p.66; AT, p.73.

2) アセザは、このセネカ非難者について、こう注記している。《L'abbé Grosier du *Journal de littérature, des sciences et des arts.*》AT, p.74, note 1.

3) CN, t.I, p.98; HN, t.I, p.66; AT, p.73.

4) CN, t.I, pp.99-100; HN, t.I, p.66; AT, p.74.

5) CN, t.I, p.98; HN, t.I, p.66; AT, p.73.

なことはしない、とカトリック僧は答えるであろう。だが、——とディドロは反論する——「神父さん〔以下神父とは、すべてグロジェ神父をさす〕、それは考え違いだ。この国であなた流に道を説くのおなじように、そこではインド流に道を説くに違いない」。¹⁾

第4, コーチシナの僧侶の初夜権について——コーチシナでは、僧侶の初夜権が、君主と人民によって承認されている。もしカトリック僧が、コーチシナの僧侶の立場におかれたらどうするだろうか。自分は決して、そんな権利を行使するつもりはない、と彼は答えるだろう。だが、——ともう一度ディドロは反論する——「神父さん、それは考え違いだ。パリとおなじように、コーチシナでも、あなたはご自分の身分のすべての特典を利用するに違いない」。²⁾

第5, 18世紀のローマの風俗について——現代のローマでは、良家の娘が母親とともに、教会で告解、ミサ、聖体拝受をすませたあと、22歳の画家のモデルになりに行く。「裸体のモデルかね」と神父は問う。「そうですとも、神父さん。全裸です。」これが18世紀イタリアの日常風俗なのであって、決してふしだらな行為とはみなされていない³⁾。

ディドロは以上のように、道徳的善悪の相対性の実情を考察した結果、「色事の気風」が国民を支配し、「浮気っぽさ」が国民的性格を形成していたネロの時代においては、セレーヌスの行為は、当然弁護可能だと主張している。

裁かれる人間の行為の動機の理解(二) (2)セネカが暴君ネロの宮廷で奉仕を続けたことの弁護

(一)ネロが5年間の善政にあきて、暴君に変じてからも宮廷にとどまっていたことの弁護——セネカの批判者たちは、次のようにいって彼を非難している。「なるほど、引退を申し出たり、真実をのべたりすれば、セネカの生命は奪われたであろう。だが、哲学が危険な時に役立たないとすれば、いったいなんの役に立つのか。」すなわち、哲学者は身の危険をおかしてでも、君主を善政にひきもどすべきであり、もしそれが不可能であれば、彼の「哲学」はなんの有効性ももたない、というのである⁴⁾。

この非難にたいして、ディドロは、真の「哲学」は、むしろ無用の危険から身をまもるすべをひとに教えるという。この英知の有無が「狂人」と「賢者」とを区別する。「賢者」は危険を回避しつつ、たとえ君主からいやがられても、持場に踏みとどまらなければならない⁵⁾。

だがなぜ、彼はそれほど注意をはらってまで宮廷にとどまらねばならないのか。それは、たんに保身のためだけではないのか。この当然の疑問にたいして、ディドロは、否と答える。なぜなら、セネカの行為には、別の動機がかくされているからである。その動機とは、ローマ帝国の市民たちの「公共の幸福」と「個人の幸福」を確保することである⁶⁾。しかし、セネカの非難者たちは、続けてこういふであろう。「セネカよ、君は、ひとのためにも自分自身のためにも、ネロからはなに

1) CN, t.I, p.100; HN, t.I, pp.67-68; AT, p.74.

2) CN, t.I, p.100; HN, t.I, p.68; AT, pp.74-75.

3) CN, t.I, pp.101-102; HN, t.I, pp.68-69; AT, p.75.

4) CN, t.I, p.85; HN, t.I, p.58; AT, p.66.

5) *Ibid.*

6) *Ibid.*

も獲得できないだろう」と¹⁾。

これにたいしてディドロは次のように反駁する。「属州所管大臣〔セネカ〕は、皇帝の承認なしに善行を実践する機会を日に4度ももっており、また悪を防止したり、悪をつぐなったりする機会も、おなじ程度にもっている」と。事実セネカは、このような大臣の権限を利用して、友人、肉親、善良な市民たちを、ネロの迫害の手からまもり続けてきたのであった²⁾。このセネカの動機の正当性は、彼によって救われた人間の立場に身を置いてみるだけで明らかである、とディドロはいう（弱者との同一化の要請）。「さあ、しばらく、ノウィウス・プリスクス、パウリナ、メラ、ガッリオ、セネカの身内、友人、被保護者たちの立場に身を置いてみよう。もし大臣〔セネカ〕が死ぬか引退するかすれば、彼らの身はたちまち危険にさらされるに違いないのだ。そしてわれわれはこう自問してみよう。あくまで持場をまもりぬいて、われわれを救おうとするセネカの堅い決心を卑屈さ呼ばわりできるものかどうか。」セネカ自身は、自分の内心を次のように語っている³⁾。

「私は死なずに生きのびてきて、ずっと沢山のことを友人のためにしてやれたと思う。」

「私が今まで考えてきたのは、どれほど思いきりよく死ねるか、ということではなかった。どれほど思い切り悪く、彼ら〔友人たち〕が私の死に耐え切れない思いをするかということだった。」

「私は生きることを強制されている。そして生きることは、時には高邁な行為である。」

しかし誹謗者たちは、なおもこういうであろう。セネカが宮廷にとどまる限り、ネロが犯したすべての悪は、セネカが「賛成」していたといわれるに違いない、と。だがディドロは、セネカにとって、世間の評判は、なんの意味もちえない、という。セネカの行為を導き、その正しさを証明するのは、彼自身の「良心」であった。

(二)アグリッピーナ殺害事件以後にも、宮廷にとどまっていたことの弁護——セネカの批判者たちは、また次のようにいって彼を非難している。「アグリッピーナの殺害後も、セネカをネロの傍に見るのは耐えがたいことだ」、「恐らく彼は、宮廷を去ると生命が危なかったに違いない」と⁴⁾。

この非難にたいしてもまた、ディドロはセネカの内心の正当な動機を見よ、という。すなわち、セネカの決心は、宮廷における正しい人間の保護という動機から発しているのである⁵⁾。

だが宮廷にとどまることは、帝国と、セネカの家族と、友人と、大勢の善良な市民のために有益だったのだ。賢明で、意志が強く、正しい人物。彼は、実務の無限のすみずみにまで責任を持ち、自己の権威と知識と勇気と親切によってさまざまなことが可能であった。すな

1) CN, t.I, p.88; HN, t.I, p.60; AT, p.67.

2) CN, t.I, p.88; HN, t.I, p.60; AT, pp.67-68.

3) CN, t.I, pp.89-90; HN, t.I, p.61; AT, p.68.

4) CN, t.I, p.155; HN, t.I, p.103; AT, p.110.

5) CN, t.I, pp.155-156; HN, t.I, p.103; AT, p.110.

わち、援助や特赦を与えたり、不幸を償ったり、喧嘩をやめさせるか、それとも事前に防いだり、公金の使いこみを防止したり、無能力者を遠ざけ、知識と徳行にすぐれたひとびとを高い地位につけたりする。なんということだ。アグリッピーナの殺害後は、こういう人物が善行を行なう余地がなくなってしまうとでもいうのだろうか。

ディドロはこう自問したあと、ネロ個人の家庭教師の立場から、ローマ帝国全体の大臣の立場に移ったセネカにとって、「善行」をなしうる範囲は今や限りなく広がっているという。そしてセネカは、任務の遂行を妨げるあらゆる種類の障害、たとえば、ネロの情婦で、やがてその妻になるポッパエア・サビーナの憎悪、解放奴隷たちの陰險な策謀、ネロからの邪魔者あつかい、などに抵抗して、その責任ある地位をまもり続ける。やがてブッルスが死に、「徳はその指導者のひとりを失う」にいたるが、それすらも、彼の善への意志を挫くことはない。なぜなら彼は、「もし彼らが私を殺さねばならないなら、宮廷のなかで私を殺させよう」と堅く覚悟をきめていたのであるから¹⁾。

しかし、セネカの意志がたとえどうであれ、彼はその行為の選択にかんして、はたして無謬だったのであろうか。この当然の疑問にたいしてディドロは、はっきりとこう答えている。「並の人間なら、行為の決定動機の選びを誤まることもありうる。だがセネカは並の人間だったろうか。」²⁾

だが、たとえセネカがどれほど努力しようと、今も昔も、「人民」は、彼を誹謗することをやめないであろう。ディドロもこの悲しい事実を認める。「宮廷にとどまれば死を恐れたからだといい、宮廷を去れば、それもまた死を恐れたからだという。」だが、汚名や不名誉が、セネカにとって、どんな重要性をもちえようか。なぜなら、この場合もまた、セネカを導くのは、世評ではなくて、彼の「良心」なのであるから。「不名誉は世人の評判のなかにあり、潔白はわれわれの心のなかにある。私は次のどちらを実行するだろう。世人が賛成する悪か、世人が否認する善か。私が耳を傾けるのは、人民の声だろうか、それとも良心の声だろうか。賢者カトーよ、私に教えてほしい。」³⁾

(三)アグリッピーナ殺害事件のあと、事件の「弁明書」を執筆したことの弁護——セネカの批判者たちは、さらに次のようにいって彼を非難している。「君は、セネカがアグリッピーナ殺害の弁明書を執筆したことを容認したいというのか。もし彼が、喉もとに短刀をつきつけられるか、それとも毒薬を口もとにおしつけられて、書かされたというのなら話は別だ。もしそうなら、彼を許せないまでも大目にみてやることのできる。死を物ともしないという徳は、恐らく人間の義務とはいえないからだ。」だがこの場合は事情がまったく異なる。だからセネカは、「弁明書」の執筆を拒否して、断固としてネロに抵抗すべきであった、と批判者たちはいうのである⁴⁾。

この非難にたいして、ディドロは、アグリッピーナの殺害後、ネロにむかって無謀な抵抗を試みることは、血気にはやった一時の蛮勇にすぎないと答える。なぜなら、この抵抗は、国内に收拾し

1) *Ibid.*

2) CN, t. I, p. 158; HN, t. I, p. 105; AT, p. 111.

3) CN, t. I, pp. 157-158; HN, t. I, pp. 104-105; AT, p. 111.

4) CN, t. I, p. 161; HN, t. I, p. 107; AT, p. 113.

がたい「革命」を惹起したに違いないからである。ディドロによれば、セネカの「弁明書」執筆という行為は、ひとえにこの危険な「革命」の防止という動機から発しているのである。「革命」の防止によって、国内の治安を回復することこそ、大臣セネカに課せられた第1の義務なのであった。「真の義務の観念は、公益に基礎づけられている。」¹⁾

だが、非難者たちは、再びこう反論するであろう。「ローマの人民が反乱を起こし、母親殺害者が帝位からつき落とされる危険がそれほど大きかっただろうか。また、この革命が到来したからといって、革命はそれほど大きな不幸だろうか」と²⁾。

これにたいしてディドロは、「革命」が流血を伴う時、その災厄は「きわめて大きい」と答えている。当時ネロは、強力な護衛隊にかこまれていたから、彼にたいする抵抗は、必ず流血の惨事をひきおこしたに違いないからである³⁾。

だが、非難者たちは、続けてこう反論する。「この事件〔ネロにたいする「革命」〕が国家を崩壊させる可能性をもっていたにしても、ネロが国家を崩壊させることのほうが、より確実だったのではないか」と。しかしディドロは、当時のネロの乱行が、国家を破滅させる程度にまで進行していたとは考えられないという。しかも当時のローマ帝国の政治情勢を見ると、ネロに代って皇帝の座につきうる人物を探しだし、この新皇帝を支持する社会勢力を新たに組織することは不可能であった。なぜなら、墮落した「元老院」には権威がなく、「護衛隊」には規律がなく、「人民」にはエネルギーがなく、どこにも頼るべき力は存在しなかったからである。したがってディドロは、アグリッピーナ殺害直後の時点で、大臣セネカに残された唯一の道は、無用の混乱と流血をさけて、早急にネロの権威を強化して、人心の不安を一掃することだけであった、と結論する。ここでもまた、セネカの行為は、流血革命の防止という彼の内的動機の理解によって正当化されるのである⁴⁾（ディドロと「革命」の問題にかんしては、後述する第三部、第三章、2の「革命の否定」の項参照）。

私は本章2（「第2版固有の弁護原則——初版の弁護原則の精密化」）において、ディドロが『セネカ論』第2版のなかに導入した新しい3つの弁護原則——「責任の吟味」（複数の人間が関係した事件全体において、セネカ個人が負うべき責任の有無の確定）、「被告発者の人格の高潔さの吟味」、「裁かれる人間の行為の動機の理解」——を検討してきた。この検討をとおして、上記3弁護原則が『セネカ論』初版のなかの3弁護原則——「事実の吟味」、「告発者の人格の信憑性の吟味」、「裁かれる人間への自己投入」——にそれぞれ対応し、しかも後者が前者をより精密化したものであることが、今や明らかにされたことと思う。

3. 自己批判を媒介とした、セネカ弁護から自己弁護への転化

老ディドロの自己批判 ディドロは、『セネカ論』第2版、第I巻の終わりのほうに、他の本文

1) CN, t.I, p.162; HN, t.I, p.107; AT, p.113.

2) *Ibid.*

3) *Ibid.*

4) *Ibid.*

といちじるしく調子の異なる長い付加文を挿入している (§.117後半——§.123)。この付加文全体は、次の順序で構成されている。——第1, 若いディドロのセネカ非難と、これにたいする老ディドロの自己批判¹⁾。第2, 新たなセネカ弁護²⁾。第3, 歴史上有名なセネカ顕彰者たちの紹介³⁾。第1の部分(老ディドロの自己批判)のテキストは、次のことばによってはじまっている⁴⁾。

私が愛する若者がいる。私は時々この男を尊敬することさえあるが、だからといって、今さらこの男をいんぎんにとりあつかうつもりはない。というのは、この男とは、今までいつも率直に語りあってきたからだ。この若者は、かつてセネカとブルスにたいするもっとも簡潔だが、もっとも辛辣な諷刺を發表したことがあった。これまで私が考察してきたセネカの敵たちは、この男が1ページのなかに集約したことを、膨大なページを使って薄めたにすぎないような印象を与える。

ディドロは、この文章(老ディドロの自己批判)の結末にならなければ、真相を明らかにしようとはしないが、上記引用文中の「ある若者」とは、実は32歳の時のディドロ自身を、また「セネカとブルス」にたいする「今までのうちで、もっとも簡潔だが、もっとも辛辣な諷刺」とは、32歳のディドロが、シャフツベリの翻訳『人間の真価と徳論』につけたひとつの訳注の末尾の部分(注全体のほぼ3分の1)を、それぞれさしている。

付記 ディドロ訳シャフツベリ『人間の真価と徳論』とその第二篇、第二部、第三節結末の訳注 私は、以下において、若いディドロがこの訳注の末尾で展開したセネカ批判と、それにたいする老ディドロの自己批判とを検討せねばならないのであるが、それに先立って、参考までにここでディドロ訳シャフツベリ『人間の真価と徳論』を一瞥し(ディドロ訳は、シャフツベリの原著の「自由訳」と称すべきものであるが、ここではもっぱらこの訳書を通してのみ原著を問題にする)、ついでこの訳注全体の論旨を紹介しておこう。

シャフツベリのこの本は、その副題「道德哲学原理」が示している通り、「道德」的生の「原理」、すなわち、人間がこの社会で幸福に生きていくための原理の探求を課題としている。しかも彼は、この探求を正統的神学が前提する超自然的教義の枠から離れた場所で遂行しようとする。すなわち彼は、人間の内部に存在する自然的傾向に基づいて、われわれの道德的生き方の原則を確立しようとするのである。

彼によれば、人間の情念は、3種類に分けられる⁵⁾。——第1, 「人類の公共の善を生みだす自然な感情」。第2, 「私人の利益を生みだす自然な感情」。および第3, 「公共の善も、私人の利益も生みださない感情。これは私人の善を妨げるから、むしろ不自然な〔退廃した〕感情と呼ぶのがふさわしい」。したがって、「道德」の目的は、第3種の感情、すなわち「公共の善も、私人の利益も生みださない感情」を人間のうちから除

1) CN, t.I, pp.251-256; HN, t.I, pp.164-167; AT, pp.176-178.

2) CN, t.I, pp.256-266; HN, t.I, pp.167-174; AT, pp.179-186.

3) CN, t.I, pp.266-274; HN, t.I, pp.174-179; AT, pp.187-189.

4) CN, t.I, p.251; HN, t.I, p.164; AT, p.176.

5) AT, t.I, p.70.

去して、残る2種類の感情の間に正しい調和を確立することに求められる。

しかし、シャフツベリの力点は、第1種の感情、すなわち「人類の公共の善を生みだす自然な感情」の上におかれている。彼は、この感情が過剰になった場合の危険を充分察知しつつも、こう力説する。「自分自身との間に葛藤なしに生活するための、したがって幸福に生活するための重要な手段は、社会的感情のすべてをいきいきと持ち続けることである」と¹⁾。なぜなら、人間の根源的墮罪の教義に基礎づけられたそれまでの超自然的神学体系の全体的破産のあとに、なおも人生の合理的計画をうち立てようとすれば、この人間の「社会的諸感情」、すなわち「人類愛」のうちにしか、確実な基礎を発見しえないからである。

したがって、シャフツベリ（および翻訳者ディドロ）の意見によれば、この計画の実現を妨げる反社会的生き方こそは、すべてのひとを不幸に導くものであり、したがってそれは悪である。シャフツベリ（および翻訳者ディドロ）は、この反社会的生き方が生じてくる原因を、上記3種類の人間感情を基礎として説明し、次の3つの場合に分類する²⁾。——「社会的感情が微弱で、不完全である」場合、「利己的感情が強すぎる」場合、「感情が、個人の私的利益も、人類の公共の利益も生みださない」場合。

この最後の場合に、人間は最大の不幸におちいる。なぜなら、人類全体が、一切の「社会的感情」を失ったこの人物を、「共通の敵」として社会から追放してしまうからである。こうして彼は、ただひとりの友もなく「いやしがたいわびしさ」のうちにつき落される。「心のなかに、もっとも悲しい孤独を抱き、社会のまったくなかに、もっとも恐ろしい無人の砂漠を見いだすこの男が、味わわないような苦しみが存在するだろうか。全世界との絶えざる戦い。自然との和解しがたい葛藤。なんという状況だろう。」そして、シャフツベリ（および翻訳者ディドロ）は、こう結論する。「自然な社会的感情の喪失は、結果としてぞっとするような悲惨を生みだす」と³⁾。（いうまでもなく、ディドロは後年、この反社会的人間のみじめな姿をルソーのなかに読みこむのである。）

訳者ディドロは、原著者シャフツベリの上記の立論をさらに補強するために、この本の第二篇、第二部、第Ⅲ節の結末に特にひとつの長い訳注をつけ、そのなかで、反社会的人間の「ぞっとするような悲惨」を、ティベリウス、ネロ、セネカ3人の例に即して、具体的に説明している⁴⁾。

まずティベリウスにかんする説明から見ていこう。ディドロによれば、この皇帝の実態は、「自己が統治する国家の暴君、一族郎党の殺害者、一群の淫売婦たちの奴隷、一団の奴隷たちの保護者」にほかならなかった、という。これほどやりたい放題のことをやったローマ皇帝は、その自由さのゆえに、「幸福」だったのだろうか。ディドロは、タキトゥスとともに、否という。「暴君たちの魂を探してみると、そこにはいやし難い傷が発見できる。悪人の精神は、絶えずその罪を非難されているために、拷問にあった肉体よりも、もっとずたずたに引き裂かれている」（『年代記』第4巻、第6章）と⁵⁾。

ディドロはさらに続けて、この時代には一群の悪人たちの系列があって、両端に、ネロとセネカがそれぞれ位置しており、この系列に属するそれぞれの悪人の内部には、各人の「退廃」に比例した「悲惨」が見いだされると強調する⁶⁾。

1) *Ibid.*, p.78.

2) *Ibid.*, p.77, p.78.

3) *Ibid.*, pp.117-118.

4) *Ibid.*, p.118, note 1.

5) *Ibid.*

6) *Ibid.*

ネロについてはどうか。彼の生涯は、殺人の連続のうちに送られる。彼の命令によって殺された人物の名前をざっとあげてみよう。――義弟ブリタンニクス、母親アグリッピーナ、妻オクターウィア、第2の妻ポッパエア、義妹アントーニア、執政官ウエスティーヌス、義子ルーフス・クリスピーヌス、セネカ、ブッルス。殺人のうえにあらゆる種類の放蕩、乱行が加わる。彼もまた、思いのままに振舞いながら、その自由のうちに一瞬の「幸福」も見いだすことができなかった¹⁾。

それどころか、絶え間のない恐怖が彼をせめさいなみ続けたのである。しばしば正気を失い、そのたびごとに、眼前には口を開くテナール河が見え、背後には松明をかざしてどこまでも自分を追ってくる復讐の女神たちが見える。時々彼は、「途方もなく豪華な饗宴」にふけるが、それも楽しみを求めるためというより、むしろ苦悩を忘れんがためだったのだ、とディドロは結論している²⁾。

私が本論においてこれから検討しようとする32歳のディドロのセネカ非難（『セネカ論』第2版がいう「セネカとブッルス」にたいする「今までのうちで、もっとも簡潔だが、もっとも辛辣な風刺」）が展開されているのは、今まで説明してきたディドロの訳注の、ネロにかんする部分の直後、すなわちこの訳注の末尾においてである。

では、『セネカ論』第2版の老ディドロは、『人間の真価と徳論』訳注の青年ディドロのセネカ非難をどのように自己批判しているであろうか。両者の論点を、テキストに即して逐条的に検討していこう。

第1、青年ディドロは、たとえ「死の危険を犯して」も弟子ネロの放蕩をいさめるべき義務があった教師セネカにたいして、まず次のように非難する。「この危険な義務を果すことよりも、財産をためこむことに汲々としていた賢者セネカは、暴君の淫蕩に手をかけて、残虐行為によってすみ切った君主の心のうさを晴らしてやっている」と³⁾。

この非難にたいして、老ディドロは、まず「セネカは財産をもってはいたが、それに恋々としていたわけではない」と反論する。またセネカが、ネロの淫行に手をかけたという第2の攻撃にかんしては、こう断言する。「今では君〔老ディドロの青年ディドロにたいする呼びかけ〕にも、タキトゥスが理解できるようになっている。だから、彼の本〔『年代記』〕に目を通してみさえすれば、上の第2の非難が誤っていたことを、赤面しながら認めるに相違あるまい」と⁴⁾。

第2、青年ディドロは続いて、「彼は、恥知らずにも口をつぐんで、本来危険から身を守ってやるべき幾人かの正直な市民の死を承認した」という⁵⁾。

これにたいして老ディドロはこう反駁する。青年ディドロが、この非難文を書いたのは、高等中学校を出てからやっと4～5年たった頃で、タキトゥスの作品がなんとかすらすらと読めはじめたばかりの時であった。だが彼にはまだ、タキトゥスの歴史書を理解するのに絶対に必要な条件が欠

1) *Ibid.*

2) *Ibid.*

3) CN, t.I, pp.251-252; HN, t.I, p.164; AT, p.176. 原注と『セネカ論』第2版との異同は、次の通りである。(原注) *pupile*: (CN) *disciple*.

4) CN, t.I, p.252; HN, t.I, p.165; AT, p.176.

5) *Ibid.*

けていた、と主張する。この絶対的条件とはなにか。それは、現実の世界のなかで責任をもって生きた、という経験である¹⁾。

〔青年ディドロには〕人生経験も、対人経験も、運命の裏切りがわれわれを巻きこむ恐しい二者択一の経験も、善と悪とをへだてる線の上を、確固たる足どりで歩くという困難な経験も、すべてが欠けていた。

その時、君はただ「わきたつ想像力」の声を聞き、「幻想的モデル」を基準にして他者を裁くだけであったと老ディドロはいう。だがやがて、自分自身がひとつの「危機」に遭遇した時、はじめてひとは過去の誤った判断に気づく²⁾。（ディドロが、こう書きながら自分自身の過去のヴァンセンヌ入獄体験を想起していることは、ほぼ確実である。次の引用文中にあらわれる「自分自身との戦い」、「賢者の苦悩」ということばに、同時に注意されたい。）

君が、もっとも有徳な人物に、そしてさらにいえば、もっとも不幸な人物に（ただし有徳な人物が真に不幸になりうるとしてのことであるが）、あびせかけた残酷な侮辱のことばを後悔するのは、君が自分自身との戦いをへ、賢者の苦悩を味ったあとのことである。

ディドロはこうして『セネカ論』第2版のなかで、生涯ではじめて、しかもただ一度だけ、公然たる自説の否認を行なったのであった。しかし老ディドロは、突然ここで語調を一変して、次のように問う。「私は君と知りあってから随分になる。君は生まれつき寛容で、正直な感じやすい魂をもっている。自分自身の立場を守る時に示すよりも、もっと激しい関心と熱意をそそいで、君が罪人を弁護してきたのを、皆は幾度も目撃している。それなのに、どうして突然、君は立派で稀な素質を失ってしまったのだろうか」と³⁾。しかし、ディドロは、いったん自分の過去の誤った主張を公然と撤回したあと、今度はここで、その過去の責任を、自分自身の外部に探しはじめる。そして、「君の無分別なことばについて責任をとるべきは、君自身ではなくて、むしろ文法家たちだ。彼らが君を教育した。そして君の趣味を腐敗から守るという口実で、君の目からこの哲学者のきびしい教えを遠ざけたのだ」と断定する。老ディドロが上で「文法家たち」と呼んでいるのは、いうまでもなく青年ディドロが学んだ高等中学校の教師たちである。彼らが、「ローマの雄弁家」キケロの文体にだけ、若い自分の関心に向け、セネカの教説について考えることを教えてくれなかった、それが自分の誤った判断を生みだす原因であった、と老ディドロは主張しているのである⁴⁾。

第3、青年ディドロは、またこう主張する。ストア派のセネカは、友人たちの没落を見て自分の

1) *Ibid.*

2) *Ibid.*, CN, t.I, pp.252-253; HN, t.I, p.165; AT, pp.176-177.

3) CN, t.I, p.253; HN, t.I, p.165; AT, p.177.

4) *Ibid.*

破滅に近いことを悟るが、その時彼はエピクロス派のペトロニウスほどにも勇気がないことを露呈する。すなわち「自分の庭の果物を食べ、庭の流れの水で喉をうるおして毒殺の危険から逃げまわっていたが、それにも疲れて、あさましくも財産とひきかえに命乞いに行く。」それまで彼は、「生命の無価値」を説き続けていたくせに（しかもその「無価値」な「生命」を嬉々として維持し続けてきたのであるが）、いざとなると財産で生命を「買い戻」そうと画策し、結局それにも失敗した、と断罪する¹⁾。

これにたいして老デイドロは、この断罪は「事実の順序」が誤っている、と指摘する。すなわち、セネカにたいする毒殺の陰謀、および彼の屋外での生活は、宮廷からの引退の結果として、そのあとに起ったものであって、その逆ではない。青年デイドロのセネカにたいする非難は、この種の「幼稚な不正確さ」に基づいている。そして老デイドロは、青年デイドロに呼びかける。君の判断が「勉学と反省と経験」によって完全になり、「セネカがいかに生き、いかに死んだか」が明らかになり、「彼の著作と道徳の原則」が、君にも理解できるようになった今では、「君は、私とおなじように、恥かしく、腹立たしく、また心からすまなく思わないか」と²⁾。

第4、青年デイドロには続けてまた、タキトゥスにしたがえば、「これ以上好意的にセネカを裁くことは不可能である」と断言さえする³⁾。

これにたいして老デイドロは、やっとラテン語が分りはじめた頃の自分には、まだ「タキトゥスを読み、理解し、評価する」能力がなかった、と反駁している。（なお老デイドロは、その頃の彼の「行為の尺度」、すなわち道徳判断の基準は、学校で学んだアリストテレスの倫理学と「ニコル〔『道徳論』〕の数章」だけであったと付言して、ここでもまた当時の自己に人生の「経験」が欠如していたという事実を示唆している。）⁴⁾

第5、そしてデイドロは、『人間の真価と徳論』の問題の訳注の結末を、「だから、私の考えをふたことでいえば、セネカもブッルスも、ひとびとが描きだすほど誠実な人間ではないのだ」という結論で閉じている⁵⁾。

これに反論して、『セネカ論』第2版の老デイドロは、セネカとブッルスの真の姿を、次のように描きだす⁶⁾。

彼らは、もっとも不幸な素質をもって生まれてきた主君を、14年間の治世期間中、5年にわたって名君として統治させた。彼らは、生涯にわたって、すべてのひとからあまねく尊敬

1) CN, t.I, pp.253-254; HN, t.I, p.166; AT, p.177. 原注と『セネカ論』第2版との異同は次の通りである。(原注) ennuyé: (CN) las. (原注) vivant: (CN) se nourrissant. (原注) l'eau: (CN) se désaltérer au courant. (原注) va: (CN) s'en va. (原注) pour: (CN) contre. (原注) une vie qu'il n'eût pas été fâché: (CN) une vie dont il avait prêché le néant, qu'il n'aurait pas été fâché. (原注) par elles: (CN) à ce prix.

2) CN, t.I, p.254; HN, t.I, p.166; AT, pp.177-178.

3) CN, t.I, p.255; HN, t.I, p.166; AT, p.178.

4) CN, t.I, p.255; HN, t.I, p.166-167; AT, p.178.

5) Ibid.

6) CN, t.I, pp.255-256; HN, t.I, p.167; AT, p.178.

された。義務を果す忠実さを、自分たちの血で証明した。だから2人の急死は、すべての善良なローマ市民から哀惜されたのである。

では、この事実を無視して、2人の有徳なローマ人を、「こんなにうぬぼれた調子」で弾劾するのはいったい誰だろうか。『セネカ論』第2版の老ディドロは、ここではじめてこの若い激烈なセネカ非難者が、実は若き日の自分自身であったことを明らかにする¹⁾。

少しばかり文才があったために、不幸にも常識を忘れてしまった子ども、あわて者。このあわて者、この子どもは、いったい誰だろう。それは私だ。20歳の私だ。そして彼にこの訓戒を与えているのは、60歳をこえた私だ。

ディドロはここで、「20歳の私」、および「60歳をこえた私」とそれぞれ書いているが、これは必ずしも正確ではなく、彼がシャフツベリ『人間の真価と徳論』の翻訳を出版した時は、32歳、また『セネカ論』第2版を刊行した時は68歳であった（「20歳の私」という表現のなかには、人生経験の欠如を強調するための老ディドロの誇張が認められる）。

自己批判の意味 このようにして、老ディドロは、『セネカ論』第2版のなかに、かつての自説にたいする公然たる否認を挿入する。だが、この自己批判が、老ディドロ対青年ディドロという2人の人物間の対話という形態をとっており、しかも片一方の対話者である青年ディドロの実態が最後までふせられているという事実は、きわめて暗示的であろう。なぜなら、対話形式による、この仮面の自己告白のうちには、自己を対象化したという欲求と同時に、自己の姿を一人称の独語として語ることにたいする、ディドロの不安が認められるからである。

ところでディドロは、この仮面の自己告白を通して、彼自身の内面のいったいなにを表現したのであろうか。私はここで次の3つの点を指摘しておきたいと思う。

第1、この自己告白は、まずディドロにおけるセネカとの同一化の意識の成立根拠を表現している。——老ディドロのこの自己批判が「経験」の名において行なわれていることに注目しよう。私は、本論第二部において、『セネカ論』初版における「経験」の意味を解明した。すなわち、初版中に認められるセネカ弁護の4原則が、表層から深層にいたるひとつの全体を形成し、この4層が、最深層にある、迫害されたセネカとの同一化の意識によって構造化されていること、この同一化の意識（それは同時に、すべての苦悩しつつ生きる善人と連帯する意識である）は、ディドロの内奥の良心から湧出していること、またこの良心は決して永遠不動の実体のごときものではなく、「経験」によって絶えず変化し、成熟していくものであることを明らかにした。

『セネカ論』初版とおなじこの意識構造は、第2版の新たなセネカ弁護3原則が形成する全体のなかにも認められ、「責任の吟味」という表層の意識と、「被告発者の人格の高潔さの吟味」と

1) CN, t.I, p.256; HN, t.I, p.167; AT, p.178.

いう中層の意識とは、最深層に位置する「裁かれる人間の行為の動機理解」という意識、すなわちセネカと同一化の意識によって組織化され、構造化されている。そして、第2版では、初版中の前記4層構造とその反復（ただし第2版の付加文では、「人間的弱点の容認」の層だけが脱落しているため、3層構造となる）、および第2版固有の3層構造とが完全に融合して、ひとつの意識の総体をつくりあげているのである。

いうまでもなく、『セネカ論』第2版における、このセネカ弁護論の意識の総体もまた、ディドロのセネカ（およびすべての苦悩しつつ生きる善人）との同一化の意識に収斂していくのであるが、彼は、先に検討した第2版の自己批判文において、この他者との同一化の意識の成立根拠を、ただたんなる客観的真理としてではなく、彼自身が生きた主体的真理として、提示しようとする。すなわちディドロは、この同一化意識が成立する主体的根拠を明示しようとするのである。

この主体的根拠とは、ディドロとセネカ（およびすべての苦悩しつつ生きる善人）とが、それぞれの生涯において生きた「経験」の類似性の自覚にほかならない。ディドロの自己批判文は、すべての善人が、苦悩しつつこの現実の生を生きていることを——「人生経験」、「対人経験」、「運命の裏切りがわれわれを巻きこむ恐ろしい二者択一の経験」、「善と悪とをへだてる細い線の上を、確固たる足どりで歩くという困難な経験」を生きていることを——読者の前に明らかにする。このきびしい現実の生を責任をもって主体的に生きるという「経験」を通して、ディドロははじめて「自分自身との戦い」と「賢者の苦悩」とを知るにいたる（再びここで、ディドロのヴァンセンヌ入獄の体験、『百科全書』刊行のため、抵抗と妥協との細いはざまを歩んだ彼のあの「困難な経験」を想起しよう）。そして、このディドロ自身が「経験」した「自分自身との戦い」と「賢者の苦悩」とが、セネカの「自分自身の戦い」と「賢者の苦悩」に彼を同一化させる。この生の「経験」の類似性が、ディドロにたいしてセネカ理解の——それと同時にすべての苦しみつつ生きる人間理解の——道を開いたのである。今や彼自身の生涯の主体的「経験」そのものが、『セネカ論』初版・第2版における一切のセネカ弁護論の真理性のあかしとなる。

第2、この自己告白はまた、初版のセネカ弁護が、第2版において自己弁護に転化する内面的根拠を表現している。——ディドロ自身の「経験」とセネカのそれとの基本的類似性が自覚された今、ディドロはセネカの運命のなかに自己のそれを読みとっていく。その時セネカ弁護は自己弁護に転化せざるをえない。もちろん、すでに小論第二部で考察したように、『セネカ論』初版を、たんなるセネカ弁護とみなすことは不可能であろう。なぜならディドロは、セネカと同一化しつつ彼を弁護する彼自身の意識を、初版中のいたるところで暗示的に表現しているのであるから（本論第二部の目的は、この暗示的なディドロの意識の構造をとりだして分析することであった）。しかし彼は、初版においては、この意識の主体的成立根拠を——なぜ自分がセネカと同一化するのか、なぜセネカと同一化して彼を弁護することが許されるのかを——決して明示的に語ろうとはしなかったのである。

第2版において、この根拠が明示的に語られた今、読者は、「セネカの生涯と著作とを公平に検

討し、中傷された偉人の仇を討ち、万一、彼が有罪だと思える場合には、彼の過失を嘆」¹⁾ いてほしいというディドロの執拗な叫びが、実は「私の生涯を公平に検討し、中傷された私の仇を討ち、もし私が有罪だと思える場合には、私の過失を嘆」いてほしいというディドロ自身の訴えにほかならなかったという事実気づく。そして読者は、ディドロが第2版中でネジョンへの献辞に付加したことば——「読者は、私が描いているのが物語中に姿をあらわすさまざまな人物の魂であると同時に、私自身の魂でもあるということにやがて気づきはじめるであろう」²⁾（傍点中川）——の深い意味を把握するにいたる。その意味で『セネカ論』第2版は、ディドロの『告白』にほかならない。

『セネカ論』第2版のこの自己批判は、同時にまたディドロの寛容の立場、「人間の誤謬を軽くみなそう」とする「美しい魂」の立場の成立の主体的根拠をも明らかにしている。ディドロはこう考えるであろう。自分自身が、「経験」を通して徐々に生熟していく存在であるという事実を承認した以上、そして過去には未熟さ（「経験」の欠如）のゆえに、セネカにたいして誤った非難を投げかけたことがあるという事実を承認した以上——つまり自分自身が誤謬の可能性をはらんだ存在であるという事実を承認した以上——どうして他の人間にたいしてだけ、無謬であることを要求しえようか、と。ここに、ディドロが他人の過失を許す主体的根拠が存在する。

だが、このように、人間が常に誤謬の可能性にさらされた存在であり、常に許されうる存在であるという基本的事実を承認することは、同時にディドロを道徳的相対主義——一切の裁きを不可能にする道徳的ニヒリズム——に導かないであろうか。否、ディドロの自己批判を正しく読む限り、そのような推測をくだすことは不可能である。

なぜなら、第3、この自己告白は最後に、セネカの死が、ディドロにたいしてもっている絶対的な意味を表現しているからである。すでに本論第三部、第1章（2の「『文学年報』1779年、第26巻、「第2信」の総括的検討」の項）で詳細に検討したように、セネカは生涯の最後に、彼の行為の全責任をひとりでひきうけ、ネロから与えられた死の命令によって、従容として死んでいる。このセネカの死という絶対的事実が、それまでの彼の生涯の誤謬の可能性に終止符をうつ。ディドロにとって、セネカの死こそ、すべての道徳的誤謬からまぬかれた絶対的事実であった。

『セネカ論』第2版の自己批判中には、次のような形で、セネカの死への言及があらわれる。まず彼は、かつてのシャフツベリ『人間の真価と徳論』の訳注から、「セネカは、たとえ死の危険を犯しても弟子〔ネロ〕に徳行を勧めるべき義務があった」という箇所を引用したあと、こう注釈を加えている³⁾。「これこそ彼が実行したことであり、生命を失った原因なのだ」と。また、この自己批判の末尾には、次の表現があらわれる。「〔セネカとプルスは〕義務を果す忠実さを、自分たちの血で証明した。だから彼らの急死は、すべての善良なローマ市民から哀惜されたのである」と⁴⁾。

1) S, pp.(2)-(3); CN, t.I, pp.2-3; HN, t.I, pp.5-6; AT, p.9.

2) CN, t.I, p.4; HN, t.I, p.6; AT, p.10.

3) CN, t.I, pp.251-252; HN, t.I, p.164; AT, p.176.

4) CN, t.I, p.256; HN, t.I, p.167; AT, p.178.

後述するように（第四部参照）、ディドロはかつてヴァンセンヌに投獄された時、一度政府の圧力の前に屈服する「経験」をもったのであるが、これ以後の彼は、『百科全書』の刊行のためにたとえ具体的な方針にかんしては政府に妥協しても、原則的な問題にかんしては、決して屈服するまいという決心をかためる。その時彼は、ソクラテスのように「義務を果す忠実さを、自分の血で証明しよう」と決心したのであるが、この決心が今、再びセネカとの同一化意識を媒介としてよみがえり、セネカ（とブッルス）の死の場面に投入されたのである。

したがって、ディドロが意味することは明らかである。——彼はこう考える。義務への献身を、生涯の最後に自分の血で証明したセネカは、この絶対的事実によって、決して死を恐れていないことを明らかにした（セネカと同一化したディドロは、そういう事態に追い込まれば、自分もまたセネカと同様に死ぬであろう、と考える）。したがって、一見妥協的に見える彼の行動も、実は慎重に考慮された内的動機——他者の利益のためにもっとも有効な身の処し方を選ぶという内的動機——に発しているのであって、決して自分自身の保身・栄達という動機からでたものではない（ディドロは、自分の一生の行動もまたそうであった、と考える）。また彼は一生の間に過ちを犯したことがあるかもしれない。しかし、それらはすべて、彼の未熟さ（「経験」の欠如）のゆえに免責しうる過失にすぎないのである、と（ディドロは、自分の過ちもまたそうであった、とこの自己告白を通して語っている）。

こうして、セネカの生涯は、彼の死という絶対的な事実を媒介として、ディドロにとって絶対的な意味を獲得する。そしてディドロは、一方でセネカの生涯を、自己を含めたすべての善人の徳行のモデルとして描きだすと同時に、他方では逆に、セネカの生涯の神聖化を通して、自己の生活の正当化をはかっているのである。

以上検討したように、『セネカ論』第2版の自己批判のなかにこそ、この書の初版・第2版のディドロの意識の基本的な核が表現されているといえるであろう。

新たなセネカ弁護 ディドロは、『セネカ論』第2版のなかで、前記自己批判にひき続いて、いくつかの新たなセネカ非難をとりあげ、それらに順次反駁を加えながら、新たな弁護論を展開していく。以下にその主要論点を見ていこう。

(1)セネカの精神と性格とが矛盾しているという非難にたいする弁護

セネカ非難者はいう。「セネカの精神は、性格と矛盾している」と。この非難にたいして、ディドロはソクラテスの例をあげながら次のように反駁する¹⁾。

すべてのアテナイ市民のなかで最高のこの賢者は、セネカほど幸福な素質をもって生まれてこなかった。だが彼は、自分を悪徳に向わせる生来の傾向に抵抗しながら、徳を実践した。〔……〕もしセネカが、生まれつきの〔性格の〕弱さを、もっとも峻厳な哲学の原則によって支えたのであるとすれば、私はますます余計に彼を尊敬したいと思う。

1) CN, t.I, p.257; HN, t.I, p.168; AT, p.182.

ディドロによれば、徳は先天的な素質ではない。それは「経験」を通して——先のディドロの表現を借りれば、「賢者の苦悩」を通して——獲得されるものである。だから彼は、「感じやすい心の裁判官」について次のようにいう。この裁判官は毎日、内心にわきおこる「哀れみ」(«commiseration»)の声を、「正義」の叫びによって押し殺しているのである、と。「これは、〔セネカ〕批判家が、多分完全に無縁な〔内心の〕戦いであろう。」¹⁾

したがって、教師・大臣としてのセネカの功績は、ネロの悪い「天性」を、彼の哲学の教えによって、少なくとも5年間は克服させた点にある、とディドロはいう。したがって彼は、「弟子を墮落させなかったことが、それほど大きな功績だったのか」とセネカを攻撃する非難者にむかって、「弟子の天性に逆って、しかも彼の治世のほとんど半分の5年間にわたって、彼を偉大な皇帝にしたことが、それほどつまらぬ功績なのだろうか」と反撃しているのである²⁾。

(2) アグリッピーナがセネカの「哲学的順応性」に期待していたという非難にたいする弁護

セネカの非難者は、また次のようにいう。「アグリッピーナは、帝国の統治に大いにくちばしをいれてやろうと思っていた。知性もあり、人間もよく知っていたこの皇后は、だからセネカの哲学的順応性にはじめから非常な期待をよせていたに違いない。追放からの召還は、この被追放者にとって、余り大きな名誉にはならないように思われる。」³⁾

この非難者は、セネカが果たした役割を、「あらゆる種類の邪悪さの混合した精神」アグリッピーナと結びつけることによって、彼を誹謗しようとしている。これにたいしてディドロは、セネカを召還して名誉が傷つけられたのは、むしろアグリッピーナのほうであると反論する。なぜなら、セネカは彼女の期待に反してネロに哲学を教え(彼女は、哲学の学習は、「皇帝にはふさわしくない」と言明していた)、その結果ネロは、彼女の期待に反して、トラヤヌスさえうらやんだほどの善政を、5カ年にわたってしいたからである(したがって彼女は、帝国の支配に介入する余地がなかった)⁴⁾。

ディドロは、このセネカ批判者の意見よりも、タキトゥスの証言のほうを信用すると主張する。「タキトゥスは、はっきりこうのべている。アグリッピーナは、セネカのために追放からの召還と法務官職への任命を〔夫である皇帝クラウディウスに〕懇願してやったが、それもひとえに人民の気嫌をとり、自分の一連の犯罪行為を、称賛すべき行為〔セネカをネロの家庭教師にすること〕によって、中断したいと望んだからであった。」ディドロは続けて、タキトゥスは、後世の中傷を予期して、まるでそれを防止するためにこれを書きとめておいたかのようだ、とのべている⁵⁾。

だが非難者はさらにいう。「セネカは、結局は母親〔アグリッピーナ〕の方針通り、息子〔ネロ〕を教育せざるをえなかったではないか」と。これにたいしてディドロは、こう反論する。上のような非難をセネカに投げつけるのは、タキトゥスを読んだこともない「無学な人間」か、それとも錯

1) *Ibid.*

2) CN, t.I, p. 259; HN, t.I, p. 169; AT, p. 183.

3) CN, t.I, p. 261; HN, t.I, p. 171; AT, p. 184.

4) *Ibid.*

5) CN, t.I, p. 262; HN, t.I, p. 171; AT, p. 184.

乱した頭に浮んだことを、口からでまかせにのべたてる「悪徳漢」か、どちらかである、と¹⁾。

また、「ストア派哲学者セネカの哲学的順応性」という中傷にたいしては、軽蔑をこめてこう反撃している。「それはちょうど、〔戒律のきびしいトラピスト修道院の創立者〕ド・ランセ神父や、〔同様に戒律のきびしい〕カマルド会修道院長の福音的順応性を云々するようなものだ」と。こうしてディドロは、最初にアグリッピーナに登用された、という事実には依拠して、セネカを中傷しようとする非難者たちの試みから、彼を救いだしている²⁾。

(3)セネカとブッルスとの比較論

セネカの非難者はまた、セネカとブッルスとを比較しつつ、この哲学者にかんして、次のようにいう。「道徳的美しさにたいする、きわめて繊細な直感力と、きわめて精妙な感情とを持ったラシーヌは、セネカをほら吹きとみなしている」と。これにたいしてディドロは、非難者がこう主張する典拠を引用すべきである、という。もしラシーヌが、同じ規準でブッルスを裁くなら、この軍人もまた「卑怯な廷臣」にすぎないことになるのではないかとディドロは反論する³⁾。

非難者はラシーヌの悲劇『ブリタニクス』を念頭におきつつ、恐らくこう考えているのであろう。ブッルスは立派な軍人としてこの戯曲に登場しているのに、セネカは全然姿を見せていない。これこそラシーヌが、セネカの人物を信用していなかった証拠である、と。ディドロは、この反駁を予想して、次のように答えている。「真相は、哲学者よりも軍人のほうが芝居の舞台にふさわしい、ということである。真相は、〔……〕ラシーヌが異教徒のうちに、なんらかの真実の徳を認めなくなかったということである」と⁴⁾。

そしてディドロは、はっきりと、「私はブッルスの振舞いより、セネカのそれを好む」と宣言する。なぜなら、ディドロによれば、両者は最初のうちは、一致協力してネロの教化に努力していたのに、やがてブッルスだけが、皇帝の前で迎合的な態度をとりはじめるからである。ディドロはそのことを、2人の行為の比較によって明らかにしていく。

まずアグリッピーナ殺害事件に先立つ時期から見ていくと、その頃の2人の態度は完全に一致しており、両者とも「偉大な人間」、「偉大な大臣」として非のうちどころがない。次に、アグリッピーナ暗殺がネロによって発意され、両者に暗殺計画が打ちあけられた時点ではどうか。まだ2人とも完全に「潔白」である。やがて暗殺が実行されるが、2人はともに宮廷にとどまる。ディドロによれば、この時期を境として、両者の役割が分裂しはじめるという⁵⁾。

すなわち、これ以後、「一方〔ブッルス〕は廷臣の役割を果し、他方〔セネカ〕は批判者の役割を果す」。母親を殺害させたあと、ネロは「幽霊」に追われる幻覚におびえて、カンパニア地方に逃げだすのであるが、その時「ブッルスは兵士たちに命じて親殺しの前に平伏させ、彼がうまく危険〔アグリッピーナ一味の手で殺害されるという危険（これがネロ側の母親暗殺の口実に使われ

1) CN, t.I, pp.262-263; HN, t.I, pp.171-172; AT, p.185.

2) CN, t.I, p.263; HN, t.I, p.172; AT, p.185.

3) CN, t.I, p.265; HN, t.I, p.173; AT, p.186.

4) *Ibid.*

5) CN, t.I, p.265; HN, t.I, p.174; AT, p.186.

た)」をまぬがれたことを祝福させ、まだ母親の血煙の立っている〔ネロの〕手に接吻させた」。¹⁾

それ以後のブッルスは、ひたすらネロに迎合する。皇帝が、舞台に出て堅琴を弾じたり、歌を唄ったりして「役者」の真似をし、戦車競争に出場して「御車」の役をするたびに、拍手喝采する。他方セネカのほうはどうか。彼は、当時の宮廷から、「歌い手〔ネロ〕をからかい、戦車の御車〔ネロ〕の悪口をいった」と非難され続けているのである。こうしてディドロはブッルスの振舞いに疑問を投げかける一方、セネカの行為には無条件的称賛をおしまないのである²⁾。

セネカの顕彰者たち ディドロは前記「あらたなセネカ弁護」のあとに、歴史上有名なセネカ顕彰者たちの意見を紹介していく。

大プリニウス——セネカは、「人生のさまざまな空しい事柄」に決して欺かれることはなかった、という³⁾。

テルトゥリアヌスと古代の教父たち——セネカの「きわだった信仰心」に深く打たれて、彼を「われらの仲間」と呼んで、キリスト教信徒の扱いをしている⁴⁾。

若干の教会会議——セネカのことばを自分たちの主張を裏づけるべき典拠として引用している⁵⁾。

フライジンゲンの司教オトン——セネカを「異教の哲学者」というよりも、むしろ「キリスト教徒」とみなしている⁶⁾。

エラスムス——「もし君が彼〔セネカ〕を、異教徒の作家として読みはじめても、やがて彼がキリスト教徒であることに気づくにいたるだろう。」あるいはまた、「彼はゼノン学派において、イエス・キリストの教会でパウロが占めている地位を占めている」という⁷⁾。

ある作家——「若干のひとびと、特にディオオンが、恠憤、野心、姦通、その他の悪徳をセネカに非難している。だが私は、彼らに反論するつもりはない。あれほどたくさんの古今の学者と、セネカの生涯と死そのものが、まったく逆の事実を語っているのであるから。〔……〕明白な中傷にたいしては、長い論議よりもむしろ沈黙によって反駁を加えたほうがよい。」⁸⁾

別の作家——「セネカの著作を読むたびに、読者は必ずこう感じざるをえない。読む前にくらべて、運命からより解放されたように、苦痛と死にたいしてより勇敢に、より強くなったように、義務にたいしてより忠実になったように、現実の必要がより明確に洞察できるように、つまりあらゆる点でより立派になったように、特に徳の魅力にたいしてより敏感になったように感じざるをえない。」ディドロは、セネカの非難者たちは、この作家ほどにセネカが理解できているのだろうか、という⁹⁾。

1) CN, t.I, p.266; HN, t.I, p.174; AT, p.186.

2) *Ibid.*

3) *Ibid.*

4) CN, t.I, p.267; HN, t.I, p.174; AT, p.187.

5) *Ibid.*

6) *Ibid.*

7) CN, t.I, p.267; HN, t.I, p.175; AT, p.187.

8) CN, t.I, pp.267-268; HN, t.I, p.175; AT, p.187. この「ある作家」が誰であるか不明。

9) CN, t.I, p.268; HN, t.I, p.175; AT, p.187. この「別の作家」が誰であるか不明。

ある昔の作家——「人生の苦しく、困難な事件に対処する決心を固めること。平然と摂理に服従すること。現在を無視して、至福の不死を熱望すること。われわれを、しばしば高く、あるいは低く運んでいく不思議な情念の傲慢さを抑制すること。あれほどひんぱんな嵐と難破のまっただなかで、大きな平安を味わうこと。——これらのことを内心で実現するために、私は異教徒の間で、セネカ以上に有益な、歴史家、哲学者、雄弁家、作家を知らない。彼に比肩できる人間は、ほとんどないし、大部分のひとは、はるかうしろから彼のあとを追っているのだ。」¹⁾

プルタルコス——「道徳哲学」にかんしては、ゼノンのストア学派も、プラトンのアカデメイア学派も、アリストテレスのリュケイオン学派も、セネカに比肩しうるものはなにひとつ生みだしていない、という²⁾。

クインティリアヌス——セネカは、雄弁のすべてのジャンルに精通している。彼は「悪徳の懲戒者」であり、驚ろくほど豊富なその著作は、賛美すべき箇所で充満している、という³⁾。

ディドロはさらに付け加えて、セネカの非難者たちはクインティリアヌスをひきあいにだしてセネカを攻撃しようとするが、それは見当ちがいで、この『雄弁家教育論』の著者こそ逆にセネカの賛美者なのだ、と反論している⁴⁾。

ディドロは、このように古今のセネカ顕彰者たちの意見を紹介したあと、次のような意見をつけ加える（セネカとソクラテスとの類比、ディドロが彼ら2人にたいしていただいている宗教的ともいふべき敬虔の念の表現に注意されたい）。⁵⁾

エラスムスはかつて、「もう少しで[・]聖[・]ソ[・]ク[・]ラ[・]テ[・]スと叫ぶところだ」といったが、私もまた、「もう少しで[・]聖[・]セ[・]ネ[・]カと叫ぶところだ」といった。それにしても、私は、ロッテルダムの大学者を、不謹慎だとか、不信仰だとかいって非難したひとを知らない〔傍点は原文イタリック体の語〕。

では、なぜ異教徒セネカやソクラテスを神聖視するオトンやエラスムスは、誰からも不謹慎だといって非難されないのだろうか、とディドロは自問したあと、「それは彼らが死んでしまっているから、もはや彼らに危害を加えることができないからなのだ」と自答している⁶⁾。（これに反して、自分はまだ生きているから『セネカ論』初版にたいしてこれほど不当な悪罵をこうむっているのだ、というディドロの示唆を読者はここに読みとるであろう）。

ディドロは最後に、セネカの教説が18世紀フランスにおいてもちうる教育的価値について考察する。彼によれば、この時代の公教育・家庭教育に共通する悪弊は、生徒の心に、強すぎる「生命

1) CN, t.I, pp.268-269; HN, t.I, pp.175-176; AT, p.188.

2) CN, t.I, p.269; HN, t.I, p.176; AT, p.188.

3) *Ibid.*

4) *Ibid.*

5) CN, t.I, p.270; HN, t.I, p.177; AT, pp.188-189.

6) *Ibid.*

愛」と、強すぎる「死の恐怖」とを吹きこんでいることである、という。その結果、現代の教師は、ほんの少しの衝撃をうけただけで「あわてふためく奴隷たち」をつくりだしている。セネカの哲学こそ、まさにこの「臆病さ」の克服を教えるものである¹⁾。

古今の著作家のうちで、セネカほど毅然として、臆病さに立ちむかったひとがいれば、どうか教えてほしいものだ。この臆病さこそ、われわれの生活の条件を、動物のそれよりも悪くし、われわれをあらゆる種類の暴政のもとに卑屈にも屈服させ、あるいはまた（エピクテトスの注釈家アリアノスのエネルギーにみちた表現を使えば）、強い男や僧侶が、自分たちの意のままに弱い男をひきまわす時につかむ二つの取っ手を、しっかりとつかみとるのである。

ディドロは、現代教育の欠陥にたいするこの認識に立脚して、高等中学校での教育改革を提唱する。彼によれば、授業内容は、知育のほかに、徳育も加えられなければならない。一方において「われわれを無知でなくする」ための教育が実行されるとともに、他方では「われわれから悪徳をとり除く」ための教育が実施されなければならない。そしてディドロは、この徳育のための最適の教材として、「有能な教師によって抜粋され、編集されたセネカの道徳的教訓」を推奨するのである²⁾。

ディドロは、「臆病さこそわれわれの生活の条件を動物のそれよりも悪くし、われわれをあらゆる種類の暴政のもとに卑屈にも屈服させ」と指摘し、それと同時に、セネカの著作の中心に、この「臆病さ」の克服の教説を読みとっているのであるが、われわれはここで、ディドロにとって、内心の「臆病さ」との絶えざる戦いと、現実の「暴政」への絶えざる抵抗こそが、その生涯の課題であったという事実に気づかざるをえない。ここでもまたディドロは、セネカの「経験」と自己のそれとの類似性への確信を媒介として、彼自身の平素の覚悟をセネカのそれとを重ねあわせているのである。その意味において、セネカの徳の顕彰は、直ちにディドロ自身の生涯の戦いの顕彰につながり、セネカの「道徳的教訓」の重視は、直ちにディドロ自身の倫理的立場の宜明につながる、といえるであろう。

第Ⅲ章 セネカとの対話から「後世」との対話へ

1. 道徳の探求と真理の認識

セネカとの対話の枠を越えて 私は小論第二部第Ⅲ章において、『セネカ論』初版の後半（§. LXIV—§. CIX）に表現されたディドロの意識をその内面的秩序の展開にしたがって考察してい

1) CN, t.I, p.271; HN, t.I, p.177; AT, p.189.

2) CN, t.I, pp.271-272; HN, t.I, pp.177-178; AT, pp.189-190.

った。すなわち、まず社会におけるわれわれ人間の個人的存在のあり方にかかわる「道徳」の問題、ついで、社会におけるわれわれ人間の公的存在のあり方にかかわる「政治」の問題、最後に、現実を越えた未来の世界——「後世」のひとびとの記憶と意識の世界——における、われわれ人間の全体像（私的人格・公的役割の統合された全体像）のあり方（評価のされ方）にかかわる「未来への期待」の問題であった。

だが、『セネカ論』初版のこの内面的秩序は、第2版にいたって、根本的に変化する。第1、セネカは、人間のいとなみのなかで、「道徳」（「徳の実践」）の問題を第一義的に考え、この問題とは直接結びつかない他の知的認識（形而上学、科学、技術）の探求をまったく無視している。彼の著作の全体は、当然この認識の枠のなかで展開されており、『セネカ論』初版後半におけるディドロのセネカ著作解説も、この枠内におさめられていた。しかしディドロは、第2版になると、彼自身の問題意識にそって、この枠を一挙に大幅に拡大する。すなわち第2版の付加文では、ディドロの考察は、セネカの文体の問題から出発して、一般的な文体と言語の問題、ディドロ独自の自然科学方法論、医学と医学教育の特殊問題にまでひろがっていく。

第2、「政治」の問題にかんしていえば、初版のなかであれほどはげしく暴君への抵抗を説き、アメリカ革命のために蜂起した新大陸の人民、すなわち「勇敢なアメリカ人」にたいして燃えるような期待の念を表明したディドロの姿は、第2版の付加文中にはほとんど見あたらない。ごくわずかな、むしろ例外的なテキストを除けば、ディドロはもはや現実の「政治」の改革には積極的な期待を失ってしまっている。

第3、第2版のディドロを支配しているのは、むしろ現実の退廃への深い絶望、友人への幻滅、孤独な自己の内部への回帰の意志である。そして、この孤独な内面への座から、彼は敵と味方にたいて、最終的論告と頌辞とを書き遺し、同時にソクラテスとセネカが住み続ける、未来の「不死」の世界への憧れを歌いはじめている。

以下に私は、『セネカ論』第2版の付加文中の、この新しい内面的秩序にしたがって、ディドロの意識の構造を順次説明していきたいと思う。

道徳の探求者ディドロ ディドロは、『セネカ論』第2版第Ⅱ巻の末尾に、マルモンテルが書いたディドロの生涯の素描と評価を収録し、そのあとに、自分自身をどう規定し、どう評価するかを簡潔に付け加えている。まずマルモンテルによるディドロの略伝から見ていこう¹⁾。

彼の人生の20年、ないし25年は哲学史と機械技術の記述〔『百科全書』の哲学史関係の項目と科学技術関係の図版の説明〕の下書きに捧げられた。あらゆる種類の迫害と不当な圧迫を受けながら、自分から職人の仕事場に出向き、眼の前で4000枚の図版の下絵を描かせた。彼は、出版業者たちには莫大な財産をつくってやったが、自分自身の財産は全然つくらなかった。というのは、どんな場合にも、財産こそ、彼がもっとも気につけない事柄であったか

1) CN, t. II, pp. 313-314; HN, t. II, p. 205; AT, p. 400.

ら。彼は時々、劇場で、〔自作の戯曲を上演させて〕感動の涙を流させ、喝采を拍した。彼が、その他の自作にくだした判断によると、これらはすべて、誤謬は攻撃したが、人身攻撃はせず、必らずしも読者を教化はしなかったが、決してひとを傷つけたことはなかった。恐らくディドロは許してくれると思うが、私はさらに付言していいたい。彼は次の事実を公表して、恩知らずでないことを、はっきりと示したのである、と。すなわち、ロシアの女帝陛下が、フランスに住む彼にたいしては数々の贈物を、また陛下の宮廷に滞在中の彼にたいしては、数々の殊遇を与えられたという事実である〔……〕。

ディドロが、『セネカ論』第2版中に、このマルモンテルのことばを進んで収録したという事実から判断して、これが彼を非常に喜ばせたことは事実であろう。しかしディドロは、このあとさらに付記して、自分自身のことばで、正確に自分の一生を規定している。

ディドロは次のようにいう。私は、「かなり多くの事柄」を知っているとは思いますが、専門家なら誰も、私以上に各自の「専門の事柄」に通じているはずだ。私のこの「すべてのジャンルにおける凡庸さ」は、「抑制のできない好奇心」と「乏しい財産」のために、私が「人間認識の一分野」だけに専心できなかったことの必然的結果なのだ。私はやむをえない事情で、自分には決してむいていない『百科全書』の編集・執筆という事業を一生続けざるをえなくなり、「趣味と才能と、いくらかの成功の希望」によってひきつけられていた劇作の仕事を、不幸にも放棄せざるをえなくなったのである、と¹⁾。

では、人間知識のあらゆる分野において、非専門家たることを自認するディドロは、その全生涯を閉じるにあたって、自分自身をどのように規定するのであろうか²⁾。

私は、自分が、どうかこうにか認められる程度の道徳の探求者であると思う。というのは、この学問が必要としているのは、ほんのわずかの適確な判断力、よい素質にめぐまれた魂、ひんぱんな独語、および自分自身にたいするもっともきびしい誠実さ、すなわち自分自身を告発するすべは知っているが、許すすべは知らないということ、なのである。

ジャフツベリの道徳論の翻訳と注解の仕事によって、独自の著作家の道を切り開いていったディドロは、最後にもう一度、自己の生涯の主要課題が、道徳の探求であったことを確認しているのである。道徳こそ、彼の全著作——特に『セネカ論』初版・第2版——のすべての問題意識を貫く中核部分である。

道徳論の形式と原則 道徳の探求者ディドロは、『セネカ論』初版の場合とおなじく第2版においてもまた、道徳論が必然的にもたざるをえない、断片的性格、あるいは自己矛盾的性格を次のように強調している。「道徳にかんする命題で、例外なしに真理であるようなものは、ひとつも存在し

1) CN, t. II, p. 314; HN, t. II, pp. 205-206; AT, pp. 400-401.

2) CN, t. II, pp. 314-315; HN, t. II, p. 206; AT, p. 401.

ないのであるから、道德の探求者があることを肯定しつつ、また同時にそれを否定するというような場合がひんぱんにおこる」と。たとえば、「人間」にかんする真理がそうである¹⁾。——われわれがもし「一般法則」によって「人間」をとらえようとすれば、それは「偉大」な存在に見えるであろう。また逆に、「特殊な個人」に即して「人間」を検討してみれば、それは「卑小」な存在にすぎないであろう。だから道德の探求者は、「人間」を時に「偉大」であるといい、時に「卑小」である、と称しているのである。

ここから、道德論の形式の基本的条件としての断想的性格がうまれてくる。セネカは、『ルーキウスあての書簡』（第38信）のなかで、「道德論は、断想の形式において、より多くのエネルギーを獲得する」とのべているが、ディドロはこのことばに注解を加えつつ、こう付言する。「私は彼の意見に賛成だ。彼の断想は、それとおなじ数の青銅の針のようなものだ。魂につきささって抜くことができない」と²⁾。ディドロが、『セネカ論』初版・第2版において <essai> という断想的考察の形式を採用したのは、まさに道德論がもつこの断想的性格による。

しかし、この断想的形式にもかかわらず、ディドロの道德論には、やはり一貫した原則の主張があらわれている。彼は『セネカ論』初版のなかで、すでにセネカのストア主義的道德原則——「思考と行為とをいつも自然法則に一致させる」こと——を検討し、その非人間的な厳格主義（たとえば、「官能的快樂の輕蔑それ自体が官能的快樂である」）には反対の意見を表明していたのであるが、彼は再び、この問題を第2版の付加文のなかでとりあげて深めていく。

まずディドロは、「ひとが官能的快樂を感じなくなれば、それとともに苦痛もまた感じなくなる」、したがって、この心の不惑不動の境地こそわれわれが望みうる最高の理想的状态であると主張するセネカの論拠を検討し、これこそ「詭弁」から導きだした帰結にすぎないと断定する。不惑不動の存在は、決して人間ではありえない。自己存在の意識をもった彫像がもしありうるとすれば、これがストア主義的理想人、「ゼノンの賢者・幸福人」にほかならないであろう、とディドロは結論している³⁾。

セネカの原則は、「自然にしたがって生きる」ことである。この原則から出発しながら、なぜストア主義者は、自然がわれわれの周囲につくりだした数々のよきものを、われわれに享受させまいと努めるのだろうか、とディドロは反論する。たとえば、「料理のうまみ」、「果物の風味」、「葡萄酒の美味」、「花のかぐわしさ」、「女性の愛撫」など⁴⁾。

これにたいして、ストア主義の擁護者はいふ。ストア主義者は、これらの自然のたま物を味わうことを禁じてはいない。「だが彼は、それらの奴隷にはならないのだ」と⁵⁾。

しかし、ディドロは重ねてこう反論する。——エピクロス主義者もまた、決して快樂の奴隷に転落することはない。君自身がエピクロス主義者にきいてみたまえ。彼の口からは、もっとも甘美な

1) CN, t. II, p. 21; HN, t. II, p. 16; AT, pp. 211-212.

2) CN, t. II, p. 37; HN, t. II, p. 26; AT, p. 221.

3) CN, t. II, p. 190; HN, t. II, p. 126; AT, p. 315.

4) CN, t. II, p. 191; HN, t. II, p. 126; AT, p. 315.

5) *Ibid.*

官能的快樂は「徳」から生まれてくる、という返答がはねかえってくるだろう、と¹⁾。

ディドロとストア主義の擁護者との、この仮空の対話の意味はすでに明らかである。すなわちディドロはここで、セネカのストア主義に内在する極度の非人間的厳格主義の論拠をつきくずし、ストア主義が内包する実質的な真理を、エピクロス主義の真理と和解させようとしているのである。だから彼は、「道徳にかんしては、この2学派を和解させることは困難ではないだろう」と結論する。だが、それと同時に彼は、両学派の志向する方向が正反対であることを指摘する。すなわちエピクロスの徳は「社交人の徳」であり（そこから、ともすれば誘惑に屈するという危険が生じる）、ゼノンの徳は「隠者の徳」である（そこから、ともすれば氣力を失うという危険が生まれる）。前者は、官能的快樂とともに生き、それと戯れるが、後者は快樂にたいして絶えず警戒をゆるさない、と²⁾。

したがって、『セネカ論』第2版におけるディドロの道德論の原則は、エピクロス主義的ストア主義、すなわち、エピクロス主義によって、その非人間的不自然さを抑制したストア主義、と規定しうるであろう。

セネカの作品の文学的価値の擁護 セネカの著作集の中心が、道德の探求に向けられていたという事実は、しかしながら、これらの著作の文学的価値を否定する根拠にはなりえないであろう。『セネカ論』第2版第Ⅱ章中のディドロのひとつの付加文は、セネカの中傷家たちが彼の「文体と著作に」について表明したさまざまな意見の検討にあてられている。以下に、この付加文の主要論点を考察していこう。

(1)セネカの著作には、知性があるだけで感性が欠如しているという非難にたいする弁護

ディドロは、セネカの著作には「魂や感性」が欠如し、ただ「知性」があるばかりだ、という非難にたいして、次のように反駁する。「知性」（「正しい論理的判断力」）と「感性」とは、2つの美点であるが、ひとりの人物が両者を兼ねそなえることは不可能に近い。もしセネカが、知性しかもっていないという理由で攻撃されねばならないのなら、おなじ理由でフォントネルも攻撃されねばならないであろう。「判断力」と「想像力」，「激情」と「繊細」，「知性」と「感情」とを、同一の比率で所有するような人間は「空想の産物」にすぎない、と³⁾。

中傷家たちはまた、こういってセネカを非難する。彼が流刑地コルシカ島から母親に送った手紙（『ヘルウィア慰藉文』）のなかには、自分が不幸ではないという事実を、60～80ページにおよぶ「煩瑣で長々しい理屈」によって証明する「著作家と詭弁家」の姿が認められるだけであって、「真実の人間と感じやすい息子」はどこにも見当らない、と。これにたいしてディドロは、ジュストゥス＝リプシウスの次の意見を反証として引用している。すなわち、この古典学者はこういう。「セネカは、この論文〔『ヘルウィア慰藉文』〕を、働き盛りの年頃に、いきいきした知性を駆使して執筆した。これには感性と雄弁とがみちている。彼はこのなかに、他のどの作品にも見られぬ

1) *Ibid.*

2) CN, t. II, p. 191; HN, t. II, pp. 126-127; AT, p. 315.

3) CN, t. II, pp. 40-41; HN, t. II, p. 29; AT, pp. 223-224.

ほどの秩序を与えている」と。ディドロはさらに続けて、ジュストゥス＝リプシウスの意見に依拠しながら、セネカがこの『慰藉文』のなかで、どのような「秩序」のもとに、どのような「感性和雄弁」とをこめて母親を慰めているかを、説明している¹⁾。

(2)セネカの著作には、整然たる構成が欠如していて、繰り返しが多い、という非難にたいする弁護

第1、セネカは、『ルーキウスアエリウス書簡集』第33信のなかで「すぐれた思想は、天才のない人物を示している」(すぐれた思想を表現しうるのは、ただ天才のない人物だけに限られている)と断言しているが、この断言によって、セネカはそれと知らずに自分自身の天才の欠如を断罪する結果になっているのだという非難にたいする反論——ディドロは、この非難が、セネカのテキストの読み違いに基づいていると主張し、次の正しいテキストを対置する。「すぐれて、きわだった思想は、その著作全体の構成にむらがあることを示している。もし森の中のすべての木が、最も高い木に似ていれば、最も高い木すらも、誰からも賛美されることはないだろう。すべての歴史、すべての詩は、この種の格率にあふれている。」そしてディドロは、この文章のどこにも、「すべての歴史家」、「すべての詩人」に「天才が欠如している」という主張は含まれていない、と反論する。誰も、ラ・ブリュイエールやラ・ロシュフーコー以上に「すぐれた思想」や「きわだった文句」を書いたひとはいないが、いったい彼ら2人に天才が欠けていたのだろうか。なるほど、「天才には、しばしばむらがある」。だが、この非難者に、「ほんの少しの正しい判断と反省」があれば、セネカが語っていないことを、彼に非難することはできないはずだ、とディドロは結論している²⁾。

第2、「作品の効果は、表現と、特に構成に大きく左右される」とのべて、暗にセネカの著作中の表現の欠陥と構成の欠如とを非難する意見にたいする反論——ディドロは、この意見の原則的正しさを承認するが、同時に、「セネカには、文体と秩序〔構成〕とがある」とはっきり主張する。たとえば、長論文『怒りについて』(そこでは、まず「事物」の定義が与えられ、そのあとに整然たる論述が章を追って展開される)³⁾。

では、流刑地や宮廷の激務の合間に執筆したその他の「即興的作品」はどうか。確かにここには外面にすぐ認められるような「文体」や、「構成」が欠けている。だがディドロは、次のことばによって、この外面的秩序の欠如を補償する内面の秩序——心情と良心の秩序——の存在を確認しているのである⁴⁾。

彼は構成しない。紙の上に精神と魂を流しだす。骨を折って文章に諧調を与えようとはしない。彼は私に徳の実践をすすめる、自分自身にもそれをすすめる。心の奥底を探り、自分自身を容赦しない。敵の批判も、彼が自分自身にたいしてくだす批判ほどの厳しさをもってい

1) CN, t. II, pp. 41-42; HN, t. II, p. 30; AT, pp. 224-225.

2) CN, t. II, pp. 45-46; HN, t. II, pp. 32-33; AT, pp. 226-227.

3) CN, t. II, pp. 46-47; HN, t. II, p. 33; AT, p. 227.

4) CN, t. II, p. 47; HN, t. II, pp. 33-34; AT, p. 227.

ないだろう。キリスト教徒も彼以上の厳格さで、自分の良心を調べることはないだろう。

ディドロは、こうして自分の著作を支配する内面的秩序と類似の秩序を、一見無秩序なセネカの作品中にも発見して、彼の作品の文学的価値を擁護している。

第3、デュベロン枢機卿とドリヴェ神父は、「たえずおなじ思想の周辺をぐるぐる廻り、たえずもとの所へひき返すセネカの10ページにくらべると、深い思索にふけるキケロの2ページのほうに、多くの内容が含まれている」と主張しているが、この意見にまったく賛成だという非難にたいする反論——ディドロはまず古代ローマの哲学者について論議する際に、18世紀の文法家ドリヴェ神父（彼にとってセネカの「峻厳な道德」は無縁である）と、16世紀の「宮廷付き神学者」デュ・ペロン枢機卿（彼にとってセネカの「峻厳な道德」は憎むべきものである）とを論拠にするのは見当違いである、と反撃する¹⁾。

ディドロはさらにこう続ける。確かに、「セネカが時としておなじ思想にたち戻る」ことは事実であるが、それはたんなる同一思想の繰り返しを意味するものではない。豊かな表現が、基調となる思想に「微妙なニュアンス」を与え、「繊細な変化」をひきおこす。だからもし、普通の雄弁家、あるいは道德探求者が、セネカのひとつの「断想」とまったくおなじ内容を表現しようとすれば、優に4ページ以上を必要とするのである。しかも、セネカのテキストを喜ぶ読者も、この4ページにはうんざりしてしまうであろう、と²⁾。

(3)セネカは立派な思想家ではなくて、たんなる修辞家にすぎない、という非難にたいする弁護

第1、「セネカは修辞家にすぎない」という非難にたいする反論——ディドロは、『自然の問題』、『恩恵について』、『怒りについて』、およびクインティリアヌスが「すばらしい作品」と評した『書簡集』の著者を、「修辞家」という侮辱的名称で呼ぶことは、「きびしすぎる」と反論する³⁾。

彼は続けて、これほどうぬぼれた調子でセネカを断罪しようとする人間は、その前にまず、自分の雄弁と哲学の能力を証明しておくべきだという。いずれにせよ、いかなるひと（たとえ、フェヌロン、ラシーヌ、ヴォルテールの才能をもつひとでも）、他人にたいして「穏和な調子」を捨てる権利をもっていないのだ⁴⁾。

第2、「セネカの著作を支配している、きらきら輝きたい〔人目をひきたい〕という欲望は、哲学者よりもむしろ修辞家の特徴を示している」という非難にたいする反論——これにたいしてディドロはまず、「哲学者」と「修辞家」の定義を与えることによって反撃しようとする。「哲学者」の役目は次のように規定される⁵⁾。

深く考えぬくこと、明晰、簡潔、正確に自分の考えを表現すること、あらゆる所で同一の

1) CN, t. II, p. 48; HN, t. II, p. 34; AT, pp. 227-228.

2) *Ibid.*

3) CN, t. II, p. 49; HN, t. II, p. 35; AT, pp. 228-229.

4) *Ibid.*

5) CN, t. II, p. 54; HN, t. II, p. 38; AT, p. 231.

原則に基づいて論証すること、真理にたいする不変の愛と、善、美、礼儀、誠実にたいする不変の好みとをたえず示し続けること。

したがってセネカは当然「哲学者」に属する。他方、「修辞家」の役割は、次のようなものである¹⁾。

修辞家にとっては、歪曲しえない真理もなければ、美化しえない虚偽もない。

だからセネカは決して「修辞家」ではない。では、彼の文体の特徴はなにか。ディドロによれば、「セネカは熱烈な魂と、高貴な性格にまかせて語る」という。だから、非難者がとがめるように、セネカの文体が「きらきら輝」いているとしても、それは、ダイヤモンドがきらきら輝くのとおなじく、彼自身の天性に属している。天性はとがめることができない（「ひと目をひくような気どりがあふ、といて彼を非難するのは、燕にむかって、そんなにすいすい空を飛ぶのはけしからん、といて叱りつけるようなものだ」²⁾）。

第3、「セネカの致命的な欠点は、観念の微妙な表現によって、扱っている主題の重要性をほとんど常に弱めてしまうことだ」という非難にたいする反論——ディドロは、上の非難をセネカにあびせかける批評家が多いが、誰ひとりその証拠をあげた者はいない、とまず反撃する。これと同様の非難は、「崇高なコルネーユ」と「深遠な大法官ベーコン」にたいしても今までたえず加えられ続けてきた。だが、この種の非難は、結局どういう意味をもちうるであろうか。それは、コルネーユもベーコンも、「知性」（正しい思想）と「天才」（微妙な表現）とを兼ねそなえていた、という事実を意味しているにすぎない。ディドロによれば、正しい思想と微妙な表現とを結びつけることは、凡人にはほとんど不可能なのである³⁾。

第4、「哲学者は、悪い作家である権利をもっていない」という非難にたいする反論——ディドロは、この非難の内容を、まず一般的真理として承認するが、他方また、哲学者の文体は雄弁家のそれであってはならない、と主張する。では「哲学者」の文体はどうあるべきか⁴⁾。

彼が関心をもたねばならないのは、表現よりも事物そのものであり、優雅さよりも明晰さであり、諧調よりも正確さである。彼が語りかけるのは、耳にむかってではなくて理性にたいしてである。だから、もしこの種の語り方のほうが、〔耳に語りかける文体よりも〕自己の知識と確信とを、より力強く読者の精神に伝えられると彼が考えるなら、たとえこの語り方が諧調にかけていようとも、彼は躊躇なくこれを選ぶであろう。

1) *Ibid.*

2) *Ibid.*

3) CN, t. II, pp. 50-51; HN, t. II, p. 36; AT, pp. 229-230.

4) CN, t. II, pp. 51-52; HN, t. II, pp. 36-37; AT, p. 230.

ディドロはさらに、皮肉な調子でこう付言する。哲学者は、もちろん悪い作家である権利をもっているのではない。だが、ラテン語の初歩をやっと覚えたばかりで、アウグストゥス時代の純粋ラテン文の伝統につながるセネカの文章を云々し、大胆にも彼の「文体の純粋性」を否認し、断罪しようとする子どもたちの前では、「肩をすくめる権利」をもつ、と¹⁾。

また彼はいう。近代のもっとも洗練された作家ですら、自分が生きている世紀の影響をまぬがれていないのとおなじように、セネカの文章もまた時代の刻印を帯びているのは当然である。だが批評家は、いったいセネカの文中において、「悪いラテン語」(墮落したラテン語)に属する「1行」あるいは「1語」を指摘できるのだろうか。あのエラスムスですら、セネカの文体がキケロのそれと違うことは認めつつも、「しかしだからといってセネカを非難するつもりはない」と確言しているのだから、と²⁾。

(4)セネカは、時代の趣味を墮落させたという非難にたいする弁護

第1、「セネカは、ローマの趣味を墮落させた」という非難にたいする反論——ディドロは、「ちょうどヴォルテールがフランスの趣味を墮落させたように」とここで逆説的に反論している。彼は、同時代の一部の偏狭な批評家の意見に反撃し、ヴォルテールが死んだ時、「文学」は「支柱」を失い、「よい趣味」は「擁護者」を失い、「暴君」と「嘘つき」は「もっとも恐るべき厄介の種」を失ったと語った大衆の意見に賛成しているのである³⁾。

第2、文学を墮落させた人間という点で、「セネカとヴォルテールとの間には、非常な関係がある」という非難にたいする反論——ディドロは、「2人にとってこれほど結構なことではない」と断言する。なぜなら、もし誰かが、このセネカ非難者にむかって、「ヴォルテールとセネカと君との間には、非常な関係がある」といったとすれば、それは非常な賛辞なのだから。だが、彼がそういわれる心配はまったくない、とディドロは皮肉な調子で付け加えている⁴⁾。

(5)「それでは、セネカには欠点がないのか」という反問にたいする弁護

ディドロは、この反問にたいして、「セネカにも、もちろん欠点はある、自分はたえずそれを指摘してきた」と答えている。すなわち、「強く、いきいきとした感じ方のあまり、正確さの限度を越えたところにまで押し流されていってしまう」という欠点である。そしてディドロは、自分が決してセネカの欠点を見逃してはこなかったという事実を、「ある現代の批評家」の次の評言によって傍証しようとしている。「このセネカ弁護者〔ディドロ〕が、ネロの宮廷における哲学者の振舞いにたいして寛容すぎるように見えるにしても、作品の評価にかんしては、誰も彼以上にきびしくすることはできない。」⁵⁾

だからディドロは、誰かが自分のきびしいセネカ批判に反論してくれることを望むと付言している。なぜなら彼は、セネカを「攻撃している時でも、自分が誤っていることを願う」のであるから、

1) CN, t. II, p. 52; HN, t. II, p. 37; AT, p. 230.

2) *Ibid.*

3) CN, t. II, p. 53; HN, t. II, p. 37-38; AT, p. 231.

4) CN, t. II, pp. 53-54; HN, t. II, p. 38; AT, p. 231.

5) CN, t. II, pp. 55-56; HN, t. II, p. 39; AT, p. 232.

文体論と言語論の問題 セネカの作品の文学的価値を擁護しつつ、彼の文体について論じたディドロは、次第にその考察の枠を広げ、やがて、セネカの所説、あるいはセネカの作品そのものとの直接的関連を離れた文体論や言語論の一般的問題にまで論究の対象を拡大していく。以下にその主要論点を検討していこう。

ディドロは、初期の作品『聾啞者にかんする手紙』（1751年）以来、文体の問題にかんして強い関心をもち続けてきたのであったが、『セネカ論』第2版のなかでも、もう一度この主題を取りあげる。彼によれば、文章のなかには、一般に2種類の文体、すなわち2種類の「諧調」を認めることができるという²³。

一方は、表現を巧みに選択し、調和的に配列して、耳を楽しませて喜ぶ。他方は、前者ほどありふれてはいないが、感じやすい魂から生まれ、作家の心が動かされるさまざまな情念につれて、彼の内部におのずから浮かびあがってくる。

前者は、「平穩な物語」に適しており、後者は、「観念、感情、談話」に混乱が生じた場合の表現にふさわしい。ディドロは、あとのほうの文体を、特に、「混乱、あるいは異常をあらわす模倣的文体」と呼ぶ。「模倣的文体」は、「苦悩」を表現する時には、「弱々しく、嘆くような調子」をとり、「怒り」を表現する際には、「激烈な調子」を帯びる。

ディドロは、ウェルギリウス『アエネーイス』のなかから、*«monstrum horrendum, informe, ingens, cum lumen ademptum»*（「恐ろしく、不恰好で、巨大で、そして視力の奪われた怪物」）という一句をとりだして次のようにいう。ここに表現された「混乱あるいは異常をあらわす模倣的文体」は、「長々格」と「省音」とをつみ重ね、その効果によって怪物ポリュペーモスに「並はずれた大きさ」を賦与している。この句は「規格はずれ」であるがゆえにそ、れだけ一層強い美的効果をもつ、と⁸⁹⁾。

ディドロは続いて、作家と批判家に次のように忠告する。「悲惨な時代の歴史」を描く文体と「幸運な時代の歴史」を描く文体とは、決して同一であってはならない。ただ困ったことに、前者、すなわち「耳を喜ばせる」描写の文体には一定の「法則」が存在するが、後者、すなわち「うまく耳に異和感を与える」記述の文体には、「法則」が存在しない。だから、「すぐれた作家」と「すぐれた批判家」は、この異なる文体の相違点を直観的に把握する「二重の感覚」を保持していなければならないのである、と⁴。

1) CN, t.II, p.55; HN, t.II, p.39; AT, p.232.

2) CN, t. II, p. 310; HN, t. II, p. 203; AT, p. 398.

3) CN, t.II, p.311; HN, t.II, p.203; AT, p.398. なお、この句の「長々格」(記号--)と「音」(記号×)をしるせば、次の通りである。mōnstrum hōr-rēndum in-fōrme in-gēns cui|lūmen
a-|dēmtum Virgil, *Aeneid* lib. 3. v. 658.

4) CN, t.II, p.311; HN, t.II, pp.204-205; AT, p.399.

(2)言語論の問題（フランス語を豊穡化する方法）

すでにディドロは、『セネカ論』初版のなかで、セネカのラテン語の貧困化にかんする考察（『ルーキーリウスあての書簡集』第58信）を紹介している。すなわちセネカは次のようにいう。「ラテン語は、洗練されることによって貧困化した。」だが、この「洗練」なるものは、実は「無知と、見せかけの繊細の結果」にすぎない。「無知」が多数の「有用な単語」を廃止してしまい、「見せかけの繊細」が、「響きの悪い、あるいは発音しにくい単語」を追放してしまった、と¹⁾。

初版のディドロは、このいわゆる「洗練」の必然的帰結としての言語の「貧困化」現象を、ラテン語とフランス語において、平行的に追求している。まずラテン語においては、セネカ（前5—後65年）の時代になると、詩人エンニウス（前239—169年）や、悲劇作家アッティウス（前176—85年頃）の表現はすっかり時代遅れになってしまい、ウェルギリウスのそれすらも、古びかけはじめる。同様の現象がフランス語においても生じてくる。すなわち、18世紀になると、ラブレ、モンテニユ、マレルブ、レニエのことばは、もはや使用されなくなってしまうのである²⁾。

では、フランス語の「貧困化」の傾向をくいとめ、逆にそれを豊穡化するためにはどうすればよいだろうか。ディドロは『セネカ論』第2版において、次の方策を提唱している³⁾。

もしある単語が、現在フランス語で使われていなくても、それが想像力をかきたてる力をもち、耳に快よければ、思いきって使ってみるべきだと思う。〔……〕諸言語は、原初の貧しさから逃れる時に通ったのと、まったくおなじ道をたどって、いつまでも豊かになり続けていくべきではないのか。

ディドロにおいては、言語がもつ、観念の伝達力だけが問題なのではない。イメージの喚起力、音楽性をも同時に包含した、全体的エネルギーが常に評価されるべきなのであった⁴⁾。

1) CN, t. II, p. 69; HN, t. II, p. 48; AT, p. 240.

2) *Ibid.*

3) CN, t. II, p. 291; HN, t. II, p. 191; AT, p. 384. ディドロはすでに『聾啞者にかんする手紙』のなかで、「原始時代の粗野な表現法の痕跡をほとんどとめていない」、「もっとも洗練された、もっとも正確な、もっとも称賛すべき」フランス語は、「明晰、判明、簡潔」を獲得したが、その代償として、原始言語のもっていた「熱気、雄弁、エネルギー」を喪失してしまったという事実を確認している。彼はそこで、失われたフランス語の豊穡さを詩のなかで回復するための方法を、文体論的に考察したのであった。（中川「十八世紀フランスの言語論——コンディヤック、ディドロ、ルソー」、『思想』1972年2月号 p. 206.）

4) ディドロ自身は、「貧困化」と同義の「洗練」には反対であって、たとえ一般には「廃用」された語であっても、それが表現にみちている限り、使用することを躊躇しない。たとえば『セネカ論』初版中の次の2語がディドロが復活した廃用語の実例である。

déssouci —— 用例 «Dans la treizième [lettre à Lucilius] du courage que donne la vertu, & du déssouci de l'avenir.» [「第13信、徳と、未来をくよくよ気にせぬことが写える勇氣について」] S, p. 282; CN, t. II, p. 15; HN, t. II, p. 12; AT, p. 208.

exangue —— 用例 «Si tu crains d'être un poète exangue, un diseur de puerilités sonores, [...] lis Sénèque.» [「もし君が血の気のない詩人、耳に快よいだけのたわごとを上手に口にする人間になることが心配なら、〔……〕セネカを読みたまえ。』] S, p. 292; CN, t. II, pp. 27-28; HN, t. II, pp. 20-21; AT, p. 216.

『自然の問題』とディドロ晩年の自然科学方法論 ディドロは、『セネカ論』初版のなかでは、セネカの『自然の問題』にかんして、わずか1ページの説明を与えていただけであった（しかも、その大部分は、ラ・グランジュ訳の冒頭に、ネジョンがつけた解説の再録である）¹⁾。

これに反して『セネカ論』第2版では、ディドロは長い付加文を挿入し、そのなかでこの著作を詳しく検討すると同時に、セネカの思索に触発された彼自身の最晩年の自然科学方法論をかなりまとめた形で展開している。

(1)セネカ『自然の問題』にかんする考察

『自然の問題』は、次のように広汎な問題を取り扱っている（主題の広汎さという点では、『ルーキーリウスあての書簡集』に比肩される）。「若干の隕石、虹、幻日、幻月、鏡、天空、星、気圏、大地、空気、雷鳴、稲妻、落雷、流星、腸占い、水、雨、雪、雹、海、大河、小川、湖、泉、沼、温泉、蒸気、雲、鬼火、洪水、ナイル河、風、地震、火山、彗星。」セネカは、これらの現象のひとつひとつを取りあげ、さまざまな哲学者たちの意見の是非を逐一検討したうえで、自分の「推測」を提出しているのである²⁾。

しかし、ディドロによれば、この著作の特色は、むしろ次の点にある、という³⁾。

時々、道徳探求者が自然学者の役割を中断し、自然の光景が、ストア派哲学者を好みの問題、すなわち人間の義務の問題に連れもどす。

セネカにおいては、すべての自然現象が、人間の生き方との関連において考察されている。たとえばセネカはいう。「夜になって鳥がかーかーと鳴き、梟がほーほーと鳴いたからといって、不幸の前兆ではない。ちょうど、ひばりや夜鳴き鶯の歌が幸福な出来事を予告していないのとおなじことだ。しかし、鳥や梟の声は不気味だから、われわれは希望ではなくて、恐怖を感じてしまうのだ」

しかし、『セネカ論』初版における、ディドロのこの種の単語の使用は、たちまち当時の批評家の反感をそそり、たとえば『ジュルナル・ド・パリ』（1779年1月9日号）は、「『セネカ論』初版の」著者は新しい表現を勝手につくりだした」といって非難する。BR, t. XII, p. 110, note (1)

これに答えるために、ディドロは『セネカ論』第2版のなかに、早速友人マルモンテルの反論を収録している。——このディドロ擁護者という。ディドロが「勝手につくりだした」単語と非難されているものは、実はフランス語の「古語」にすぎない。古語か新語かは問題ではない。たとえば、「人生をくよくよ気にせぬこと」(«le désœuvrement de la vie»),あるいは「文体の気品のなさ」(«l'inelegantie du style»)という単語が廃用されたためにフランス語が「貧困化」したのなら、この2語を復活すべきだ。また、モンテーニュが好んだ「血の気のない」(«exangué»)という語が「エネルギー」にみちているなら、もう一度改めて使ってみるべきだ。あの「よい趣味の持主」ヴォルテールですら、この「血の気のない」という形容詞を『アカデミ辞書』に採録することを提案したのであるから、と。CN, t. II, p. 291; HN, t. II, p. 191; AT, p. 384.

- 1) ネジョンは、彼の解説のなかで次のようにいう。『自然の問題』には、「さまざまなジャンルのきわめて膨大な知識」、「自然史」上の「不思議な事実」、「若干の現象の原因」にかんする「新見解」などが盛りこまれている。道徳論の作品の場合とおなじく、ここでもまたセネカは「精妙で繊細な観念」と「大胆で輝かしき知性のひらめき」を表現している、と。S, p. 484; CN, t. II, pp. 254-255; HN, t. II, pp. 166-167; AT, pp. 358-359.

- 2) CN, t. II, p. 255; HN, t. II, p. 167; AT, p. 359.

- 3) Ibid.

と¹⁾。

この断想を読みながら、ディドロの意識もまた、自然の問題から道徳の問題へと向かっていき、ここにディドロ自身の自己対話がはじまる。——彼は問う。鳥の声をききながらわれわれが恐怖を感じるのはなぜか、と。彼は答える。それは、人生が幸福よりも不幸にみちているからではないのか。それは、不幸の恐怖と記憶が、幸福の魅力と記憶よりも、はげしく、持続的だからではないのか、と。だが、すぐに彼は反問する。人間は、果たして不幸を恐れているのであろうか。なぜなら、人間は「きわめてつまらぬ享楽」を求めて、危険や労苦のまっただなかにとびこんで行くのであるから。人間の想像力は、絶えず幸福を誇大視し、逆に不幸を過小評価している。だから人間は、不幸を無視して、ひたすら幸福だけを追求しようとする存在なのではないか、と。こうしてディドロは、セネカの意見に触発されつつ、いつしか無限の自問自答のうちにはいりこんでいく²⁾。

『自然の問題』中のセネカの意見に触発されてはじまる、ディドロの自己対話の例をもうひとつあげよう。——ディドロは、セネカがルーキウスに、ある「危険な実験」にかんする説明を与えながら、「あなたの最下等の奴隷しか、この実験に使用してはならない」と書いているのを発見する（『自然の問題』は、ルーキウスに献呈された作品である）。その時、ディドロの内部に、あの虐げられた人間への「同情」(<compassion>)がわきおこる（本論第二部、第三章、Iの「弱者との同一化」の項参照）。怒りの激発にかられて、セネカにむかって叫ぶ。「まるで人間ではないかのように奴隷を扱うとは。好奇心の満足のために、まるで同胞を生贄にすることが許されているかのように振舞うとは」と³⁾。

そしてディドロは、このあとに16世紀の人文主義者ミュレが、病院に入院していた時の体験談をつけ加えている。——寝台に横たわっているミュレの傍で、危険な手術をある病人に実施すべきかどうかを医師たちがひそひそと話しあっている。やがて、そのうちのひとりがこう提案する。「とにかくあのいやしい男に実験してみよう」と。ミュレの口から、次の声がほとばしり出たのは、それと同時にあった。「それでは人間が、まるでいやしい存在のようではないか。キリストはこの人間の救いのために、自らが死ぬことをいとわなかったというのに。」医師たちは即座にこの危険な手術を思いとどまり、問題の患者はそのまま治った、という⁴⁾。

ここから再びディドロの自問自答がはじまる。——彼は問う。人間の生命の尊厳を断固として主張したこのミュレの逸話は、果たしてわれわれのいわゆる「歴史」の書物に記録されているであろうか、と。彼は、否と答える。そして次のように慨嘆する⁵⁾。

なんということだ。誰もが、カエサルとポンペイウスの歴史を、これからもたえ間なく書

1) CN, t. II, p. 259; HN, t. II, pp. 169–170; AT, p. 361.

2) CN, t. II, p. 259; HN, t. II, p. 170; AT, p. 361.

3) CN, t. II, pp. 260–261; HN, t. II, p. 171; AT, p. 362.

4) CN, t. II, p. 261; HN, t. II, p. 171; AT, p. 362. ブリュールによれば、この手術は、実はミュレ自身に実施されかけたものであって、彼は、驚きのあまり翌日、病気が治ったという。BR, t. XII, p. 74, note 2.

5) *Ibid.*

き続けていくであろう。彼ら2人こそ、諸国民の虐殺者だったというのに。そして、誰ひとり、ミュレのような人物のエネルギーにあふれた、信心深いことばを記録しようとしないうであろう。彼こそひとりの人間の命を救った人物であったというのに。

ここに、ディドロの「歴史」観が明瞭に表現されている。彼にとっては、「歴史」はたんなる征服者の事蹟の記録でもなければ、いわんや人間の悪行の羅列でもなかった。それは、人間の平等と人格の尊厳を信じて行動する善なる人間たちの徳の顕彰碑でなければならなかったのである。かつて、『ブーガンヴィル航海記補遺』（1772年）のなかで、ブーガンヴィルに指揮されたフランス探検隊のタヒチ島侵略を告発し、また、その後レナルの『両インド史』の改訂に協力してヨーロッパ諸国の植民地拡張政策を弾劾したディドロは、したがってセネカの次のことばに全面的に賛成する¹⁾。

人類がまだ航海できない海域が存在しているおかげで、戦争の半分为防止されている。
われわれは波濤を越えて、掠奪すべき新世界の発見に出かけていく。

そしてディドロは、こう付言する。「セネカの時代にこの反省は真実であったが、今日ではそれは誰の目にも明白な事実になっている。」「近代人の新世界発見の先駆者たちの名誉をたたえる、なんと美事なことばだろう。」²⁾ このようにして、ディドロもまた、絶えず彼の「好みの問題、すなわち人間の義務の問題」に立ちかえるのである。

(2)ディドロ晩年の自然科学方法論

『自然の問題』はまた、『セネカ論』第2版のディドロにたいして、彼の最晩年期の自然科学方法論を展開する機縁を提供することになった³⁾。

まず彼は、セネカの「自然学」、すなわち『自然の問題』を読んだ第一印象として、次の事実を確認する。「合理自然学」（思弁的自然学）は、「実験自然学」の確立に先だって、すでにセネカの時代に飛躍的な成果をあげている。ただ「合理自然学」は、古代ローマにおいてのみならず、18世紀ヨーロッパにおいてもまた、いまだに「事実」の裏づけを欠いている。「実験自然学」の発展をまって、はじめてわれわれは2000年後に「合理自然学」が必要とするすべての「必要な事実」を収集しておえて、後者に「堅固な基礎」を与えうることになるのだ、と⁴⁾。

1) CN, t. II, pp. 261-262; HN, t. II, p. 171; AT, p. 363.

2) *Ibid.*

3) ディドロにおける自然科学の認識を実証的に跡づけた、唯一の基礎的研究である次の本は、奇妙なことに『セネカ論』第2版中の自然科学方法論には全然言及していない。Jean MAYER, *Diderot, homme de science*, Imprimerie Bretonne, 1959. なおこの書は、『セネカ論』にかんしてはこうのべているだけである。「〔この作品は〕セネカがはたした、家庭教師の職務を検討し、〔ネロの〕教育と〔彼の〕天性との葛藤において、教師〔セネカ〕がはたした責任を高く評価している。」*Ibid.*, p. 388.

4) CN, t. II, p. 256; HN, t. II, p. 168; AT, p. 359. 「合理自然学」（「合理哲学」）と「実験自然学」（「実験哲学」）とを対比する考えは、すでに『自然の解釈について』（初版1753年、第2版1754年）のなかにあらわれている。彼はそこで、思弁的な自然学である「幾何学」の発展は、「科学における大革命の

では、「実験自然学」を発展させるために、どのようにすべきか。ディドロはここで、次の3段階からなる「実験自然学」方法論の確立を提案する。

第1, 「観測」(「予備的作業」)——「諸現象を観測し、記述し、記録すること。」この手続きにできるだけ多くの時間をさき, 「さまざまな現象を相互にへだてている空隙」を完全にうずめつくさねばならない¹⁾。

第2, 「仮説」の定立——諸現象の間に, 「原因」と, それから生みだされた「結果」とをまず区別すること。ついで, 次のようにして「仮説」を定立すること²⁾。

各原因の周囲に, それに付随しておこる数多くの結果をひとまとめにしなければならない。
〔因果関係の〕これらの系は, 最初は相互に孤立している。だが各系はそれぞれ次第に拡大していった, やがて相互に融合してしまい, 最後には, 多数の原因のなかから, ただひとつの原因しか残らなくなる。〔……〕自然学の進歩は, 原因の数をふやして, 結果の数をへらすことにある。

第3, 「仮説」の検証——「実験によって仮説を否定したり, 確認したりする」こと。ついで「この検証作業の結果を報告する」こと³⁾。

ただしディドロは, 厳密な観測に基づいて立てられた「仮説」と, たんなる思いつきにすぎない「幻想」とは, はっきり区別すべきである, と強調する。なぜなら, 解明すべき問題は自然学者の「頭のなかで起こっていること」なのではなくて, 「自然のなかで起こっていること」なのであるから⁴⁾。

自然の沈黙を, 類推や推測によって埋めあわせるのは, 夢をみること, もしよければ, じょうずに, 立派に夢をみることだといってもよい。しかし, いずれにせよ, 夢をみていることには変わりがない。天才が1度正しい考えに出あうとすると, それにたいして100度の割合で彼は誤りを犯すだろう。魅惑的な大ぼらにみちた何巻もの本の間に, たった1行だけ, 真実を書きこむだろう。

だからディドロは, 「類推」や「推測」を捨てて, ただひたすら「観察」に専心することを自然

時期」, すなわち18世紀に停止し, そのあとには, 「実験自然学」の進歩の時代が続くであろうと指摘している。『セネカ論』第2版のディドロの上記の主張は, 『自然の解釈について』のなかで表明された意見に, 直ちに接続する。 OPH, pp.180-181.

1) CN, t.II, p.256; HN, t.II, p.168; AT, p.359. しかしディドロは, 同時に, 「諸現象の完全な収集」の困難さを自覚している。なぜなら, 「もっとも重要」で「もっとも意味のある」「事実」は, 次の2つの理由によって, 常にわれわれの認識を逃れていくだろうからである。第1, 人間の「感覚器官の弱さ」, 第2, 「観測器具の不完全さ」。 CN, t.II, p.258; HN, t.II, p.169; AT, p.360.

2) CN, t.II, p.256; HN, t.II, p.168; AT, pp.359-360.

3) CN, t.II, p.257; HN, t.II, p.168; AT, p.360.

4) *Ibid.*

学者にすすめるのである。しかし、このことは自然学者の労苦を軽減することにはならないであろう。むしろ逆である。「よく観察することほど困難なことはない。実験や観察から厳密な結果を引き出すことほど困難なことはない。偏見と速断という、誰もがひっかかる誘惑から身を守ることほど困難なことはない。」¹⁾

ディドロのこの「実験自然学」方法論の基礎には、いうまでもなく彼の自然の統一性にたいする信念が横たわっている。彼は青年期に早くもこの確信に到達しており、それを『人間の真価と徳論』の訳注と、ついで『自然の解釈について』のなかですでにはっきりした形で定式化していたのであるが²⁾、それが再びそのままここでとりあげられている。すなわちディドロはいう³⁾。

ただひとつの機械〔「宇宙」〕にかんしては、ただひとつの理論しかありえない。機械が複雑であるだけに、この理論の発見にはいっそう時間がかかるのである。〔……〕もしわれわれが諸現象の完全な収集を完成できれば、もはやただひとつの原因、あるいはただひとつの推測しか存在しえなくなるであろう。〔……〕物質の統一性、あるいは同質性と、現象の多様性とを一致させることがきわめて困難に思えるのは、おそらくわれわれの無知のせいにはすぎないのである。

そしてディドロは、諸現象をつらぬく唯一の統一理論が、上のようにしてえられた時、われわれ

1) CN, t. II, pp. 257-258; HN, t. II, p. 169; AT, p. 360.

2) 『人間の真価と徳論』の訳注は、次のようにいう。「宇宙では、一切が結びついている。この真理は、哲学の歩みの最初の一步であり、しかも巨人の一步であった。『昔の巨匠たち〔エレア学派の哲学者、特にパルメデス〕の知性は、われわれよりもはるかに広大な認識をもっていたし、同時にまた彼らの狭い見聞にもかかわらず、今日のわれわれの頭脳をもってしては洞察不可能であるほど深く、さまざまな事物を理解していたのである。事実彼らは、われわれの頭上と足下にひろがる一切のものを、ひとつの全体として説明した。この全体はただひとつの力、すなわち自然の調和力によって維持されているというのである。だから、諸部分のうちのただの一部分といえども、孤立しては存続しえないし、逆に他の諸部分も、一部分を欠くと、必ず全体の原動力と永続性に損傷を写してしまうのである。』（キケロ『弁論家論』第4巻）近代哲学者のすべての発見は、こぞって上とおなじ命題を確認している。エピクロスも含めて、哲学体系の建設者たちはすべて、世界をひとつの機械とみなしており、隠されたばねを解明せねばならないと考えたのであったが、その際彼らは上の命題を当然の前提として容認していた。自然を深く調べれば調べるほど、そこにはますます多くの結びつきが発見される。われわれがまだこの事実を証明することに成功していないのは、われわれには深い理解力と、〔宇宙の〕多種多様な諸部分と全体の大きさに釣合ったような〔大規模な〕実験が欠けているからなのだ。だが、全体が巨大で、部分の数が無限であるとすれば、その結びつきがしばしば把握できないとして驚くには当たらないだろう。また、この結びつきが把握できないという事実を根拠にして、結びつきが存在しないと結論すべき理由も、存在しないであろう。」 AT, t. I, pp. 26-27, note 1. なお、ディドロが、この自然の統一性の信念を、キケロからえていることに注目すべきである。ヴェントゥリによれば、ディドロはこのキケロのことばを、シャフツベリから引用しているという。（F. VENTURI, *Jeunesse de Diderot*, p. 346, note 11.）

ついでディドロは、これとおなじ自然の統一性の確信を、『自然の解釈について』のなかで次のように表現している。「自然」の「行為」はただひとつの統一ある運動であるにもかかわらず、ひとは常に個別的な現象だけに着目して、あたかもばらばらな事実だけしか宇宙には存在していないように錯覚している。しかしもし「相互に独立した現象」しか宇宙に存在しないのであれば、諸現象をつらねる「一本の連続的な鎖」は断ち切られてしまう。なぜなら、「ただひとつの事実の独立性は、全体という観念と両立せず、全体の観念なしには、哲学は存在しない」からである、と。

3) CN, t. II, p. 258; HN, t. II, p. 169; AT, pp. 360-361.

ははじめて、運動が物質にとって本質的であるかどうか、物質は創造されたものであるかどうか、という諸問題を解決することができるだろう、とのべている。

付記 『自然の解釈について』と『セネカ論』第2版における自然科学方法論の差異 「観測」、「仮説」の定立、検証のための「実験」の3段階からなる『セネカ論』第2版の自然科学方法論は、「観測」、「反省」、「実験」の3段階からなる『自然の解釈』の方法論とそれぞれ段階的に対応している¹⁾。

ただし、この見かけの一致にもかかわらず、ディドロの力点の置き方は、両者において非常に異なっている。なぜなら、『セネカ論』第2版のディドロは、「仮説」定立の段階で「類推」や「推測」を提出することに否定的であるのに反して、『自然の解釈について』の彼は、逆に、「類推」と「推測」の重要性を強調しているからである。すなわち、この初期作品において彼はいう。「自然の観測者」は、「自然の解釈者」にまで高まり、大胆な「推測」を提出しなければならない（「類推」は、「推測」のなかに含まれている）。「自然の解釈者」は、感覚器官と観測器具とが、自然の観察者を見捨てた地点から出発する。彼は存在しているものから、存在すべきものを推測する。彼は事物の秩序から、抽象的、一般的結論をひきだす。この結論は、彼にとっては感覚的、個別的真理同様の明白さをもっているのである。そして彼は、秩序の本質にまで高まる。」

ディドロの晩年に、なぜ「推測」から「事実」への力点の転換が生じたのであろうか。歴史的「事実」への興味は、彼の内部で「類推」や「推測」への関心を薄れさせたのであろうか。

ディドロの晩年の医学と医学教育への関心 ディドロは、青年時代以来、生物学、特に医学と、医学教育とに一貫した関心をもち続けていた²⁾。彼のこの問題への関心は、『セネカ論』初版では、ほとんど表現されていないのであるが、第2版になると、それは(1)ペリル『外科学史』への言及、(2)医学教育における死体解剖の必要性の強調という形であらわされている。

(1)ペリル『外科学史』への言及

晩年のディドロは、特に生理学、心理学、道德論、存在論を統合した一種の人間学——ネジョンのことばを借りれば「新しい人間理論、あるいはむしろ自然的・実験的人間史」——を建設しようという意図のもとに模索を続けていたのであった（その成果は、今日未完のノート『生理学の基礎』、

- 1) 『自然の解釈について』のなかでディドロはいう。「われわれは、3つの重要な手段をもっている。すなわち、自然の観察、反省、および実験である。観察は事実を集め、反省は事実を組合せ、実験はその組合せを検証する。」OPH, p.189.
- 2) ディドロが、医学と医学教育にたいしていただいていた関心の強さは、彼の次の翻訳と著書を想起するだけで充分であろう。——『内科学、外科学、解剖学、化学、薬学、植物学、博物学などの総合辞典。序論——内科学の起源と進歩にかんする歴史的考察。ジェイムズ氏著、ディドロ、エドゥ、トゥサン氏訳、パリ大学医学部長・博士ジュリアン・ビュソン校閲・訂正・増補』、1746—1748年、6巻。『盲人書簡』1749年。『外科医でも内科医でもない熱心な市民から、サンコーム〔外科学校〕元教授、王立科学アカデミ会員、外科学アカデミ会員、外科学修士D.M.〔ド・モラン〕氏にあてた第1の手紙。内科学と外科学とを多年にわたって離反させている紛争を鎮静させる手段を提案する』1748年12月16日（日付はロトの推定にしたがう）。『百科全書』中の生物学、医学項目の執筆と編集。また、次の諸著作にも、生理学、医学、解剖学への言及がある。——『自然の解釈について』初版1753年、第2版1754年。『ディドロとダランベールとの討話』3部作、1769年。『エカテリーナ2世との討話』1773年。『エルヴェシウス著「人間論」にたいする逐条的反駁』1774年。『オランダ旅行記』1774—1775年。『ロシア政府のための大学計画案』1775年。『生理学の基礎』1785—1782年（マイエールの推定）など。

あるいは断想集『両親と教育』などの形で残されている)。¹⁾ その過程で彼は、多数の生理学、医学関係の書物に目を通しており²⁾、なかでもペリル『外科学史』³⁾ (正式題名『古代の内科学・外科学の歴史』) 第2巻に非常に強い関心を示している。特に、彼は『セネカ論』第2版執筆中の1780年には、ピエール・ルソーが編集する『百科評論』のために、書評『ペリル氏の外科学史について』を執筆しており⁴⁾、そのために同書へのディドロの関心は、そのまま『セネカ論』第2版にも反映している。以下に、その点を調べてみよう。

セネカの持病——ディドロは『セネカ論』初版のなかで、セネカの持病である <susprium> という病気について語り、この病気は、「喘息」(<asthme>), 「息切れ」, 「動悸」の3症状からなる、と規定していた。セネカ自身は、『ルーキーリウスあての書簡集』(第54信)において、「suspriumの時間は短い。発作が1時間以上続くことは、ほとんどないが、暴風雨に似ている。私が苦しんでいるすべての病気のなかで、これが一番厄介なものだった」と書いている⁵⁾。

この初版の記述にたいして、ディドロは第2版のなかではペリルの本に基づいて注釈をつけ、「susprium は喘息 (asthme) ではない」と断定している。その理由は、セネカの持病がもし「喘息」そのものであれば、彼は当然ギリシア語の <asthma> という名称を使用したはずであり、した

1) 『生理学の基礎』には次の2系統のテキストが存在する。AT: *Eléments de physiologie*, AT, t.IX, pp.235-440. EP: *Eléments de physiologie*, éd. par J. Mayer, Marcel Didier, 1964 (レヴァンテール版『ディドロ全集』第13巻 EP を収録している。)

AT 版はレニングラッドのエルミタージュ博物館蔵の写稿に基づいて、レオン・ゴダールが作製した写稿を底本とし、EP 版は、パリ国立図書館蔵のヴァンドゥル原稿群の写稿を底本としている。両版本間にはかなりの異同があるが、EP 版が、より完成した段階を示している。なお、AT 版末尾の「雑録」(<mélanges>) は、EP 版に欠如している。

『両親と教育』 INV, pp.192-235.

2) ディドロが1778年(あるいは1779年)に作製した生理学、医学関係の読書計画表が残されており、そこには次のような著者の作品があげられている。——Cullen d'Edinbourg, Bonnet, Barthis, Zimmerman, Whity, Haller, Fontana, Le Camus, La Chambre, Heister, Sthall, Bordeaux, Rousset, Marat, Helvétius, La Mettrie, Spigelius. なお、この計画表には、後述するペリル『外科学史』は含まれていない。Jean MAYER, *Diderot, homme de science*, Imprimerie Bretonne, 1959, pp.275-276; EP, pp. xiii-xiv.

3) Bernard PEYRILHE, *Histoire de la chirurgie*, 1780, t.II, in-4°. Paris, Imprimerie royale. 第1巻, 1774年)の著者は Dujardins である。

4) ディドロによる <Sur l'Histoire de la chirurgie par M. Peyrilhe>, 1780年, の原稿の送り状が今日残されているが、ロトは、この手紙の送り先にかんして、こう注記している。「A. バブロンは、『文芸通信』とグリムが宛先だと誤解していた。ただし、この『雑誌』の編集者は、ディドロのテキストに『やすりをかける』能力があると考えられている点に注意を払っておこう。」CORR, t.XV, pp.198-199, note 2. ロトは、慎重にそれ以上の推測をさけているが、レヴァンテール版編集者は、この手紙の受取人がピエール・ルソーであり、ディドロの書評はルソーの『百科評論』1781年8月15日号と、9月1日号とに分載されたことを明らかにしている。なお、ディドロの原稿はルソーによって完全に手をいれられ、「これがディドロのテキストであるとはいえないほど」であるという。L, t.XIII, p.54.

ディドロは、この書評のなかで、なぜ自分が、医学をこれ程重視するかという理由を明らかにしている。それは彼が、「医学なしには、正しい哲学はありえない」という確信を抱いていたからである。すなわち彼はいう。「思弁の哲学者たちが、今までにもし、医学の研究から、さまざまな事実の認識をひきだしていたならば、彼らは真理の探求において、もっと速い、もっと確実な足どりで先へ進んでいたことだろう。というのは、これらの予測不可能な事実だけが、形而上学的推論の正否を確定しうるからである。医学者が肉体の本性にかんして語ってきたことを、もしこれらの哲学者が知らなければ、彼らは魂の本性にかんしても、今後どれほど多くの特異な事実を知らずにすごすことだろう。」AT, t.IX, p.472.

5) S, pp.11-12; CN, t.I, p.16; HN, t.I, pp.14-15; AT, p.19.

がってそれは、*<suspirium>* とは別の病気に違いない、というのである¹⁾。

このおなじ注は、ペリルの本に記録されている次の逸話を紹介している。「医師アンティルスは、散歩が頭と眼の病気に特効があると信じていたが、彼の伝えるところによると、セネカは持病の肺炎に、いつもこの治療法を用いていたという。」

ローマにおける無料施療院の有無——ディドロは、『セネカ論』初版のなかで、クラウディウスの次の事蹟を紹介している。すなわち、この皇帝は治世の後期に、「病気の奴隷」が主人に遺棄された場合は彼を解放すべきであり、また彼が主人に殺された場合は主人を「殺人犯」として処罰すべきであるという勅令を発布したのである²⁾。

ディドロは、第2版では、ペリル『外科学史』に基づいて、この箇所に次のような注を付記している。すなわち、クラウディウスの上記勅令から推定できるのは、当時のローマには「貧民のための無料施療院」は存在していなかったということであると。なぜなら、もし無料の治療施設が存在していれば、病気の奴隷をかかえた主人は、自分の労働力を失うことを恐れて、必ず彼らを治療せよと違いないから、と（紀元400年に、あるローマ婦人が施療院をつくったという記録が残されているが、彼女の死とともに、この施設は消滅したという）。³⁾

授乳期の女性が、夫と性的交渉をもつことの有害性の有無——ディドロは、『セネカ論』第2版の注のなかで、ペリルに依拠しつつ、こうのべている。「古今の幾人かの医師が主張するところによれば、夫婦間の義務〔性的交渉〕は、母親としての務め〔授乳〕と立派に両立しうるし、また母体が妊娠しても、そのことは決して母乳の量にも質にも悪い影響を及ぼさない、という。」⁴⁾

ディドロはここで、新生児はすぐに母親から引き離し、乳母の乳で養育されるべきであり、またもし母親自身が授乳する場合には、夫婦関係を慎むべきであるとする貴族とブルジョワの偏見を打破しようと試みている。しかし彼は、なによりも授乳期の女性の性的交渉の有害性の有無を、「実験」の積み重ねによって、実証的に究明せよと主張している。「人口〔の増殖〕と、よい風儀のためにこれほど重要な研究は、わが国の学会のどれかによって提案されるに値いするであろう。」⁵⁾

1) CN, t.I, p.285, note (136); HN, t.I, p.187, note (136); AT, p.19, note 2.

2) S, pp.41-42; CN, t.I, p.38; HN, t.I, p.28; AT, p.35.

3) CN, t.I, pp.291-292, note (63d); HN, t.I, p.195, note (63d); AT, p.35, note 1.

4) CN, t.I, p.310, note (191p); HN, t.I, p.215, note (191p); AT, pp.95-96, note 2. なお、この注は、『セネカ論』第2版本文中に挿入された、ルソー批判のテキストにつけられたものであるが、ディドロはそこで『エミール』第1編におけるルソーの2つの主張（産衣は新生児の体をしめつけるから、禁止すること、母親は自ら新生児に授乳すること）は、決して彼の独創ではないと示唆している。CN, t.I, p.133; HN, t.I, p.89; AT, pp.95-96. J.-J. ROUSSEAU, *Œuvres complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, t.IV, pp.253-254; pp.256-257. ただし、マイエールは、この種の問題における、ディドロの先駆者のひとりとして、ルソーをあげている。MAYER, *op. cit.*, p.399.

5) ディドロにとって、国家の繁栄の第1の指標は「人口」の増加であった。たとえば、『ブーガンヴィル航海記録補遺』参照 (OPH, p.485 et suiv.; p.490)。

妻が授乳している間に、夫婦関係を禁止された夫が浮気をするという現象は、『世論の一貫性の欠如について』のなかで、ディドロの文学的主題のひとつになっている。——「彼女〔デロッシュ夫人〕は、子どもはどうしても自分の母乳で育てたいと思った。情熱的な気質をもち、この種の節制には耐えられないように生まれついた青年には、これは長い、危険な期間だった。デロッシュ夫人が勤め〔授乳〕を果している間、夫は社交界に出入りした。そしてある日不幸にもひとりの魅惑的な、技巧的な女に出合い[……]」AT, t.V, p.344; OR, p.822. ディークマンによれば、これはディドロの体験の投影である、という。

（ディドロは、ベリルに依拠しながら、ヒポクラテスの注釈家マルティアヌスの意見を引用して、動物の雌では授乳と交尾とが両立する、という事実に注意を喚起している。）⁴¹

ティベリウスの接吻禁止令の解釈——ディドロは『セネカ論』初版の注のなかで、ティベリウスが「勅令」を發布して、「市民間の日常的な友情の表現」すなわち接吻を禁止していたことにふれ、この「勅令」を、皇帝の「猜疑心にみちた不安」からでたものであると解釈していたのであった⁴²（なおネジョンは、これに注記して、スエトニウス『12皇帝列伝』を典拠としてあげている⁴³）。

しかし、第2版のディドロは、ベリルを読んで初版の解釈が誤っていたことに気づき、次の注を付加している。「私はこの勅令を、〔初版において〕公共の自由の再度の侵害とみなしていたのであったが、その後、外科学史の著者によって、実はそれが、伝染病の蔓延を防止するための、きわめて賢明な治安命令にほかならなかったという事実を教えられた。」⁴⁴

ローマにおける外科手術の進歩の原因——ディドロは、『セネカ論』初版のなかで、ローマ人の「生命の軽視」に言及し、この精神は、闘技場の血みどろの決闘の見物によって生みだされたのではあるまいか、と自問している（ローマ人は、この種の見せ物によって、「残酷な魂」をもつにいたったのだろうか、それとも剣闘士が、優雅に、作法どおりに死んでいくのを見なれたために、死の苦痛を無視することを覚えたのだろうか、と）。⁴⁵

ディドロは、第2版のなかで、上の説明に注記して、この「生命の軽視」こそが、ローマの外科手術の進歩の原因であると推測している。すなわち、「剣闘士、軍人、将軍、哲学者」たちが、ローマ人の心に「生命、苦痛、死にたいする軽視」の念をふきこんだので、当時の外科医は、手術に失敗して患者を死に追いやることを恐れなくなり、その結果、18世紀の外科医がとうていメスをいれる勇気のない「内臓」にまで手術を実施したのだという（子宮切開、肝臓切開、腎臓切断、あるいはこれらの器官の火による焼き切り）。ディドロは最後に、「治療の技術が進むにつれて、技術は臆病になってきたように思える」と結論している⁴⁶。

D. DIDEROT, *Supplément au Voyage de Bougainville*, éd. par H. Dieckmann, Droz, 1955, p.cxvii.

- 1) 母親が直接授乳すべきかどうかという問題にかんするディドロの基本的見解は、『生理学の基礎』の「雑録」中に次のように明確な形で表明されている。「授乳しないこと、すなわち授乳を抑制することは、他の一切の分泌作用の抑制とおなじように、不都合な結果を生む。〔乳は〕血液中に逆流し、血液を熱し、濃密にする。〔授乳の抑制によって〕体液の変質、〔乳腺の〕閉塞、発疹、丹毒、膿瘍、硬性癌、癌〔などが発生する〕。〔授乳期は〕子宮の休息〔が必要である〕。子宮を休息させておかないと、生殖に関係する諸器官が疲労し、活力が失われてしまう。水分を十分に含んだ母乳は、子どもの体を根本から清める。」AT, t.IX, pp.439-440.

ただし、母親が授乳期間中に性的関係をもつことにかんしては、ディドロは否定的立場（『生理学の基礎』）、ないし断定保留の立場（『セネカ論』第2版）をとっており、その最終的結論は、将来の実証的研究に委ねようと考えている。

- 2) CN, t.I, p.329, note (309h); HN, t.I, p.235, note (309h); AT, p.145, note 1.
3) CN, t.I, p.329, note (*); HN, t.I, p.235, note (*); AT, p.145, note *. Suétone, *Vies des douze Césars*, livre III, chap. 34.
4) CN, t.I, p.329, note (309i); HN, t.I, p.235, note (309i); AT, p.145, note de Diderot.
5) S, p.320; CN, t.II, p.79; HN, t.II, p.55; AT, p.246.
6) CN, t.II, p.328, note (18c); HN, t.II, p.216, note (18c); AT, p.246, note 1. ディドロは『生理学の基礎』のなかで、昔の大胆な手術の一例として、ローマの医師ソラスの子宮手術を紹介し、彼の次のことばを引用している。「もし子宮の頸管部が潰瘍をおこし、〔……〕腐敗してくれば、恐れること

ディドロは、ここでは指摘していないが、上の意見は、恐らくペリルからえたものであろう。なぜならそれは、先述したディドロの書評「ペリルの外科学史について」の次の一句に完全に対応しているからである。「誰もが残念がるのが当然だが、いくつかのはげしい治療手段〔危険な手術法〕が忘れさられてしまったために、かつては完全に治癒した病気が今日では不治になってしまった。これは、治療法が完全になるにしたがって風俗が柔弱になり、病人と外科医が柔弱になったことの結果なのだろうか。」¹⁾

(2)死体解剖の必要性の強調

ディドロは、『百科全書』第2巻の項目《死体》(前半の執筆者はトゥサン、後半のそれはダランベール)の付記において、「医学の進歩」のためには、死体解剖が必要であるとはじめて主張したのであるが、彼はそれ以来、機会があるごとにおなじ主張を繰り返してきている²⁾。

『セネカ論』第2版においても、ディドロは再びこの主張を取りあげる。ただ、彼はここでは、まず、「偏見、慣習、風習、あるいは法律そのもの」によって、解剖用の死体の提供が妨げられ、その結果、科学の進歩が足踏みさせられているという慨嘆すべきフランスの現状の検討からは始めている。すなわち、公立医学校、私立医学校は、ともに死体の絶対数が不足している。大病院にたいして、公立医学校だけが遺体を要求しうるが、入手できるのは必要数の30分の1であり、しかもその大部分は「壊血病、潰瘍、膿瘍、その他の伝染病」で汚染されている。他方、私立医学校の生徒は、非合法手段で、すなわち墓掘人に金をやるか、それとも自ら墓地で盗掘するかして、やっと「半ば腐敗した死体」を入手している³⁾。リヨン、ボルドー、モンペリエの状況は、パリよりもっと悪い。ただし、ストラスブールだけが唯一の例外で、そこでは、すべてのブルジョワの死体が無償で解剖学教師の手に渡されているという⁴⁾。

なくその部分を切除せよ。[……] 今までに幾度か、子宮全体を切除したことがあるが、その試みは成功した。」 AT, t. IX, p. 394.

1) AT, t. IX, pp. 393-394.

2) ディドロは、項目《死体》の付記のなかで、死因の確定と、今後の誤診の防止のためには、死体解剖が不可欠である、という。「人類の自己保存と治療の技術とは、きわめて重要な問題である。だから文明の進んだ社会では、僧侶は解剖学者の手からしか、死体を受けとるべきではないであろう。また解剖をすませる前には、死体の埋葬を禁止する法律を制定すべきであろう。」 ENC, t. II, p. 511. ダランベールもまたこの項目のなかで死体解剖の重要性を力説し、「死体は、解剖学を学ぶことができる唯一の書物である」と書いている。

ディドロは上記の項目《死体》とおなじ趣旨の主張を『ロシア政府のための大学計画案』(医学部設立計画)のなかでもう一度とりあげている。すなわち彼は、ロシアに今後建設すべき、7講座からなる新医学部の「第1講座、解剖学と産科学」において、「死体解剖を学習させるべきである」と主張する。「解剖学の教授は、冬季の学期全期間にわたって(時間は充分ある)、死体を眼の前において、この学問のさまざまな分野を実地に教授すべきであろう。」(ディドロによれば、ロシアの冬は寒いから、おなじひとつの死体を用いて、15—20日間、連続的に解剖学の授業を続けることが可能である、という。)また、「第7講座、臨床医学」の教授は、患者が死んだ場合は、いかなる理由、あるいは口実があろうとも、「学生の眼の前で、その患者の死体を解剖せねばならない。」 AT, t. III, p. 438; pp. 500-501; p. 503.

ディドロはまた、たんに医学生のみならず、普通人、特に将来母親となるべき若い娘の一般教養として、解剖学が必要であると考えており、そのことを『エカテリーナ2世との対話』の覚書のなかで説いている。なおディドロ自身、主として性教育のため、娘アンジェリクを解剖学の講座に通わせていた。 DC, pp. 395-397; pp. 385-394.

3) CN, t. II, p. 222; HN, t. II, p. 146; AT, pp. 335-336.

4) CN, t. II, p. 224; HN, t. II, p. 147; AT, pp. 336-337.

ディドロはついで、このフランスの現状と、古代諸国と現代ヨーロッパ諸国のそれとを比較する。まずエジプトでは、死体をミイラにする前に必ず解剖が行なわれた。ギリシアでは死刑囚、スパルタでは奇形児、初期王制下のローマでは遺棄された新世児、罪人、敵の死体がそれぞれ解剖に付された。マルクス＝アウレリウス治下では、従軍医師が死体解剖を許されており、セネカの父の時代には、生者の病気を占う手段として、死者の内臓検査が行なわれていた。現代のスペインやプロイセンでは、必要な死体はすぐ入手できるようになっている¹⁾。

このように、死体解剖にかんする古今の状況を一瞥したあと、ディドロはフランスの状態を次のように嘆いている²⁾。

われわれは文明人だと自称していながら、こんなに大切なことに目をつむっている。それは書物のなかでは学べない学問が、重要であればあるほど、その学問を完成させる手段をいっそう解放し、いっそう増加させねばならないという事実だ。〔……〕私は、皆が声を大にしてこの悪弊に抗議し、それを改めるようにすることを希望する。

そしてディドロは最後に、パリ市内のセーヴル通りに病院を建設した「立派な、尊敬すべき夫人」（ネッケル夫人をさす）に呼びかけ、彼女の善意にもかかわらず命を救うことができなかった「不幸なひとたち」の遺体を解剖用に提供してほしい、と訴えている³⁾。以上が『セネカ論』第2版のなかに表現されたディドロ自身の医学と死体解剖にかんする意見である。

ディドロは先に『セネカ論』初版のなかで、セネカの道徳論を検討した際、このストア哲学者が、「ひとが一生かかって学ばねばならない、幸福になる技術」がまだ究明されていないのに、「道徳」以外の科学・技術の研究（「こんな愚にもつかないこと」）にかかわりあうくらいなら、「いっそなにもしないほうがましではないのか」と主張していたのにたいして、「義務の認識と徳の実践とに直接関係をもたない研究は、なんでも無視しなければならないのだろうか」という疑問を提出していた⁴⁾。しかし、初版のディドロは、まだセネカとの対話の枠をまもっており、彼自身の積極的反論を詳細に展開していなかった。これに反して、第2版では、一挙にディドロ自身の主張——科学・技術の有用性の主張——がセネカとの対話の枠を破って付加されるのである。

まず自己の幸福の確立を願うエピクロスのストア哲学者セネカにとって、自己を幸福にする道、すなわち「道徳」の探求以外は、確かに関心の外にあるであろう。しかし、ディドロにとっては問題は異なる。彼の視野の一方の極には個人の私的幸福の問題が、他方の極に全人類の現在と未来にわたる幸福の問題が、同時に収められており、彼自身は、一方を欠いた他方の幸福は考えることができないのである。

1) CN, t. II, p. 223; HN, t. II, p. 147; AT, p. 336.

2) CN, t. II, p. 224; HN, t. II, p. 147; AT, p. 337.

3) CN, t. II, p. 224; HN, t. II, p. 148; AT, p. 337. この女性がネッケル夫人であることを指摘したのは、ブリエールである。BR, t. XII, p. 37, note (1).

4) S, p. 303; CN, t. II, p. 40; HN, t. II, pp. 28-29; AT, p. 223.

永続する人類という場のなかでしか、自己の幸福を享受することができないディドロにとっては、だから未来のフランス語の豊穡化、本来の人類の健康な生活は、直ちに彼自身の幸福の問題につながっている。なぜなら、もし人類の未来が存続しなければ、自分の生涯の意味づけを、すべて「後世」に託そうとする彼自身の信仰の基礎が崩壊してしまうからである。こうして『セネカ論』第2版は、セネカとの対話から、ディドロの自己主張へと力点を移行させている。

2. 政治的改革への幻滅

隠遁する哲学者 哲学者の使命にかんして、『セネカ論』第2版のなかには、初版の立論と基本的に一致する部分とともに、初版にたいして、根本的な見解の変容を示す箇所が出現してきている。

まず一致する部分から考察していこう。ディドロは、初版のなかで、「賢明で、開明された人間の生活は、真理の探求と徳の実践のためにすごされる」と語っていたのであるが¹⁾、第2版のなかでもまた、「真理の探求と徳の実践とは、哲学の2大目的である」とのべている²⁾。「哲学」こそ、われわれの生活を、認識と実践の両面において導く指針である。だからディドロは、「われわれが生きていられるのは神々のおかげであり、正しく生きていられるのは哲学のおかげである」(『ルーキーリウスあての書簡集』第90信)というセネカのことばを引用して賛意を表明している³⁾。

初版のディドロはまた、暴君の圧制と現実の退廃によって、真理が歪められ、正しく生きることが困難になった場合、「哲学者」(「賢明で開明された人間」)はどうすべきか、と問うていた。沈黙し、現実背をむけるべきか。初版のディドロは、「否」と答え、「哲学」の役目は、なによりもまず、「虚偽を売る占師と虚偽を保護する法官と、哲学を嫌悪する君主〔……〕の支配下で、真理を認識することを教え、真理を語る勇気を支える」ことであると主張していたのであった⁴⁾。この見地は、第2版にもそのまま受けつがれている。ディドロはいう⁵⁾。

自分が語ろうとする危険な真理が、未来に実を結ぶことが信じられなければ哲学者は沈黙するだろう。彼は、偉大な君主が偉大な大臣があらわれて、〔真理を〕実現してくれることを待ち望みつつ、〔真理を〕語るのである。彼は徳を愛し、徳を実践する。生命を重んぜず、死を軽んずる。〔……〕もし悪徳を攻撃しても、命を長らえることができるなら、そうするだろう。だが、生きることと、真理を語るものが両立しえない場合がくれば、その職務〔真理を語るという職務〕を果すことを選ぶだろう。真理の使徒が虚偽の使徒〔カトリック僧侶〕と同一の勇気をもたないなどということは、決してありえないのだ。そうだ。そんなことはありえない。

1) S, p. 293; CN, t. II, p. 29; HN, t. II, p. 22; AT, p. 217.

2) CN, t. II, pp. 318-319; HN, t. II, p. 208; AT, p. 404. 第2版の別の箇所にも、ほぼおなじ趣旨の発言が見られる。「真理の探求と徳の実践にたえずはげんでいるひとにしか、私は哲学者の称号を与えない。」CN, t. II, p. 31; HN, t. II, p. 23; AT, p. 218.

3) CN, t. II, p. 103; HN, t. II, p. 70; AT, p. 260.

4) S, p. 23; CN, t. I, p. 23; HN, t. I, p. 19; AT, p. 24.

5) CN, t. II, p. 16; HN, t. II, p. 13; AT, p. 209.

『セネカ論』初版のディドロと、第2版のディドロとは、確かにここまでは一致している（ただし、この第2版のテキストに、新たに出現した、「君主」と「大臣」にたいする強い期待感に注目されたい）。しかし、その先に大きな相違点があられはじめる。

第2版のディドロは問う。「哲学者が善を行なうことに絶望した時」、「時代の退廃」の根が余りにも深く、改革がついに不可能であると知った時、彼はどうするであろうか、と。初版の主張とは逆に、ディドロは、「徳あるひとびと」は暴風雨を避けるような慎重さをもって現実の社会のひとびととの交わりを断つ、と答える。「孤独」こそが、彼らのひきこもる「港」になるのだ、と。そしてディドロは続ける¹⁾。

これらの賢者は、いくら身を隠そうとしても、決して隠れおおせないだろう。背徳者の群から遠く離れたところに身を置く彼らは、神々と、徳を愛する人間によって、はっきりそれと認められるであろう。彼らはこの名誉ある亡命の地で平和に暮らしながら、いささかの羨望もなしに、俗世間の光景を眺めている。そこでは、俗衆が、自分たちをまどわすペテン師たちに賛嘆を惜しまず、高位高官のひとびとは、自分たちを嬉しがらせ、喜ばせる道化師たちに、たっぷり報酬をふりまいているのだ。

セネカは、『ルーキーリウスあての書簡集』（第68信）のなかで、賢者はこのいとわしい現実世界を逃れて、「無限の空間」の高みに身を置き、そこから俗世間の愚劣を見おろすべきだと主張していた。これにたいして初版のディドロは、「賢者」こそ雲の上から舞いおりて、地上の現実のまただなかに立たねばならない、と反論していたのであった。

しかし、第2版のなかに、前記の引用テキストを挿入したディドロは、かつて初版中で自らが否定していた、セネカの「賢者」の立場——『ラモーの甥』のなかで、「私」が「彼」をからかった時の表現を使えば²⁾、「『水星の周転円の上にとまって』人類のさまざまなパントマイムを眺めている」立場——に、今や身を置こうとしている。現実の直接的・政治的改革にたいする志向は、もはや彼の内部で消失している。第2版のディドロの意識の深みを支配しているのは、「神々」と「徳を愛する人間」からなる、より高い理念の世界に、自分もまた連なりたいというはげしい希求である（「神々」とは、いうまでもなくひとつの比喩であり、人類の記憶にある、過去の徳あるひとびとを指している）。

もちろん、初版のディドロは、哲学者の使命が、現実の改革だけにつきるとは決して考えていなかった。なぜなら、「哲学すること」は外部の退廃との戦いであると同時に、内部の腐敗との戦いでもあったのだから。したがって、初版のディドロはいう。「自分の心情を検討し、自己自身とひんぱんに会話すること」³⁾、毎日くり返して自己自身の欠点を「非難」すること——「この種の自

1) CN, t.I, pp.30-31; HN, t.I, p.24; AT, p.29.

2) NR, p.104. ただしディドロは、『ラモーの甥』においても、この観想的立場を、よしとしているのではない。「賢者」は地上で戦うべきだと考えている。

3) S, p.259; CN, t.I, p.277; HN, t.I, p.181; AT, p.193.

己吟味以上に、称賛すべき、有益なことがありえようか」¹⁾と。

だが、第2版のディドロは、この苦しい戦いから、身をひきたがっているように見える。というのは、彼は、「哲学者よ、君はどこまで研究を深めたのか」というセネカの問いを第2版に引用したあと、こう付け加えているからである²⁾。「この問いを自分にだして、次のように答えられるひとは、なんと幸福だろう。『私は自分自身と仲なおりしはじめています』と」。

『セネカ論』初版において、現実との戦いの教説であり、良心の自己検討の勧めであった「哲学」は、やがて70歳になろうとする老ディドロにとって、今や現実からの隠遁の教え、自己自身との和解の知恵という色彩を帯びはじめてきたのである。

革命の否定 だがもちろん、『セネカ論』第2版のディドロが、現実存在する不正にたいして無感動になってしまったわけではない。初版において彼は、ピーソが理不尽な理由で部下の兵士に死刑を宣告した話を語りながら、「血が煮えたぎる」のを感じ、読者にむかって、さあ一緒にピーソに飛びかかり、彼を短剣で刺し殺そう、と呼びかけたのであったが（第二部、第Ⅲ章、1の「弱者との同一化」の項参照）、これとおなじ反応が第2版においても認められる。ここでもまた彼は、権力者が無力な人間を不当に虐げているのを見ると、たちまち反射的にこの権力なき人間と連帯して、不正に抵抗しようとする。

たとえば彼は、『ルーキーリウスあての書簡集』（第7信）のなかに、「奴隷の絶望は、国王の気まぐれとおなじ数の人間を殺す」ということばを発見するや、直ちにこう付け加える。「ぜひそうあってほしいものだ」と。また、「奴隷は主人にたいして生殺与奪の権利をもっているだろうか」という問いを見いだすや、即座にこう応酬する。「誰がそのことを疑えるだろう」と。そして力強い調子でこう続ける。「誘拐され、売りはらわれ、買いとられ、また売りはらわれ、牛馬同様の仕事を強制されているこれら不幸なひとびとが、すべていつか私同様の確信をいだかんことを」と³⁾。

またディドロは、アルメニア国王ティリダテスがローマ皇帝の宮殿に服属の挨拶に伺候した際、ネロがこの属領の君主に与えた余りにも傲慢なことば（「私はあなたをアルメニア王にするが、それは私がいつでも好きな時に、王冠を奪ったり与えたりする権力をもっているという事実を、あなたと、あなたの国民に教えるためなのだ」）を書きしるしながら、激怒にかられて次のように叫ぶ。「この高慢なローマ人たちは、なんとというみじめな隷属状態に、全世界を投げこんでしまったのだろう。もしこの専制的な権力がいつまでも続いていたら、われわれはいったいどうなってしまうだろう。未開の民よ、駆けつけよ。そして未来の諸国民を縛りつけている鉄鎖を断て」と⁴⁾。

このように、不当な隷属をしいられた「奴隷」および「未開の民」と連帯する第2版のディドロ

1) S, p. 386; CN, t. II, p. 149; HN, t. II, p. 100; AT, p. 287.

2) CN, t. II, p. 7; HN, t. II, p. 7; AT, p. 203.

3) CN, t. II, p. 11; HN, t. II, p. 10; AT, p. 206. 初版における、ディドロの「勇敢なるアメリカ人」への呼びかけ（«*Puissent ces braves Américains...*»）S, p. 439; CN, t. II, pp. 203-204; HN, t. II, p. 134; AT, p. 324.）と、第2版のこの奴隷への呼びかけ（«*Puissent tous ces malheureux enlevés...*»）との文体上の類似点に注目すべきであろう。いうまでもなく、第2版のこのことばは、ヨーロッパ諸国の奴隷売買制度にたいする弾劾である。

4) CN, t. I, p. 81; HN, t. I, p. 56; AT, p. 64.

は、その当然の帰結として、「圧制」に抗して立ちあがる「人民」の「革命」行動を是認するのであろうか。確かに、初版に挿入されていたアメリカ革命の賛美——「勇敢なアメリカ人」への呼びかけ——は、第2版にもそのまま収録されている。しかし、第2版におけるディドロの政治的立場は、初版のそれにくらべて、明らかに一步後退している。第2版のディドロは、現実世界の政治の問題を「人民」の立場からではなくて、むしろ君主の立場に立って——君主の統治技術の有効性の立場に立って——解釈しようとしている¹⁾。

これにたいして、あるいは次のように反論されるかもしれない。——ディドロは、必ずしも君主の立場に身を置いているわけではない。たとえば、次のテキストが明示するように、彼はただ「君主」と「人民」の2つの立場の接点に立って、両者の「契約」関係の相互的限界を冷静に考察しているのにすぎないのだ、と²⁾。

緊急の事態が、自然法の侵害、人権の蹂躪、臣民の特権の無視を要求しないような政府は存在しないが、逆にある状況が臣民の側の抵抗を正当化しないような政府もまた存在しない。そこから、大逆罪を正確に定義し、限定する極度の困難さが生じてくる。

確かにこのテキストだけを解釈する限り、前記のような反論も可能であろう。だが、このテキストに後続する部分をも同時に考察するならば、上の反論がその根拠を失うことは明らかである。ディドロは、後続するテキストでいう³⁾。

立法委員会あての賢明な勅令の1行ごとに、明敏にして偉大な北国の女帝〔エカテリーナ2世〕は、大逆罪について、そんな犯罪がおこるとは考えられないと語っておられる。人民が身の安全を享受している場合には、それを〔すなわち安全を保証する条件を〕明文化しておかねばならない。また、逆に人民がそれを享受していない場合には、ますますそれを明文化しておかねばならない。

これは明らかに、「君主」のよき支配——法に基づく支配——にたいする期待の表明である。もちろん、このテキストを、エカテリーナ2世にたいするディドロの単純な頌辞と解釈することは誤りであろう。テキストの後半部分——人身の保護規定の明文化の要求——は、明らかにディドロの

1) ディドロが、統治者の立場に立って政治の具体的改革を発想しはじめるのは、彼のロシア滞在以来である。たとえば、『エカテリーナ2世との対談』の覚書の「奢侈」の章で、彼は自ら「国王ドニ」と称して、18箇条からなるフランス改革案を提唱している。MC, pp.145-160; DC, pp.222-244.

2) CN, t.I, p.144; HN, t.I, p.96; AT, pp.102-103. いうまでもなく、ディドロはここで、人民と君主間の「服従契約」を前提している。ディドロ後期の「服従契約」の端的な表明は、『立法議員あての女帝陛下の訓令にかんする意見』の冒頭に認められるが、そこでは「契約」による君主権の制限に、むしろ力点が置かれている（国王が契約に背いた場合には、死刑に処すべきだという）。OP, pp.344-345; TP, p.62. しかし、『セネカ論』第2版の立論は、一般にこれよりさらに後退している。

3) Ibid.

諸国の君主にたいする政治的要請なのであるから¹⁾。だが、ここにはもはや、「啓蒙された専制君主」は、人民の「災厄」であり、この種のよき君主が2～3代続くことは、結局「人民にその特権を忘れさせ、隷属状態を完成するであろう」と警告した初版のディドロの姿は、どこにも見当たらない（第二部、第三章、2の「啓蒙君主に期待しうるための条件」の項参照）。

すでに詳しくのべたように、『セネカ論』第2版のディドロにとっては、「国家」が存続していくことこそが——「笏〔王権の象徴〕を手にした君主が、いつまでもそれを握り続けること」こそが——重要なのである。そして「国家の安全の確保」という責務は、決して「人民」にではなくて、「君主」に——その君主がたとえネロであったとしても、あくまでも「君主」に——課せられているのである（第三部、第二章、2の「裁かれる人間の行為の動機の理解(二)」の項参照）。だから、流血「革命」の「不幸」はあらゆる手段をつくして防止せねばならない。——ディドロは、この「革命」反対の主張を、ネロのアグリッピーナ殺害直後のローマの危機に即して明らかにしたのであった²⁾。

彼は、『セネカ論』初版・第2版以前に、すでに『エルヴェンシュス著「人間論」にたいする逐条的反駁』（1774年）のなかで、一見複雑そうに見えるが、よく調べてみると簡単な問題があり、逆に一見簡単そうに見えるが、よく検討すると解決不可能な問題があると書き、後者に属する問題の1例として次のものをあげていた³⁾。

臣下が国王に手をかけることが許されるような場合が、ひとつでも存在するかどうか。もし万一ひとつでも存在するとすれば、それはどのような場合か。

未来の世代の幸福のために、現在の世代の幸福を革命の危険にさらさねばならないかどうか。

1774年のディドロは解答をだすことをためらっている。だが1778年、『セネカ論』初版のディドロは、アメリカ革命への熱狂を通して、一旦は「革命」を肯定する。しかし、1782年、『セネカ論』第2版の彼は、初版のこの大胆な立場を一步後退させ、「革命」を否定するにいたるのである。

1) かつて、ヴァンセンヌに投獄された経験をもつディドロは、人身保護の問題にかんしてきわめて敏感である。『立法議員あての女帝陛下の訓令にかんする意見』のなかで、彼は無実の人間が拘禁されることの苦痛と、それにたいする賠償の必要性について、詳しく論じている。OP, p. 381, p. 392; TP, p. 100, p. 112. また被告の弁護は、決して若い、未経験な人間に委ねてはならぬ、という。OP, p. 383; TP, p. 103.

2) この主張は、次の対話の形で展開されている。

〔ディドロにたいする批判者〕——「〔アグリッピーナ殺害事件直後〕ローマの人民が反乱をおこし、母親殺しを皇帝の座からひきずりおろすような危険がはたしてあったのだろうか。またかりに、このような革命がその時、勃発していたとしても、いったいそれがそれほど不幸だったのだろうか。」

〔ディドロ〕——「もし革命が血の川を流さずには成就できないものだとすれば、それはきわめて大きな不幸だ。〔……〕」

〔ディドロにたいする批判者〕——「この事件によって、国家が破壊される危険があったことは事実であるにしても、ネロによって国家が破壊されることのほうが確実だったのではないか。」

〔ディドロ〕——「私はそうは思わない。墮落した元老院には権威がなく、護衛隊には規律がなく、人民にはエネルギーがなかったのだから。〔……〕」CN, t. I, p. 162; HN, t. I, p. 107; AT, pp. 113-114.

3) AT, t. II, p. 345.

る¹⁾。

だがそれにしても、なぜディドロは、ネロの母親殺害のあと、多年彼の恐怖政治のもとで呻吟してきた「人民」にむかって、さあ母親殺しの打倒に立ちあがろう、と呼びかけないのであろうか²⁾。第2版に認められる「革命」にたいする逡巡、君主による国内の掌握への期待への背後には、初版から第2版にかけて、ディドロの心のなかにますます深まっていく、人民への幻滅がかくされているのである。

人民への幻滅の深まり 『セネカ論』初版のなかで、「自由」の擁護のために蜂起したアメリカ人のうちに、理想の「人民」の姿を発見したディドロは、しかしながら、決して無条件的にすべての人民に信頼を寄せていたわけではなかった。なぜなら、すでに見たように（第二部、第三章、2の「人民への絶望」の項参照）、彼は、現実の世界で徳への愛を失った人民をしばしば発見し、そのたびごとに、「人民から遠ざかることと、よい人間になることはおなじである」と発言してはばからなかったからである。

人民のなまの実態にたいする彼のこの幻滅は、第2版にいたってますます深まり、彼らへの信頼感とははや完全に失われてしまう。今やディドロは、セネカの時代のローマに生息していた「人民という名で呼ばれるあの巨大な野獣」³⁾のなかに、18世紀フランス社会にうごめく「いやしい俗衆」⁴⁾（*canaille*）との類似点を見出すことだけに専心している。では、このローマとフランスの人民に共通する、いとうべき類似点はどのようなものであったろうか。

臆病さ——ディドロは、人民の第1の属性は臆病さであるとする⁵⁾。ネロが皇帝の座を追われそうだと、いう噂がひろまった時、この暴君を怨んでいた人民はたちまち「歓声」をあげる。しかし人民の「歓声」などなにもものでもない。なぜネロは、ガルバの反乱の情報がはいった最初の時点で、断固たる決意をもって行動に移らなかったのだろう、とディドロはいぶかしむ。もしネロが逡巡することなく、即座に反逆者たちの「首を、ひとつか2つ」切り落としていれば、「この反逆した奴隷の群」はたちまち四散し、人民の「歓声」はたちまち沈黙に変わったはずである、と。（ディドロがここでもまた、抑圧された「人民」の立場にではなく、支配する「君主」の側に身を置いて発言していることに注意されたい）。

1) いうまでもなく、この時代の用語法では *révolution* とは一般に「変化」、「変革」を意味する。したがって、ディドロのいう血の川を流す「革命」が、今日の用語の「革命」にまた血の川を流さない「革命」が、今日の用語の「改革」に相当する。

2) 次項「人民への幻滅の深まり」における人民の「臆病さ」の説明参照。

3) CN, t.I, p.157; HN, t.I, p.104; AT, p.111. ディドロは、セネカとブッルスがたえず協力し続けたことを指摘し、もしどちらか一方が相手を見捨てて宮廷から引退すれば、きっと民衆は、見捨てたほうを非難するに違いないと書いたあと、さらにこう付け加えている。「われわれは、今日でも、これとおなじ非難を耳にした。人民という名で呼ばれるこの巨大な野獣は、いつの時代でも似ている。」 CN, t.I, p.157; HN, t.I, p.104; AT, p.111. アセザの注によれば、「これとおなじ非難」とは、1777年のテュルゴ失脚後、しばらく閣内にとどまっていたマルゼルブにあげせかけられた非難をさす。しかしやがてマルゼルブも内閣を退く（後述）。AT, p.111, note 1.

4) CN, t.I, p.169; HN, t.I, p.112; AT, p.118.

5) CN, t.I, p.163; HN, t.I, p.108; AT, p.114. なお、ディドロは、初版のなかでも、すでに「暴君の真のよろい、それは大胆さだ」とのべている。S, p.127; CN, t.I, p.144; HN, t.I, p.96; AT, p.103.

邪悪さ——セネカの批判者は、なん度もくり返して、「元老院にあてた手紙〔アグリッピナ殺害事件を正当化した手紙〕は、不謹慎だ」と非難する。これにたいしてディドロは、第2版のある箇所で、次のような理由をあげてセネカを弁護する¹⁾。すなわち、まずセネカの手紙が「不謹慎」だというのは、たんなる民衆の噂にすぎない（この噂においてすら、セネカは、「犯罪的である」とも、「卑怯である」とも、「下劣である」とも非難されていない）。タキトゥス『年代記』のなかには、確かに「不謹慎」という表現が発見されるが、タキトゥス自身は、この評価に賛成も、反対もせずに、ただ「人民の噂」として、事実を記録しているのにすぎないのだ、と。ディドロはすぐ続けて、彼の当時の人民観をはっきり示すような、次のことばでこの一節を結んでいる。「なぜわれわれは、いやしい俗衆よりも、もっと邪悪な態度を示さねばならないのだろうか。あの連中の特徴は、すべてを悪意で歪めてしまうことなのだから。」

思慮なき熱狂——『セネカ論』初版のなかで、ディドロはタキトゥス『年代記』（第14巻、59—61章）に依拠しながら、次のような事件を報告していた²⁾。すなわち、ネロはアグリッピナを殺して、自分の行動を制肘する人間からやっと解放されたので、貞淑な妻オクターウィアを離婚して、情婦ポッパエアを正式の妻に迎えようとする（オクターウィアの実父が先帝クラウディウスであったことと、彼女自身が民衆の間で非常な人気があったことが、ネロには煙たかったのである）。早速、腹心の者に命じて、オクターウィアが密通していると讒訴させよう、それを理由に彼女を離縁して追放する。事件を知った人民は、彼女にたいする「尊敬」と「同情」からたちまち非難の声をあげ、騒ぎは次第に拡大していく。事態の悪化を恐れたネロは、急遽オクターウィアの呼び戻しを命令する。人民は歓喜するが、その歓喜を決して節度ある行動によって示すことができない。オクターウィアにどれほどの迷惑がかかるかということも考慮せずに、直ちに無分別な動きにでる。「ポッパエアの像を倒壊させ、オクターウィアの像を肩にかついで、それを花という花で飾りたて、はてはそれを神殿に据えつける。」そればかりか、人波はネロの宮殿のなかにまで殺到しはじめる。護衛隊兵士は、危険を感じて剣と鞭をふるい、彼らを追い散らした。

第2版のディドロは、初版の以上の記述のあとに、こう付言している³⁾。「人民の思慮なき熱狂は、いつの時代でも有徳のひとに不利な結果を生みだし、無実のひとを破滅させてしまう。」事実、オクターウィアは、この事件のあとパンダテリア島に幽閉され、間もなく斬殺された。

行動の一貫性のなさ——ディドロは、人民の行動の一貫性のなさ、あるいは感情的な短絡反応に

1) CN, t.I, p.169; HN, t.I, p.112; AT, p.118.

2) S, p.167; CN, t.I, pp.182-183; HN, t.I, pp.120-121; AT, pp.127-128.

3) *Ibid.* 人民の愚しさ、軽信については、すでに初版のなかでも指摘されている。すなわちディドロは、セネカの死後、彼の「失寵」と「死」を正当化するための口実が考えだされたが、人民は愚かにもなんの疑いもなく、すぐにその口実を信じた、とのべている。「彼ら〔廷臣〕が口にしない悪口があるか。また、大衆が信じない悪口があるか。大衆は天才を敵視し、有徳のひとたちを敵視する（特に後者は、天才以上に彼らを傷つける存在であるから）。だから大衆は、セネカになすりつけられた非難が正しいかどうかを検討しようとしなかった。いったい人民が、事柄の是非を検討したりするものだろうか。今日でも彼らは、悪口ならすぐに信じてしまうだろうが、ちょうどそれとおなじように、昔も、まったく無批判に悪口を信じたのだ。大衆は邪悪だ。だがそれ以上にばかなのである。」 S, p.230; CN, t.I, p.234; HN, t.I, p.153; AT, p.164.

ついて、次のようにいって非難する¹⁾。クラウディウスが、背徳者スイッリウスを追放した時、民衆は皇帝とセネカにたいして不平の声をあげていた。ところが、なんということであろう。クラウディウスが、スイッリウスの罪を許し、彼を流刑地からローマに呼び戻すや、今度はこの恩赦が気に入らず、かつての不平も忘れたかのように、以前の追放令を賛美するのである。「これこそが人民だ。他人が罪を犯した時には、極端なまでに憤慨するくせに、その罪が罰せられるとなると、いつも愚かしくも同情する。」

いやしさ——第2版のなかで、ディドロが『ヘルウィア慰藉文』に基づいて語っている逸話によれば、かつて清廉なアテナイの政治家アリストイデスが処刑場にひかれていったとき、大勢の市民が彼の運命を気づかって、むらがり集まってきたなかに、ただひとり、彼の顔に唾をはきかけた「破廉恥漢」がいたという²⁾。また、アテナイの將軍フォキオンにたいしても、おなじような侮辱を加えた民衆がいたという。「だから私はこう結論する。アテナイの下層民は、わが国の下層民よりも、もっといやしかったのだ、と。」³⁾（もちろんディドロは、だからといってここで、フランスの「下層民」がアテナイのそれよりも高貴であると主張しているのではない。程度の差はあれ、「人民」という名のつく、すべての「巨大な野獣」に共通するいやしい性格を承認したうえで、上のようにのべているのである。）

このように、『セネカ論』第2版には、臆病で、邪悪で、すぐに熱狂し、行動には一貫性がなく、しかもいやしい人民にたいする呪咀のことばが充満している。初版のなかで、アメリカ革命の理想の人民によせた期待は、もはや第2版のどこにも見いだされないのである。

国王と政府への幻滅の深まり フランスの現実の改革の主体を、人民に託することができなくなったディドロは、それなら当時の国王ルイ16世と彼のもとにある政府に期待をつなぐことができるであろうか。（第2版において、国王や大臣の強力な政治力にたいするディドロの強い希望が表明されていることは、すでに見たとおりである。）だが、この希望もまた無残に裏切られざるをえない。

ディドロは、初版のなかで、クラウディウスの君主としての弱さを批判し、「クラウディウスは、玉座にあっても無力であり、宮殿にあっても無力である。彼はそのことを知っており、認めていた」と書いていたのであったが、第2版になるとそのあとに次の逸話を付け加える⁴⁾。

お付きの者が、2つの公共建築物の雛形を彼〔クラウディウス〕に見せたとすれば、彼は

1) CN, t.I, p.309; HN, t.I, p.214; AT, p.89, note 1.

2) CN, t.II, p.215; HN, t.II, p.142; AT, p.337.

3) ディドロはこの直後に、次のように付言する。「民衆は、たとえおまえにたいしてでも、こんな侮辱は加えなかったであろう。人間のなかで、もっとも嫌われ、もっとも軽蔑すべき、そして事実もっとも軽蔑されているおまえにたいしてもだ。おまえの名前をここにあげようとは思わないが、この本を読めば、これが自分のことだとわかるだろう。そら、おまえは顔を赤らめた。まっ青になった。自分だということがわかったのだ。」*Ibid.* なお、アセザによれば、これは以前の大法官・国璽尚書モーブー、あるいは以前の財務総監テレのいずれかだという。AT, p.331, note 1.

4) S, p.44; CN, t.I, pp.40-41; HN, t.I, p.30; AT, p.37.

おそらくこういったことだろう。「この雛形のほうが美しい。だが連中〔廷臣たち〕が選ぶのは、これではないだろう」と。大臣のひとりについて、彼は恐らくこういったことだろう。「あの男はきっと失脚するだろう。あの男を支持しているのは、私ひとりだけだから」と。彼は無力だが分別があったから、顧問会議で発言する時には、恐らくこういったことだろう。「私の意見が最良のものだったが、連中はきっとそのうちに後悔することだろう」と。元老院では、こういったことだろう。「私が証人に喚問したこの女は、昔私の母親から解放してもらった奴隷で、今では彼女の侍女だが、いつも私を主人として扱ってくれた。私の宮殿のなかには、この女のように振舞わない人間がたくさんいる」と。

廷臣たちの前で、なんの決定権ももたない、この分別はあるが、実力のないローマ皇帝のイメージを通して、ディドロが現実のフランス国王の姿を諷刺していることは明らかであるが¹⁾、アセザによれば、この国王はルイ15世であるという²⁾。ディドロはこの逸話を語ったあと、最後にこう結論をくだしている。「悪を防止することもできず、善を命令することもできない弱さは、結果として圧制をはびこらせる。」³⁾

この暗示的な結論は、ディドロが国王と政府の改革政策にたいして一時抱いた強い期待と、その期待が、国王（ルイ16世）の無力さのゆえに次第に裏切られていったことにたいする深い幻滅を物語っている。（アセザが推定するように、前記逸話がたとえ、ルイ15世を諷刺しているにしても、その結論のうちには、『セネカ論』初版のなかで、ディドロがまだいくらかの希望を託していた「生まれつき徳を信ずることのあつゝ」ルイ16世にたいする強い幻滅感が表明されていることは明らかである。⁴⁾

では、ディドロの内部で、国王と政府にたいする期待は、どのようにして生まれ、またどのようにして消えていったのであろうか。そのことを当時のフランスの現実的諸事件とのかかわりのなかで考察しておきたい。

ディドロがフランス政府の立場に身を置いて具体的な、内政改革案を最初に提案したのは、『エカテリーナ2世との対談』の覚書（1774年）の「奢侈について」の章においてであった⁵⁾。

この改革案において、彼はまずフランス国王の強力な指導権を要求する。「国王は自ら範例を示すことによって、国家のすべての善と、すべての悪をつくりだす。」⁶⁾ だから国王は、側近のあら

1) すでに『文芸通信』1782年3月号は、『セネカ論』第2版には、「クラウディウスの性格と、それが誰であるか読者にはすぐわかる、ある国王との比較論」が展開されていると指摘し、「誰もが知っている〔この国王の〕ことば」として、私が上にあげたものを引用している。CORR LIT, t. XIII, pp. 104-105.

2) アセザの推測によると、ルイ15世の第1の発言は、パリ市立病院の移転の際の改築計画にかんして、第2の発言は、陸軍大臣ド・モンテナル侯爵について、第3の発言は、その他のもろもろの機会に、それぞれなされたものである、という。AT, p. 37, note 1.

3) CN, t. I, p. 41; HN, t. I, p. 30; AT, p. 37.

4) S, pp. 222-223; CN, t. I, p. 229; HN, t. I, p. 150; AT, p. 160. なお、小論第二部、第三章、2の「現実の君主たちへの絶望」の項参照。

5) MC, pp. 145-160; DC, pp. 222-244.

6) MC, p. 158; DC, p. 241.

ゆる妨害を押し切って、行政の経験に富んだ、有能な大臣を選ばねばならない。

フランスの経済と財政とが、まず緊急の改革を要求している。したがって国王が誰を財務総監（大蔵大臣）に選ぶかに、フランスの繁栄がかかっているであろう。ディドロはこの地位に最適任の人物がひとりいる、という。「テュルゴ氏は、フランス王国中でもっとも正直な人物のひとりである。そして、どのような領域においてであれ、おそらくもっとも有能な人物であることは確かである。」彼は現在地方総監として任地のリモージュにおり、その地を離れることはないだろう。「だがもし彼が〔万一財務総監に任命されて〕リモージュを去ることにでもなれば、私は歓喜の叫び声をあげるであろう。というのは、わが国の内閣の精神は完全に一新され、事態はほとんど奇跡的に改善されるにちがいないからである。¹⁾」

ディドロの希望は夢ではなかった。1774年5月10日ルイ16世が20歳で即位するや、モールパが政府の実権を掌握し、ミロムニルが大法官に、テュルゴが財務総監にそれぞれ任命される（テュルゴは1761年から1774年にかけて13年間地方総監をつとめたあと、1774年8月24日財務総監に任命される1カ月前7月19日に、海軍大臣に任命されていた）。また同時にディドロの友人サルチースが海軍書記官（海軍大臣）に、翌年にはマルゼルブが宮内書記官（宮内大臣）にそれぞれ就任する。そして先に（1771年1月21日から22日にかけて）モーブーによって追放されていた高等法院の評定官は、新政権の手で即座に呼び戻され、旧高等法院が再建されたのであった²⁾。ディドロは、「旧裁判官集団〔高等法院〕の再建が、自由な時代を回復した」と『エルヴェシウス著「人間論」にたいする逐条的反駁』のなかで書いている。³⁾

この時こそディドロの胸に生涯ではじめて、大きな政治的希望の火が燃えあがったに相違ない。彼の喜びは、『エルヴェシウス著「人間論」にたいする逐条的な反駁』の冒頭にはっきり表明されている。すなわち、ディドロは、エルヴェシウスの主張——今日のフランスは全ヨーロッパの輕蔑的であること、どのような救いも不可能であること、経済的消費の増大によって必ず破局がおとずれるであろうこと、「〔外国の〕侵略だけが、さまざまな不幸の唯一の救済策である」こと、だがこの救済策が有効であるかどうかは、偶然の事情だけが決定すること——に反論して次のように断言する⁴⁾。

1) ディドロの主張によれば、フランスの「財務総監」は、必ず「地方総監」のなかから選ばなければならない。なぜなら、全国に散在する「地方総監府」こそ、「偉大な行政官たちの現に実在する養成所」にはかならないからである。「地方総監」はそこで、「人口、商業、マニュファクチュア、農業、あらゆる種類の産物、完成した公共事業、計画中の公共事業、森林、河川、運河、行政の全部門、課税、大小の町と大小の村の富」の実態を知り、その管理法を学ぶのである。MC, p. 159; DC, p. 243.

2) ディドロは、旧高等法院が、「ばかな、あるいは邪悪な恣意的〔君主〕権力にたいして、人民を守る防壁」としては、ほとんど役に立たぬ、欠陥だらけの組織であったことは認めている。〈Essai historique sur le police〉, MC, p. 24; DC, p. 123. しかし、それにもかかわらず、この組織は人民のための最小限度の王権の制限の保障なのであるから、それを強権によって解散したモーブーは許しがたいと考え、彼にたいしてはげしい怒りを示している。MC, pp. 28-33; DC, pp. 127-134. 〈Lettre à la princesse Dashkoff〉, 3 avril 1771, CORR, t. XI, p. 20.

3) AT, t. II, p. 275; OP, p. 465.

4) Ibid.

現実の経験は逆のことを証明している。現在、国家の第1の地位を占めている正直なひとたちが、せめて10年間、その地位を保持してほしいと思う。そうすれば、われわれのすべての不幸は解消するであろう。

ディドロの期待どおり、新財務総監テュルゴは、「国王あての手紙」のなかで、瓦解にひんしているフランスの構造改革案を提出する¹⁾。この改革案は、「商業取引の自由、生産と交換にたいする政府の干渉の廃止、同業組合の廃止、租税の徴収組織の完全な改革、宗教的寛容、表現の自由、議会制憲法計画」（ブノ）の諸条項を含んでおり、ブノの評言を借りれば「もしこの計画が実現されていれば、革命とおなじだけの影響力をもちえたであろう」という²⁾。

彼はまず、財政の分野では、緊縮政策をとろうとする。しかし廷臣の抵抗と国王の弱気のために、この試みはほとんど成果をあげられない。社会経済の領域では、1774年9月以後、「小麦取引」の自由を認める。同年の凶作、翌年のパン価格の高騰などが原因で1775年に人民暴動（「小麦粉戦争」）が勃発して、市場や商店を荒らしまわると、テュルゴは直ちにパリ周辺に3万人の警備兵を配置し、首謀者を投獄（うち2名をグレーヴ広場で絞首刑）して、危機をのりきった³⁾。

賦役労働の問題にかんしては、1775年1月5日の勅令によって、農民に無償労働を要求することを禁止する（「富める人間を利するために、貧しい人間に租税を課することは正しくない」と勅令前文はいう）。おなじ時期に、「同業組合制度と親方制度」にかんする勅令を公布させて、各種同業組合から、職業組合の独占権を奪う（労働権は、なにびとも束縛しえない自然権である）⁴⁾。

続々とうちだされるテュルゴの構造改革的諸政策の前に、既得権をもつ宮廷人が、マリ＝アントワネットを中心に連合して、反テュルゴ勢力を形成し、同時に高等法院もまた諸勅令の登記を拒否して抵抗する⁵⁾。国王は高等法院の抵抗を乗り切るために、親臨して、諸勅令の登記を強制した⁶⁾。

しかし、内閣においては、実力者モールパは嫉妬心からテュルゴを支持せず、政府内で彼の側に立つのはただルイ16世だけであった（「人民を愛しているのは、テュルゴ氏と私だけだ」と国王はいう）。各方面からの抵抗の前に、国内の経済情勢は一向に好転のきざしを見せず、しかも国王すら周囲の圧力におされて自分を見放そうとしていることに気づいて、いらだったテュルゴは、1776年4月30日、国王にあてて、予言的な手紙を書く。「陛下、決してお忘れになりますな。チャールズ1世の首を断頭台にのせたのは、弱気だったということ。」⁷⁾（このことばは、ある意味で、先に引用した『セネカ論』第2版の「悪を防止することもできず、善を命令することもできない弱

1) Michel DENIS et Noël BLAYAU, *Le XVIII^e siècle*, Librairie Armand Colin, 1970, p.230.

2) TP, p.39.

3) M. DENIS et N. BLAYAU, *op. cit.*, p.237.

4) *Ibid.*, p.238.

5) *Ibid.*

6) 1776年3月4日付、高等法院の国への勧告はいう。「秩序正しい君主国において、人道と慈善の仮面をかぶって、ひとびとの間に義務の平等をうちたて、必要な〔社会諸階層間の〕差別を解体させようとする一切の制度は、やがて絶対的平等の不可避的帰結である無秩序をまねきいれ、社会の崩壊をうながすであろう。」*Ibid.*, p.239.

7) *Ibid.*

さは、結果として圧制をはびこらせる」という発言と重なりあうものをもっている。）

1776年5月13日、テュルゴは政府を去り、翌年マルゼルブが彼のあとを追う¹⁾。国王の支持がなければなに事もなしえない「旧制度」のもとで、テュルゴの試みは国王の「弱さ」を前にして挫折せざるをえなかったのである²⁾。（ただし、テュルゴが政権の座にあった間、ディドロの書簡は彼についてほとんど完全な沈黙をまもっており、そのためディドロが財務総監の個々の政策にたいしてどのような反応を示したかを確認する手段は残されていない。³⁾）

新財務総監の地位には、ギュイエンヌ州地方総監クリュニがつくが（1776年5月から10月まで）、彼が急死したため、ジュネーヴ生まれの新教徒である銀行家ネッケルが王国財務長官に選ばれる（翌1777年財政長官の名称が与えられるが、最後まで財務総監には任命されない）。いうまでもなく彼は、ディドロ、グリム、マルモンテルたち一派の仲間である。

ネッケルは国家財政の建て直しのために、大規模な国債の発行に頼った。その結果、一時は国庫に現金が流入して「ネッケル・ブーム」までまきおこったが、事態の根本的解決には成功せず、危機を累積して先へひきのばしたにすぎなかった。そのほかに、彼は若干の税制改革⁴⁾と行政改革⁵⁾に手をつけた。

しかし、財政危機の慢性的進行とともに（特に1780年以後）、彼の権威は低下しはじめ、反ネッケル勢力が拡大していく。——僧侶（新教徒ネッケルに敵意をもつ）、高等法院（その成員は、地方議会から排除されていたので、ネッケルに憤慨している）、徴税請負人と廷臣（既得権益を大幅に縮小されて、ネッケルに怒る）⁶⁾。

ネッケルは、公開の場で敵対者たちに反撃するため、1781年2月、「ネッケル氏による国王への

1) *Ibid.*

2) もし当時のフランスにテュルゴが望んでいたような憲法と近代的議会が存在してさえいれば、彼は議員の支持に頼ることができたであろう。しかし、それは18世紀の旧制度下の現実においては、不可能な夢であった。なおテュルゴは、死後に『地方議会にかんする覚書』を残しており、そのなかで、各地方の聖堂区を最小単位とする初級議会から出発して、順次上級議会を積みあげてゆき、最後に国民議会にいたる議会制度を構想していた。 *Ibid.*, p. 237.

3) この沈黙の理由は2つ考えられる。——第1、テュルゴにたいするうしろめたさ。当時ディドロは、非常に利益のある王立鉄工場の経営権を娘婿カロワロン・ド・ヴァンドゥルに獲得してやるために、まずテュルゴに、ついでこれと平行してネッケルに、最後には、テュルゴの2人の友人——王室造営物長官ダンジュヴィル侯爵と商業監督長官デュボン・ド・ヌムール——を介して、間接的にテュルゴに、執拗に画策を続けていた。画策は結局成功するが、このかなり不明朗な運動のうしろめたさが、テュルゴにかんして、ディドロに沈黙をまもらせたものと考えられる。 *CORR*, t. XIV, p. 56 et note 6, p. 61, pp. 62–63, p. 91 et note 3, p. 102, pp. 115–116, p. 167, p. 179.

第2、テュルゴとネッケルとの間にはさまれた一種の困惑。ディドロは、当時、反テュルゴ工作をひそかに展開していたネッケルと非常に親しかった（ディドロは、ネッケル夫人のサロンの常連である）。ディドロは一方でテュルゴをきわめて尊敬しており（ただし、政策については後述するように、彼にたいして異論をいだいているが）、この微妙な立場に立たされた困惑のゆえに、テュルゴにかんして沈黙をまもったものと考えられる。 *TP*, pp. 40–41. Anthony STRUGNELL, *Diderot's Politics*, The Hague, Martinus Nijhof, 1973, pp. 200–205.

4) 徴税請負人の任務を、塩税、通関税、パリへの物品入市税の徴収だけに限定し、政府による直接徴収の領域を拡大した。 *Ibid.*, p. 240.

5) 病院と監獄を改革し、ベリ州とギュイエンヌ州に地方議会を設置した。この議会は、僧侶、貴族、ブルジョワジーの3階層から、国王が任命した議員によって形成される。 *Ibid.*, pp. 240–241.

6) *Ibid.*, p. 241.

報告」を發表して、国家財政の収支決算を明らかにした。無為のまま、膨大な年金を取得している廷臣たちは、その財政の実態を公開されたことに怒り、ネッケルの名声を心よく思わぬモールパと結託して、彼に抵抗する。彼はついに、1781年5月19日財政長官の地位を辞任した²¹⁾。

こうしてディドロが、1782年1月に出版されるはずの『セネカ論』第2版に最後の手をいれている頃、フランスの構造改革の現実的でない手として彼が希望を託していた3人の開明的政治家——テュルゴ、マルゼルブ、ネッケル——は次々と政府を去っていった。ディドロの眼の前には、悪しき廷臣たちの意のままになる「弱い」国王を頂点とする絶望的なフランスの姿が映っていたのである²²⁾。

すでにディドロは、『セネカ論』第2版執筆中の早い時期に——テュルゴ、マルゼルブだけが内閣を去って、ネッケルが財政長官の地位にあった時に——彼ら3人の徳をたたえることばを作中に書きいれていた。すなわち彼は、偉大な人物は、一般に公人としての美点が世間に知られているだけで、一私人としての美質は人目に隠されているとのべたあと、批評家たちに質問する形で、彼らの偉大な政治家としての徳を（そしてかくされた私人としての徳をもそれに含めて）賛美していたのであった²³⁾。

私は批評家諸氏にたずねたい。現代において〔他から抜きでた〕これらのひとつのひとり〔マルゼルブ〕について、彼の雄弁という美点と——彼が祖国に役立つことができない

- 1) ディドロは、テュルゴ——およびエコノミスト一派——の経済的自由主義政策には反対であって、彼はネッケル派とともに、政府の介入の必要性を力説し続けてきた。しかし他方で彼はまた、ネッケルの理想を欠いた実用主義の立場——「まず生き、それから哲学する」という立場——には反対であり、その点ではテュルゴの高邁な精神——「まず哲学し、それから生きる」という精神——に共感していた。 CORR, t. XIV, p. 122, pp. 141–142, p. 144; OP, pp. 62–63. A. STRUGNELL, *op. cit.*, pp. 204–205. しかし、ディドロは、テュルゴ、ネッケルそれぞれにたいする異和感を越えたより高い次元で、彼ら2人にフランスの改革への希望を託していたのである。
- 2) ドニとブレヨはいう。「改革派の諸大臣を犠牲にすることによって、ルイ16世は、特権者たちの策動にほとんど抵抗できないことを明らかにした。弱く、臆病な国王と、人民とのつながりの欠如は、彼の治世の全期間を通じて、増大するばかりであった。」 *Ibid.*, p. 242.
- 3) CN, t. I, p. 224; HN, t. I, pp. 146–147; AT, pp. 156–157. ディドロの政治思想にかんするもっともすぐれた包括的研究であるアンソニー・ストラグネル『ディドロの政治観』1973年は、ディドロの晩年の政治思想の発展にかんして、こう結論する。「モーブーが権力の座について、むきだしの暴政にたいする唯一の防壁であるように考えられていた高等法院を追放した時、ディドロは視線をフランスからロシアにむけた。そこでは、エカテリーナの計画的な改革が、すべての希望がまだ失われてしまったわけではなく、信すべき根拠を彼に与えた。そして今や彼の祖国が、再び反動のまっ黒なとばかりのもで窒息しそうになっていた時に、彼は再び視線を祖国の外、北アメリカに転じ、公平と正義の新しい夜明けの前兆を探し求めた。今度は彼は、革命の炎のなかで、新しい国家が誕生するのを目撃した。」 A. STRUGNELL, *op. cit.*, p. 205.

こうして、ストラグネルは、ディドロの政治思想の究極的形態として、暴力的人民革命論（アメリカ革命の全面的肯定）を措定している。 *Ibid.*, pp. 205–217. 特に p. 213.

しかしストラグネルは、『セネカ論』第2版のなかに重層されている初版テキストと、第2版付加文とを区分けして分析するという方法をとらなかったために、1778年（『セネカ論』初版）のディドロの立場と、1782年（第2版）のそれとを同一視するという誤った結論に追いこまれてしまっている。（彼は、第2版中にあるディドロの革命的主張〔初版テキスト〕のみをとりあげ、革命反対の主張〔第2版付加文〕を、完全に無視してしまっている。）事実上、小論で分析したように、暴力的人民革命への希望が一旦ディドロの内部で燃えあがったあと、再び強い幻滅が彼を襲うのである。

ということをはっきり自覚した時に示した——高い地位への恬淡さという美点以外になにを知っているか、と。また彼の同僚〔テュルゴ〕について、彼の普遍的な知識、国民の幸福にたいする揺るがぬ愛、および彼の政策を妨げる障害と絶えず戦う比類なき力以外になにを知っているか、と。また彼らの後継者〔ネッケル〕にかんしては、彼の無欲と、真の名声へのあこがれ、つらい職務と、日に日に増大しつつある〔敵の〕憎悪と中傷にささげた、毎日の平穏な生活の犠牲以外になにを知っているか、と。恐らく現在語られ、未来にも語られ続ける彼らの美点は、以上のものであろう。それなら、彼らはこれらの美点だけしかもっていなかったのだろうか。

しかし、その後、ネッケルもまた政府から去る。ディドロは、現実の政治的改革への諦念と改革をはばんだフランスとフランス人への苦渋をこめて、再びテュルゴ、マルゼルブ、ネッケル3人の名を、ひそかに——しかしそれとわかる形で——『セネカ論』第2版のテキストのなかで顕彰しているのである¹⁾。

古代の歴史は、絶えず偉大な人物のことをわれわれに語っていて、大衆の上にわれわれの視線をとどめさせることはめったにない。だからわれわれは、過ぎさった時代には、大衆は今ほど下品でも邪悪でもなかったように想像している。そして、昔のアテナイの通りを横ぎるたびに、誰でもデモステネスやキモンのような立派なひとと腕がふれあったに違いないなどと、つい考えてしまう。だから哲学的精神が、将来一般に広まるような状況がやってくるとでもいうのなら話は別だが、そうでなければきっと未来のひとたちも、現在われわれがパリの通りを横ぎるたびに、N***〔ネッケル〕や、M***〔マルゼルブ〕や、T***〔テュルゴ〕のような立派なひとと腕がふれあったに違いないなどと考えることだろう。

3. 過去を媒介にした現代の諷刺、同時代人への賛辞と攻撃

現代の諷刺 開明派が政権の座からおりたあと、ディドロはもはや人民にも国王にも期待することができない。この諦念に身を委ねた彼に今や残されたひとつの課題は、ローマ史という鏡に照らした現代の諷刺であり、もうひとつのそれは、現代の徳あるひとびとの賛美と背徳者への攻撃である。諷刺のペンは、現代のさまざまな特権者たちにむけられていく。

廷臣の諷刺——廷臣とはなに者か²⁾。それはあらゆる事柄にかんして、自分独自の判断をもたない存在である。なぜ独自の判断をもたないのか。それは、すべての自主的判断は身に危険を招くからである。「廷臣の哲学は、野心的な僧侶の宗教とおなじく、主人のそれである。ネロのごとき君主の傍でゼノンの哲学の制服を着ることは、フルーリ〔ジェズイットの保護者〕やミルボワ〔おな

1) CN, t. II, p. 215; HN, t. II, p. 142; AT, p. 331. ほとんど同様な表現が、『エルヴェシウス著「人間論」にたいする逐条的反駁』のうちにも見いだされる。AT, t. II, p. 393.

2) CN, t. I, pp. 29-30; HN, t. I, p. 23; AT, p. 29. AT版テキストは、<Mirepoix> <Maurepas> に変えている。

じくジェズイットの保護者〕の内閣のもとでケネル〔ジャンセニスト〕の服を身につけることである。誰もこの点では、へまをやらない。」この廷臣の態度こそ、ディドロが常々攻撃してやまない奴隷のそれにほかならなかった。

保身に汲々たる廷臣の姿の醜さは、特に元首の交代期に滑稽な形で暴露される¹⁾。ディドロは、クラウディウスの死の直後のローマ宮廷の情景を次のように語る。「君主の死後、大臣、廷臣、貴族、政治家、国民すべての不安なまなこは、後継者の上にそそがれる。誰もが彼の最初の出方を吟味する。きき耳をたて、まったく意味のない彼のことばをさまざまに解釈し、彼の癖を研究し、好みを探り、性格を見抜こうとし、仮面が落ちるのをひたすら待っている。」昨日までの寵臣が突然没落し、大勢の権力者が一挙に力を失う。新しい君主に近よる廷臣たちは、いずれも、「曖昧な表情」（それは「喜びの表情でも、忘恩の表情でもなく、悲しみの表情でも淫らな表情でもない」）をうかべている。「誰かがひとりの廷臣にたずねた。『前王御崩御の日からお見かけいたしませんでしたね。』すると彼は答えた。『実は、この際どんな顔つきをしたらいいものやら、まだ見当がつかないものですから。』」ディドロはこの廷臣たちの「曖昧な表情」の原型を、あるいはエカテリーナ2世の宮廷で実際に目撃したのかもしれない。

僧侶の諷刺——国王の前で、廷臣と競いあって香をたく存在がある。それが僧侶である²⁾。「恐らく現在でも〔ネロのように〕墮落して邪悪な君主が存在していることだろう。そこで私は知りたい。聖職者たちのうちで、いったい誰がこういう君主にむかって求められざる諫言を呈するだけの勇氣をもっているだろう。」万一彼が、国王の行為に、苦いことばをのべたとしよう。たちまち、君主の不興と人民の非難が彼の上に集中するに違いない。その時、この「尊敬すべき、賢明な」僧侶たちは、どのように身を処するであろうか。ディドロは皮肉な調子でこう答える。「彼らの地位のいかめしい権威にもかかわらず、彼らは哀願し、歎き、沈黙する。」

弁護士と裁判官の諷刺——古代ローマにおいては、キンキウス法によって、弁護士が金銭や物品の贈与を受けることは禁止されていた³⁾。なぜなら、古代の弁論家にとって、「雄弁の唯一の報酬」は、自己の名声を「不死」の境地に高めることであり、それ以外の物質的利益を考慮することは、「諸学芸の女王」である雄弁を、「いやしい奴隷の境地」におとしめることにほかならなかったからである。にもかかわらず、「大きな利益を前にすると、弁論家の廉直もぐらつく」。

特にディドロの時代には、まるで伝染病のように好訴狂がはびこり、ひとびとの間に、憎悪、密告、悪口が蔓延する。そしてちょうど伝染病の流行が医者をもうけさせるのと同様に、現代のこの病的風潮が、墮落した弁護士にひと財産をつくらせているのである。

18世紀フランスのこの退廃は、弁護士ばかりでなく裁判官にもおよんでいる⁴⁾。ディドロは、『セネカ論』初版のなかで、すでに次のような逸話を語っていた。それによれば、ローマ共和制末

1) CN, t. I, pp. 67-68; HN, t. I, p. 47; AT, p. 54.

2) CN, t. I, p. 159; HN, t. I, p. 105; AT, p. 112.

3) CN, t. I, p. 48; HN, t. I, p. 34; AT, p. 41.

4) S, pp. 359-360; CN, t. II, pp. 120-121; HN, t. II, p. 82; AT, p. 270.

期の政治家で、「遊蕩児」であったクロディウスが、祭の日に女装してカエサル邸にまぎれこみ、カエサルの妻と情交して訴えられたが、多額の金銭を裁判官にばらまいて無罪で釈放されたという。ディドロは、第2版において、この逸話に注釈して、「以上のような事柄は、今日でも、いつの時代にでも見られる話だ」とのべている。

君主への直接的呼びかけ——『セネカ論』初版のなかには、ディドロから君主にむかっの直接的呼びかけがいくつか見いだされたが（第二部、第Ⅲ章、3の「現代の批判」の項参照）、第2版においてもまたこの種の呼びかけが存在している。

ディドロは初版中のテキストのなかで、即位したネロが、はじめて元老院に登院して行なった施政方針演説の具体的諸条項を、次のように紹介していた¹⁾。——すぐれた助言と忠告にしたがう。特にアウグストゥスの統治方針にしたがう。悪弊を改革する。独断的決定をくさない。寵臣の意向によって裁判の判決を左右させない。宮廷において、金銭の支配と陰謀の横行を排除する。国家収入と皇帝家の所得とを分離する。元老院に古来からの権限を回復する。イタリア本土の住民のみならず、属州民にたいしても執政官に上訴し、また元老院の審理をうける権利を認める。皇帝の義務を厳守し、軍隊の維持に配慮する。

ディドロは、第2版において、上記初版テキストのすぐあとに、諸国の君主にたいする次の直接的呼びかけを付加している。「玉座につく諸国の王よ、この演説を読んで、熟考されんことを」と。

君主の治世の明暗にたいする諷刺——ディドロは、ネロの治世の明暗——初期の善政から後期の暴政への交替——に触れながら、「ネロは呪われて死んだ。もう数年も前であれば、哀惜されて死んだであろうに」と指摘する²⁾。このように、どの君主の治世においても、成功期と失敗期とが交替する。ディドロは、このことをフランスを例にとり、次のように説明する。「国民の喜びをつくりだした事件の日付を繰りあげるか、繰りさげるかしてみたまえ。そうすれば誰もが仰天するであろう。君はフランス国民のうめき声をききたいというのか。それならルイ14世の治世を20年から25年ほど短縮してみればよい。私はもっと近年の例をあげて、時期によってどれほど人心の反応が異なっているかを示すこともできる。」

ディドロは、ここでそれ以上詳しい説明を与えようとはしないが、「もっと近年の例」とは、1774年からはじまるルイ16世の治世を指していることは明らかである。われわれは、ここにもまた、ディドロの心のなかでいったんは燃えあがったものの、すぐさまはかなく消えさっていった、開明派の政治家の手によるフランス国内の改革にたいする希望と幻滅の軌跡を読みとることができる³⁾。

同時代人への賛辞 現実の改革に絶望したディドロは、『セネカ論』初版におけるよりももっと

1) S, pp.87-88; CN, t.I, pp.73-74; HN, t.I, pp.50-51; AT, p.58.

2) CN, t.I, p.169-170; HN, t.I, p.112; AT, p.118.

3) ディドロはまた別の箇所、ネロの治世の明暗を語ったあと、「歴史と経験とは、王の生涯の間にさまざまな時期を画すべきことをわれわれに教えていないであろうか」と付言している。CN, t.II, p.254; HN, t.II, p.166; AT, p.358. この「歴史と経験」ということばは暗示的である。すべてはやはり、ディドロの意識の内部の希望にいたる曲線をさし示している。

大規模な形で、彼のこの文学的遺書『セネカ論』第2版のなかに、自分と同時代の有徳者にたいする頌辞を書き残して、それを「後世」に伝えようと意図している。

ヴォルテールへの賛辞——すでに検討したように、ディドロは『セネカ論』初版のなかで、ヴォルテールの生涯と業績にたいする熱烈な称賛を表明していたのであるが（第二部、第三章、3の「ヴォルテールへの賛美」の項参照）、第2版においてもまた、彼は再度この死んだ哲学者一派の長老にたいして、敬虔な頌辞を捧げる¹⁾。頌辞の目的は、主としてヴォルテールがフランス以外の国々でうけた死後の榮譽をたたえることにある。

ディドロが第2版のなかにこの頌辞を付加した直接の契機は、初版におけるヴォルテール賛美が、ある批評家（グロジェ神父）によって、はげしく嘲弄されたからであった²⁾。

まず批評家は、「一国民全体が、国王にさえ与えたことがないような称賛を、あなた〔ヴォルテール〕にささげた」というディドロの初版のことばをとりあげて、「つまらぬ嘘っぱち」と評する。これにたいしてディドロは、「確かにそのとおり。この国民のなかから僧侶だけは除外しておくべきであった」とやり返す。

また、批評家は、ディドロが初版に書いた「あなた〔ヴォルテール〕は、世界でもっとも開明された首都〔パリ〕で、凱旋式の榮譽を与えられた」という一句に、「滑稽きわまるお祭り騒ぎ」という注釈を加える。これにたいしてディドロは、「それでは以下に、この滑稽きわまるお祭り騒ぎの序幕と幕切れとをのししておこう」と前置きしたうえで、次のように詳細な反駁を展開する。

ヴォルテールの偉大さは、すでに世界中のひとびとから承認されている。フランス国内では、多くの文学者が生前から彼に彫像を捧げていたし、死後にはフランス・アカデミがモリエールの胸像の傍に彼の胸像を設置するとともに、彼にたいする頌辞を懸賞課題として募集している。フランス座の舞台では、今この瞬間にも、彼の胸像には冠が捧げられている。外国では、「偉大な国王」フリードリヒ2世が幕営でヴォルテール頌を執筆している。「偉大な女帝」エカテリーナ2世は、ヴォルテールの蔵書を買ひあげ、宮殿内に彼のための祭壇を築き、彼の姪あての手紙では、彼のことを「私に友情をいだいてくれた偉大な人物」と呼んでいる。

続いてディドロは、「滑稽きわまるお祭り騒ぎ」ということばに徹底的な反撃を加える。——このことばを読んで「もっともはげしい憤激」にかられない人間がいようか。ここには、「尊敬されている才能にたいする怒り」よりももっといやしい「勢力ある狂信〔者たち〕にたいするへつらい」がある。同時代の大勢のひとびとの判断にたいする「驚くべき軽蔑」と「大胆な無関心」がある。これほどいやしい批評家がなぜフランスに存在しているのであろうか、と。

最後にディドロは、死んだヴォルテールにたいするベルリンの教会とパリの教会との余りにも大きな態度の相違に慨嘆の声をあげる。すなわち、ベルリンのカトリック教会が、「ヴォルテールの魂をまつる厳粛な儀式」をあげている一方、「フランスの僧侶は、彼の埋葬を拒否した」のである。

1) CN, t. II, pp. 305-308; HN, t. II, pp. 200-202; AT, pp. 395-397.

2) ブリエールによれば、ディドロにたいする以下の嘲弄的批判は、L'abbé Grosier, *Journal de littérature* に掲載されたものであるという。BR, t. II, p. 129, notes 1 et 2.

だが、これは確かな事実なのだ。イギリスの貴族たちが、国王の墓地の間をぬって、ニュートンの骨壺の傍まで、ガリック〔シェイクスピア劇の名俳優〕の遺骸につきそっていったその年に、フランスでは、コルネーユとラシーヌに比肩される人物に、土地のひとにぎり、墓地のほんの片隅を与えることすらこぼんだのである。

自分自身の死期が余り遠くないことを自覚していたに違いないディドロにとって、最大の関心事は恐らく自己の死後の運命である。ヴォルテールの死後の運命にたいするこの配慮のうちには、ディドロの自分自身の死後の運命にたいする懸念が表現されている¹⁾。

ネジョンへの賛辞——ディドロは、『セネカ論』第2版のなかに、ある「匿名の人物〔マルモンテル〕」のネジョン擁護と賛美のことばを掲載している²⁾。この「匿名の人物」は、「『セネカ論』初版の編集者〔ネジョン〕は、哲学の見習小僧だ」と断定した批評家に抗議している。ネジョンは決して「見習小僧」ではない。彼はすでにギリシア語、ラテン語、近代諸国語、古代史、自然科学に通暁した一人前の学者である。そのことは、彼の「セネカにかんする仕事」（ラ・グランジュ訳『セネカ著作集』の注とディドロ『セネカ論』初版の注）が証明している。それだけではない。ネジョンはまた哲学者に不可欠の条件、すなわち深い思索力をそなえており、その成果は、上記の注釈の仕事のなかに遺憾なく発揮されているのである、と。

そしてディドロはこの「匿名の人物」の意見に付言している。「批評家が、ネジョンを哲学の見習小僧と呼んだ時、彼はそれと気づかずに、また自分のことばの意味も理解せずに、正しいことをいっていたのだ。」「真理の探求」と「徳の実践」を目ざす哲学者にとって、「哲学の見習小僧」でなくなる日はないのであるから、と。

マルモンテルへの賛辞——ディドロは、『セネカ論』第2版のなかで、「崇高な論文」の著者セネカを、一介の「修辞家」にすぎないと非難する批評家に反駁するために、「ある作家」の意見を掲載している³⁾。この「ある作家」とは、実はマルモンテルのことである。

マルモンテルは、ディドロを擁護している。「このセネカ弁護者〔ディドロ〕は、知ったかぶり屋の教師と、できの悪い生徒の群にたいして、セネカを弁護する勇気をもったという点だけでも称賛に値する。私はこの連中の悪意を煽動する読者の群を、フェリペ2世〔スペイン王〕や3頭政治の執政官〔ローマのアントニウス、オクタウィアヌス、レピドゥス〕になぞらえたいと思う。前者はオレンジ公を暗殺した人間は貴族にしてやると約束したし、後者はもっともすぐれた市民の首

- 1) 『セネカ論』第2版では、ヴォルテールのラ・メトリ賛美に言及した箇所がある。これにたいして、ラ・メトリの価値を認めていないディドロは、自分はヴォルテールを尊敬するが、いつも彼と同意見であるとは限らないという。CN, t. II, pp. 31-32; HN, t. II, p. 23; AT, pp. 218-219.
- 2) CN, t. II, p. 318; HN, t. II, p. 208; AT, pp. 403-404. なおブリュエルは、このネジョンにたいする批評は、Rouyou, *Journal de Monsieur* にでたものであろうと推測していたが、アセザによればこの推測は誤りで、L'abbé Aubert, *Annonces, Affiches et Avis divers — Journal général de France* が正しいという。BR, t. II, p. 142, note 1. AT, p. 403, note 1; p. 404, note 1.
- 3) CN, t. II, pp. 49-50; HN, t. II, pp. 35-36; AT, p. 229.

をとってきた人間を、国家第一等の地位につけてやったのだ」と。

そしてディドロはそのあとに、この「ある作家」マルモンテルにたいする、次のような賛美の一文を付け加えている（マルモンテルの名前は明記されていないが、当時の読者には、これが誰を指すか、容易に推察できたはずである）。「感情と真実と優雅と気品とにあふれたこの作家のさまざまな著作は、すべての国語に翻訳されてきたが、たとえこれらの国語が減じたとしても、彼の作品だけは生き続けるであろう。」

ドルバックへの賛辞——ディドロは、ネジョン頌の場合とおなじく、ここでもまた、ある「匿名の人物」〔マルモンテル〕のドルバック賛美のことばを掲載する。この「匿名の人物」は、「現在ひとつの哲学結社が存在している」という批評家のことばをとりあげて、これに反論を加えつつ、ドルバックの高邁な人格に——ただし、最後まで彼の名前はふせたままで——称賛のことばを送っている¹⁾。（ドルバックは、その当時、パリのロワイヤル・サン＝ロックの本邸、あるいはグランヴァルの別邸で、哲学者たちの秘密組織をつくっていると噂されていた。）

「匿名の人物」は次のようにいう。まず「この結社は、実在しているどころか、本当は、批評家の頭のなかにすら存在していない」。結社が実在しているにせよ、いないにせよ、そんなことは、「孤独」のうちで、「家族」と「友人」に尊敬されて暮らしている「人物」（ドルバック）にとっては問題ではない。彼が生活しているのは、「きわめて狭い空間」にすぎないが、そこには「出身、身分、広く多様な知識によって有名な内外のひとびと」が続々とつめかけてくるのである、と。

ディドロは最後に、この「匿名の人物」の意見に付け加えていう。この「たぐい稀な人物」は、もし望みさえしていれば、すでにずっと以前に「3種類の月桂冠」を獲得していたであろうが、それすらも「彼にふさわしい称賛の最小限度」なのである、と。

レナル神父への賛辞——すでに詳しく検討したように、ディドロは『セネカ論』第2版出版以前に、グリムあての『レナル神父弁護の手紙』を執筆して、彼の立場を擁護していたのであるが（第三部、第1章、3の『『レナル神父弁護の手紙』の項参照）、第2版のなかにもまたレナル神父擁護と賛美のことばが見いだされる²⁾。

ディドロは、批評家たちが、『両インドにおけるヨーロッパ人の植民事業と通商にかんする哲学的・政治的歴史』の著者レナル神父を侮辱することは許されないという。なぜなら神父は、「全ヨーロッパにおいて認められ、尊敬されている人物」だからである。事実、オランダ国民は彼にたいして、「もっとも好意的な尊敬のしるしを示しており、またフランスの敵イギリス軍ですら、アメリカ独立軍に従軍して俘虜となったレナル神父の甥を、神父の才能にたいする敬意のゆえに、わざわざフランスまで送還してくれたのである。そしてディドロは最後に、「学問的調査と大胆さと雄

1) CN, t. II, pp. 293-294; HN, t. II, pp. 192-193; AT, pp. 385-387. なおブリエールによれば、この批評家のことばは、L'abbé Grosier, *Journal de littérature* に見いだされるという。BR, t. II, p. 112, note 2.

2) CN, t. II, pp. 302-303; HN, t. II, pp. 198-199; AT, pp. 393-394. 『レナル神父弁護の手紙』の本文は、1781年3月25日、追伸は同年5月25日に執筆されているが、ヴァルロットによれば、『セネカ論』第2版中のレナル神父頌の部分が書かれたのは、それより約1年前であろうという。CORR, t. XV, pp. 240-241 et note 16.

弁と天才」にみちた書物『両インド史』の著者を攻撃する批評家にむかって、こうはげしくののしり返す。「あわれなへっぽこジャーナリストよ。黙りたまえ。君は自分がなにをいっているかわかっていない。黙りたまえ。君は正直で感じやすいひとたちの心の底に、怒りの火をつけた。そして彼らに堪忍袋の緒を切らせ、君がつまらぬ人間であることも忘れて、怒りを抑えられないようにしてしまったのだ」と。

ダランベールとコンドルセへの賛辞——ディドロは、『セネカ論』第2版のある箇所¹⁾で、古今の有名な伝記作家として、タキトゥス、プルタルコス、モレリ、ペール、ショーフピエ、マルジャン、フォントネル、ダランベール、コンドルセの名前をあげているが²⁾、そのうちでダランベールとコンドルセの2人にかんしては、注のなかで特に場所をさいて、賛美のことばを書きとめている³⁾。

伝記作家としてのダランベールの特徴は、「繊細で、巧妙で、面白く、しかも大胆である」点にあり、他方コンドルセのそれは、「徳と背徳とを描きだす力強さと技術」にある。2人の技術はそれぞれ異なるが、ともに「偉大な描写家」であって、対象の美点を「鮮明な光」に照らしだすが、対象の欠点は「半濃淡」のなかに半ばかくして、読者に提示する。彼らはまた「真と善と美にたいする愛」においても一致している。読者が彼らの著作中に見いだすのは、「有能な人間」と同時に、「誠実な人間」なのだと、ディドロは結論している。

ジョフラン夫人への賛辞——ディドロは、「機知と立派な友人と慈善によって有名なある夫人」という呼び名で——ただし本名はあかさないで——ジョフラン夫人を指し、「この有名なある夫人」が語ったことばを『セネカ論』第2版に収録して、彼女の徳をたたえている⁴⁾。彼女はこういったという。「私は昔、偉大な芸術家の面倒をみてきましたが、今ではむしろ貧しい芸術家を援助したいと思います。昔は自分の趣味の声をきいていたのですが、今では心の声に耳を傾けています。」

エカテリーナ2世への賛辞——ディドロはすでに『セネカ論』初版のなかに、エカテリーナ2世の恩恵に感謝することばを——彼女の実名はあげずに、婉曲な表現を使って——書きこんでいたのであるが（第二部、第三章、2の「啓蒙君主への感謝」の項参照）、第2版のなかでは、この「有能にして偉大な北方の女帝」⁵⁾にたいする賛辞を——依然として彼女の実名こそあげていないが、今度ははっきりそれとわかる明確な表現を使って——次のように書きとめている⁶⁾。

ディドロはある日、「偉大な女帝の部屋」で、彼女にこう語った。——専制的な政府の束縛は、国民の精神を偏狭にしてしまう。「ひとが精一杯ものを考え、精一杯それを語れるのは、墓の底からです。墓の底に身を置かねばなりません。哲学者に遺言状を書くことを勧めたひとは⁷⁾、有益で

1) CN, t.I, p.225; HN, t.I, p.147; AT, p.157.

2) CN, t.I, p.334, note (324f.f); HN, t.I, p.240, note (324f.f); AT, p.157, note 2.

3) CN, t.II, p.169; HN, t.II, p.113; AT, p.301.

4) CN, t.I, p.144; HN, t.I, p.96; AT, p.103.

5) CN, t.II, p.33; HN, t.II, p.24; AT, p.219.

6) ダランベールをさす。ネジョンは、ラ・グランジュ訳『セネカ著作集』第1巻、巻頭の「編集者の前書」のなかで、ダランベールがフランス・アカデミでのべた「サン＝ピエール神父頌」のなかのことばとして、この一節を引用している。 *Les Œuvres de Sénèque, traduites en français par Feu M. La Grange*, Paris, Chez les Frères de Bure, 1778, t.I, pp.xx-xxi et note (12).

偉大な考えを抱いていたのです」と。すると女帝は、「あなたは、パリでもそんな意見を大っぴらに口にされますか」と問う。これにたいしてディドロは、「いいえ。私は奴隷の国と呼ばれている所で、私の心のなかに自由人の魂を見だし、自由人の国と呼ばれている所で、奴隷の魂を見しました」と答えたが、そのとき女帝は即座に、「今までこれほど嬉しいことばをきいたことはありません」と応じたという。

フランスでは「奴隷の魂」を、ロシアでは「自由人の魂」を見いだすということばは、はたしてディドロの本心だったであろうか。ただわれわれにとって確実なのは、『セネカ論』第2版のディドロの眼には、自国のあの「弱い」国王ルイ16世にくらべて、この北国の力強い女帝が、統治者としてははるかに英邁な資質をそなえた人物として映っていたということである。

ルソーへの攻撃(一) 『セネカ論』第2版のなかでは、同時代の徳あるひとびとへの賛美とならんで、同時代の背徳者への攻撃が展開される。攻撃の第1の対象は、ジャン＝ジャック・ルソーであり、第2のそれはフレロン父子である。以下順次この2人への攻撃を検討していこう。

ディドロは、すでに『セネカ論』初版のなかに、ルソー弾劾の文章を——ただしルソーの名前はふせたままで——2ページたらずの脚注の形で挿入していたのであったが、第2版ではこの注をとりさって、その代わりに本文内に16ページにおよぶルソー攻撃文を——今度は彼の実名をあげて——収録する¹⁾。第2版のルソー攻撃文は、ルソーにかんする種々雑多な批判の集録——時には相互に矛盾する主張の断片的集録——という形態をとっているのであるが、以下にその主要な論点をひきだして、この攻撃文の意味を検討しよう。

初版にルソー攻撃文を付け加えたことの弁明——ディドロはまず、『セネカ論』初版に、ルソーを弾劾する注を加えたことの「弁明」からはじめる。この弁明において注目すべき点は、ディドロの強度の自己防衛的心理であろう。すなわち彼は、ここで、自分が先にルソーを背徳者と呼び、自分が先にルソーを攻撃したという印象を他人に与えることを回避しようとして、きわめて屈折した表現をとっているのである。後述するように、この屈折のなかに、ディドロが意識の奥底では恐らくは決して真に憎んだことがないルソーにたいして——『告白』によって哲学者一派に加えられるようとしている攻撃のゆえに——やむをえず公然たる反撃にでざるをえなくなった無念さを読みとるべきなのかもしれない。(『セネカ論』初版のルソーについての注の場合とおなじく、第2版のルソーにかんする文章もまた、その直接の狙いは『告白』への反撃——より正確には予防的先制攻撃——である。なお付言すれば、『セネカ論』第2版が出版された1782年1月の時点では、『告白』はまだ公刊されていない。『告白』第一部〔第1巻—第6巻〕は、1782年5月、第二部〔第7巻—第12巻〕は1788年にそれぞれ公衆の前に姿をあらわす。)

「私の〔初版の〕攻撃は、ジャン＝ジャックを狙っていたと一般にいられている。」ディドロはこのべたあと、次のようになん重にも逃げ道をつくった表現をかりてルソーを告発しつつ、自分には挑戦的意志がないことを弁明する。——「このジャン＝ジャック」は、はたして「昔からの友

1) CN, t. I, pp. 125–140; HN, t. I, pp. 83–93; AT, pp. 90–100. 初版のルソーにかんする注は、若干の訂正をへたうえで、第2版のルソー攻撃文の冒頭に収められている。

人たち」にかんして、「中傷」的言辞を弄し、「恩人たち」にたいして「もっとも腹黒い忘恩」を犯していたのだろうか。また自分が握っている「秘密」を、死後出版の『告白』であばいて、今まで平和に暮らしていた「家族」や「友人」たちの間に、「不和」と「敵意」を投げこもうとしているのだろうか。もしそれが事実なら、私は彼の墓の上に、「このジャン＝ジャックは背徳漢である」と書きこもう。

だがもし逆に、「ジャン＝ジャックは、こんなことはなにもしていなかったのだとしよう。それなら私が〔初版で〕語ったのは、彼についてではない」。ディドロはこう逃げたあと、さらに巧妙に、——あるいはむしろ狡猾に——次のように続ける¹⁾。

誰それがこんな非行を犯した、と吹聴してまわり、その話に信憑性を与えるために、自分もまたこれこれの非行を犯しましたと告白するほど狡猾な悪漢がいるだろうか。そんな悪漢が今までいたのだろうか。そんなことは信じられない、と私は〔初版で〕明示しておいた。批評家諸君、諸君はいったい誰のことを指しているのだ。もしも非難されるべき人間がいるとすれば、それは諸君だ。私は醜惡な顔を描きだただけなのに、諸君がその下にモデルの名前を書きこんだのだ。

ディドロは続いて——今度もまた慎重にアリバイを用意しつつ——「公平に物事を判断できるひとびと」の意見なるものを紹介する。このひとたちはいう。——もし「問題の秘密回想録」（『告白』）が存在しなければ、それをめぐる賛否両論は一挙に終息するだろう。だがもし存在すれば、端的にこう結論すべきだ。「自分の遺骸の灰をふやすために、墓のなかに世紀全体をひっぱりこもうとすること」は、「気持ちがいい」じみており、「残忍」きわまる、と。

「公平に物事を判断するひとびと」は続ける。なるほど、初版のルソーにかんする文章が——ただし、「もしそれがルソーにむけられたものであるとして」——「きわめて攻撃的」であったことは認めよう。だがそれなら、大勢のひとの悪口を書きこんだ「回想録」を死後に出版しようとする人物については、どう考えればよいのか。（ルソーは「後世の審判」を軽蔑しているが、他人もそうだと考えることは許されない。）確かにジャン＝ジャックの「文章はうまい」。だが、その「疑いぶかい性格」のために「20人もの尊敬すべき友人たち」——ダランベール、ヴォルテール、マレジャル、ヒューム、デュソー、『セネカ論』初版の著者、その他——を失ってしまった。『告白』が出版されようと、されまいと、ルソーが多くの時間をかけて、冷静に「中傷文書」を執筆したことは事実なのだ。

「公平に物事を判断するひとびと」はさらに続ける²⁾。（だが、次のことばを読めば、この公平に物事を判断するひとびと」という仮面の背後から、すでにディドロ自身の顔がのぞいていることは明らかであろう。ここには、もし『告白』さえ存在しなければルソーにたいして永久に平和を保

1) CN, t. I, p. 127; HN, t. I, p. 85; AT, p. 92.

2) CN, t. I, p. 129; HN, t. I, p. 86; AT, p. 93.

つことができたのに、というディドロの無念さが——一種の愚痴ともいえるような無念さが——ききわけられるであろう。)

もし彼が、大勢の証人たちの前で、いまわしい『告白』を灰にしたと公表しさえしていれば、彼の敵は沈黙していたであろうし、彼の才能の賛美者たちは、彼をフランス最高の作家のうちに加えていたであろうし、彼の徳の熱狂者は彼を聖者の列に連ならせていたであろう。

ここまで来たあと、ディドロは突然今までかぶってきた仮面をぬぎすて、今度は自分自身の口で語りはじめる。——「いやいや、批評家諸君。私がこうして発言しているのは、決してジャン＝ジャックの死後に刊行される著作〔『告白』〕のなかで、私の悪口がいわれることが恐いからではない。」私は、自分が『告白』のなかで「不幸にも」「容赦」されているということを知っている¹⁾。だから「今度は、私は他人の仇を討っているにすぎない」と。

ディドロは続ける。ルソーの賛美者は、ルソーの「崇高な徳」は、その作品を読むだけで明らかであるというが、それなら「説教師」の品行の正しさと信仰のあつさは、その「説教文」を読むだけで明らかなのだろうか、と。

ディドロはまた続ける。私の批判者の「聖者」はルソーであり、私の「聖者」はセネカである。ただ批判者は、セネカの傍で生活したことがないのに反して、私はジャン＝ジャックと「17年間」²⁾の交友をもったという点が違う。「われわれ〔ディドロとルソー〕は、恐らく2人の狂信家だろう。だが、もし間違いでなければ、滑稽なのは、自分の同胞をばかにするほうの狂信家だろう」と。

ディドロはついで、2人の人物がルソーの味方をしたことを批判している。ひとり（ドラ³⁾）は、ルソーを深く知りもしないくせに、彼の発言——他人への称賛や非難——の「公けの証人」になると申しでている。これは「腹黒い行為」でないにしても、少なくとも「頭脳の軽薄さ」を表わしており、「許しがたい暴言」である。またもうひとり（ドレール⁴⁾）は、ルソーの死後、彼に熱狂的賛辞を呈したが、これが自分の尊敬すべき友人にたいする「皮肉」になっていることに気づいていない。だがこの「重大な過失」も、彼の「感情の高貴さ」のゆえに許されるであろう、と。

ディドロの非難者たちは、「ルソーが死んだからといって彼を攻撃するのは卑怯である」、「君〔ディドロ〕はルソーの魂に侮辱を加えた」といって怒っている。これにたいしてディドロは次のように答える。もし死者を攻撃するのが卑怯だというのなら、セネカもまた死者ではないのか。自分はルソーの魂を侮辱しているのではない。彼の魂が生者を侮辱するのが許せなかったのである。

1) ディドロはいう。「ルソーは、もっとも信頼のおける人物、碑文アカデミー会員デュソー氏や、その他大勢のひとの前でわざわざ『告白』を朗読したのであるが、彼らの口を通して、私はルソーが悪口をいった大勢の人物の間で、不幸にも容赦されていることを知った。」 CN, t.I, p.130; HN, t.I, p.87; AT, p.93.

2) *Ibid.*「17年間」という数字は正しくない。ディドロとルソーの交友関係は、1742年から1757年までの間だから、正確には「15年間」というべきであろう。

3) CN, t.I, p.310, note (*); HN, t.I, p.215, note (*); AT, p.94, note 1.

4) CN, t.I, p.310, note (**); HN, t.I, p.215, note (**); AT, p.94, note 2.

と。そしてこう結論する。「広く一般に流布された噂によって、ひどい中傷文書が近く世に出そうだということを知ったとき、私はその中傷の効果を〔『セネカ論』初版の注によって〕予防しようとしたが、そのことを決して後悔しないであろう」と。

ルソーへの攻撃(二) 文学者ルソーの評価——文学者としてのルソーは、どのように評価すべきであろうか。ルソーの賛美者は、「ジャン＝ジャックはフランスの作家中、もっとも雄弁であった」とほめあげる。これにたいしてディドロは、ルソーの全作品よりも、トマ『フェヌロン頌』、同『マルクス＝アウレリウス頌』、ビュフォン『博物誌』のほうが好ましいと反論する。「彼が雄弁だったとしても誰も、彼以上に雄弁を悪用した者はいなかったということを認めねばならない。」

それではディドロは、ルソーの文学作品の価値を全然認めないのであるか。否、むしろ逆である。彼は、『セネカ論』の編集者ネジョンが、初版の注(367)¹⁾のなかで、ルソーを「巧妙な詭弁家」と評し、ルソーの著作中で最も高く評価されている「哲学思想と道徳・政治原理の大部分」は、すべてセネカ、プルタルコス、モンテーニュ、ロックからの借用にすぎないと断定していたのにたいして、第2版のなかで、こう反論しているのである。「私の初版の編集者には失礼だが、私はジュネーヴ市民の著作を非常に高く評価している²⁾」と。

しかし、ここでもまたディドロの意識は屈折している。彼はこのあとすぐに、ルソーの著作の美点を説明しようとはせずに、まず「恐らくひとは、私にこういつて反論するだろう……」と断って、文筆家ルソーにたいする否定的意見を列挙しているのである。これもまた、自分には挑戦的意図がないという釈明を用意しつつ、ルソーを攻撃したいという心理をあらわしているのであろうか。それともむしろ、文筆家ルソーにたいするディドロ自身の評価が肯定・否定両面の間でゆれていたということをあらわしているのだろうか。いずれにせよ、ディドロは、次に列挙する否定的意見を、彼自ら積極的に打ち消そうとはしていない。

「おそらくひとは、私にこういつて反論するだろう……」³⁾とディドロは続ける。——ルソーの著作中、彼の独創と呼べるものはひとつも存在しない。彼が主張する「基本的な観念」(賢明なもの、ばかげたものも、すべて他人の着想である)、「社会状態」より「未開状態」を優先する考え(昔からの論争のむしかえしにすぎぬ)、「学問と芸術の進歩」にたいする「無知の擁護」(彼以前にすでに100度も試みられている)、「社会契約」の思想(この思想の基礎と細目とは、どこにでも見いだされる)、『新エロイズ』(モデルはリチャードソンの小説だが、出来具合にいたっては、モデルと比肩すべくもない)、『村の占者』(今日では、まったくとるにたらない音楽だ)、『エミール』の子どもの教育法(気まぐれな思いつきにすぎず、むしろロックの児童教育論にしたがうべきだ)、産衣は新生児の体の発達を阻害するという考え(すでに多くのモラリストと、医師がのべている)、産婦が授乳しないと、自分の体に悪いという考え(これが常識化したのは、ルソーの雄弁

1) S, pp.268-270, note (367); CN, t.I, pp.352-356, note (367); HN, t.I, pp.256-259; AT, pp.196-198, note 2. ただしネジョンは、ルソーのことを、M. R. de G. [Monsieur Rousseau de Genève] あるいは M. R. と表記している。

2) CN, t.I, p.132; HN, t.I, p.88; AT, p.95.

3) Ibid.

によってではなく、多くの母親が、授乳しなかったために健康を害したからだ)。

ディドロは、このように、文筆家ルソーにたいして予想されうる否定的評価を「ひと」(<on>)の口をとおして語ったあと、慎重に自分の意見を語りだす。

上記の意見が誤っているにせよ、正しいにせよ、ジャン＝ジャックは文学者の間では、描写における偉大な色彩家であるという長所をもち続けるだろう。なるほど彼の作品のデッサンはふたしかだし、その衣裳のつけ方も投げやりだが、それにもかかわらず彼の作品は愛好者によってひっぱりだこになっている。

ルソーへの非難(三) 人間ルソーの評価——いま見たように、文学者ルソーの才能は、決して否定しないディドロではあるが、彼の性格と行動にかんしては、次のような激しいことばを使って攻撃を加える¹⁾。

ジャン＝ジャックは、今から200年前ならば、宗教的分派の首領になっていただろうが、いつの時代でも、祖国では人民煽動家だ。森のなかに住んで孤独な生活を送ったために破滅してしまったのだ。あんな性格をもち、あんな動機で森にはいったのでは、人間がよくなるはずもあるまい。のちに彼の身に起こった出来事は、ずっと以前から私がすでに予言しておいたとおりのことだった。

ジャン＝ジャックは、生前どんなことをしていただろうか。——『サヴォワの助任司祭の信仰告白』を書いて祖国の神を嘲弄し、宗教の秘儀を、不条理な謎々扱いし、奇跡をおとぎ話だとみなしていた。娼婦を好み、徴税請負人の家庭にたえず出いりしていた。

それならいったい、なぜこれほどいかがわしい人物が、生前、死後を通じて「利害、意見、性格において、もっとも対立しあっているさまざまな階層の市民」の間に、「熱狂的な信奉者」を獲得しえたのだろうか。「答えは簡単である。それは彼が反哲学者になったからだ。」

「反哲学者」にしたがう、これら「狂信者」の群の振舞いは恐るべきものである。彼らは神を愛するよりも、むしろ敵を憎む。宗教を信ぜず、尊重もしないくせに、宗教家は攻撃しないで、むしろ哲学者を憎む。彼を信奉する「老女たち」は、無条件で彼の意見にしたがい、「若い女たち」は彼の小説の「官能的な描写」に魅惑される。「社交界のひと」の大部分は、彼が書いた『人間不平等起源論』のことは忘れて、彼を許してやる。そればかりか、「文学者」のうちのある者は、政治的利害のからんだ宗教的党派心からルソーの肩をもって権力者に迎合するし、また別の者は、ルソーの性格的欠陥をよく知っているくせに、彼の文学的才能のゆえに、ルソー賛美者の列に加わるというありさまだ。

1) CN, t. I, p. 134; HN, t. I, p. 89; AT, p. 96.

「だが、20年間も哲学者たちと一緒に生活したあとで、どうしてジャン＝ジャックは反哲学者になったのか。」ディドロは、自らにこう問いかけたあと、この矛盾こそ、ルソーの行動に認められる一貫した型であるとのべて、次のような矛盾の実例をあげている。——プロテスタントからカトリックになり、カトリックからまたプロテスタントになったこと。1週間のうちに2通の手紙をジュネーヴに送り、一方では平和を、他方では復讐と反抗を説いたこと。パリでは未開人の立場をとり、カナダの森林では文明人の立場をとったこと。演劇を書いたあとで反演劇論を書いたこと。世論がフランス音楽を擁護している時にはフランス音楽に反対し、世論がフランス音楽に反対している時にはフランス音楽を擁護したこと。一生文筆を業としながら文学の悪口をいい、好色小説を書きながら、道德の退廃を攻撃したこと。尊敬するひとを中傷し、中傷したあとで交際を求めたこと。イエズス会士を危険視しておきながら、彼らがフランスから追放されるや、彼らを弁護したこと¹⁾。

ルソーとの個人的交際関係の総括——ディドロのルソー攻撃文は、最後に彼との個人的交友関係の総括に移っていくが、それとともに彼の文章のうちには次第に追憶の感傷と未練とが混入しはじめてくる。

個人的交友関係の最初の深い思い出は、ヴェンセンヌの城塞司令官邸に軟禁されていたディドロのもとに、ルソーが訪ねてきて、ディジョンのアカデミーの懸賞論文の課題「学問、芸術の進歩は、風俗を墮落させたか、それとも純化させたか」、にたいして、どう答えるべきかという相談をもちかけた時のことである²⁾。

ディジョンのアカデミーの懸賞課題が発表されたとき、彼はどういう立場をとったらいいかと私に相談にきた。君のとるべき立場は、誰もがとらない立場だ、と私は答えた。君のいうとおりだ、と彼は応じた。

第2の思い出は、ルソーの口からなん度もきかされた次のことばである。「私の心は恩知らずだと思う。私は恩人が嫌いだ。というのは、恩恵は感謝を強制し、感謝は義務となり、義務は耐えがたいからだ。」ルソーはこのことをマルゼルブに書いているが(『マルゼルブ院長あての4通の手紙』1)、これとおなじことをディドロにも20ぺんも語っていたという。

「それなら軽蔑する世捨人〔ルソー〕の部屋になぜ17年間も通い続けたのか。」ディドロはこう

-
- 1) ディドロによれば、ルソーの反応はこうに信じがたかったら、彼が、自分はキリスト教徒だ、と主張した時に、「君はイエス＝キリストがユダヤ人であるようにキリスト教徒だ」と答えたという。また、彼が自分はキリストの復活を信ずると語った時には、「ピラトが、イエス＝キリストは死んだのかとたずねた時に、彼がイエスの復活を信じていたのと同程度には、君はそれを信じている〔つまりイエスの復活を、ほんとうは信じていない〕」と答えたという。CN, t. II, p. 137; HN, t. II, p. 91; AT, p. 98.
 - 2) *Ibid.* ディドロは、この事件にかんして、これ以上にも説明していないが、その内容はルソーが残している『学問芸術論』の着想をめぐる3つの証言(『マルゼルブ院長あての4通の手紙』2, 『告白』第8巻, 第2『対話』)およびディドロ側のもうひとつの証言(『エルヴェシウス著「人間論」にたいする逐条的反駁』第27ページ反駁, AT, t. II, p. 285)と矛盾する点は含んでいない(ただしルソー第2『対話』は、ディドロの会見には、触れていない)。

いう問いを提出し、次のように答えている¹⁾。

裏切られた恋人にむかって、なぜそんなにいつまでも恩知らずの女に未練を残すのか、ときいてみたまえ。そうすればひとりの文学者が、すぐれた才能をもった文学者にたいしてなぜいつまでも未練がましくしているか、その理由がわかるだろう²⁾。〔……〕ルソーはもはやいない。彼は長年にわたってわれわれ仲間の大部分から恩恵の援助と友情の奉仕とをうけいれていた。そして私が彼にたいしてなにひとつ腹黒いことをしていないという事実をはっきり認め、そう断言したあとで、約束を裏切って、卑怯にも私を攻撃した³⁾。それでも私は彼を迫害したことも、憎んだこともなかったのだ。

ディドロはここで、ルソーにたいするもっとも深い心情をあらわにしている。「恩知らずの女」に「裏切られた恋人」の「未練」という比喩そのものが、彼の意識のすべてを語っているであろう。——君にたいしてあれほどの「友情」と「恩恵」をそそいだのに、そして自分は君を「迫害したことも、憎んだこともなかった」のに、なぜ君のほうから理不尽にこの友情を踏みじめるのか、と。ここには怒りというより、むしろディドロの深い嘆きがききとれるようだ。

「私は著作家〔ルソー〕は評価するが、人間「ルソー」は評価しない。」だから、今までに、彼

1) CN, t. I, pp. 138-139; CN, t. I, pp. 92-93; AT, p. 98.

2) このあとディドロは、「恩人にむかって、なぜそんなに恩知らずの男に未練や、心残りを抱くのか、ときいてみたまえ。そうすれば人間を結びつけているあらゆる絆のうちで、一番断ちがたいのが恩恵の絆であり、自尊心は恩恵〔をひとにほどこすこと〕によって、もっとも満足させられるものだということがわかるだろう」と書いている。Ibid. ディドロがここで語っているのは、自分が「恩恵」を与えたと思っていたルソーから理不尽にも裏切られたと感じてうけた、「自尊心」の傷である。しかし、ディドロが「恩恵」という時、それはたんなる、利害関係だけにかかわる「恩恵」ではない。「裏切られた恋人」ということばが示すように、相手に与えた精神的絆としての「恩恵」が問題なのである。

3) ディドロは、この問題をマルモンテルだけに打ちあけている。——それによれば、ルソーがサン＝ランベールの恋人であるドゥドト夫人に恋を告白したあと、後悔にさいなまれてディドロに相談をもちかける。ディドロは一切をサン＝ランベールに白状して、誠実に許しをこうようルソーにすすめる。ルソーはディドロに深く感謝したうえ、そうするむね約束する。ディドロがそのあとでサン＝ランベールにあうと、彼はルソーにたいして憤慨している。ルソーが、ドゥドト夫人を悪人にしたあげた手紙をよこしたからだという。ディドロはそこで一切を説明して、ルソーのために謝ったので、サン＝ランベールの怒りもとける。ところが、ディドロは、間もなくルソーがディドロに裏切られたと怒っているという噂をきいたので、彼を訪ねる。事実ルソーは秘密をもらされたといって怒っている。そこでディドロは、ルソーに、君がすべてをサン＝ランベールに告白すると約束したから、自分はこの事件を彼に語ったのだ、と釈明する。ルソーは、ディドロの誠意を認めて、和解が成立する。そして、その直後、ルソーは『ダランベールの手紙』の序文の注に、『旧約聖書』「集会の書」の次の一句（第XXII章、26—27）を書きいれて、ディドロを裏切ったというのである。「たとえあなたが友にたいして剣を抜いたとしても、絶望しなくてもよい。歩みよる手段があるからだ。ことばで友を悲しませたとしても、心配しなくてもよい。今度もまた和解することが可能だからだ。しかし、侮辱、不当な非難、秘密の暴露、また裏切りによって与えた傷にたいしては、許しはない。友は遠ざかり、もはや2度と帰らぬであろう。」（傍点中川）*Mémoires de Marmontel*, Paris, 1891, t. II, pp. 246-255. なおディドロ自身も、上の事件について「雑記帳」に次のように書残している。「彼〔被廉恥なルソー〕は、私が彼を裏切り、私に打あけた秘密を、不誠実にももらしたといってとがめた。そして、彼は私が裏切者でも、口が軽い男でもないことを知っていながら、そして、彼こそ私をあざむいた腹黒い男でありながら、彼の演劇反対論の序文に、あの通りの脚注を印刷させたのである。◀Note sur la désunion de Diderot et de J.-J. Rousseau, L. t. XIII, p. 629.

からなん度も「和解」の申し出があったが、すべて拒否した。なぜなら、「もはや信頼の念が失われてしまっていたから」とディドロはいう¹⁾。彼はまた、ルソーの「死後の名声」を傷つけるつもりはない、という。「だがもし、ジャン＝ジャックが善人だったというのなら、そこからひきだされる結論は〔……〕彼が長いあいだ背徳漢たちに囲まれていたということだ。」そして最後にこう付言する²⁾。

私が書いているのは、攻撃文ではない。これは私自身のための弁明文であり、私に親しい多くの市民たちのための弁明文である。私がはたしているのは、神聖な義務である。〔……〕時が一切に結末をつけるであろう。そして生者を傷つける恐れがもはやなくなった時に、死者〔ルソー〕にたいする裁きがくだされるであろう。

フレロン父子への攻撃、誹謗家たちに共通の論法、および正しい批評の方法 フレロン父子への攻撃——ディドロは、18世紀フランス社会の状況を顧みながら、次のように慨嘆している。「恥じも知らず、才能もない」大勢の文筆家たちが、フランス第1級の人物たちに「罵倒の声」をあびせかけ、しかも驚くべきことには、この卑劣な攻撃が、政府によって「大目に見られている」ばかりでなく、むしろ「公認されている」、と³⁾。

いうまでもなく、この種の文筆家の筆頭が『文学年報』を編集していたフレロン父子である⁴⁾。(子スタニスラス＝マリ＝ルイ・フレロンが1779年『セネカ論』初版に加えた非難についてはすでに考察した。第三部、第I章、2、「フレロンの攻撃」参照。)ディドロは『セネカ論』第2版のなかに、このフレロン父子にたいするある「匿名の人物」〔マルモンテル〕のきびしい批判を掲載している⁵⁾。

この「匿名の人物」はいう、子フレロンは、セネカの悪口をいっている。だが全フランス国民の「ののしり声」をあびながら、平然とヴォルテールやその他のすぐれた人物への攻撃を続けるようなフレロン父子から、たとえ「称賛」されようが、「非難」されようが、そんなことにはなんの意

1) しかし今日の研究が明らかにしている限り、事態はディドロのこの記述の逆である。1765年春、ヌーシャテルのジャン＝フランソワ・デシュルニを介してルソーに和解を申し入れ、拒否されているのは、逆にディドロのほうである。J. FABRE, *Lumières et Romantisme*, pp.48-49.

2) CN, t.I, p.140; HN, t.I, p.93; AT, pp.99-100.『セネカ論』第2版のなかに、ルソーとの関係の一切を書き終ったあと、ディドロはもう一度だけ『盲人書簡への追補』(1782年)のなかでルソーのことに触れる。「私は〔触覚で色を判別する能力をもった盲人を〕ひとりあげることができるが、このひとは、とても微妙な感覚で花束の色のとりあわせを加減することができた。その微妙さは、J.-J.ルソーが、友人たちに——あれは本気だったのだろうか、冗談だったのだろうか——パリの花売り娘に、〔花束の色のとりあわせの方法を〕教える学校を開くつもりだ、とうちあけた時に自慢していた、あの微妙さなのだ」と。OPH, p.152; AT, t. I, p.332. ひとは、心から憎んでいる人物について、このような、やさしい思い出を語りうるであろうか。

3) CN, t.I, p.207; HN, t.I, p.136; AT, p.146.

4) 父エリ＝カトリースが1754年にこの雑誌を創刊、1776年3月に死ぬまでその編集を続け、彼の死後は、子スタニスラス＝マリ＝ルイがそれを引きつぐ。NR, pp.151-152.

5) CN, t. II, pp.294-295; HN, t. II, p.193; AT, pp.387-389.

味もない。この種の批評家がスイッリウスのような背徳漢を弁護したとしよう。その時でも、彼にとっては、実はスイッリウスなど問題ではないのだ。彼らがほんとうに弁護しているのは、自分たち自身の立場なのだから、と。

「匿名の人物」はまた続ける。——ディドロは、フレロン父子から批判されてきたことで、彼らを恨んでいるだろうか。とんでもない。フレロン父子の先輩で、彼らよりずっと才能があったデフオンテヌ神父ですら、今日では完全に忘れられてしまっているというのに、どうしてディドロがこの無能なフレロン父子のことをいつまでも記憶していようか。世人がフレロン（父）なる人物が昔生存していたということを思いだすのは、せいぜい年に3～4回、ヴォルテールの『スコットランド女』が上演されている時だけだ、と（フレロンはこの芝居のなかでヴッスプという名で登場している）。

ディドロは、この「匿名の人物」の以上のことばのあとに、さらに皮肉な調子でこう付言する¹⁾。「わが国の大部分の雑誌編集者がいまだに発見していない秘密〔秘訣〕がある。それは彼らの紙面に、1週間の生命を保証するという秘訣〔秘密〕だ。」

誹謗家たちに共通の論法——ディドロは、『セネカ論』第2版のなかで、このように誹謗家個人をとりあげて批判を加えると同時に、彼らに共通する誹謗法の特徴をとりだして次のような分析を試みている。

第1、彼らの基本的方法は、「漠然とした、相互に矛盾しあう中傷」を、「証明ずみの事実」にすりかえることである。

第2、あるいは、ずっと昔すでに決着がついている「非難」を——決着がついているという事実だけはふせて——むしかえすことである。

第3、また彼らが提出した「非難」に釈明がなされた場合には、「この答えは充分でない」と「おごそかに断言する」ことである。

第4、あるいは、その釈明の「確固とした」「論証」にたいして、常に「単純だが、断固とした否定」を申し立てつづけることである。

ディドロは最後にこう結論する。このような、「然り」と「否」だけからなる論争術をおぼえこんだとともに、現代のジャーナリストたちは、自分たちが、ペール、バナージュ、ル・クレールにも比肩されるべき大批評家になったと思いがかるのだ、と。

正しい批評の方法——では逆に、正しい批評の方法、真の論争の方法は、どのようにあるべきか。ディドロは次のように説明する²⁾。

第1、批評や論争において、「真実」が相手を傷つけることがよくあるが、その責任のいく分かは、「真実を語るひと」が負わねばならない。すなわち、彼の、「高慢」、「無知」、「粗野」などの「欠点」が相手に屈辱感をいだかせるのである。この点をまず自覚せねばならない。

第2、だから「真実」を語る際には、常に「親切」、「率直」、「謙虚」、「慎重」な態度を保持

1) *Ibid.*

2) CN, t. II, p. 305; HN, t. II, p. 200; AT, p. 395.

しなければならない。そのための具体的な手段を列挙すれば、次のとおりである。——こちらに「明白な証拠」がある場合でも、自分に「疑問」を提出してみること。「誠実さ」をことばのはしばしにまでこめて、こちらの「論拠の強さ」の押しつけがましさを和らげること。こちらに「確信がある」場合でも、「相手から教えてもらう」という態度で、たずねてみる。たとえ相手が「誤謬」を犯した場合でも——特に相手が「美しい魂」ゆえに（すなわち、誰かを救うために）誤謬を犯している場合には——「寛容」になろう。「思いやり」（これは、天分と自由な教育とひとびとの交際によって形成される）は、「もっとも気むずかしい自尊心の怒り」すらなだめることができるのだ。

第3、逆に、「背徳者」にたいしては、徹底した「はげしさ」で、「無作法なうぬぼれ」にたいしては「辛辣な皮肉」で抵抗しよう。

ディドロは最後にこう付言する。私はこの規則を犯した時には、いつも後悔した。「真理が、それ自体として絶対的であればあるほど、それは慎み目な姿をとってあらわれねばならない」と。

4. 永遠の秩序のなかへ

友情への幻滅 現実の人民と国王と政府に幻滅し、現実の背徳的批評家たちに幻滅し、今や現実の改革の道を捨てて、ただ隠遁の世界のなかだけで生きようとするディドロにおいて、なにが彼の心を支え続けていたのであろうか。友情であらうか。

ディドロは、『セネカ論』初版のなかで、友情にかんして次のようにのべていた¹⁾。「君は、真の友情とはどんなものか知りたいというのか。それなら、〔『ルーキーリウスあての書簡集』〕第6信を読めばわかるだろう」と。そして彼は、この第6信のなかにある、「どれほど大勢の人間が、友人よりも友情に不足していることだろう」という一句に注釈を加え、上記の主張の逆もまた真実である、と付言していた。すなわち、彼によれば、「どれほど大勢の人間が、友情よりも友人に不足していることだろう」と主張することもまた可能だというのであった。ここには確かに、晩年になって、友人の不足を嘆くディドロの聲がききとれるだろう。だが『セネカ論』初版を執筆中の彼には、少なくともまだかけがえのない親友グリムが存在していたはずである。

では『セネカ論』第2版を執筆していた頃の状態はどうであらうか。第2版において初版の上記テキストのあとに付加された、長文の友情論を、ディドロはまず友情の賛美からはじめている²⁾。

「恋愛はおとなの陶醉だが、友情は青年の情熱だ。この青春の日々においてこそ、私は彼であり、彼は私であった。よく考えたうえで友を選んだわけでは決してない。相手が自分に似ていることを、なにかよくわからぬ本能で感じとってひきつけられてしまったのだ。彼がもっと賢かったら、好きになんかならなかつただろう。あるいは、彼がもっとばかだったら、好きになんかならなかつただろう。賢いかにせよ、ばかにせよ、そのままの彼であることが必要だったのだ。」（傍点中川）

相手と自分とが、完全に一身同体であるような——「私は彼であり、彼は私である」ような——

1) S, p.277; CN, t.II, p.7; HN, t.II, p.7; AT, p.203.

2) CN, t.II, pp.8-9; HN, t.II, pp.7-8; AT, p.204.

友人関係、オレステスとピュラデスのような友人関係がディドロの理想であったことは、彼の短篇小説『ブルボンヌの2人の友』（1770—1771年）によってすでに明らかである。しかしディドロが、『セネカ論』第2版のなかに上記の友情賛美論を書きとめた時、彼は、恐らくより具体的に若かった頃の、ルソーとの交友関係を思い浮かべていたものと考えられる。

その当時のことを想起しつつ、ディドロは第2版において続ける。——若かった私は、友人とおなじ「楽しみ」、「苦痛」、「好み」、「嫌悪」を感じ、2人で一緒に「冒険」に飛びこんでいった。友人が「気まぐれな考え」を思いつくと、どうして自分もそれに気づかなかったのかとあやしんだ。「相手をやっつける時も、相手からやっつけられる時も、一度として、そう、一度として相手と自分のどちらが正しいとか、どちらが間違っているとか、詮索する気をおこしたことはなかった。」もちろん財布もひとつだった。友人がなにか「悪事」をたくらんでいるのを知った時は、それに加担する恐ろしさと、彼ひとりにそれをやらせる苦しさの間で、いつも心がはりさける思いであった。

しかし、70歳に近づいたディドロは、ここで、突然われにかえったかのようにこう自問する。「あれほど完全に一身体になれた、はげしく、甘美な生き方はいったいどうなってしまったのだろう。」もはやそれは、どこにも見いだせない。なぜだろう。「個人的利害が、次第次第に友情を弱めてしまったのだ。」

そしてディドロは今やこう告白する¹⁾。

私は年をとってしまった。そしていま、若干の苦い、悲しい思いをかみしめながら白状する。ひとは老年になっても習慣的な交友関係だけは維持している。だが、われわれの心のなかには、われわれの傍には、友情のむなしい幻影だけしか残されていないのだ。

老ディドロの「習慣的な交友関係」、「友情のむなしい幻影」とはなんだろうか。それはルソーを失ってからあとのディドロの最大の親友——そしてヴェルムヌウ夫人邸でレナル神父を攻撃して以来（第三部、第I章、3の『レナル神父弁護の手紙』の項参照）、その仮面の下の素顔をはじめて暴露したグリム——のことである。

かつてディドロは、この「親しい、唯一の友」にむかって、「私は、非常に強い力で、君と一身体になっているように感じるので、君の行為は善悪のいかに問わず、私自身の行為とわがちがたい。〔……〕20年来というもの、私は〔君とは〕姿は2つだが、人間はただのひとりであるはずだ」と思ってきた」（1772年5月15日付の手紙²⁾）と語るほどだったのだが、上記レナル神父攻撃事件において、グリムの「権力者の従僕」の素顔を発見した時、彼はこの友にむかってこう書くにいたる³⁾（1781年3月25日付『レナル神父弁護の手紙』）。「友よ、私にはもう昔の君の姿が認められ

1) *Ibid.*

2) CORR, t. XII, pp. 62–63. ディドロは、1767年7月のファルコネあての手紙のなかで、グリムの才能を絶賛し、彼自身より「はるかにすぐれた」人物と呼んでいる。CORR, VII, p. 96.

3) OPH, p. 630; TP, p. 192. レナル神父攻撃事件をきっかけとして、ディドロの眼から鱗が落ちる。そして恐らくこの時、ディドロは、ルソーのうちに真に純粋な魂を発見したものと思われる。「なゼルソ

ない。君は自分でもそれと気づかぬうちに、もっとも眼につかない、だがもっとも危険な反哲学者のひとりになってしまったのだ。君は、われわれと一諸に生活していたが、実はわれわれを憎んでいたのだ。」老いたディドロにとってルソーはすでに敵であり、グリムもまた友ではなかったことが判明する。この痛切な体験から、ディドロは『セネカ論』第2版のなかにこう書きとめる¹⁾。

ああ、友人、友人。ただひとりの友人がいる。この友人だけしか本当の頼りにするな。君は彼の親切と裏切りとを、長い間、なん度も経験してきた。彼はいく度となく、君の世話をやき、またいく度となく君をひどい目にあわせてきた。〔……〕彼以外のすべての友人たちより君は長生きをするかもしれない。だが彼だけは、君が死ぬまで決して君を見棄てないだろう。この友人とは君自身だ。君自身の親友になるように努めたまえ。

ディドロにおいて、「友情」とは相手との「一身同体になる」(<uni>)体験であった。この完全な他者との同一化の意識——それは彼にとって理性的判断をこえた、より根元的な、他者とのかわり方であった。だから彼は、「恋愛」と「友情」とを比較しながら、こう断定する。「恋愛」を支配するのは、打算、あるいは「理性」であり、「友情」を支えるのは、損得を度外視した「情熱」である、と。そしてディドロによれば、この人間世界においてなにか「偉大なこと」をなすうるのは、決して理性的「人間」ではなくて、その底に生きている情熱的「動物」なのである²⁾。

ーが雄弁家であって、ランゲ〔高等法院を弾圧した専制的大法官モーブーの支持者〕が美文家にすぎないのか。それは前者が原則にしたがっており、たとえ過ったことをいっても、真実であることがこちらにわかるからである。他方、後者はどんな原則ももっていないから、真実を語っている時でさえ、嘘をついていることがこちらにわかるからである。ルソーは、第1行目しか嘘をつかない。だがランゲは、最初から最後まで嘘をついている。」OPH, p.632; TP, p.194. 悪人は決してルソーではなくグリムであった。自分は、愚かにも、そのグリムにふきこまれて、今までルソーを悪人だと思い続けてきた。——こうして、レナル神父を弁護しつつ、ディドロの意識のなかで迫害されているレナルと、迫害されているルソーのイメージが重なりあい、昔のルソーにたいする愛情が、せきをきったように流出する。「君〔グリム〕を愛するくらいなら、私はむしろ生きることをやめたほうがましだ。私がジャン＝ジャックのところでは最初に君と出あった時、君が〔……〕昨日のように話したなら、決して君の友人なんかにならなかっただろうに。」OPH, p.643; TP, p.209. もしグリムとさえ知りあわなければ、決してルソーと仲たがいすることもなかったであろうに。

だが、死んだルソーとの関係は、やがて公表されるはずの『告白』の攻撃によって、とりかえしがつかないところまできている。ディドロは『レナル神父弁護の手紙』（すでにのべたように、ディドロは結局この手紙をグリムに送っていないと推測される）以後も、グリムとは死ぬまで交際を続けるが、もはや彼はディドロにとって「友情のむなしい幻影」にすぎない。『セネカ論』第2版の友情論は、このような状況のなかで執筆されるのである。

- 1) CN, t.II, p.9; HN, t.II, p.8; AT, p.204. 晩年のディドロとグリムとの関係を究明する基本文献である『レナル神父弁護の手紙』が、ディークマンの手によってはじめて公開されたのは、1951年のことであった。INV, pp.236-253. したがって、当然のことながら、ディドロとグリムの関係を扱った次の基本的研究書は、ディドロ晩年のこの友情の危機に、全然気づいていない。——Edmond SCHERER, *Melchior Grimm*, Paris, 1887; André CAZES, *Grimm et les Encyclopédistes*, Les Presses Universitaires de France, 1933; Joseph Royoll SMILEY, *Diderot's Relations with Grimm*, University of Illinois Press, 1950.
- 2) ディドロは、『ブルボンヌの2人の友』のなかでは、「友情」を「反省的友情」「動物的友情」に2分している。またプルートスは、ディドロによるこの「友情」の2大区分を、アリストテレスによる「親切」の2大区分——「本能的親切」と「完全な親切」——に結びつけて説明しているが、説得的ではない。

不滅の生命をめざして 現世において、一体化すべき友人のすべてを失ったディドロの視線は、今やセネカに導かれつつ、「真理の使徒」¹⁾として死んでいった死者たちの世界にむかう。いや、死者たちと呼ぶことは誤りであろう。ディドロは彼らの不滅の生命を確信しているのであるから。

その世界には、ソクラテスが住み、セネカが住み、ヴォルテールが住んでいる。そして、やがて死ぬべきことを自覚している老ディドロの最後の願いは、すべての徳あるひとびとから愛惜されて死んでいったソクラテスたちの系譜に、自分もまた加えられるということであった。「だが出生の偶然が彼ら〔ソクラテスたち〕を君の祖先にしてくれるわけではない」と『ルーキーリウスあての書簡集』（第44信）のセネカはいう²⁾。では彼らの子孫と呼ばれるためにはどうすればよいのか。こう自問したあと、ディドロは、「彼らのように生き、彼らのように死ぬことを学ぶ」ことと答える。その時はじめて、われわれは「彼らの遺産を継承して、彼らの子孫のうちに数えられるであろう。」

しかし、ディドロが崇拝するこれら「真理の使徒」は今なお、背徳者たちの攻撃にさらされている。かつてソクラテスを告発した、あのアニュトス、メレトスのやからは、現在でも死にたえてはいない。「これは推理ではない。ひとつの事実である」とディドロは断言する³⁾。

では、みすみす背徳者の跳梁にまかせ、徳あるひとびとを彼らの中傷のうちに埋もれさせるのか。——ディドロは、生前のヴォルテールがある日彼にむかって、権力者に迎合する裁判官がすぐれた人物と書物に「焼ごて」（罪の宣告）をあてていると嘆息した時、こう返答したと書いている⁴⁾。

あなたを苦しめるその焼ごてのことですが、あなたはおわかりではないのでしょうか。時がその焼ごてをとりさり、不正な裁判官の上に押しつけ返す、ということを。毒人蔘を飲みほしたアテナイの哲学者〔ソクラテス〕には、神殿が建てられたではありませんか。

その時ヴォルテールは、ディドロを胸に抱き寄せて、「君のいうとおりだ。そのことばを君からききたかったのだ」といったという。

しかし「時」が「焼ごて」をとって、「不正な裁判官」の上に押しつけ返すためには、生者は、「ソクラテスの弁明」、「セネカの弁明」、「ヴォルテールの弁明」を書き続けねばならないであろう。そして事実、ディドロの『セネカ論』こそ、これらすべての中傷された有徳者のための弁明書にほかならなかった。

QC, pp.50-51; p.169, note 115.

1) CN, t.II, p.16; HN, t.II, p.13; AT, p.209.

2) CN, t.II, p.38; HN, t.II, p.27; AT, p.222.

3) 「だがソクラテスを残忍な嘲罵と今まで千度も論駁された非難にさらし、アニュトス、メレトスのやからを生きかえらせたいのか。それならソクラテスの弁明を書きたまえ。これは推測ではない。ひとつの事実である。」CN, t.I, p.107; HN, t.I, p.72; AT, p.78.

4) CN, t.II, p.304; HN, t.II, p.199; AT, p.394.

それだけではない。ディドロが死んだ善行のひとソクラテス、セネカ、ヴォルテールの弁明の書を執筆し、それと同時に、彼とおなじ時代にまだ生きている有徳のひとネジョン、マルモンテル、ドルバック、レナル神父、ダランベール、コンドルセ、ジョフラン夫人、テュルゴ、マルゼルブ、ネッケル（そのなかにエカテリーナ2世の名も加えるべきであろうか）たちの顕彰文を執筆すること——それは同時に、彼らの名声に、不滅の生命を保証する行為であった。

ディドロのこの確信は、彼が引用した『ルーキーリウスあての書簡集』（第21信）中の次のことばに表明されているであろう¹⁾。

アッティクスが婿としてアグリッパを、子孫としてティベリウスやドルススをもったとしても空しいであろう。もし雄弁家の王者〔キケロ〕が、彼の数通の手紙を書き残していなければ、彼の名前は忘れられてしまっていただろう。ルーキーリウスよ、君がたとえ栄光〔顯職〕に恵まれているにせよ、私の手紙のほうが、君自身の顯職よりも、ずっとよく君の名をひとびとの間に伝えるであろう。もしエピクロスの手紙が残っていなければ、イドメネウスなる人物〔クレタ王ミノスの孫〕がかつて存在していたことを誰が知ろう。

セネカは、自分がルーキーリウスあての手紙を書くことによって、文筆家としての彼自身の「不死」をこの友人にわかち与えることができると、ここで主張しているのである。すなわち、未来の人間は、この手紙を読むたびにルーキーリウスのことを想起するであろう。その時、ルーキーリウスは未来のひとの心に再びよみがえる。これが「不死」の意味である、とセネカは——そして彼とともにディドロは——語っているのである。だがこの手紙を読む未来のわれわれは、いかにしてこの時間と空間のへだたりを飛びこえて、すでに死んだ過去のひとをわれわれ自身の意識のなかでもう一度生きかえらせることができるのだろうか。

ディドロは『セネカ論』論初版のなかで、すでにいく度か、不当に中傷された正しい人間とわれわれを連帯させる、同一化の意識について語ってきたが、第2版では、この意識についてさらに精密な説明を与えている²⁾。——ある種の人間たちは（いうまでもなくディドロのごとき人間である）、どのような事件に遭遇しても、理性の眼だけでそれを見ることができない。「悪徳」に「憤激」し、「不正」に「怒」り、「社会や個人の不幸」に「涙」を流し、「徳が報いをえる」のを見て「感動」する。これが彼らと世界とのかかわり方の基本的形式である。だが彼らは、決してこれらの諸事件の現場にいわせる必要はない。誰か文筆家が、文章によって事件の実態を想起させてくれさえすればよい。その時すべては、彼らの意識のなかにありありと再現される。

これらの諸事件が、彼らの傍でおころうが、2000年前におこったことであろうが、それらはともに、彼らの眼の前にあるのだ。彼らの心情は、想像力と協力して、時間と空間とのへ

1) CN, t. II, pp. 21-22; HN, t. II, pp. 16-17; AT, p. 212.

2) CN, t. II, p. 14; HN, t. II, p. 96; AT, p. 284.

だたりをとびこえるのだ。

現実の世界から隠遁し、現実の世界の友情を失ったディドロの眼の前に、今や、古典のテキストを媒介に、彼の「心情」と「想像力」がつくりあげた、広大な死者たちの世界が、いな不滅の生命を獲得したひとたちの世界が広がっている。その天上の世界では——事実ディドロは、セネカとともにそれを「天上」の世界と呼んでいる——ソクラテス、セネカをはじめとする無数の徳あるひとたちの魂が生きているはずである。

ディドロは『ルーキーリウスあての書簡集』（第79信）から、この不滅の生命にかんする「うっとりするほど微妙」なことばをとりだしている¹⁾。「徳への愛は、魂が天上のふる里へと向かっていく絶えざる飛翔である。自分の時代にしか生きなかったというのでは、余りにも小数のひとのためだけに生をうけた、ということになってしまう。」

『セネカ論』初版と第2版との間に存在するあらゆる相違点にもかかわらず、ディドロのソクラテス、セネカにたいする連帯の意志と、彼らの不死への確信——「後世」のひとびとの意識のなかで生き続けるという確信——は、変わらないものとして残っているのである。

『セネカ論』第2版の意識の構造、およびそれと『セネカ論』初版の意識の構造との一致は、以上この第三部で検討したとおりである。しかし、ディドロはなぜこれほど強くセネカの「後世」における不死という確信を主張するのであろうか。——そのことが最後に問われねばならない。

小論の結論において示す予定であるが、ディドロにおけるこのセネカへの共感、彼の多年にわたるソクラテスへの共感がセネカの内部に投影されたものなのであり、またセネカの不死への確信は、このソクラテス崇拝と平行してディドロの内面に徐々に成立していった「後世」への期待の感情が、セネカの内部に投影されたものなのである。

そのことを明らかにするために、私は以下の第四部で、ひとまず、『セネカ論』とは切り離れた形で、『セネカ論』執筆までのディドロの生涯におけるソクラテスの意味と、「後世」の意味とを検討しておきたいと思う。

第四部 ディドロの生涯におけるソクラテスと「後世」の意味

第1章 ディドロ訳プラトン『ソクラテスの弁明』、および『クリトン』（冒頭の一節）の校訂テキストの編纂

3つの写稿 この第四部において²⁾、私はディドロの生涯におけるソクラテスの意味の問題から

1) CN, t. II, p. 91; HN, t. II, p. 63; AT, p. 254.

2) 本第四部の中心的部分は、既発表の次の諸論文に改訂を加えたものである。——「ディドロにおけるソクラテスの問題（上）——ディドロにおける徳の鑑としてのソクラテス」（名古屋大学教養部「紀要」第11輯、1967年3月）、「ディドロにおけるソクラテスの問題（下）——ディドロの作品にあらわれたソクラテ

考察していきたいのであるが、そのための基本的文献であるディドロ訳プラトン『ソクラテスの弁明』と『クリトン』（冒頭の一節）の現存3写稿はいまだに校訂テキストの形では刊行されていない²¹。したがって私はまず、この3写稿に依拠した校訂テキストの作製からはじめたいと思う。

最初に、3写稿の一般的特徴を、パリ国立図書館の分類番号順に概観しておこう。各写稿にかんする記述の前に、大括弧にいれて記載した数字がその分類番号である。なお以下の解説、およびテキストの脚注では、各写稿の筆記者名の略称を、写稿略号として使用する。

1) 第1写稿²²〔Nouvelle acquisition française 13753〕（以下この写稿をMと略称）。

扉ページ——なし。

表題（本文のすぐ上）——*Apologie de Socrate traduite de mémoire au Château de Vincennes*。

ページ数——55 pp.

最終ページ（p. 55）の断片の表題——*Dialogue/Criton ou de ce qu'il faut faire*。

筆記者——Michel。

Michelの筆跡の特徴——「ミシエルの筆跡はひと目でそれとわかる。習字ふうに念をいれて書いているわけではないが、繊細、柔軟なことで、文字の太い細いのとりあわせとが注意をひく。縦の

スのイメージ」（名古屋大学教養部「紀要」第14輯、外国語・外国文学、1970年3月）、「DIDEROT における <postérité> の観念——FALCONET との論争書簡を中心に」（日本フランス語フランス文学会『フランス語フランス文学研究』No. 17, 1970年）。

なお、ソクラテスにかんする前記の論文にかんしては、プラトンの研究者である京都大学大学院博士課程学生内山勝利氏から有益な批判と教示をえた。同氏、ならびに同氏を紹介された藤沢令夫教授にここであつくお礼を申しあげたい。

1) INV, pp. 55-56, pp. 114-117.

この3写稿は、ヴァンドゥル原稿群に属し、その存在は1951年（ディークマン『ヴァンドゥル原稿群目録』）以来一般に知られていたにもかかわらず、それに依拠した『ソクラテスの弁明』と『クリトン』（冒頭の一節）の校訂テキストの編纂はいまだに試みられていない。

したがって、私が以下に印刷するものが、ディドロによるプラトンの翻訳の最初の校訂テキストである。この作業のために、3写稿のマイクロフィルムを利用することを許可されたパリ国立図書館に感謝する。なお、私の校訂テキストの作製は、1969年年7月に完了していたのであるが、その直後、私は Raymond Trousson, <Diderot helléniste>, *Diderot Studies XII*, Genève, 1969, pp. 141-326. を入手した。この論文は、ディドロによるギリシア語テキストのフランス語訳——ホメロス『イーリアス』の断片的翻訳、およびプラトン『ソクラテスの弁明』の完訳——を原典と訳文とを照合しながら検討し、ディドロのギリシア学者としての能力を解明したものである（なおこの論文は、トゥルーソンの前論文 <Diderot et l'antiquité grecque>, *Diderot Studies VI*, Genève, 1964, pp. 21-245. のいわば続篇をなす）。著者はこの論文のなかで、ディドロ訳『ソクラテスの弁明』の写稿（パリ国立図書館分類番号——N. a. fr. 13753）をそのまま印刷している（著者はそのあとに、18世紀に流布していた『ソクラテスの弁明』の2種類のフランス語訳——Louis Giry 訳, 1643年と André Dacier 訳, 1699年——をも全文収録している）。またトゥルーソンのテキストとほぼ平行して、レヴァンテール編『ディドロ全集』第2巻 1969年にも、『ソクラテスの弁明』と『クリトン』（冒頭の一節）のテキストが収録された。L, t. II, pp. 241-273. しかし、このトゥルーソンのテキストは、あくまで1写稿だけに依拠したものであって、校訂テキストの設定が目的ではないのであり——<Comme il n'entre pas dans nos intentions de procurer de ce texte une édition critique, nous nous servions ici de cette troisième version [N. a. fr. 13753].> (Op. cit., p. 168.)——他方レヴァンテールのテキストもまた、校訂版の性格を欠くものであるから、以下の私のテキストは、ディドロ訳『ソクラテスの弁明』（および『クリトン』の冒頭の一節）の最初の校訂本の試みとして、ある種の存在意義を主張しうるものと考え、まずそれを名古屋大学教養部『紀要』第14輯（外国語・外国文学）、1970年3月発行、に発表した。以下に印刷するのは、それに若干の訂正を加えたものである。

2) INV, pp. 55-56.

線はまっすぐにひかれ、全体に鋭角的な感じをあたえる。語頭の s, 語頭の f, および語尾の s が特徴的である。〔語頭の s は、時として現代の f のように書かれる。語頭の f は s に似ているが、下半分はただ 1 本の直線でしめされ、横線はきわめて細く、時には識別しがたいこともある。語尾の s は t の横線をとったものに似ている（中川付記）。〕 d が語頭におかれた場合も、語の中におかれた場合も、ともに縦線は丸くまがっている。〔d 全体が o, より正確には横転した c に見える（中川付記）。〕（ヴェルニエール¹⁾）なお、すべての行がなだらかな右上がりになっている。

用紙の状態——良好。欠けた部分なし。

2) 第 2 写稿²⁾〔N. a. fr. 24937 〔正〕〕（以下この写稿を V と略称）。

扉ページ——なし。

表題（本文のすぐ上）——*Copie des notes écrites par M. Diderot en marge d'un volume des œuvres de Milton, pendant sa détention au château de Vincennes; entré à Vincennes le 24 Juillet 1749, 29 jours au Donjon, huit pour les cours, puis le parc, sorti.*

ページ数——36 pp.

最終ページ（p. 36）の断片の表題——*Dialogue/Criton ou de ce qu'il faut faire.*

筆記者——de Vandeul.

de Vandeul の筆跡の特徴——文字全体が小さく、ややいじけた印象をあたえる。語頭の s は現代の f のように、語尾の s はアラビア数字の 1 の上半分のように書かれる。p の縦線は最下端をかなめとして上部が 2 本に開いている。n は右傾した v のように見える。

用紙の状態——左右両端、および下部に破損箇所があり、そのため原稿の一部が欠ける。

3) 第 3 写稿³⁾〔N. a. fr. 24937（続）〕（以下この写稿を D と略称）。

扉ページの表題——*Apologie de Socrate traduite de mémoire / 1749.*（扉ページの表題だけは、de Vandeul の筆跡。《*mémoire*》は《*du grec*》ということばの上に重ねて書いたように見える。）

表題（本文のすぐ上）——*Copie des notes écrites par M. Diderot en marge d'un volume des œuvres de Milton pendant sa détention au château de Vincennes./Entré à Vincennes le 29 [sic] Juillet 1749. 29 Jours au Donjon, huit pour les cours, puis le parc, sorti.*

ページ数——i + 76 pp.

最終ページ（p. 76）の断片の表題——*Dialogue/Criton ou de ce qu'il faut faire.*

筆記者——姓名不詳。ただし、この筆記者をヴェルニエールにしたがって筆記者 D とよぶ。（ヴェルニエール『ディドロ——その原稿と筆記者』〔1967年〕は、ディドロの原稿の中心的筆記者 Roland Girbal と Michel のほかに氏名不詳の主要筆記者 8 名をあげ、これを A から H に分類している。ヴェルニエールが同書にあげている各筆記者の筆跡写稿と比較対照して検討すると、この

1) Paul VERNIERE, *Diderot—ses manuscrits et ses copistes*, Paris, 1967, p. 28; pl. 4.（ミシエルの筆跡写真）。

2) INV, pp. 114–116.

3) INV, pp. 116–117.

写稿の筆記者はそのDにあたるものと推定される。)

Dの筆跡の特徴——「縦の線が大きく屈曲した、上品でおおらかな筆跡。縦長で、すらっとしている。語頭のcは署名の飾り文字のように大きく書かれ〔しかし、必ずしもそうとは限らず、普通に小さく書かれている場合も多い(中川付記)〕、語頭または語中央におかれたsは、現代のfのように書かれる。語頭のiはjのように、下にひきのばされる。大文字の不規則な使用が多い。一度こういう筆跡を目にすると、容易に忘れられない。」(ヴェルニエール)¹⁾

用紙の状態——良好。欠けた部分なし。

『ソクラテスの弁明』と『クリトン』(冒頭の一節)の翻訳の時期の確定 現在、『ソクラテスの弁明』と『クリトン』(冒頭の一節)の翻訳は、M, V, D 3種類の写稿の形で残されているだけであるが、これらの写稿のモデルとなった翻訳自筆原稿は、いつ、どういう形で成立したのであろうか。

ヴァンドゥル夫人は、『ディドロ回想録』のなかで、父ディドロがヴァンセンヌに拘禁されていた時のことを、こう書いている²⁾。

父はミルトンの『楽園喪失』の1巻をもっておりましたので、その余白ページと行間に、自分が現在おかれている立場の反省と、詩の注解とを書きこみました。

ここにのべられているディドロの「自分が現在おかれている立場の反省と、詩の注解」とは、正確にはなにをさしているのだろう。

この点にかんして、ネジョンは、その『ドニ・ディドロ覚書』の脚注のなかで、より具体的な情報を伝えている。この脚注はいうまでもなく、ディドロの独房生活をのべた部分(正確には、独房におけるインクの製造法をのべた箇所)につけられている³⁾。

彼はこれ〔スレートをこなごなに砕き、葡萄酒にとかした即製のインク〕を使って、ミルトンの1巻の欄外に、プラトン作ソクラテスの弁明の、彼流の翻訳〔自由訳〕を書いた。これは、彼が『百科全書』の《ソクラテスの(哲学)》に利用するつもりになっていたものだ。私はこの翻訳を読んだが、その自筆稿は現在ディドロの1友人の手もとにある。

もしこのネジョンのことばを信頼するとすれば、先のヴァンドゥル夫人のことばをどう理解すればよいだろう。現在この「ミルトンの『楽園喪失』の1巻」なるものが残されていない以上、われわれの判断は推定の域を越えることができないが、ヴァンドゥル夫人が主張するディドロの「自分が現在おかれている立場の反省」というのは『ソクラテスの弁明』の翻訳のことではあるまいか。

1) P. VERNIERE, *op. cit.*, p. 35; pl. 11, pl. 12. (筆記者Dの筆跡写真)。

2) AT, t. I, p. XLIV.

3) J. A. NAIGEON, *Mémoires historiques et philosophiques sur la vie et les ouvrages de D. Diderot*, Paris, 1821, p. 133, note 1.

なぜなら、ディドロもまたソクラテスとおなじく、世人をまどわす危険な存在として告発されていたからであり、獄中のディドロが『弁明』のソクラテスの立場に自己を投入することは、まったく自然であると考えられるからである¹⁾。

ネジョンは『ソクラテスの弁明』の翻訳にかんして、この『ドニ・ディドロ覚書』のほかにもうひとつ証言を残しているから、次にこれを調べよう。これは、現在オート・マルヌ県記録保管所に残されている2月17日付の——年号、宛名、頭書を欠く——手紙（差出人ネジョン）の写しである。ディークマンは、内容から判断して、この手紙はネジョンが、ヴァンドゥル（夫）にあてたものだろうと推定している²⁾。

私にお送りいただいた原稿をお返しいたします。これはプラトン作ソクラテスの弁明の自由な意識で、ディドロ氏が百科全書の項目ソクラテスの（哲学）に利用するつもりになっていたものです。彼はなん度となく、この翻訳のことを私に語りましたが、自分ではこれが、ル・ブルトンの手で自作から削除されたもののひとつだと、思いこんでいました。記憶が曖昧になってしまって、事実を奇妙にとりちがえることが、彼にはよくありました。

この手紙の文面と、先に引用した『ドニ・ディドロ覚書』のことばとを比較すると、ひとつの疑問がうかびあがる。——なぜネジョンは、この手紙では、翻訳が独房でおこなわれたこと、またその初稿が元来ミルトンの1巻の欄外に書きこまれていたものであることを、ヴァンドゥル（夫）に伝えなかったのか。

この疑問にたいしては、次の推定がなりたつ。——当時、ネジョンはまだこれらの事実を知らなかった。彼が『ドニ・ディドロ覚書』を書いたのは、この手紙よりあとであり、その時にはもうヴァンドゥル夫妻から翻訳の前後事情をきいて知っていた、という推定である。だがそれなら、彼はなぜ『ドニ・ディドロ覚書』のなかで「その自筆稿はディドロの1友人〔男性〕の手もとにある」などと書いて、ヴァンドゥル（夫）の名を明示しなかったのだろうか。当時、ネジョンはヴァンドゥルと仲が悪くなっていて、彼の名をだしたくなかったのだろうか。

ディークマンが主張するように、いま引用した手紙（ネジョンからヴァンドゥルにあてた返信）に先立つヴァンドゥル側の手紙（ヴァンドゥルからネジョンへの第1信）と、問題の「ミルトンの1巻」とが発見されない限り、すべては「実証できない推測」ととどまるのかも知れない³⁾。

1) では「詩の注解」(«notes sur le poème»)とはなんだろう。もちろんこれは『弁明』の翻訳ではありえない。——もしこの「注解」と称するものが、『弁明』の翻訳とおなじ時期に書かれたことが事実とすれば、のちに『劇作論』*De la poésie dramatique*の第4章「一種の哲学劇について」のなかで展開されるソクラテスの死を主題とした劇のプラン——あるいはその下書——のことではあるまいか。しかし、この点にかんしても確証はなく、以上は私の推測にとどまる。なお、あらゆるディドロ研究者は、この問題をまえに一致して沈黙をまもっている。

2) この手紙は J. MASSIET DU BREST によって発見され、彼の手で最初に発表された («Lettres inédites de Nageon à Mr et Mme de Vandeuil», *Bulletin de la Société historique et archéologique de Langres*, 1^{er} janvier 1948, p.7)。ついでディークマンが *Inventaire*, p.115 に再録し、考証を加えている。

3) INV, p.116.

だが、まず解明しうるところから進んでいこう。

第1、いま一応『ソクラテスの弁明』の翻訳がヴァンセンヌ入獄中に行なわれたということを容認しておこう（ディドロのヴァンセンヌでの拘禁生活は、本論でのべたように、独房にいれられていた時期と軟禁されていた時期とに2分されるが、ここでは両者をひっくるめて、「入獄」とよんでおく）。そこで、この翻訳が入獄中に行なわれたという事実と、この翻訳を『百科全書』の項目《ソクラテスの（哲学）》に使用する予定でいたという主張（『ドニ・ディドロ覚書』、および「手紙」）とは両立しうるかどうか。第2、ディドロ自身は、この翻訳がル・ブルトンの手で『百科全書』の項目《ソクラテスの（哲学）》から削除された部分に含まれていると思ひこんでいるが、この思ひこみが誤りだというネジョンの主張（「手紙」）は正しいかどうか。

第1点にかんしていえば、ヴァンセンヌにおけるディドロの翻訳の動機がたとえなんであれ、完成した翻訳を（あるいは進行中の翻訳を）、のちになってから（あるいは翻訳を行ないつつ）『百科全書』に利用しようと考えたとしても少しもおかしくはない。ディークマンも、トゥルーソンも、そこに矛盾はないと考えている¹⁾。ただもちろん、ディドロが《ソクラテスの（哲学）》の資料を作製するというそれだけの動機でプラトンをヴァンセンヌにもちこみ、そこで翻訳をおこなっていたというのなら、それは誤りであろうが。

第2点については、ディドロの主張が、完全に彼の思いちがいであることが、今日では実証可能である。なぜなら、付論でのべるように、ゴードンによって発見された『百科全書』の最終10巻の校正刷——ル・ブルトンによる自主検閲以前の段階のもの——によって、ディドロの翻訳がル・ブルトンの削除部分に含まれていなかったことが明らかになっているからである。

そこで残された問題は、ディドロがヴァンセンヌ入獄中のどの時期に翻訳を行なったかを、確定することであるが、それに先立って、若干の予備的考察を試みておこう。

ディドロがヴァンセンヌにプラトンの著作をもちこんでいたというのは、はたして事実だろうか。まず、ディドロの証言をきこう（ソフィー・ヴォランあて、1762年9月23日付の手紙²⁾）。

私がヴァンセンヌの小塔に閉じこめられてから、もう1カ月たっていました。私は古代のひとびとのこうした運命を次々とみな思いおこしていました。私はちょうど、ポケットに小型のプラトンの対話篇を持っていたので、そのページを開いて、すぐ眼にとびこんでくる最初の一節を読み、私の監禁の期間が、まだこれからどれくらい続くのか、あててみようと思いました。ページをさっと開く。するとページの上にある次のことばが眼に入ったのです。——「この事件は、すぐにかたがつくはずだ。」私に微笑がうかんできました。ほんの15分もすると、独房の扉をあける鍵の音がきこえます。それは警察代理官ペリエで、私を翌日釈放すると知らせにきたのでした³⁾。

1) INV, p.115; Trousson, *op. cit.*, p.116.

2) CORR, t.IV, p.161.

3) ただし、厳密にいえば、ディドロはこの翌日「釈放」されたのではない。独房からヴァンセンヌ城塞司令官邸に移されたのである。しかし、いずれにしても彼の生活に大幅な自由が許されることになった。なお

またヴェントゥリの調査によれば、当時のゴシップ雑誌『雑文集』は早くも1749年10月30日号のなかで、ディドロがヴァンセンヌの獄中に「神聖なプラトン」をもちこみ、その欄外を一連の書きこみでうずめたと報じている。同誌によれば、看守がディドロにプラトンの携帯を許可したのは、この四人にギリシア語など読めるはずがないと判断したからだという¹⁾。（これとまったく同一の事実がドゥロール『バスティーユとヴァンセンヌにおける哲学者と文学者の拘禁の歴史』1829年にも報告されている。ただし、ドゥロールはその典拠を明示していない²⁾。）

このように、ヴァンセンヌでディドロが身近にプラトン著作集をもっていたことは確実である³⁾。では実際に翻訳を行なった期間はいつか。すでにトゥルーソンが『ヴォルテール、ディドロおよびルソーの前に立つソクラテス』（1967年）の付録「ディドロと『学問芸術論』におけるソクラテス神話」のなかで実証したように、ルソーは『学問芸術論』のなかで、ディドロが翻訳した『ソクラテスの弁明』のテキストを使用している⁴⁾。ところで『学問芸術論』が執筆されたのは1749年10月から1750年3月末までの間であるから、ディドロの『弁明』の翻訳がこれ以後だということはいえぬ。

トゥルーソンにしたがって、さらに厳密に翻訳の時期を限定してみよう。——ディドロは1749年7月24日に逮捕され、すぐヴァンセンヌの独房に送られる。7月31日に独房内で尋問を受ける。彼が、独房内で不安と絶望にさいなまれ、肉体的にも衰弱していたことは、8月10日付ダゲッソーあての手紙と、8月10日と13日の2度におよぶペリエあての手紙から明白である（後述）。この状態

後述するように、独房内で彼がプラトンの対話篇を手にしていたという事実から、直ちに彼が独房内で翻訳を行なったと結論することは不可能である。

- 1) *La Bigarrure*, 30 octobre 1749, p.61.—Cf. Franco VENTURI, *Jeunesse de Diderot*, Paris, 1939, p.191. ヴェントゥリによれば、これはオランダのハーグから発行されていた小雑誌で、ディドロの獄中の動静を、かなり明確に伝えているという。 *Ibid.*, p.135.
- 2) J. DELORT, *Histoire de la détention des philosophes et des gens de lettres à la Bastille et à Vincennes*, Paris, 1829, t.II, p.216.
- 3) ディドロがヴァンセンヌで、プラトン著作集を手もとにもっていたことが確実だとすれば、Dの扉ページとMの表題——*Apologie de Socrate traduite de mémoire*——にある «de mémoire» という言葉は訂正を要するだろう。ディクマンは、この「記憶によって」というただし書は、あとから付加されたのであって、翻訳は原文を前にして行なわれたのだらうと推定している（「記憶によって」という事実は、ネジョンも、ヴァンドゥル夫人も、報告していない）。ただし彼はこう付加している。「もしディドロがこの翻訳を行なったのが、本当にヴァンセンヌの獄中だったとすれば、彼がうけた古典教育は逆境にあっても彼を見捨てなかったといいうるだろう。」 INV, p.116.
- 4) Raymond TROUSSON, *Socrate devant Voltaire, Diderot et Rousseau*, Paris, 1967, pp.106-124. ギリシア語の読めなかったルソーは、『学問芸術論』に引用した『ソクラテスの弁明』の一節（J.-J. ROUSSEAU, *Discours sur les sciences et les arts*, éd. par BOUCHARDY, *Œuvres complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, t.III, p.13.）をどこからえたのか。この問いにたいして、たとえば次のような説がある。——「ジュネーヴの市民〔ルソー〕は、プラトンをよく読んでおり、それをラテン語の翻訳からなん度も引用している。」G. R. HAVENS, *J.-J. Rousseau, Discours sur les sciences et les arts*, Édition critique, p.68. 「ルソーは、ここで、プラトン『ソクラテスの弁明』の自由訳をしている。彼はギリシア語が読めなかった。1643年には、すでにジリによる『弁明』と『クリトン』の仏訳がでている。」 Note de BOUCHARDY, *op. cit.*, p.1246.

トゥルーソンは、ルソーのテキストと、Giry 訳（1643年）、Dacier 訳（1699年）、Ficino のラテン語訳（*Platonis Opera omnia*, Marcilio Ficino interprete, Fracofurti apud Claudiam Maenum, 1602）とをまず照合し、ルソーの典拠がこの三者ではありえないことを実証する。ついで、ディドロ訳を検討し、ルソーの引用がこれに依拠し、その一部を修正したものであることを明らかにしている。

のもとで、彼が翻訳をおこなうことは不可能だったにちがいない。先に引用したディドロからソフィー・ヴォランにあてた手紙（1762年9月23日付）は独房でのディドロの経験をのべていると思われるが、この文面から判断する限り、彼が独房内で翻訳を行っていたとは考えがたい（ただし、この手紙は、ディドロがただひとりでプラトン——特に『ソクラテスの弁明』、『クリトン』、および『パイドン』——に読みふけたことを、暗示している）。

ついで8月21日、ディドロは独房から解放され、ヴァンセンヌ城内の城塞司令官邸に移され、中庭の散歩、訪問者との面会も許される。もちろん、読書、執筆の自由も認められたにちがいない。この軟禁状態は、完全に釈放される11月3日まで2カ月半たらずの間つづくのである。

したがって私は、トゥルーソンとともに、ディドロの翻訳が、この軟禁状態の間——つまり「1749年8月末から10月末の間¹⁾」——になされたものと考えざるをえない。もちろん、たとえ大幅な自由が認められたとしても、『盲人書簡』、『哲学断想』、『お喋りな宝石』の著者として、自己弁護の文書を、ヴァンセンヌ城内で執筆できるはずがない。だから、この時期のディドロの自己主張の方法としては、ただ『弁明』のソクラテスのことばをかりることしか残されていなかったのではなかろうか。

いうまでもなく、われわれはまだ『ソクラテスの弁明』（および『クリトン』の冒頭の一節）の初稿（いわゆる「ミルトンの1巻」）をもっていない。また、この翻訳がいつ行なわれたかを指示する確実な証言をもっていない。したがって、ディークマンのいうようにすべてはまだ「推測」とどまる。しかし、トゥルーソンにしたがって、ほとんど確実な「推測」として、第1にディドロが『ソクラテスの弁明』と『クリトン』（冒頭の一節）の翻訳者であること、第2に、この翻訳が1749年8月末から10月末の間に行なわれたこと、を主張することは可能であろう。

3 写稿の関係 今日、翻訳の自筆初稿が失なわれている以上、われわれは残された3写稿に依拠して『ソクラテスの弁明』と『クリトン』（冒頭の一節）のテキストを設定しなければならない。しかしまず、3写稿相互の関係（および3写稿と自筆初稿との関係）を確定することからはじめよう。3写稿間の異同は、全部で次の3種類に類別できる。（ただし、＝は2つのテキストが同一であることを、|は2つのテキストが異なることを示す。）

(1) V = D | M

(2) V | D = M

(3) V | D | M (V = M)

次に示すのが、この分類にしたがった3写稿の異同表であるが、表のなかでは次の記号を使用する。

() —— 上欄の表現に付加された部分。

(削除) —— 上欄の表現から削除された部分（削除には、線をひいて消した場合《rayage》とナイフで削りとして消した場合《grattage》とがあるが、ここでは区別しない）。

1) TROUSSON, *op. cit.*, p. 167.

< >——最初に上欄とおなじ表現を書き、ついでそれを書き直した部分（書き直しには、いったん前の表現を線で消して、上の行間か、欄外の余白に書き直した場合と、まえの表現の上から書き直した《surcharge》の場合とがあるが、ここでは区別しない）。

—— 上欄の表現とまったく同一の場合は、横線で代用する。

(+) (—) —— 写稿間の異同は、3つの次元——(i) 意味上の異同、(ii) 文法的異同、(iii) 文体的異同——におよんでいる。しかし、表ではこれらの次元の区別はせず、ただ正しい（または望ましい）表現の欄に(+)を、誤った（または望ましくない）表現の欄に(—)をつける。両方とも同程度に望ましい場合は両方の括弧内を空白にする。

写稿のページの記載——各表現のあとの括弧内に記入する。

(1) V=D | M

V	qu'ils ont avancées (p. 1)	(+)	l'impudence (p. 1)	(+)
D	—— (p. 1)		—— (p. 2)	
M	qu'ils ont avancé (p. 1)	(—)	l'imprudence (p. 1)	(—)
	aperçu (p. 1)	(—)	n'entendrez (p. 1)	(—)
	—— (p. 2)		—— (p. 2)	
	aperçus (p. 1)	(+)	n'entendez (p. 1)	(+)
	soixante et dix (p. 1)	(—)	du rhéteur (p. 2)	(+)
	—— (p. 3)		—— (p. 3)	
	soixante dix (p. 2)	(+)	de rhéteur (p. 2)	(—)
	à témoins (p. 4)	(—)	Appollon (p. 6)	(—)
	—— (p. 7)		—— (p. 11)	
	à témoin (p. 5)	(+)	Apollon (p. 8)	(+)
	Appollon (p. 7)	(—)	C'est ce que (p. 8)	(—)
	—— (p. 12)		—— (p. 13)	
	Apollon (p. 8)	(+)	(—) ce que (p. 9)	(+)
	je me répondrais (p. 10)	(—)	convaincu (p. 12)	(—)
	—— (p. 18)		—— (p. 20)	
	je me répon<dais> (p. 12)	(+)	convaincu(s) (p. 14)	(+)
	Ô vous (p. 18)	(+)	qu'un homme pour la vie ou la mort (p. 18)	(—)
	—— (p. 34)		—— (p. 34)	
	Et vous (p. 24)	(—)	<que pour un> homme [削除] la vie ou la mort (p. 24)	(+)
	il y avait (p. 18)	(—)	ou de la perdre, qu'il répondit (p. 19)	(—)
	—— (p. 34)		—— (p. 34)	
	il y aurait (p. 24)	(+)	ou de la perdre? Vous savez ce qu'il répondit (p. 24)	(+)
	serait-ce là une faute grave? (p. 19)	(—)	—— (p. 36)	
	ce serait là une faute grave; (p. 26)	(+)		

Nous ne ... arrive, _____ [下線なし] (p. 20) (pp. 37-38) (-)	toute autre chose (p. 20) _____ (pp. 39-40) (-)	
Nous ne ... arrive [下線あり] (p. 27) (+)	tout autre chose (p. 28) (+)	
Mais il paraîtra (p. 22) (-) _____ (p. 44) (-)	à [空白] avec (p. 23) (-) _____ (p. 47) (-)	
[削除] Il paraîtra (p. 31) (+)	<au>(Shale) avec (p. 34) (+)	
avec ceux que (p. 24) (-) _____ (p. 49) (-)	il est un emploi (p. 25) (-) _____ (p. 50) (-)	aie (p. 26) (+) — (p. 52) (+)
avec les personnes que (p. 35) (+)	c'est un emploi (p. 36) (+)	ai (p. 38) (-)
aux dieux, si (p. 27) (-) _____ (p. 56) (-)	de chercher (p. 27) (-) _____ (p. 57) (-)	
aux dieux ... Si (p. 41) (+)	<Je> cher<chais> (p. 41) (+)	
[紙片破損, この部分を欠く] (p. 27) et je consens que (p. 57) (-)	chaires (p. 28) () _____ (p. 58) ()	devaient (p. 28) (-) _____ (p. 59) (-)
je consens (donc) que (p. 41) (+)	chaises (p. 42) ()	doivent (p. 42) (+)
la peine dont Mélite (p. 29) (-) _____ (p. 61) (-)	promettai-je (p. 29) (-) _____ (p. 61) (-)	
la peine (de la faute) dont Mélite (p. 44) (+)	promett<rai>-je (p. 44) (+)	
et à charge, que vous (p. 30) (-) _____ (p. 62) (-)	Mais il y a (p. 30) (-) _____ (p. 63) (-)	
et à charge (au point) que vous (p. 45) (+)	[削除] Il y a (p. 45) (+)	
n'auriez (p. 32) (+) _____ (p. 68) (+)	continuions (p. 32) (-) _____ (p. 69) (-)	
n'au<rez> (p. 49) (-)	continuous (p. 49) (+)	

(2) V | D=M

V	rien de juste (p. 1) (-)	la plupart de vous (p. 1) (-)
D	rien que (de) juste (p. 2) (+)	la plupart de (vous) tous (p. 3) (+)
M	rien que de juste (p. 2) (+)	la plupart de vous tous (p. 2) (+)
	les anciens, les nouveaux (p. 3) (-)	et que la désavoue (p. 4) (-)
	les anciens et les nouveaux (p. 5) (+) _____ (p. 4) (+)	et que (je) la désavoue (p. 7) (+) et que (je) la désavoue (p. 5) (+)
	dont m'accuse (p. 4) (-)	Hippias (p. 5) (-)
	dont on m'accuse (p. 8) (+) _____ (p. 5) (+)	Hippias (p. 8) (+) _____ (p. 6) (+)
	nous n'aurions pas de peine de trouver (p. 5) (-)	excellent (p. 5) (-)
	nous n'aurions pas de peine à trouver (p. 9) (+) _____ (p. 6) (+)	excellents (p. 9) (+) _____ (p. 6) (+)

Et qui est-ce? repris-je. (p. 5) (-)	Je m'en pique nullement (p. 6) (-)	
Et qui est-ce, repris-je? (p. 9) (+) _____ (p. 6)	Je (ne) m'en pique nullement (p. 11) (+) Je ne m'en pique nullement (p. 8) (+)	
il osa donc demander (p. 7) (-)	l'idée de dieu (p. 7) (-)	il est pas (p. 7) (-)
il osa demander (p. 12) (+) _____ (p. 8)	l'dée<du>dieu (p. 12) (+) l'idée du dieu (p. 9) (+)	il n'est pas (p. 13) (+) _____ (p. 9)
à un ceux qui (p. 7) (-)	que moi si je (p. 8) (-)	Si aimerais (p. 10) (-)
à un de ceux qui (p. 13) (+) _____ (p. 9)	que moi je (p. 4) (+) _____ (p. 10)	Si j'aimerais (p. 17) (+) _____ (p. 12)
citoyens, ou étrangers (p. 11) (-)	fort savant (p. 12) (-)	
citoyen ou étranger (p. 19) (+) _____ (p. 13)	fort savants (p. 19) (+) _____ (p. 13)	
plutôt que de rester (p. 12) (+)	rien: qui (p. 12) (-)	
plutôt de rester (p. 20) (-) _____ (p. 13)	rien << qu'ils (p. 20) (+) _____ (p. 13)	
prétendez (p. 14) ()	dresse (p. 15) (-)	quelques biens (p. 15) (-)
prétendiez (p. 24) () _____ (p. 17)	dresse(nt) (p. 25) (+) dressent (p. 17) (+)	quelque bien (p. 26) (+) _____ (p. 18)
est (p. 16) (-)	fait (p. 18) (-)	qu'elle fera (p. 18) (-)
<sont> (p. 27) (+) sont (p. 19) (+)	 (p. 33) (+) font (p. 24) (+)	qu'elles <feront> (p. 33) (+) qu'elles feront (p. 24) (+)
que j'exerce en vertu de l'obéissance (p. 20) (+)		conseillent (p. 22) (-)
que j'exerce de l'obéissance (p. 39) (-) _____ (p. 28)		<conseille> (p. 44) (+) conseille (p. 32) (+)
si l'on m'eût appelé (p. 23) (-)	passa (p. 23) (+)	
si l'on (ne) m'eût appelé (p. 46) (+) si l'on ne m'eût appelé (p. 33) (+)	passât (p. 47) (-) _____ (p. 34)	
un grand nombre (p. 24) (+)	manqua (p. 28) (-)	
grand nombre (p. 48) (-) _____ (p. 35)	manquât (p. 57) (+) _____ (p. 41)	
vous vous êtes pressé (p. 31) (-)	vous vous êtes bien trompé (p. 32) (-)	
vous vous êtes pressés (p. 65) (+) _____ (p. 46)	vous vous êtes bien trompé(s) (p. 68) (+) vous vous êtes bien trompés (p. 49) (+)	

(3) V | D | M (V=M)

V	le culte du dieu (p. 11) (+)	convenez-vous (p. 16) (+)
D	le culte de dieu (p. 11) (-)	conveniez-vous (p. 28) (-)
M	le culte du dieu (p. 13) (+)	convenez-vous (p. 20) (+)

《Si vous ... victoire》	(p. 19) (+)	recouvrez	(p. 21) ()
Si vous ... vous-mêmes. [下線あり]	(p. 35) (-)	recouvrirez	(p. 42) ()
Si vous ... victoire. [下線あり]	(p. 25) (+)	recouvrez	(p. 30) ()
je n'ai pas	(p. 24) (-)	si je trouve	(p. 27) (+)
je n'aie pas	(p. 50) (+)	si trouve	(p. 56) (-)
je n'ai pas	(p. 36) (-)	si (je) trouve	(p. 40) (+)
		dans une autre	(p. 30) (+)
		dans un autre	(p. 62) (-)
		dans une autre	(p. 45) (+)

この表からひきださう結論はただひとつ——Vがもっとも不完全な段階、Dがこれにやや修正を加えた段階¹⁾、Mがもっとも整合的な段階を示しているということである。すなわちモデル（失なわれた自筆初稿²⁾）→V→D→Mの順序で写稿が作製されたのである。

この事実は、たとえば次の3文例を見れば特に明白である。

(V) Je m'en pique nullement.

(D) Je (ne) m'en pique nullement. (最初 Je m'en pique nullement. と書き、ついで Je のあとの上の行間に ne を書き加える。)

(M) Je ne m'en pique nullement. (書き加えや訂正のあとなし。)

この3文例それぞれの特徴は、V→D→Mという関係を想定した場合にしか、合理的に説明しえないだろう³⁾。

本校訂テキストの編纂の原則 3写稿のうちでもっとも整合的な段階を示しているMを底本とし、これを基礎テキストとして印刷する。

印刷にさいしては、次の原則にしたがう。

綴字——固有名詞以外は、すべて現代的綴字に改める（動詞と代名詞間の連結線、アクセントが欠如している場合は付加する。)

固有名詞の表記——(a)固有名詞の表記は現代化せず、原文にそのまましたがう（ただし、アクセントは現代的に付加する。)(b)固有名詞の表記に混乱がある場合はこれを統一する（もっとも頻繁に使用された表記を基準にする。頻度がおなじ場合は、現代表記に近いものを基準にする)。この種の混乱、および編者による統一にかんしては特に注記しない。

大文字の使用——原文では、大文字の使用がまったく恣意的であるから、これを、現代の慣用に

- 1) Dに加えられた修正のうちには、D自身の筆跡のほかに、ヴァンドゥルの筆跡も認められる。しかし、なかには両者を識別しがたいものもあり、私が編纂したテキストでは特にこの点是指摘しなかった。
- 2) もちろん、この図式は厳密なものではない。モデルとVとの間に、別の自筆稿（または写稿）が介在したこともありうる。
- 3) ただ、(3)V | D | M (V=M) に属する7例は、VとMとが同一であることから、V→D→Mの関係と矛盾するようにみえるかもしれない。しかし、この7例ともMがDにたいして単純な修正を加え、それが必然的（あるいは偶然的に）Vと一致したということを示しているにすぎない。したがって、私の結論は、修正を必要としない。

したがって改める。(たとえば, *deux poulins et deux petits Taureaux* においては, *Taureaux* を *taureaux* とする。)

句読点——(a)原文にしたがう。(b)ただし, そのままでは意味が不明瞭であるか, それとも現代の慣用に反している場合は, 最少限度の変更を加える。変更は脚注で指摘する。

3 写稿のページ付の表示——(a)底本のページ数は, ページのはじまりごとに, 大括弧〔 〕にいて表示する。(b)V, Dのページ数は, ページのはじまりごとに, それぞれ縦の1本線, 縦の2本線をいて表示し, その行の右欄外に, Vのページ数は並活字体で, Dのページ数はイタリック体でそれぞれ記入する。(c)各ページ左欄外に, ステファヌス版『プラトン全集』 (*Platonis opera quae extant omnia*, éd. par H. Stephanus, 1578) のページ数と各ページ内の a, b, c, d, e の段落づけとを印刷する (ただし, a は省略)。

脚注——(a)脚注の見出しは, 行上の一連番号によって示す。(b)底本にたいする V, D 両写稿のすべての異同を採録する¹⁾。(ただし, 編者による綴字の変更は除く。)(c)各写稿の筆写の状態の特徴はすべて指摘する。(d)各写稿の文法上の誤りは, すべて指摘する。(e)Vの紙片が破損しており, そのために欠けた部分はMによっておぎない, イタリック体で表示する。(Vで欠けている部分の表現が, DとMとで異なる場合が1箇所ある。——*et je consens que* (D, p. 57); *je consens donc que* (M, p. 41)——この場合, Vの原文は, 恐らくDと同一であろうが, 基礎テキストがMなのであるから, このVの欠如部分もMによっておぎなっている。)

本テキストで使用した記号——(a)編者の付加, 説明などはすべて大括弧〔 〕に入れる。(b)底本の句読点に変更を加えた場合は, その部分を本文内で鍵括弧< >にいて表示するとともに, もとの句読点を, おなじく鍵括弧にいて脚注内に表示する。

固有名詞対照表——参考のために, 固有名詞の原語, ディドロの表記, 現代フランス語の慣用的表記 (PLATON, *Œuvres complètes*, Paris, Les Belles Lettres, 1920 による) との対照表を次にかかげる。ディドロの誤訳は, イタリック体で示す (なお, *Zotide* にかんしては, この綴りをとる写本も存在するから, 誤りとはいえない)。

1) 単純な筆写の誤りは指摘しない。——*facon* (*façon*) [M, p.2, l.9; M, p.21, l.23], *conçue* (*conçue*) [M, p.15, l.6], *acquiescons* (*acquiesçons*) [M, p.48, l.15] (括弧内に記入したのが正しい綴り)。

原 語	デ ィ ド ロ の 表 記	現代の慣用的表記
Ἰ Anytos	Anyte	Anytos
Μέλητος	Mélite	Méléotos
Γοργίας	Georgias	Gorgias
Πρόδικος ὁ Κεῖος	Prodicus de Scio	Prodicos de Céos
Ἰππονίκος	Hypponique	Hipponicos
Εὐηνος	Ēvènus	Événos
Κλαζομεναί	Closomène	Clazomène
Τροία	Troyes	Troie
Ποτειδαία	Potydee	Potidée
Ἀμφίπολις	Amphypolis	Amphipolis
Δήλος	Délos	Délion
Ἀντιοχίς	Antioche	Antiochide
Θόλος	Shale	Tholos
Λέων	Léontas	Léon
Λυσανίας	Lysias	Lysanias
Σφήττος	Sphètius	Sphettos
Αἰαχίνης	Ēvésinus	Eschine
Ἀντιφῶν ὁ Κηφισιεύς	Antyphon Cèptiseus	Antiphon de Képhisia
Θεοζοτίδης	Zotide	Théozotidès
Παράλιος	Phalarus	Paralios
Δημόδοκος	Démodice	Démodocos
Αἰαντόδωρος	Cantodon	Aïantodore
Ἀπολλόδωρος	Appollodore	Apollodore
Ῥαδάμανθς	Rhadamangos	Rhadamanthe
Αἶας	Éac	Éaque
Τριπτόλεμος	Triptolène	Triptolème
Ἡσίοδος	Héziode	Hésiode
Σίσυφος	Sysiphe	Sisyphe

Apologie de Socrate

traduite de mémoire au Château de Vincennes¹⁾

Athéniens, je ne sais quelle impression auront fait sur vous les discours de mes accusateurs; pour moi j'ai tellement été frappé de la confiance avec laquelle ils ont parlé, quoiqu'ils n'eussent rien à dire de vrai, que je me suis presque oublié moi-même. Dans le grand nombre de faussetés || qu'ils ont avancé²⁾ [sic], une chose m'étonne particulière-³⁾ ment, c'est qu'ils aient eu l'imprudence⁴⁾ de vous prévenir contre moi comme un homme capable de vous séduire, et de me traduire pour éloquent. Ils ne se sont pas aperçus⁵⁾ qu'ayant à leur répondre devant vous, vous vous apercevriez bientôt du contraire; je ne les conçois pas à moins qu'ils n'entendent par un homme éloquent, un homme véridique. Dans ce cas je suis rhéteur, mais non comme ils le sont; car, je vous le répète,⁶⁾ ils n'ont rien dit de vrai et vous n'entendez rien de moi qui ne le soit.⁷⁾ Ils ont eu soin de choisir leurs termes et d'étudier leurs mots. Je ne les [2] imiterai point non plus en cela; vous entendrez les choses de moi comme elles se présenteront à mon esprit; j'espère qu'il n'y aura rien que de juste,⁸⁾ et je me flatte qu'il n'y a⁹⁾ personne ici qui attende autre chose de moi: il me siérait bien à mon âge¹⁰⁾ de prononcer devant vous ||¹¹⁾ 3 un tissu de mots recherchés et de phrases étudiées comme un écolier. Je vous conjure donc, Athéniens,¹²⁾ de n'être ni surpris ni offensés, si je n'emploie dans ma réponse que

1) V [Mの表題を欠き、代りに次の表題をもつ。——] *Copie des notes écrites par M. Diderot en marge d'un* volume des œuvres de Milton, pendant sa détention au Château de Vincennes; entré à Vincennes le 24** Juillet 1749, 29 jours au Donjon, huit pour les cours, puis le parc, sorti.*

* [最初 *sur un* と書き、ついでそれを線で消し、上の余白に *en marge d'un* を書き加える。]

** [最初29と書き、ついで9の上から4と書き直し、24にする。]

D [Mの表題を欠き、Vと同一の表題をもつ。表題の前に、次の扉ページをもつ。——] *Apologie de Socrate traduite de mémoire/1749*

2) D *avancées* [*avancé* の語尾に *es* 脱落。]

3) V, D *impudence*

4) V, D *aperçu*

5) V [*répondre* のあと、上の行間に *devant vous* を書き加える。]

6) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*je*]

7) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*répète*]

8) V, D *n'entendrez*

9) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*soit*]

10) V *rien de juste*

D *rien que de juste* [最初 *rien de juste* と書き、ついで *de* の上から *que* と書き直し、欄外余白に *de* を書き加える。]

11) V [最初 *il n'y* のあとに一語を書き、ついでこれを線で消し、上の行間に *a* を書き加える。]

12) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*âge*]

13) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*Athéniens,*]

les mêmes façons de parler dont je me suis servi au barreau, dans les bureaux des argen-
 tiers, où la plupart de vous tous m'avez entendu.¹⁴⁾ Il faut que cela soit ainsi, car je
 parais¹⁵⁾ en justice pour la première fois, et j'ai soixante-dix¹⁶⁾ ans passés.¹⁷⁾ Il n'est donc pas¹⁸⁾
 étonnant que la langue du barreau me soit tout à fait étrangère.¹⁹⁾ Vous pardonnez à un²⁰⁾
 18 étranger²¹⁾ nouvellement débarqué dans Athènes, son patois²²⁾ et son accent. Ayez pour moi 2
 la même indulgence; je vous conjure de n'avoir aucuns²³⁾ égards à la manière de dire qui
 sera ou plus mauvaise ou meilleure.²⁴⁾ Mais examinez seulement si ce que je dirai est exact
 ou non. C'est là le devoir du juge. Celui de rhéteur²⁵⁾ est d'être vrai.

|| Je crois qu'il est à propos de répondre d'abord [3] à la première accusation, et aux²⁶⁾ 4
 premiers accusateurs, et de passer ensuite à la dernière accusation et à mes derniers accu-
 b sateurs. Les auteurs d'Anyte²⁷⁾ sont puissants; mais je les crains bien moins que ceux qui
 m'ont calomnié devant vous, il y a plusieurs années; ils sont en grand nombre, ils se
 sont emparés de vos esprits dès l'enfance; ils vous ont suggéré des faussetés [,] répétant
 sans cesse qu'il y avait un certain Socrate, un prétendu sage qui s'occupait à examiner ce²⁸⁾
 qui se passe au-dessus des airs et sous la terre, et à rendre à force de dissenter la meilleure²⁹⁾
 c cause, mauvaise. Voilà les gens que je redoute. Ce sont ceux qui ont semé ces bruits
 contre moi; car ceux qui les écoutent, se mettent dans l'esprit, que ceux qui s'occupent de
 telles choses ne croient point de dieux. Or ceux-ci sont en grand nombre; il y a longtem-
 ps qu'ils m'accusent, et ils vous ont pris dans un âge que l'on || persuade facilement; 5
 vous étiez pour la plupart dans l'enfance, ou dans la jeunesse; c'est le temps de la
 crédulité; et puis on m'accusait sans que personne me défendit; mais ce qu'il y a de plus
 extraordinaire dans la cause présente [,] c'est que je ne connais et ne puis dire le nom³⁰⁾

14) V de vous m'avez entendu

D de vous tous m'avez entendu [最初 de tous と書き, ついで上の行間に vous を書き加える。]

15) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——parais en]

16) V, D soixante et dix

17) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——passés。]

18) V [最初 il n'est donc pas のあとに数語を書き, ついでこれを線で消す。]

19) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——langue]

20) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——étrangère. Vous pardonnez]

21) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——étranger]

22) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——nouvellement débarqué dans Athènes, son patois]

23) D aucun égards [aucuns égards の誤記]

24) V [最初 dire のあとに数語を書き, ついでこれを線で消し, そのあと qui を欄外余白に, sera ou を上の行間に, それぞれ書き加える。]

25) V, D du rhéteur

26) V [accusation のあと, 上の行間に et を書き加える。]

27) V, D, M [Anyte に下線を引く。]

28) V s'occupait のあと, 上の行間に à を書き加える。]

29) V [des airs のあと, 上の行間に et を書き加える。]

30) V extraordi

d d'aucun de mes accusateurs; tout ce que je sais, c'est qu'il y a parmi eux un (4) comé-
 dien; d'ailleurs ceux qui vous ont mal parlé de moi, soit par envie, soit par calomnie,³¹⁾ ou
 qui (,) persuadés eux-mêmes de ce qu'ils croient, en ont persuadé d'autres, sont en si
 grand nombre qu'on ne | peut ni les appeler en justice, ni les réfuter; il faut ici se battre³²⁾ 3
 comme dans les ténèbres, interroger sans ouïr personne qui vous réponde, et porter des
 coups sans voir son ennemi. Je vous disais³³⁾ donc, Athéniens, que j'avais deux sortes
 e d'accusateurs, les anciens et les nouveaux,³⁴⁾ et qu'il était à propos de répondre d'abord à
 ceux que vous avez entendu (sic)³⁵⁾ || les premiers: ce que je vais faire. Je vais tâcher 6
 19 dans le peu de temps qui m'est accordé pour me défendre, de dissiper, s'il est possible,
 une opinion conçue sur tant et de si vieilles calomnies,³⁶⁾ et conservées pendant tant d'an-
 nées; je souhaite d'en venir à bout, pourvu que ce soit le plus avantageux pour vous et
 pour moi.

Je sais combien cela est difficile; je n'ignore pas même ce qui en arrivera, mais dieu
 surtout. Pour nous obéissons à la loi, et défendons-nous. Relisons dès le commencement
 b cette accusation, le fondement de la calomnie sur laquelle Mélite a osé me traduire
 devant vous; que disent donc mes accusateurs? Qu'on récite l'accusation, comme s'ils
 étaient présents, qu'ils jurassent, (5) et qu'ils exigeassent de moi le serment; voici l'accu-
 sation: (37) Socrate est un homme injuste qui examine sérieusement³⁸⁾ ce qui || se passe au- 7
 dessus des airs et sur la terre, et qui se plaît à rendre bonne une mauvaise cause. De
 c plus il enseigne aux autres la même chose. (39) Voilà l'accusation,⁴⁰⁾ | et c'est aussi à peu 4
 près ce que vous avez entendu dans la comédie d'Aristophane, où l'on introduit un
 personnage appelé Socrate, qui assure qu'il se promène dans les airs, et autres puérités
 semblables. Je n'ai pourtant jamais rien su de cela. Ce n'est pas que je fisse grand cas
 de celui qui en aurait la science, et que je la désavoue⁴²⁾ de peur que Mélite ne m'en fasse
 un grand crime; non, Messieurs, je dis que je ne l'ai point (,) cette science, précisément

31) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——calomnie]

32) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——*en ont persuadé d'autres, sont en si grand nombre*]

33) V [最初 *vous* のあとに一語を書き, ついでこれを線で消し, そのあと上の行間に *disais* を書き加える。]

34) V *les anciens, les nouveaux*

35) V, D, M [*entendu* の語尾に *s* 脱落。]

36) V, D *tant et si vieilles calomnies*

M [*et* のあと, 上の行間に *de* を書き加える。]

37) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——*l'accusation* :]

38) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——*sérieusement*]

39) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——, *et qui*]

40) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——*plus*]

41) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——*Voilà l'accusation*]

42) V *et que la désavoue*

D, M [*que* のあと, 上の行間に *je* を書き加える。]

d parce qu'elle me manque. J'en prends à témoin⁴³⁾ la plupart de vous; vous m'avez presque
 tous entendu. Je vous prie d'exposer ici les choses dont je vous ai entretenu [sic]. S'il y⁴⁴⁾
 en a quelqu'un qui m'ait jamais entendu⁴⁵⁾ parler || de ce dont on m'accuse,⁴⁶⁾ qu'il le dise; 8
 et vous, Athéniens, jugez du reste par cela. Il n'y a rien de vrai. Je ne doute point que
 e quelqu'un ait ajouté que je faisais payer mes leçons, et que je m'en enrichissais <:⁴⁷⁾ autre
 fausseté; ce n'est pas qu'il ne paraisse beau de s'enrichir en enseignant les hommes quand
 on en est capable, comme Georgias [6] le Léontin, Prodicus de Scio, et Hippias⁴⁸⁾ l'Élén,
 qui ont ce talent qu'ils portent de ville en ville, persuadant aux jeunes gens qui pouvaient
 20 se faire instruire gratuitement chez eux, de quitter leur maître, de les suivre, de leur
 donner de l'argent et de leur être fort obligés. Nous avons encore un certain | sage de 5
 Paros dont l'arrivée dans cette ville m'a fait grand plaisir. Il m'arriva un jour de me
 trouver avec Callias[,] fils d'Hypponique,⁴⁹⁾ et c'est un homme à qui les sophistes coûtent
 plus qu'à tous les habitants d'Athènes <;⁵⁰⁾ il a deux fils || sur lesquels je me mis à le 9
 questionner <:⁵¹⁾ [《》] Callias, lui dis-je, si vos fils étaient deux poulins, ou deux petits
 taureaux [,] nous n'aurions pas de peine à trouver⁵²⁾ quelqu'un pour de l'argent qui les
 b perfectionnât, et les rendit excellents⁵³⁾ chacun dans son genre, et ce serait un écuyer, ou
 un laboureur, mais ce sont des hommes que vos fils; à qui donc les confierons-nous? Qui
 est-ce parmi nous qui sait former des hommes <?>⁵⁴⁾ Car j'imagine, Callias, que vous
 n'aurez pas manqué de vous faire ces questions. Avons-nous quelqu'un, où⁵⁵⁾ [sic] n'avons-
 nous personne? [—] Nous avons quelqu'un sans doute, me répondit-il. [—] Et qui
 est-ce, repris-je⁵⁶⁾? D'où est cet homme, et combien [7] prend-il? [—] C'est [,] me
 dit-il [,] Événus de Paros; et on lui donne cinq mines <.⁵⁷⁾ [《》] Je vous avouerai
 c qu'Événus me parut heureux, s'il avait réellement l'art de former des hommes, et s'il

43) V, D *témoins*

44) V, D, M [entretenu の語尾に s 脱落。]

45) V [最初 *jamais* のあとに一語を書き, ついでこれを線で消し, そのあと上の行間に *entendu* を書き加える。]

46) V *dont m'accuse*

47) V, D, M <; >

48) V *Hippias*

49) V [最初 *d'Hyppol* と書き, ついでこれを線で消し, その横に *d'Hyppolique* と書き, 再びこれを線で消し, その横に *d'Hypponique* と書く。]

50) V, D, M <, >

51) V, D, M < . >

52) V *de peine de trouver*

53) V *excellent*

D [最初 *excellent* と書き, ついで語尾に s を書き加える。]

54) V, D, M <, >

55) M [où は *ou* の誤記。]

56) V *Et qui est-ce? repris-je.*

57) V, D, M <; >

l'exerçait || bien, car si je l'avais [,] moi [,] j'en ferais⁵⁸⁾ gloire, et je m'en estimerais 10
 beaucoup; mais je ne l'ai point⁵⁹⁾, Messieurs; on me demandera peut-être <: >⁶⁰⁾ Socrate,
 que faites-vous⁶¹⁾ donc, et comment avez-vous donné lieu à toutes les calomnies qu'on débite
 contre vous? Vous n'auriez⁶²⁾ | jamais fait tant de bruit, si votre conduite n'avait pas 6
 quelque chose de particulier. Pourquoi aurait-on tant parlé de vous, si vous eussiez agi
 comme tout le monde? Dites-nous donc ce qui en est, afin que nous portions de vous un
 d jugement éclairé, et que nous n'en pensions pas mal faute d'être instruits. < >> Ce que
 vous me demandez me paraît juste, et je vais vous apprendre d'où me viennent et la
 réputation que j'ai, et les calomnies, auxquelles j'ai été exposé.

Athéniens, je vous invite à m'écouter, quoique je craigne que quelques-uns ne || prenne⁶³⁾ 11
 [sic] ce que je vais dire pour une plaisanterie. Quoiqu'il en soit, je les conjure de croire
 que c'est la pure vérité [,] — Mon malheur, et ma célébrité n'ont autre cause qu'une
 certaine réputation de sagesse, et de quelle sagesse? D'une sagesse [8] toute humaine; car
 si j'en ai, c'est de cette espèce. Je laisse celle qui surpasse l'humanité à ceux dont j'ai
 e parlé plus haut. Je ne l'ai point. Je ne m'en pique nullement⁶⁴⁾. Si quelqu'un dit le
 contraire [,] il ment, et me calomnie; si je suis obligé d'entrer dans un détail qui a
 quelque air de vanité, je vous prie de n'en être point offensés. Je n'avancerai rien de
 mon chef, je m'appuierai de témoins dignes de foi. C'est Apollon⁶⁵⁾, c'est l'oracle de
 21 Delphes⁶⁶⁾ qui m'a attribué cette sagesse quelle qu'elle soit. Vous avez tous connu Chéré-
 phon. Il m'aimait⁶⁷⁾ dès ma jeunesse, et il était aussi l'ami du peuple athénien. Il vous || 12
 suivit, et dans votre fuite⁶⁸⁾, et dans | votre retour. Vous savez avec quelle chaleur 7
 Chéréphon se portait à tout ce qu'il entreprenait; étant donc allé à Delphes⁶⁹⁾, il osa de-
 mander⁷⁰⁾ au dieu; (Messieurs [,] ne vous offensez point de ce que je suis forcé de vous

58) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——ferais]

59) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——point]

60) V < . >

D < " >

M < , >

61) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——que faites-vous]

62) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——donné lieu à toutes les calomnies qu'on débite contre vous? Vous n'auriez]

63) V, D, M [prenne は prennent の誤記。]

64) V Je m'en pique nullement.

D [Je のあと, 上の行間に ne を書き加える。]

65) V, D Appollon

66) V, D, M [三写稿とも, ここでは Delphe (語尾の s を欠く)。しかし, 本ページ 1.22——M Delphes にあわせて, 語尾の s を補う。]

67) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——Il m'aimait]

68) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——peuple athénien. Il vous suivit, et dans votre]

69) V, D Delphe

70) V il osa donc demander

dire) il osa demander au dieu s'il y avait dans Athènes quelque homme plus sage que moi; la pythie lui répondit que non. Messieurs, Chéréphon est mort; mais voilà son
 b frère qui vous attestera le fait. Voici maintenant à quel propos je le raconte: il s'agit de vous dévoiler l'origine des calomnies débitées contre moi, et la voici. Lorsque j'appris la réponse d'Apollon⁷¹⁾, je me dis (9) à moi-même <:⁷²⁾ > <《> Quelle est l'idée du dieu⁷³⁾, et que signifie cet oracle <?>⁷⁴⁾ Car je me suis témoin à moi-même que je ne suis sage ni dans les grandes, ni dans les petites choses; pourquoi donc m'appelle-t-il le plus || sage des 13 Athéniens<?>⁷⁵⁾ Il n'est pas permis⁷⁶⁾ à un dieu de mentir, ni à nous de le croire menteur.
 c <《> C'est ainsi que je m'interrogeais [,] toujours incertain du sens de l'oracle; enfin [,] après bien des réflexions, je trouvai le moyen de sortir de ma perplexité. Je m'adressai à un de ceux qui passent ici pour sage⁷⁷⁾ [sic],⁷⁸⁾ espérant mettre l'oracle en défaut ou jamais, et démontrer au dieu que ce n'était point à moi,⁷⁹⁾ mais à cet homme,⁸⁰⁾ qu'il aurait dû attribuer la supériorité en sagesse; je me mis donc⁸¹⁾ | à l'examiner, il n'est pas nécessaire 8 que je le nomme, il suffit de dire que c'est un de ceux qui gouvernent actuellement la république; mais quelle fut l'issue de mon examen<?>⁸²⁾ C'est que cet homme se tenait⁸³⁾ pour sage et passait pour tel, et qu'il n'en était rien, ce que je tâchais⁸⁴⁾ de lui faire comprendre, que je m'en fis un ennemi, || et que j'indisposais tous ceux⁸⁵⁾ qui étaient présents. 14 Revenons donc sur moi-même; voici comment je raisonnai <:⁸⁶⁾ > <《> Je suis certes plus sage que cet homme. Nous ne savons à la vérité ni l'un ni l'autre ce que c'est que le

D [osa のあと、一語 (donc であろう) を削って消す。]

71) V, D Appollon

72) V, D, M < . >

73) V l'idée de Dieu

D [de の上から du と書き直す。]

74) V < : >

D < . >

M < , >

75) V, D, M < , >

76) V il est pas

77) V à un ceux qui

78) V, D, M [sage の語尾に s 脱落。]

79) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——ce]

80) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——il aurait]

81) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——sagesse ; je me mis donc]

82) V, D < . >

M < , >

83) V [cet homme のあと、一語を線で消す。]

84) V, D c'est ce que je tâchais

V [最初 c'est ce que je tâchais と書き, ついで c'est を線で消し, その横に再び c'est と書く。]

M [最初 c'est ce que je tâchais と書き, ついで c'est を線で消して ce que je tâchais にする。]

85) V [最初 tous のあとに一語を書き, ついでこれを線で消し, そのあと上の行間に ceux を書き加える。]

86) V, D, M < . >

beau, et le bon avec cette différence que [,] quoique cet homme ne sache rien, il croit savoir quelque [10] chose, au lieu que moi je ne sais rien; au moins je ne suis pas en doute; voilà donc à quoi se réduit cette supériorité de sagesse, que m'accorde l'oracle, à savoir que j'ignore ce que je ne sais pas. [>>] Mais comme il n'était pas le seul qui e passât pour sage dans Athènes, je m'adressai à un autre, que j'examinai avec le même succès, c'est-à-dire que j'augmentai le nombre des mécontents, et que j'eus un ennemi de plus. De ceux-ci je passai à d'autres [,] n'ignorant pas combien je multipliais les haines, et ne || continuant pas mes expériences sans douleur et sans crainte. Cependant rien ne 15 me parut plus important que de vérifier | l'oracle. Je continuai donc d'en chercher le 9 sens, et de converser avec ceux qui se piquaient de savoir quelque chose; vous le dirai-je 22 [,] Athéniens? Sans doute, puisque c'est la vérité! Tous mes essais me convinquirent que les plus fous étaient ceux qui passaient pour sages; et que les plus sages étaient ceux qui en avaient le moins la réputation. Mais il faut que je vous fasse l'histoire de mes travaux, et de toutes les peines que j'ai prises pour mettre la vérité de l'oracle hors b d'atteinte. J'allai des hommes d'état aux poètes, aux auteurs de tragédie, et aux faiseurs de dithyrambes, espérant bien avoir le dessous avec eux. Je pris les livres [11] qu'ils avaient le plus travaillé [sic]; je les questionnai sur le sens de ce qui y || était renfermé, 16 dans le dessein de tirer d'eux quelque lumière; mais qu'en arriva-t-il? J'ai honte de vous le dire. Il le faut pourtant. Eh bien, Messieurs, j'aurai de la peine à trouver ici quelqu'un qui ne s'expliquât mieux sur la matière de leurs ouvrages; je connus bientôt que ce n'est point une sagesse, qui soit propre au poète qui lui dicte; mais qu'il est dirigé c par une sorte d'instinct, ou d'inspiration divine [,] semblable à celle des devins, lorsqu'ils sont agités de la fureur divine. Ils disent beaucoup de belles choses, mais ils ne les entendent point. Voilà le jugement que je portai | des poètes; je les regardai comme des 10 gens à qui leur talent en imposait, et aux autres. Ils se prenaient pour sages, et ils

87) V que moi si je

88) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——rien ne]

89) D [最初 parut のあとに一語を書き, ついでこれを線で消す。]

90) V [Je continuai のあと d'on と書き, ついでそれを線で消す。]

91) V [mes essais のまえ, 上の行間に Tous を書き加える。]

92) D [et que les のあと, 上の行間に plus を書き加える。]

93) V, D travaillés

M [travaillé の語尾に s 脱落。]

94) V [最初 sur le sens のあとに que を書き, ついでこれを線で消す。]

95) D leurs ouvrage [laurs ouvrages の誤記。]

96) V [最初 propre のあとに aux と書き, ついで語尾の x を線で消す。]

97) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——celle]

98) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——divine。]

99) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——ne les]

passaient pour tels, mais, ils n'étaient rien moins; je les quittai donc [,] persuadé que les gens || de l'état ne faisaient pas mieux mentir l'oracle. Les artistes me restaient à voir, je 17
d les vis donc. Personne n'ignorait plus les arts que moi; et ne savait mieux qu'il y avait de ce côté de très belles choses. Les artistes étaient donc évidemment plus sages que moi, puisqu'ils possédaient des connaissances qui me manquaient, mais je m'aperçus bientôt que leur condition n'était pas meilleure que celle des poètes. Ils étaient les [12] uns et les autres dans le même préjugé. Parce que les habiles d'entre eux exécutaient parfaitement ce qui était de leur savoir faire, ils se regardaient comme les hommes les plus sages, même
e en d'autres choses très importantes. Cette erreur ternissait tout à fait leur sagesse à mes yeux; en sorte que [,] me mett¹⁰⁰⁾ant à la place de l'oracle et me demandant si j'aimerais¹⁰¹⁾ mieux d'être ce qu'ils sont, ou rester ce que je suis; c'est-à-dire || savoir ce qu'ils savent, 18
ou ignorer que je ne sais rien, je me répondais¹⁰²⁾ à moi-même, et à l'oracle < : >¹⁰³⁾ je suis
23 mieux comme je suis. Ce sont ces examens qui m'ont suscité des haines¹⁰⁴⁾ violentes, qui ont ensuite donné lieu à une infinité¹⁰⁵⁾ de calomnies; et le nom de sage m'est | resté, parce que 11
la plupart de ceux qui y assistaient se sont imaginés¹⁰⁶⁾ [sic] que je savais ce que je convainquais les autres d'ignorer, mais il ne s'ensuivait autre chose, sinon qu'il n'y avait que le dieu seul qui fût sage, et que le sens de l'oracle était que toute la sagesse des hommes n'était rien ou fort peu de chose. Quant au nom de sage qu'il me donnait, c'est qu'il
b avait besoin de quelqu'un qui servît d'exemple, et il me choisit. C'était comme s'il eût dit [:] «Athéniens, celui-là est le plus sage, qui [,] comme Socrate [,] sait que la sagesse n'est rien [.]» Voilà, Messieurs, quelle a été et quelle est ma conduite. Je passe ma vie || à vérifier l'oracle, conférant [13] avec quiconque a la réputation de sage, citoyen 19
ou étranger¹⁰⁷⁾. J'interroge, et quand je trouve qu'un homme n'est rien moins que ce qu'il se croit, je le lui demande, et j'accomplis l'oracle. Ces occupations remplissent presque tout mon temps; il ne m'en reste à donner ni aux affaires publiques, ni aux affaires
c domestiques, et le culte du dieu m'a réduit à une extrême pauvreté¹⁰⁸⁾. Autre inconvénient,¹⁰⁹⁾

100) V [最初 *me mettant* のあとに *au* と書き, ついでこれを線で消し, そのあと上の行間に, *à la* を書き加える。]

101) V *si aimerais*

102) V, D *répondrais*

M [*répondrais* の上から *ndaisrépo* と書き直す。]

103) V, D, M < , >

104) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——*haines*]

105) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——*infinité de calomnies* ;]

106) V, D, M [*se sont imaginés* の *s* は誤記。]

107) V *citoyens, ou étrangers*

108) D *le culte de dieu*

109) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——*pauvreté*]

les jeunes gens riches ou qui ¹¹⁰⁾ n'ont rien à faire, me suivent, attirés par la satisfaction ¹¹¹⁾ qu'ils ont à m'entendre réfuter de graves personnages; ¹¹²⁾ quelquefois même ils suivent mon exemple, et ¹¹³⁾ | se mêlent d'en réfuter d'autres; ils ne manquent pas d'en rencontrer un ¹¹⁴⁾ grand nombre qui se croient fort savants, et qui ne savent rien ou peu de chose, mais ce n'est pas sur eux, c'est sur moi que tombe la haine de ceux qu'ils ont embarrassé ¹¹⁵⁾ [sic]; d ces gens vont || criant que Socrate est un scélérat qui corrompt les jeunes gens. Si cepen- ²⁰ dant on leur demande ce qu'il fait, ce qu'il enseigne, comment il s'y prend, ils ne savent plus où ils en sont, mais plutôt de rester ¹¹⁶⁾ [sic] court, ils se rabattent sur ces accusations vagues, et populaires que le peuple ne manque jamais de faire aux philosophes, et qui ne coûtent rien [,] «qu'ils ne croient rien de ce qui se passe au-dessus de la terre [14] ni au-dessous, et qu'ils donnent toujours gain à la mauvaise cause.» Ces gens n'ont garde de dire que toute leur indisposition ne vient que d'avoir été convaincus d'ignorer ce qu'ils faisaient semblant de savoir, c'est pourtant la vérité. Mais comme ils sont vains, e emportés, et en grand nombre, ils semblent s'être ligués pour crier contre moi et remplir vos oreilles de calomnies[:] ce qu'ils ont fait jadis, et qu'ils font tous les jours. Mélite, Anyte et ¹¹⁹⁾ || Lycon se sont mis à leur tête; Mélite est pour les poètes, Anyte pour les ar- ²¹ tistes et les hommes d'état, ¹²⁰⁾ et Lycon pour les rhéteurs. J'avais donc raison, Messieurs, ¹²¹⁾ de vous dire en commençant | qu'il serait bien étonnant que je parvinsse en aussi peu de ¹²²⁾ 13 temps que j'en ai pour me défendre à dissiper une opinion fondée sur tant et de si vieilles calomnies. Je ne vous cèle rien. Voilà, Messieurs, la vérité sans y rien ajouter [,] sans en rien retrancher; je n'ignore pourtant pas qu'elle ¹²³⁾ achevera de les aigrir, mais ce vous doit être une nouvelle preuve que je parle vrai; qu'on m'a calomnié, et que l'origine des calomnies est telle que je vous l'ai dite. Examinez bien actuellement et dans l'avenir et

110) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——*qui*]

111) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——*satisfaction*]

112) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——*personnages* ;]

113) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——*mon exemple, et*]

114) V *fort savant*

115) V, D, M [*embarrassé* の語尾に *s* 脱落。]

116) V *plutôt que de rester*

D, M [*plutôt* のあとに *que* 脱落。]

117) V *rien* ; *qui ne croient* [*rien* のあとに *deux-points* をつけるが, 引用符を欠く。]

D [最初 *qui* と書き, ついでその上から *qu'ils* と書き直す。*rien* のあとに, *deux-points* と引用符を欠くが, その代り *qu'ils ne croient rien ... à la mauvaise cause.* まで下線を引く。]

118) V, D *convaincu* [語尾の *s* 脱落。]

119) V [最初 *Anyte et* のあとに数文字を書き, ついでこれを線で消す。]

120) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——*d'état*,]

121) V [*Lycon* のあとに数文字を書き, ついでこれを線で消す。]

122) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——*donc raison, Messieurs, de*]

123) V [最初 *qu'elle* と書き, ついでこれを線で消し, 再びその横に *qu'elle* と書く。]

b vous ne trouverez rien de plus. J'ai [15] donc suffisamment répondu à mes premiers
 accusateurs. Passons à l'honnête Mélite, à cet amateur de la patrie, comme il se qualifie || 22
 lui-même¹²⁴⁾, et répondons au reste de mes accusateurs; mais¹²⁵⁾ pour éviter toute calomnie,
 reprenons l'accusation, et réitérons le serment. L'accusation est à peu près conçue en ces
 termes (:) «Socrate est un homme méchant qui corrompt la jeunesse et qui ne croit pas
 c aux dieux de sa ville (,) mais qui introduit la croyance de nouveaux démons.» Elle ne
 contient rien de plus. Reprenons-en donc toutes les parties; discutons-les. Elle dit d'abord
 que je corromps la jeunesse¹²⁶⁾ et qu'en cela je suis coupable; mais ne puis-je pas accuser¹²⁷⁾
 Mélite de l'être lui-même, de mettre de la plaisanterie¹²⁸⁾ dans une affaire sérieuse, de
 traîner les gens en justice sans aucun¹²⁹⁾ fondement, de se donner un air d'importance et
 d'affecter d'avoir¹³⁰⁾ l'œil à des choses dont il ne se mêle en aucune sorte.¹³¹⁾ C'est là, 14
 Messieurs, ce que je vais tâcher de vous démontrer <: > || << Allons, Mélite, répondez- 23
 d moi <: >¹³²⁾ veuillez-vous à ce qu'on rende les jeunes gens meilleurs? (—) Oui, j'y veille.
 (—) Dites-moi ce qui les rend tels. Vous le savez sans doute (,) puisque vous en faites
 votre affaire. [16] Vous avez déjà découvert que je les corrompais; vous m'en avez accu-
 sé; vous m'avez traduit en justice¹³⁴⁾ <. > Allons, dites-nous donc, qui est-ce qui est chargé¹³⁵⁾
 de leur instruction, et comment on l'appelle. Mais vous vous taisez <. >¹³⁶⁾ Est-ce que vous
 n'avez rien à dire? Ne devriez-vous pas mourir de honte et votre silence ne prouve-t-il
 pas assez que l'instruction de la jeunesse n'a jamais été votre soin? Mais encore une fois,
 dites-nous ce qui rend les jeunes gens meilleurs <. >¹³⁷⁾ (—) Les loix. (—) Mais, honnête
 e homme, ce n'est pas là ce dont il s'agit. Ce que je vous demande, c'est qui sont ceux à
 qui il appartient de connaître des loix qui rendent les jeunes gens meilleurs. || (—) Ce 24
 sont les juges. (—) Que dites-vous, Mélite? C'est aux juges qu'il appartient d'instruire

124) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——lui-même]

125) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——mais]

126) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——et]

127) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——accuser]

128) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——plaisanterie dans]

129) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——justice sans aucun]

130) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——et d'affecter d'avoir]

131) V [最初 dont il ne se mêle nullement と書き, ついで nullement を線で消して, その上の行間に en aucune sorte を書き加える。]

132) V, D, M <. >

133) V, D, M <; >

134) V, D <. >

M <, >

135) V [最初 dites-moi donc と書き, ついで moi を線で消して, その上の行間に nous を書き加える。]

136) V, D <. >

M <, >

137) V, D, M <? >

les jeunes gens et de les rendre meilleurs ¹³⁸⁾ <?> (—) Sans doute ¹³⁹⁾ <.> (—) Et cela les concerne-t-il tous? Est-ce l'affaire des uns, et non celle des autres? Tous s'en acquittent-ils, ou quelques-uns seulement? (—) Tous. (—) Vous répondez à merveille; et nous ne manquons pas, à ce que je vois [,] de gens chargés et s'acquittant bien du soin
25 d'instruire la jeunesse. Et ceux qui nous écoutent ici, rendent-ils aussi les jeunes gens meilleurs ou non? (—) Ils le font aussi ¹⁴⁰⁾ <.> (—) Et les sénateurs? (—) [17] Pareillement. Nous ne sommes pas gens à permettre aux orateurs de corrompre la jeunesse. (—) Tous les orateurs ¹⁴¹⁾ rendent-ils donc aussi les jeunes gens meilleurs? (—) Oui. (—) D'où il s'ensuit que tous les Athéniens travaillant à faire d'honnêtes gens, moi seul excepté, il n'y a que moi qui les corromps. N'est-ce pas là, Mélite, ce que vous prétendiez? ¹⁴²⁾ (—) Sans doute || et je le soutiens. (—) Si cela est, j'ai bien du malheur. 25
b Mais dites-moi, en est-il de même des chevaux? De tous ceux qui se mêlent de les former, n'y en a-t-il qu'un seul qui les gâte? Ne serait-ce pas tout le contraire? ¹⁴³⁾ Et de tous ceux qui se mêlent de former des chevaux, | ne faudrait-il pas dire qu'il n'y en a 15 qu'un, ou du moins un très petit nombre qui les dressent ¹⁴⁴⁾ bien et que tous les autres les gâtent ¹⁴⁵⁾ <?> Mais s'il en est ainsi des chevaux, il n'en sera pas autrement de tous les autres animaux, que vous en conveniez ou que vous n'en conveniez pas, Mélite. Que nos jeunes gens seraient heureux, s'il n'y avait dans tout Athènes qu'un seul homme qui les pervertit, et que tous les autres travaillassent à les rendre meilleurs ¹⁴⁶⁾ <!> Allez, Mé-
c lite, on voit bien que le soin de l'éducation de la jeunesse n'a jamais été votre affaire, que c'est la chose dont vous vous mêlez le moins, et que vous [18] n'avez pas assez médité ce dont vous avez à m'accuser. Mais encore un mot, Mélite. Est-il plus avantageux || pout vous, d'avoir à vivre avec des citoyens honnêtes gens qu'avec des citoyens 26 méchants? Répondez [,] je vous prie. Il me semble que je ne vous demande rien de difficile. Les méchants ne font-ils pas toujours quelque mal à ceux qui ont à vivre avec
d eux, et les bons, quelque bien? ¹⁴⁷⁾ (—) Sans doute. (—) Y a-t-il quelqu'un qui aime

138) V, D, M < . >

139) V, D, M < , >

140) V < . >

D, M < ; >

141) D [最初 *Tous les rhéteurs* と書き, ついで *rhéteurs* を線で消し, 上の行間に *orateurs* を書き加える。]

142) V *prétendez*

143) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——*contraire*]

144) V, D *du moins qu'un*

145) V *dresse*

D [最初 *dresse* と書き, ついで上の行間に *nt* を書き加えて, *dressent* にする。]

146) V, D, M < . >

147) V, D, M < . >

148) V *quelques biens?* [ただし, 紙片破損, 次の部分を欠く。——*biens?*]

mieux recevoir ¹⁴⁹⁾ du mal que du bien de ceux avec qui il a à vivre ? Dites donc, ¹⁵⁰⁾ honnête
 homme. La loi ne permet pas de vous taire. Y a-t-il ¹⁵¹⁾ quelqu'un qui veuille qu'on lui
 fasse du mal ? [—] Non. [—] ¹⁵²⁾ Mélite [,] encore un mot. Vous qui m'appellez devant
 les juges comme un corrupteur de jeunes gens, est-ce innocemment ou de propos délibéré,
 que je les corromps ? [—] C'est de propos délibéré. [—] Est-il possible que vous,
 Mélite, qui n'êtes qu'un enfant en comparaison de moi, vous ayez assez d'expérience pour
 savoir que les méchants font toujours mal à ceux qui vivent avec eux et les bons toujours
 e du bien, et que moi à l'âge que j'ai, || je sois ¹⁵³⁾ assez insensé ou pour ignorer que je ne puis ¹⁵⁴⁾ 27
 corrompre quelques-uns de mes concitoyens sans m'exposer à quelque mal de leur [19]
 part, ¹⁵⁵⁾ ou pour m'exposer à ce mal de propos délibéré comme vous m'en accusez ¹⁵⁶⁾ <?> ¹⁵⁷⁾ Ô
 Mélite, cela n'est pas vraisemblable et je ne vous en croirai ¹⁵⁸⁾ pas là-dessus, ni les autres
 non plus, si je ne me ¹⁵⁹⁾ trompe ; ainsi donc, ou je ne corromps ¹⁶⁰⁾ point les jeunes gens ¹⁶¹⁾ [,] | 16
 26 ou si je les corromps, c'est innocemment, mais l'un et l'autre ¹⁶²⁾ sont faux. Mais si c'était
 innocemment que je corrompais la jeunesse, la loi ne vous ordonnait pas de me traîner
 en justice, pour une faute involontaire, mais seulement de me reprendre et de m'instruire
 en particulier. Car il est à présumer qu'une fois averti, je ne commettrai plus une faute
 que je faisais par ignorance. Mais vous, vous ne voulez pas me corriger familièrement,
 vous me traînez devant les juges où la loi ne permet de traduire que ceux qu'il faut
 punir et non pas instruire. <>> || D'où il s'ensuit, Messieurs, comme je vous le disais tout ¹⁶³⁾ 28
 b à l'heure [,] que le moindre des soins de Mélite a été de veiller à l'éducation de la jeu-
 nesse. << Mais du moins [,] que nous sachions de vous comment je m'y prends pour
 corrompre les jeunes gens. Serait-ce [,] comme vous l'avancez dans votre accusation [,]
 en les détournant de la croyance des dieux de cette ville pour embrasser celle de quelques
 nouveaux démons ? Est-ce là votre pensée ? [—] Oui, ce l'est. [—] Au nom de ces

149) V [紙片破損, 次の部分を欠く。—du]

150) V [紙片破損, 次の部分を欠く。—donc]

151) V [紙片破損, 次の部分を欠く。—a-t-il]

152) V [紙片破損, 次の部分を欠く。—Mélite]

153) V [紙片破損, 次の部分を欠く。—assez]

154) V [紙片破損, 次の部分を欠く。—quelques-uns de]

155) V [紙片破損, 次の部分を欠く。—part, ou]

156) V [紙片破損, 次の部分を欠く。—comme vous m'en]

157) V, D, M < . >

158) V [紙片破損, 次の部分を欠く。—et je ne vous]

159) V [紙片破損, 次の部分を欠く。—si je ne me]

160) V [紙片破損, 次の部分を欠く。—point]

161) V [紙片破損, 次の部分を欠く。—jeunes gens]

162) V l'une et l'autre est

D [最初 l'autre の次に一語 (est であろう) を書き, ついでこれを線で消し, 上の行間に sont を書き加える。]

c dieux dont il s'agit ici, Mélite, [20] voudriez-vous vous expliquer un peu plus clairement ?
 Je ne vous entends pas encore bien. Convenez-vous¹⁶³⁾ que j'enseigne aux jennes gens la
 croyance de quelques dieux <?¹⁶⁴⁾> En ce cas j'admets donc des dieux. Je ne suis pas tout
 à fait un athée, et ce n'est pas en cela que je suis coupable, quoique ces dieux ne soient
 pas ceux de la ville [,] mais d'autres, ou ne me trouvez-vous coupable que d'introduire
 d'autres dieux ? Que prétendez-vous ? Que je nie les dieux et que || j'apprends aux autres²⁹
 d à les nier ? [—] Je prétends que vous n'admettez point de dieux. [—] Ô admirable¹⁶⁵⁾
 Mélite ! et sur quoi fondé ? Serait-ce sur ce que je ne crois point, comme les autres [,] que
 le soleil et la lune sont des dieux. <?¹⁶⁶⁾> [—] C'est cela, Messieurs, car il assure que
 le soleil est une pierre et que la lune est une terre. [—] Mais, Mélite, mon ami, vous
 n'y pensez pas <!¹⁶⁷⁾> Ou vous croyez qu'il faut aussi faire le procès à Anaxagoras, ou
 vous prenez les juges pour des gens ignorants au point de ne savoir pas que les livres de
 ce philosophe de Closomène sont remplis de pareilles opinions. Voilà donc ce que vous¹⁶⁸⁾
 dites que j'enseigne aux jeunes gens, et ils apprendraient ces [21] choses et beaucoup
 e d'autres de l'orchestre pour une dragme ; et l'on se | rirait de Socrate, s'il s'avisait d'avan-¹⁷
 cer ces opinions comme siennes, étant surtout aussi absurdes qu'elles le sont. Mais est-ce
 de bonne foi, Mélite, que vous assurez que je n'admets point de dieux ?
 || [—] Assurément. [《》 [—] Cela est incroyable, car cela est sans vraisemblance et³⁰
 pour moi et pour vous-même¹⁶⁹⁾ [sic], Messieurs <.¹⁷⁰⁾> Ce jeune homme est vif, étourdi ; il¹⁷¹⁾
 se sera laissé emporter au feu de son âge, a une intempérance commune à la jeunesse qui
 s'amuse de tout, lorsqu'il m'a traduit devant vous <;¹⁷²⁾> c'est une énigme qu'il s'est plu à
 27 nous proposer. Il essaye si Socrate s'apercevra qu'on le joue, qu'on lui objecte des choses
 contradictoires, ou si lui et les juges en seront les dupes. Il y a contradiction dans les
 termes de l'accusation¹⁷³⁾ si évidente, que c'est exactement comme si Mélite eût dit que je
 crois des dieux, et que cependant je n'en crois pas. Vous voyez bien, Messieurs, que ces

163) D *Conveniez-vous*

164) V ;

D, M < : >

165) V, D ,

166) V, D, M < . >

167) V, D, M < , >

168) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——*beaucoup*]

169) V, D, M [*vous-même* の語尾に s 脱落。]

170) V, D, M < ; >

171) V [最初 *ce jeune* のあとに数文字を書き, ついでこれを線で消す。]

172) V < . >

D ;

M < , >

173) V [*dans les termes* のあと, 上の行間に *de l'accusation* を書き加える。]

D [最初 *dans les termes de* のあとに別の語を書き, ついでその上から *l'accusation* と書き直す。]

discours ne se tiennent point sérieusement, et que ce sont là les puérlités d'un homme
 b qui s'amuse. Examinez seulement avec moi que telle est l'accusation de Mélite et pardon-
 nez-moi si je continue de m'exprimer selon ma façon ordinaire. [《》 Y a-t-il quelqu'un,
 Mélite, || qui s'avise (22) d'admettre des choses humaines et de nier qu'il y ait des hom- 31
 mes? [《》 Qu'il me réponde, Messieurs, sans se jeter à droite et à gauche comme il fait.
 [《》 Y a-t-il quelqu'un qui convienne qu'il y a des manèges [,] mais qui dispute qu'il y
 ait jamais eu de chevaux < , > en un mot [,] qu'il y ait des écoles de flatteurs, et qu'il
 n'y ait point de flatteurs < ? > Personne, à ce que je crois. Il faut que j'en convienne
 pour vous, et que je vous réponde, à vous et aux autres [,] puisque vous refusez de le
 faire. Expliquez-vous du moins sur ce qui suit et qui touche de plus près à ce dont il
 c s'agit. Y a-t-il quelqu'un qui attribue des actions aux démons et qui nie leur existence?
 [—] Personne. [—] Qu'on a de peine à arracher un mot de vous < ! > Ne convenez-
 vous pas que je crois et que j'enseigne que les démons ont [,] ou nouvellement [,] ou
 anciennement [,] fait des actions < ? > Cela est, comme vous en convenez, et j'en ferai
 le serment. Mais si || j'attribue des actions aux démons, j'admets donc aussi des démons 32
 d < ? > Sans doute. J'en conviens pour vous, puisque vous ne voulez pas répondre; mais
 qu'est-ce que les démons? Ne pensons-nous pas que ce sont des dieux, ou des enfants des
 dieux < ? > Accordez-vous, ou niez-vous cela? (23) [—] Soit. [—] Il | s'ensuivra 18

174) V [最切 qui s'a のあとに、数文字を書き、ついでこれを線で消し、上の行間に *muse* を書き加えて、
qui s'amuse にする。]

175) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*des*]

176) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*gauche*]

177) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*manèges*]

178) V, D, M < . >

179) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*qu'il*]

180) V [最初 *des* のあとに別の語を書き、ついでこれを消して上の行間に *écoles* を書き加える。]

181) V, D, M [*flatteurs* は *flûteurs* の誤記であろう。]

182) V, D, M [*flatteurs* は *flûteurs* の誤記であろう。]

183) V, D < . >

M < , >

184) V, D, M < . >

185) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*crois*]

186) V, D, M < . >

187) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*convenez*]

188) D [*et* のあと、一語を線で消す。]

189) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*aux*]

190) V [*donc* のあと、上の行間に *aussi* を書き加える。]

191) V, D, M < . >

192) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*conviens*]

193) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*mais qu'est-ce que*]

194) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*dieux, ou des*]

195) V, D, M < . >

196) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*Soit. [—] Il*]

que si j'admets les dieux comme vous l'avouez, et que les démons soient des dieux, que vous vous êtes plu à nous proposer une énigme; et que c'est par plaisanterie que vous m'avez accusé de nier les dieux et cependant d'en admettre [,] puisque je conviens qu'il y a des démons. Mais les démons sont-ils les enfants des dieux qui les ont eu ¹⁹⁷⁾ [sic] furtivement ou des nymphes ou d'ailleurs ¹⁹⁸⁾ <?> Vous n'en êtes pas plus avancé, car qui est-ce ¹⁹⁹⁾ qui dit qu'il y a des enfants des dieux et pourtant qu'il n'y a point de dieux? Cela serait ²⁰⁰⁾ tout aussi absurde que de dire que les mulets naissent des chevaux ou des ânes, mais qu'il n'y a ni ânes ni chevaux. || Ô Mélite, il est à présumer que rien ne devait vous ²⁰¹⁾ porter à m'accuser ou que vous ne m'avez accusé que pour faire essai de votre esprit. Mais comment avez-vous pu imaginer que sans avoir à faire à des gens entièrement perdus de bon sens, vous leur persuaderiez que le même homme admet des démons, et des êtres divins et nie ²⁰²⁾ les héros, les dieux et les démons? <»> On pourrait encore vous démontrer par d'autres voies l'évidence de cette contradiction, mais je ne crois pas qu'il ²⁰³⁾ faille prendre tant de peine pour prouver que l'accusation de Mélite est sans fondement. Ce que j'en viens de dire, me paraît suffisant. Mais rappelez-vous [24] ce que je vous ai fait remarquer plus haut, qu'il y a une infinité de gens indisposés contre moi. Ce n'est ni Anyte ni Mélite qui me perdront, si cela m'arrive. Ce sera l'envie et la calomnie qui en font périr bien d'autres aussi honnêtes sans compter ceux qu'elles feront punir. Je ne ²⁰⁴⁾ dois être ni surpris ni indigné que ce || ne soit point à moi qu'elle cesse de nuire. Mais ²⁰⁵⁾ ²⁰⁶⁾ 34 quelqu'un me dira peut-être <:> <»> N'avez-vous point de honte, Socrate, de vous livrer à une occupation qui vous met continuellement en danger de perdre la vie? <»> Voilà une objection à laquelle il importe de bien répondre ²⁰⁷⁾ <:> <»> Et vous qui me faites ce reproche, vous vous trompez si vous croyez que pour un homme la vie ou la mort ²⁰⁸⁾ doit être de quelque considération, quand même il y aurait quelque petit intérêt;

197) V,D,M [eu の語尾に s 脱落。]

198) V,D,M < . >

199) V [car qui es のあとの数文字を線で消し, 上の行間に t-ce を書き加えて car qui est-ce にする。]

200) V des dieux のあと数語を消し, 上の行間に et pourtant を書き加える。]

201) V des êtres divins のあと一語を消し, 上の行間に et nie を書き加える。]

202) V qui en fait

D [最初 fait と書き, ついでその上から font と書き直す。]

203) V ceux qu'elle fera

D [最初 qu'elle fera と書き, ついで elle に s を加え, fera の上から feront と書き直し, qu'elle feront にする。]

204) V,D,M < , >

205) V,D,M < . >

206) V,D ô vous qui

M [D の ô (原稿では o) は et に似ている。そのため M は Ô を Et と読み違えたのだろう。]

207) V,D si vous croyez qu'un homme pour la vie ou la mort,

V [最初 si vous croyez のあとに一語を書き, ついでこれを線で消して, そのあと上の行間に qu'un を

au lieu d'examiner [,] quand il agit, si ses actions sont bonnes ou mauvaises, d'un honnête homme ou d'un méchant. En suivant votre raisonnement [,] quel mépris n'aurions-nous pas pour ceux qui sont morts devant Troyes et surtout pour le fils de Thétis qui fit si peu de cas de la vie, | lorsqu'il fut question de subir une ignominie ou de la perdre? Vous savez ce qu'il répondit, [25] je crois, à la déesse [,] sa mère [,] qui lui fit cette prédiction, lorsqu'il fut || sur le point de marcher contre Hector et de le combattre <:²¹¹⁾ <《》 Si vous vengez la mort de Patrocle votre ami par celle d'Hector, vous périrez vous-même. Vous ne survivrez pas longtemps à cette victoire. <《》²¹²⁾ Achille [,] ayant entendu ce discours [,] fit un tel mépris du danger et de la mort qu'il la craignit moins qu'une vie déshonorée par l'oubli des injures faites à l'amitié ou des devoirs. Il répondit sur le champ (: <《》 Venger son ami et mourir plutôt que de traîner sur ses vaisseaux des jours honteux, le mépris et la fable de l'armée. <《》²¹⁵⁾ Dira-t-on après cela qu'il ait pesé la mort et le danger <?>²¹⁷⁾ Non [,] sans doute. <《》²¹⁸⁾ Ô Athéniens, ma réponse est celle d'Achille. Quiconque occupe un poste qu'il lui croit honorable de garder, ou quiconque y a été placé par un supérieur, doit [,] à mon avis [,] y demeurer, courir tout danger, subir la mort s'il le faut, et ne redouter que l'infamie. Me serais-je donc grossièrement trompé, lorsque j'ai cru qu'il était || de mon devoir d'obéir à ceux que vous m'avez donné [sic]²¹⁹⁾ pour chef [sic]²²⁰⁾, à Potydée, à Amphypolis et à Délos <?>²²¹⁾ Je suis resté où ils m'ont ordonné de rester. J'ai fait mon devoir sans que la crainte de [26]²²²⁾ la mort

書き加える。また最初 *homme* のあとに数語を書き、ついでこれを線で消して、そのあと上の行間に *pour la vie ou la mort* を書き加える。]

M [最初 V, D のテキストとおなじに書き、ついで *qu'un* を線で消し、そのあと上の行間に *que ppour* [sic] と書き、さらに *ppour* を消し、*que pour un homme la vie ou la mort* にする。]

208) V, D *il y avait*

M [最初 *avait* と書き、ついでこれを消して上の行間に *aurait* を書き加える。]

209) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*et surtout pour*]

210) V, D *ou de la perdre, qu'il répondit*

M [最初 V, D のテキストとおなじに書き、ついで *virgule* を疑問符に直し、*Vous savez* を上の行間に、*ce* を *que* の直前に、それぞれ書き加えて、*ou de la perdre? Vous savez ce qu'il répondit* にする。]

211) V, D, M < . >

212) V [*Si vous vengez ... à cette victoire.* の部分に、引用符、下線を欠く。]

D [*Si vous vengez ... vous même.* の部分に下線を引く。]

M [*Si vous vengez ... à cette victoire.* の部分に下線を引く。]

213) V [*victoire* のあと一語を消し、上の行間に *Achille* を書き加える。]

214) V [最初 *Il répondit* の前に一語を書き、ついでこれを線で消す。]

215) V [*Venger son ami ... de l'armée.* の部分の冒頭だけに引用符をつける。]

D, M [*Venger son ami ... de l'armée.* の部分の冒頭だけに引用符をつけ、全体に下線を引く。]

216) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*Dira-t on*]

217) V, D, M < . >

218) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*d'obéir*]

219) V, D, M [*donné* の語尾に *s* 脱落。]

220) V, D, M [*chef* の語尾に *s* 脱落。]

221) V, D, M < . >

222) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*mon*]

m'en ait empêché, et à présent ²²⁸⁾ que dieu m'avait placé dans un poste et qu'il m'avait ordonné d'y demeurer, ²²⁴⁾ je veux dire celui de vivre en philosophe et de scruter les autres ²²⁵⁾ et moi-même, la crainte de la mort ou de quelque autre chose m'y ferait renoncer! Non, ²²⁶⁾ Mélite, ce serait là une faute grave; je mériterais alors qu'on me traduisît en justice ²²⁷⁾ comme un homme qui n'admet point de dieux, qui méprise leurs oracles, qui craint la mort et qui m'estime sage n'étant rien moins. Car craindre la mort, ²²⁸⁾ ô Athéniens, c'est ²²⁹⁾ n'être point ce que l'on se donne, si l'on se donne pour sage. Car c'est paraître savoir ce ²³⁰⁾ que l'on ignore, si la mort n'est pas le plus grand ²³¹⁾ des biens qui puissent arriver à un ²³²⁾ homme, et on la craint comme || si c'était le plus grand des maux. Qui ne dira que ²³³⁾ cette ostentation de savoir dans cette occasion ce que l'on ignore, ne soit très à blâmer ²³⁴⁾ <?> Il y a, Messieurs, entre les autres et moi [,] bien de la ²³⁵⁾ différence. Si je m'estimais sage en quelque chose, ce serait qu'en ce ²³⁶⁾ que n'étant pas suffisamment instruit de ce qui se passe ²³⁷⁾ aux enfers, je fais aveu de cette ignorance. Au lieu que je sais très bien ²³⁸⁾ | qu'il est mal de faire injure à qui que ce soit et de [27] désobéir à un supérieur [,] ²³⁹⁾ 20 homme ou dieu <. > Si donc, Messieurs, traitant Anyte, comme il le mérite, lui qui dit, ou qu'il ne fallait point me traduire devant les juges, ou qu'il faut ²⁴⁰⁾ me faire condamner, parce que mon impunité encouragerait vos enfants à marcher sur mes traces, et acheverait leur corruption, si donc ²⁴¹⁾ [,] résolu [sic] de m'absoudre, vous me disiez ²⁴²⁾ <: > <<> Nous

223) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——que]

224) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——demeurer]

225) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——ferait]

226) V, D Non, Mélite, serait-ce là une faute grave?

M [最初 V, D のテキストとおなじに書き, ついで *Mélite* のあと, 上の行間に *ce* を書き加え (ただし *serait-ce* の *-ce* を消し忘れる), *grave* のあとの疑問符を *point-virgule* に代える。]

227) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——mériterais]

228) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——point]

229) V [*Car craindre la mort*, のあと, 上の行間に *ô* を書き加える。]

230) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——Athéniens,]

231) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——plus]

232) V [*grand* のあと, 上の行間に *des* 書き加える。]

233) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——comme si]

234) V [最初 *Qui ne dira que* のあとに一語を書き, ついでこれを線で消し, さらに上の行間に *cette* を書き加える。]

235) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——ostentation de]

236) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——très à]

237) V, D, M <. >

238) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——bien de la]

239) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——ce serait qu'en ce]

240) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——passe aux]

241) V .

D, M <, >

242) V [*devant les juges, ou* のあと, 上の行間に *qu'il faut* を書き加える。]

243) V, D, M [*résolu* の語尾に *s* 脱落。]

244) V, D, M <, >

ne croyons point ²⁴⁵⁾ Anyte ; soyez absous de son accusation ; mais que ce soit à condition que || vous 38
finirez vos expériences, et que vous renoncerez à cette philosophie inquisitive, ou que vous serez
d puni de mort, si cela vous arrive ²⁴⁶⁾ < >], si vous me proposiez l'absolution à ce prix, je vous
répondrais ²⁴⁷⁾ < : > [< >] Ô Athéniens, je vous chéris, je vous aime ; mais il vaut mieux que
j'obéisse aux dieux qu'à vous. Tant que je respirerai et que je le pourrai, je philosopherai
[,] exhortant et enseignant à ma manière tous ceux qui se présenteront. Je ne cesserai
jamais de leur dire [:] ²⁴⁸⁾ Hommes de bien, vous êtes d'Athènes [,] la ville la plus puissante et
la plus renommée par son opulence et sa sagesse, et vous n'avez point de honte de mettre tous vos
e soins à augmenter vos honneurs, votre réputation et vos richesses ; mais quant à acquérir la
prudence, ²⁴⁹⁾ l'amour de la (28) vérité et à orner votre âme de bonnes qualités, c'est à quoi vous ne
pensez nullement. » Si quelqu'un d'eux me répond, que || c'est là son occupation principale, 39
je ne le laisserai pas pour cela. Il ne m'échappera pas, je l'interrogerai, je l'examinerai,
et je lui ferai voir peut-être qu'il s'en impose ; et quand je lui aurai démontré qu'il ne
30 possède nullement cette vertu qu'il professe, je le ferai rougir de l'estime singulière qu'il
attache à des objets de vil prix, et du peu de cas qu'il fait d'une chose très précieuse.
Voilà le service que je rendrai aux jeunes gens athéniens, au citoyen, à l'étranger, mais
principalement au citoyen qui m'est allié de plus près. C'est la volonté de dieu sur moi.
Et vous n'êtes pas à vous apercevoir qu'il n'y a rien de plus avantageux pour cette ville,
que ce ministère que j'exerce de ²⁵⁰⁾ l'obéissance que je dois au dieu. Que fais-je en effet ? Je
suis sans cesse occupé de démontrer aux jeunes et aux vieux, que le ²⁵¹⁾ soin de l'âme doit
b passer avant ²⁵²⁾ celui des besoins du corps, avant les richesses et tout || autre chose, ²⁵³⁾ | que 40
l'importance est de se rendre bon ; que l'on n'obtient point de la vertu avec des richesses ;
mais qu'avec de la vertu on parvient aux richesses, (29) à tous les autres biens, aux
honneurs publics et privés. Si ces maximes corrompent la jeunesse, il faut qu'elles soient

245) V [Anyte に下線を引く。]

246) V, D [Nous ne croyons point ... si cela vous arrive. の部分に引用符, 下線を欠く。]

M [Nous ne croyons point ... si cela vous arrive. の部分に下線を引く。]

247) M < , >

V, D [répondrais と Ô Athéniens との間に, すぐ引用符をつける。(ただし, これを閉じる引用符なし。)]

248) V [Homme de bien の前に引用符をつける (ただしこれを閉じる引用符なし。)]

D, M [Homme de bien ... vous ne pensez nullement. の前後に引用符をつける。ただし, この部分は, 数行前にはじまる言葉 Ô Athéniens, je vous aime ... の結末をなすものであるから ... vous ne pensez nullement. を閉じる引用符は, 同時に Ô Athéniens ... vous ne pensez nullement. 全体を閉じる役割もしている。したがって, Homme de bien 以下をイタリック体で印刷し, homme の直前の引用符は省略するが, nullement のあとの引用符は残す。]

249) V [最初 de la prudence と書き, ついで de を線で消す。]

250) V [que j'exerce en vertu de l'obéissance]

251) D [que le soin de l'âme ... aux honneurs publics et privés. の前後に引用符をつける。]

252) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——celui]

253) V, D toute autre chose

pernicieuses; et si quelqu'un avance que j'en enseigne d'autres, il vaudrait autant qu'il se tût. Je vous annonce donc, ô Athéniens, soit que vous croyez à Anyte ou non, soit que je sois absous ou condamné [,] que je ne ferai jamais autre chose, aurais-je plusieurs vies à perdre! Athéniens [,] que cela ne vous émeuve pas. Faites-moi la grâce de m'écouter avec cette indulgence que je vous ai demandée en commençant. Il ne vous sera peut-être pas tout à fait inutile d'entendre ce qui me reste à dire. Mais comme il pourrait y avoir des choses capables d'exciter des rumeurs et du tumulte, je vous prie de m'accorder du silence.

|| Sachez, Athéniens, que si vous ôtez la vie à un homme, tel que je vous ai dit que ⁴¹ j'étais, vous vous ferez plus de mal à vous-même ²⁵⁴⁾ [sic] qu'à moi. Il ne dépend ni d'Anyte, ni de Mélite de faire du mal à qui que ce soit: cela est au-dessus de leur pouvoir. Un ^d méchant n'a pas cet empire sur un homme de bien. Il n'est pas permis de le croire. Il peut l'exiler, lui ôter la vie, le couvrir d'opprobre, à la bonne heure. [30] Lui et ses semblables regarderont tous ces malheurs comme de grands maux. Quant à moi; ce n'est pas mon avis. Je trouve qu'il est bien plus malheureux de les avoir ²⁵⁵⁾ fait [sic], que de les avoir supportés, et que Mélite est bien plus à plaindre que l'homme de bien à qui il tâche d'ôter la vie, ainsi il ne s'agit pas ici autant de ma propre défense qu'on pourrait l'imaginer; il s'agit principalement de vous empêcher de manquer || au ²⁵⁶⁾ devoir que dieu ⁴² e vous a imposé, en condamnant un homme qui ne ²⁵⁷⁾ le ²⁵⁸⁾ mérite point. Ce que je vais ajouter, paraîtra ridicule, mais il est vrai; vous ne m'aurez pas plutôt ²⁵⁹⁾ privé de la vie, que vous ²⁶⁰⁾ serez ²⁶¹⁾ privé [sic] d'un homme que vous ne ²⁶²⁾ recouvrirez ²⁶³⁾ de longtemps. Attaché par un dieu à votre ville, comme à un ²⁶⁴⁾ cheval puissant | à la vérité et vigoureux, mais que sa ²² masse rend tardif et qui a besoin d'être aiguillonné par quelqu'un, c'est là mon emploi ³¹ dans Athènes: du matin au soir j'exhorte, j'avertis, je presse et ne cesse de vous servir. La perte d'un tel homme n'est pas facile à réparer, Athéniens, je vous le répète. Vous ferez donc bien de m'absoudre, si vous voulez m'en croire ²⁶⁵⁾ < ; > mais si [,] semblables

254) V, D, M [vous-même の語尾に s 脱落。]

255) V, D, M [fait の語尾に s 脱落。]

256) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——devoir]

257) V [最初 en のあとに一語を書き, ついでこれを線で消し, そのあと上の行間に *condamnant* を書き加える。]

258) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——le]

259) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——mais, il]

260) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——que vous]

261) V, D, M [privé の語尾に s 脱落。]

262) D *recouvrirez*

263) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——longtemps]

264) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——cheval puissant]

265) V, D, M < ; >

à ceux qui dorment [31] profondément et qui trouvent mauvais qu'on les tire de leur sommeil, vous me faites périr injustement, comme || c'est le dessein d'Anyte, vous resterez 43 dans un assoupissement perpétuel, à moins que la bonté des dieux pour vous ne me suscite un successeur. Mais vous m'avez, et les dieux semblent m'avoir fait exprès pour b vous. En effet, était-il naturel, ou n'est-ce pas plutôt par une providence divine que j'ai totalement abandonné mes propres affaires, et que j'ai persévéré tant d'années dans cette indifférence ruineuse sur mes intérêts, pour veiller aux vôtres, exhortant tous les citoyens à la connaissance et à la pratique de la vertu, comme si j'étais leur père ou leur frère aîné ²⁶⁶⁾ <?> Si mon emploi avait eu son salaire, il n'y aurait rien en cela qui ne fût comme dans le train ordinaire de la vie; mais il faut que je sois bien à couvert de ce côté, puisque mes ennemis avec toute l'impudence qu'ils ont montrée dans leurs accusations, c n'ont osé m'attaquer || de ce côté, vous le voyez, ni présenter des témoins qui prouvassent 44 que j'eusse jamais exigé ni demandé quelque récompense. Ici leur ressource les a abandonné ²⁶⁸⁾ [sic], et ma pauvreté prouve suffisamment pour moi. Il paraîtra peut-être extraor- ²⁶⁹⁾ dinaire à quelques-uns [32] que je me sois tant tourmenté dans le particulier pour rendre mes concitoyens meilleurs ²⁷⁰⁾ <, > mais qu'il ne me sois jamais arrivé de les haranguer en d commun et de conseiller publiquement le bien de ma ville ²⁷¹⁾ <: > j'en ai été toujours détourné par ce démon familier, par cette voix divine qui m'accompagne et dont je vous ai parlé quelquefois. Mélite en a plaisanté dans son accusation; mais il n'en est pas moins qu'une voix divine me conseille ²⁷²⁾ sur mes actions, me poussant ²⁷³⁾ aux unes et m'éloignant des autres; c'est elle qui m'a | empêché jusqu'à présent de me || mêler des affaires 23 publiques, et il me semble que ce n'est pas sans raison. Ô Athéniens, si je m'étais chargé 45 de quelques fonctions publiques, il y a longtemps que je ne serais plus. Je serais mort e sans vous avoir été utile [,] ni à moi-même. Tâchez d'entendre la vérité sans vous en ²⁷⁴⁾ offenser. Celui qui [,] écoutant l'équité chez le peuple athénien [,] a la fermeté ²⁷⁵⁾ de

266) V <. >
D, M <; >

267) V [最初 *ni demandé* のあとに数語を書き, ついでこれを消し, そのあと上の行間に *quelque* を書き加える。]

268) V, D, M [[*abandonné* のあとに s 脱落。]

269) V, D *Mais il paraîtra*

V, D [最初 V, D のテキストとおなじに書き, ついで *Mais* を線で消し, *Il paraîtra* にする。]

270) V, D, M <. >

271) V <. >
D, M <, >

272) V *conseillent*

D [最初 *conseillent* と書き, ついで *nt* を線で消し *conseille* にする。]

273) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——*poussant*]

274) V [*sans vous* のあと, 上の行間に *en* を書き加える。]

275) V [最初 *le peuple athénien a* のあとに数語を書き, ついでこれを消し, そのあと上の行間に *la fermeté*

32 s'opposer à ce qui s'y fait d'injuste, ne peut pas vivre longtemps. Tout homme juste qui veut se conserver, vivra particulier et abandonnera à d'autres le soin de la république. Je puis [33] vous apporter des preuves de ce que je dis. Ce ne sont point des mots, ce sont des faits qui sont parvenus à la connaissance de plusieurs d'entre vous. Ecoutez, Messieurs, ce qui m'est arrivé, cela servira à vous convaincre que la crainte de la mort ne m'a jamais écarté de mon devoir, et combien il est à présumer que cette inflexibilité m'eût || coûté la vie. Je vais vous entretenir d'affaires d'état [,] fâcheuses à entendre, 46
 b mais vraies. Je ne me serais jamais mêlé d'aucune affaire publique si l'on ne m'eût appelé pour le Conseil. La tribu Antyoche dont je suis, présidait par hasard dans le temps où par un jugement précipité vous incliniez tous à condamner à mort le reste des soldats, pour avoir perdu les corps des dix chefs de l'armée qui périrent dans le combat naval < ; > ²⁷⁸⁾ il parut peu de temps après combien cette sévérité était déplacée et injuste. Je fus le seul de tous les préfets qui m'y opposai, qui m'en tins à mon suffrage, et qui empêchai ²⁷⁹⁾ qu'on ne transgressât les loix. Cependant tous les orateurs se réunirent ; ²⁸⁰⁾ il n'y en eut aucun qui ne fût prêt à me dénoncer et à me traduire ²⁸¹⁾ en justice. Vous le demandiez vous-même [sic] ²⁸²⁾ à grands cris. Rien ne m'intimida. Je [34] sentis qu'il valait ²⁸³⁾ mieux courir le dernier danger pour la loi et la || justice, que d'embrasser une opinion 47
 c injuste qui fut la vôtre, ni être entraîné par la crainte de la mort ou de la prison. Voilà, Messieurs, ce qui s'est fait dans cette ville libre encore et gouvernée par le peuple ; mais lorsque l'autorité ²⁸⁶⁾ passa [sic] ²⁸⁷⁾ du peuple dans les mains d'un petit nombre, les Trente qui gouvernaient ²⁸⁸⁾ la république, m'appelèrent ²⁸⁹⁾ au Shale avec quatre autres, ²⁹⁰⁾ et nous comman-

を書き加える。]

276) V [最初 *de ce que* のあとに一語を書き、ついでこれを線で消す。]

277) V *si l'on m'eût*

D [*si l'on* のあと、上の行間に *ne* を書き加える。]

278) V < . >

D, M < , >

279) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*empêchai*]

280) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*réunirent ;*]

281) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*traduire*]

282) V, D, M [*vous-même* の語尾に *s* 脱落。]

283) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*pour*]

284) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*la*]

285) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*encore et*]

286) V *passa*

D, M [*passât* は *passa* の誤記。]

287) V [紙片破損、次の部分を欠く。*du peuple*]

288) V [紙片破損、次の部分を欠く。*gouvernaient la*]

289) V, D *m'appelèrent à* [空白] *avec*

M [最初 V, D のテキストとおなじく *à* のあとを空白にし、ついで *à* (原文では *a*) に *u* を書き加えて *au* にし、空白を *Shale* でおぎなう。]

290) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*autres, et*]

dèrent d'amener de Salamine Léontas, et de le livrer à la mort ²⁹¹⁾ < ; > ²⁹²⁾ ils distribuèrent à d'autres encore de pareils ordres ²⁹³⁾ et leur but était de se mettre à l'abri des revers, en multipliant ²⁹⁴⁾ les complices de leurs crimes. Dans cette occasion [,] je ne me contentai ²⁹⁵⁾ pas de parler. Je fis voir par mes actions, pour vous le dire crûment, que la mort était le moindre de mes soucis, mais que rien ne m'était tant à cœur que de ne rien faire d'injuste et d'impie. Cette puissance terrible ne || m'intimida point. Je m'en tins ferme à l'équité. ²⁹⁶⁾ 48 Nous sortîmes du Shale ; les quatre autres se rendirent à Salamine, se saisirent de Léontas et l'amenèrent. Quant à moi [,] je me retirai dans ma maison. La mort eût [35] été e la récompense de cette conduite [,] si le gouvernement des Trente n'eût été détruit peu de temps après. Il y a ici grand nombre ²⁹⁷⁾ de témoins de ce que j'osai alors, et du danger que je courus. Je vous le demande à présent, Messieurs, croyez-vous qu'il y eût quelque sécurité à se mêler des affaires publiques pour un honnête homme qui est bien résolu d'en remplir les devoirs, de s'en tenir opiniâtrement au parti de l'équité, et de préférer cet avantage à tout autre ? Non [,] il n'y en a point, et il n'est pas possible de vivre ²⁹⁸⁾ 33 longtemps en suivant de pareilles maximes. C'est cependant ce que j'aurais fait pendant toute ma vie. Mais || tel vous m'avez vu dans les affaires publiques, tel j'ai été dans les ²⁹⁹⁾ 49 particulières ; suivant avec tout le monde inviolablement les loix de la justice, même avec les personnes ³⁰⁰⁾ que ceux qui m'accusent ici, appellent mes sectateurs, quoique je n'aie jamais servi d'instituteur à personne. Il est vrai que si quelqu'un [,] jeune ou vieux [,] a désiré m'entendre discourir ou traiter quelque point, il a toujours été satisfait. Je ne suis pas de ces gens qui parlent quand on leur donne de l'argent, et qui se taisent quand ils n'en reçoivent point. Le pauvre a pu m'interroger comme le riche, et je n'en ai pas [36] été moins prompt à lui répondre. Mais qu'il en soit devenu meilleur ou non, ³⁰¹⁾ ce n'est pas mon affaire. Je ne me suis jamais donné [,] ni promis à personne ³⁰²⁾ pour un homme qui eût quelque talent. Celui qui dira avoir entendu ou || appris de moi [,] dans le particulier 50

291) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——Léontas, et de le livrer]

292) V < ; >

D, M < , >

293) V [紙片破損, 次の部分を欠く。encore de pareils ordres et]

294) V [紙片破損, 次の部分を欠く。revers, en multipliant]

295) V un grand nombre

296) V, D même avec ceux que

M [最初 V, D のテキストとおなじに書き, ついで ceux の上から les と書き直し, 上の行間に personnes を書き加えて, avec les personnes que とする。]

297) V [最初 servi のあとに de と書き, ついでこれを線で消す。]

298) V [最初 meilleur ou のあとに moins bons と書き, ついでこれを線で消して, 上の行間に non を書き加える。]

299) V [最初 pour のあとに一語を書き, ついでこれを線で消す。]

300) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——entendu]

〔,〕 des choses que je n'ai pas dit ³⁰¹⁾〔sic〕 ³⁰²⁾publiquement à tout le monde, ne dit pas la
 c vérité. | Mais il est bon de vous rendre raison de la familiarité avec laquelle je vis avec 25
 quelques personnes. Rien n'est plus vrai que ce que je vous disais plus haut, que les
 hommes voient avec plaisir réfuter ceux qui se donnent pour sages sans l'être. Il y a en
 effet de la satisfaction à cela. Quant à moi ³⁰³⁾〔,〕 ³⁰⁴⁾c'est un emploi qui m'a été imposé par
 les devins, les songes et toutes les voies dont les dieux se servent pour manifester aux
 a hommes leur volonté. Ces choses sont vraies ³⁰⁵⁾<, > ô Athéniens, et la preuve en est facile.
 Si je corromps maintenant les jeunes gens, et si je les corrompais jadis, quelques-uns des
 premiers seraient maintenant d'un âge avancé, et il serait naturel qu'ils pensassent que
 j'ai mal conseillé leur jeunesse, qu'ils s'élevassent contre moi, et qu'ils demandassent || ma 51
 punition ³⁰⁶⁾〔,〕 ou ³⁰⁷⁾〔,〕 s'ils n'en faisaient rien eux-mêmes, ceux qui leur sont attachés,
 leurs pères, (37) leurs frères, leurs parents, auraient quelque ressentiment du mal qu'on
 aurait fait à des personnes qui les intéressent, se souviendraient aujourd'hui de ce mal, et
 seraient bien aise qu'on m'en punit. J'en vois ici un grand nombre qui serais dans ce
 e cas. Voilà Criton ³⁰⁸⁾〔,〕 du même âge, et de la même tribu que moi ³⁰⁹⁾〔,〕 et père de Cri-
 tobule; Lysias Sphètius ³¹⁰⁾〔,〕 père d'Évésinus; Antyphon Cèptiseus ³¹¹⁾〔,〕 père d'Épigène; il
 y en a d'autres dont les frères ont été liés secrètement avec moi, tels que Nicostrate ³¹²⁾〔,〕
 fils de Zotide, frère de Théodote. Théodote est mort, ainsi on ne dira pas que Nicostrate
 se tait à la sollicitation de son frère. Phalarus ³¹³⁾〔,〕 fils de Démodice et frère de Théagès;
 34 Adimante ³¹⁴⁾〔,〕 fils d'Ariston, frère de Platon que vous voyez, enfin Cantodon ³¹⁵⁾〔,〕 frère
 d'Appollodore. J'en pourrais citer un || grand nombre d'autres, et Mélite aurait bien dû 52
 produire le témoignage d'un d'entre eux dans le discours qu'il a prononcé contre moi.
 Mais peut-être n'y a-t-il pas pensé! Si cela est, qu'il le fasse à présent, je le lui permets.
 S'il a quelque preuve de cette nature, qu'il l'expose, mais il n'en est rien, et de tous ceux
 que je viens de citer, dont j'avais corrompu les ³¹⁶⁾parents et à qui j'ai fait le tort le plus 26

301) V 〔紙片破損, 次の部分を欠く。——n'ai pas〕

D je n'aie pas

302) V, D, M 〔dit の語尾に es 脱落。〕

303) V 〔最初 avec のあとに一語を書き, ついでこれを線で消す。〕

304) V, D Quant à moi il est un emploi

305) V, D <, >

M <. >

306) V 〔紙片破損, 次の部分を欠く。——âge〕

307) V 〔紙片破損, 次の部分を欠く。——Lysias〕

308) V 〔紙片破損, 次の部分を欠く。——Phalarus〕

309) V 〔紙片破損, 次の部分を欠く。——témoignage〕

310) V 〔紙片破損, 次の部分を欠く。——contre moi〕

311) V 〔紙片破損, 次の部分を欠く。——preuve de cette〕

312) V 〔紙片破損, 次の部分を欠く。——rien, et de tous ceux〕

313) V 〔最初 je viens de citer のあとに数語を書き, ついでこれを線で消す。〕

sensible, si l'on en croit l'accusation de Mélite [38] et d'Anyte, tous, dis-je [,] concourent
b à me secourir contre eux. Cela ne serait pas étonnant de la part de ceux que j'aurais
corrompus, mais qu'ai-je fait à leurs proches qui sont avancés en âge, pour qu'ils gardent
le silence ³¹⁵⁾ <?> On ne peut pas dire que je les ai ³¹⁶⁾ aussi corrompus. Quelle raison ont-ils
donc de m'être aussi favorables? sinon une juste et bonne raison; c'est qu'ils savent que
Mélite vous en impose et que je || dis la vérité. Voilà, Messieurs, ce que j'avais à vous ³¹⁷⁾ 53
c dire pour ma défense, ou d'autres choses semblables. Mais peut-être que quelques-uns
d'entre vous [,] jugeant des autres par soi-même, et rappelant la coutume, trouvera [sic]
mauvais qu'exposé au dernier danger de perdre la vie, je n'imite point la plupart des
coupables qui [,] dans des causes assez ordinaires [,] ne manquent point de vous sup-
plier les larmes aux yeux, de vous demander grâce, et d'essayer de vous incliner à la
commisération par le spectacle de leurs fils, de leurs parents, de leurs amis, de leurs do-
mestiques en pleurs. Permis à ceux que ma singularité achevera d'indisposer de suivre leur
d colère, et de me condamner: loin de leur adresser un discours suppliant, s'il y en a en
effet parmi vous, voici comment je crois devoir leur parler [:] [39] [《》] Honnête
homme, lui dirai-je, j'ai des parents aussi, je ne || suis sorti, comme dit Homère, ni d'une 54
pierre, ni d'un chêne, mais je suis né d'un homme; j'ai des proches, j'ai même trois fils
dont un entre dans l'adolescence, et les deux autres sont encore dans la plus tendre enfan-
ce. [《》] Il n'en viendra cependant point ici vous demander ma grâce, et voici la raison
e de cette conduite. Il n'y a, Messieurs, ni entêtement ni mépris; pour indifférence de la
vie, c'est autre chose; quoiqu'il en soit, je ne crois pas qu'il convienne à ma gloire, à la
vôtre, à celle de cette ville, à mon âge, et à la réputation bien ou mal fondée dont je ³¹⁸⁾
35 jouis, d'en agir autrement. On s'est imaginé que Socrate n'était ³¹⁹⁾ pas un homme tout à fait
ordinaire. Il serait donc honteux que ceux ³²⁰⁾ qui passent pour avoir ³²¹⁾ parmi vous quelque
sagesse, du | courage, ou quelque vertu, suivissent l'exemple de certaines gens lorsqu'ils 27
ont eu à subir votre jugement. On en faisait cas; || dans cette conjoncture, ils n'ont rien 55
épargné pour émouvoir votre pitié, comme s'ils avaient perdu quelque chose de fort impor-
tant en perdant la vie, et qu'ils dussent être immortels, si vous ne les codamniez pas à
mourir. Pour vous en dire ma pensée, je trouve que [40] ces gens déshonorent la patrie

314) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——j'avais corrompu les]

315) V, D, M < . >

316) V, D aie

317) V, D, M [trouvera は trouveront の誤記。]

318) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——fondée]

319) V [紙片破損, 次の部分を欠く。Socrate n'était]

320) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——honteux que ceux]

321) V [qui passent のあと, 上の行間に pour avoir を書き加える。]

- b [,] en donnant sujet à quelque étranger de penser que ceux qui ont occupé dans Athènes les premières dignités de la magistrature, et à qui on accorde dans leur ville quelque fermeté au-dessus de leurs concitoyens, sont aussi lâches que des femmes. ³²²⁾ Ô ³²³⁾ Athéniens, voilà ce qu'il ne nous convient point de faire ³²⁴⁾ en présence de gens qui, comme vous, ont ici quelque autorité, et voilà ce que vous ne devez point permettre, quand nous serions assez vils pour nous y résoudre. Vous devez faire croire au contraire ³²⁵⁾ que ceux qui recourront à ces moyens bas d'exciter ³²⁶⁾ la commisération, qui rendent Athènes || ridicule, encour- 56 raient plutôt votre sévérité que celui qui attendrait tranquillement votre jugement. Ajoutez à cet intérêt ³²⁸⁾ que je dois répondre à l'honneur de ma ville; que si je trouve ³²⁹⁾ à propos qu'on instruisse et qu'on persuade les juges de son innocence, il me paraît injuste ³³⁰⁾ de les supplier et d'en obtenir l'absolution à force de prières. Un juge n'est point assis dans un tribunal pour faire ³³²⁾ grâce, mais pour prononcer selon les loix. Il fait serment ³³³⁾ d'écouter la justice, et non la pitié. Il ne nous est permis [,] ni à nous de vous incliner [,] ni à vous de vous laisser incliner à l'habitude de se parjurer. Nous manquerions les uns et les autres à la ³³⁴⁾ [41] religion. N'exigez donc point de moi ³³⁵⁾ [,] ô Athéniens [,] que je fasse ce que je ne crois ³³⁶⁾ ni honnête, ni juste, ni saint de faire. Je vous conjure par ³³⁷⁾ Jupiter que j'invoque d'autant plus volontiers que Mélite m'accuse ³³⁸⁾ de ne pas croire aux dieux ... < . > ³³⁹⁾ || Si ³⁴⁰⁾ [,] vous connaissant lié ³⁴¹⁾ [sic] par serment, je cherchais à vous émou- 57

- 322) V [最初 *Ô Athéniens* を別行に書き、ついでその直前の *des femmes* との間に長い線を引いて、二つの部分を連続さす。]
- 323) V [最初 *Ô Athéniens* のあとに数語を書き、ついでこれを線で消す。]
- 324) V [最初 *en* のあとに一語を書き、ついでこれを線で消す。]
- 325) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*contraire*]
- 326) V [最初 *d'exciter* のあとに一語を書き、ついでこれを線で消し、そのあと上の行間に *la* を書き入れる。]
- 327) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*celui*]
- 328) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*que*]
- 329) D *si trouve*
M [最初 D のテキストとおなじに *si trouve* と書き、ついで *si* の上の行間に *je* を書き加えて、*si je trouve* にする。]
- 330) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*me*]
- 331) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*force*]
- 332) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*faire*]
- 333) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*d'écouter*]
- 334) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*religion*]
- 335) V [*N'exigez* のあと、上の行間に *donc* を書き加える。]
- 336) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*ni*]
- 337) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*Jupiter*]
- 338) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*m'accuse*]
- 339) V, D *aux dieux, si vous*
M [*dieux* のあと、上の行間に *points de suspension* を書き加える。]
- 340) V, D, M < , >
- 341) V, D, M [[*lié* の語尾に *s* 脱落。]
- 342) V [紙片破損、次の部分を欠く。——*par*]
- 343) V, D *par serment, de chercher*

voir et à vous fléchir³⁴⁴⁾ par des prières, ce serait vous solliciter adroitement de ne point
croire³⁴⁵⁾ aux dieux, et mieux qu'aucun de mes accusateurs <³⁴⁶⁾; >³⁴⁷⁾ je consens donc³⁴⁸⁾ | que les 28
dieux et vous portiez de moi le jugement qui vous paraîtra le plus à votre avantage et
e au mien. Je n'entendrai point avec impatience l'arrêt de ma condamnation, et cela par
36 plusieurs raisons, mais principalement parce que vous n'aurez point trompé mon espérance.
J'inclinerai plutôt à m'étonner de l'égalité du nombre des suffrages. Je n'aurais jamais
pensé qu'il s'en manquât³⁴⁹⁾ si peu pour être absous. Trois voix de plus et j'étais sauvé.
J'échappais à Méliete. Il y a mieux. Il n'eût point eu pour lui la cinquième partie des
b suffrages, et il eût payé l'amende de mille dragmes, si Anyte et Lycon ne se fussent³⁵⁰⁾
 joints à son avis. || Je suis donc digne de mort au sentiment de ces hommes <³⁵¹⁾; >³⁵²⁾ mais 58
au mien, qu'aurai-je mérité? Parce qu'il m'a condamné, me tiendrais-je coupable? Me
〔42〕croirai-je digne de châtement, pour n'avoir pas su ce que j'avais appris, pour avoir
méprisé ce que le peuple estime, le gain, les richesses, les préfectures, les chaises oratoires,
et les autres emplois de la magistrature; pour n'avoir eu aucune part aux conjurations³⁵³⁾
et aux séditions qui se sont élevées dans la république, persuadé que j'étais destiné à des
c occupations trop équitables pour imaginer que mon salut pût en dépendre <?³⁵⁴⁾> En un
mot, je ne me suis livré à aucune de ces fonctions que j'aurais exercé〔sic〕sans aucun
fruit ni pour vous ni pour moi, ne m'attachant qu'à faire agréer mes manières à chacun
de vous dans le particulier, afin que je pusse acquérir auprès de vous, une liberté de vous
|| démontrer qu'il n'y a rien sur quoi l'on doit veiller plus soigneusement que sur soi, 59
rien qui soit plus avantageux d'avoir que la vertu; que les affaires de la ville ne doivent³⁵⁵⁾
aller qu'après le soin et les intérêts de la ville même, et qu'il était important d'établir
entre les choses qui demandent notre vigilance et notre estime, la subordination qui

M [最初 V, D のテキストとおなじに書き, ついで上から *de* を *je* に, *chercher* を *charchais* に書き直す。]

344) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——*vous fléchir par*]

345) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——*adroitement de ne point croire*]

346) D <, >

M <; >

347) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——*accusateurs, je consens donc*]

348) D *et je consens que*

M [最初 D のテキストとおなじに書き, ついで上の行間に *donc* を書き加える。]

349) V *manqua*

350) V [*Lycon ne* のあと上の行間に *se* を書き加える。]

351) V <. >

D <; >

M <, >

352) V, D *chaires*

353) V, D, M <. >

354) V, D, M [*exercé* の語尾に *es* 脱落。]

355) V, D *ne devaient*

convient. Voilà, Messieurs, ce que j'ai fait, et il s'agit de savoir ce que j'ai mérité de
 d vous pour cette conduite, de vous! bien mérité! Messieurs ³⁵⁷⁾ <; > ³⁵⁸⁾ [43] si vous saviez
 attacher aux choses le prix qu'elles ont, il y aurait une récompense ³⁵⁹⁾ qui me conviendrait,
 ce serait celle qu'il faudrait accorder à un homme ³⁶⁰⁾ pauvre et bienfaisant, afin que [,]
 libre de tout soin, | il n'eût que celui de vous exhorter à la vertu. Et quelle est cette 29
 récompense, ô Athéniens? D'être entretenu dans le Prytannée aux dépens || du public, et 60
 n'en est-il pas plus digne que celui qui remporte le prix de la course sur un char à deux ou
 e quatre chevaux aux Jeux Olympiques? Cet homme vous fait estimer heureux; je fais [,] moi
 [,] que vous le soyez. D'ailleurs il n'a besoin de rien, et je manque de tout: ³⁶¹⁾ en un mot
 37 [,] je le répète ³⁶²⁾ <, > l'entretien public dans le Prytannée serait un honoraire digne de
 mes services et de mon caractère. Je ne doute point que cette proposition ne vous
 paraisse aussi ridicule que le discours que je viens de vous tenir sur les moyens qu'on
 emploie ordinairement pour vous émouvoir. Mais il n'y a aucun ridicule [,] ni dans
 l'un, ni dans l'autre. Les choses devraient être comme je vous les dis et je me suis témoin
 qu'en vous parlant ainsi, je n'ai prétendu faire injure ³⁶³⁾ à personne, et que si je ne réussis
 pas à vous persuader, c'est que le temps que nous avons à parler, || ne suffisait pas. Si 61
 b c'était la loi parmi vous comme chez les [44] étrangers, que [,] quand il s'agit de
 décider ³⁶⁴⁾ de la vie d'un homme, on donnât [,] non un jour [,] mais plusieurs à l'examen
 de ses défenses, je vous aurais [,] je crois [,] convaincu ³⁶⁵⁾ [sic] de la solidité ³⁶⁶⁾ des miennes.
 Mais comment [,] en aussi peu de temps [,] parvenir ³⁶⁷⁾ à dissiper des calomnies aussi
 graves que celles dont je suis chargé <?> Au reste [,] plus je crois qu'il ne faut faire
 tort à personne, moins je dois être disposé à me faire tort à moi-même. Ainsi donc [,]
 dans la crainte de subir la peine ³⁶⁸⁾ de la faute dont Mélite me veut coupable, irai-je [,]

356) V ;

D ,

357) V <. >

D, M <, >

358) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——si]

359) V récompense

360) V à un homme

361) V [最初 et je manque de tout のあとに一語を書き, ついでこれを線で消す。]

362) V, D, M <. >

363) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——à]

364) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——de]

365) V, D, M [convaincu の語尾に s 脱落。]

366) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——la]

367) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——parvenir]

368) V, D, M <. >

369) V, D la peine dont Mélite

M [la peine のあと, 上の行間に de la faute と書き加える。]

moi qui ignore si cette peine est un bien ou un mal réel, irai-je lui préférer quelque chose que je connais évidemment pour un mal, et m'en avouer digne <?³⁷⁰⁾> Pourquoi romprai-je³⁷¹⁾ des fers? Pour achever ma vie dans une prison, l'esclave des Undécemvirs (?³⁷²⁾) Promettrai-je || une somme d'argent et me résoudrai-je à demeurer dans ces lieux³⁷³⁾ jusqu'à ce qu'elle fut acquittée? C'est retomber dans le même inconvénient, puisque je contracterais une dette que ma pauvreté ne me permettra³⁷⁴⁾ jamais de payer. Accepter l'exil, c'est un parti qui peut-être³⁷⁵⁾ me conviendrait; mais, ô Athéniens, je montrerais un grand³⁷⁶⁾ amour pour la vie, si j'étais assez insensé pour me persuader que je serai supportable à des étrangers, [45] tandis que vous [,] mes concitoyens [,] n'avez pu supporter³⁷⁷⁾ ni ma conduite [,] ni mes discours, et qu'ils vous ont été l'une et les autres désagréables et à charge au point que vous avez pris la résolution de vous en débarrasser sur le champ. Je suis loin d'une telle pensée. D'ailleurs [,] quelle vie mènerais-je dans un exil, à mon âge, allant d'une ville dans une autre, et partout rebuté? D'ailleurs [,] quelque part que j'aille, ce sera tout comme ici. Les || jeunes gens me suivront; si je les³⁷⁸⁾ renvoie, ils s'en plaindront aux vieux qui me renverront à leur tour; si au contraire je les accueille, leurs pères et leurs proches me rebuteront; mais ne pourriez-vous pas, me dira quelqu'un, garder le silence dans votre exil et vivre paisiblement? Il y a dans ce³⁷⁹⁾ parti un embarras que j'aurai bien de la peine à faire entendre à quelques-uns de vous. Si je répons que c'est désobéir au dieu que d'accepter ce repos qu'on me promet en exil, on croira³⁸⁰⁾ que je parle ironiquement et l'on ne daignera pas m'écouter. Si je dis que je ne puis renoncer à ma façon de vivre ordinaire parce que le plus grand bien dont un homme puisse jouir, c'est de s'entretenir tous les jours de la vie, de la vertu, d'agiter les questions qui faisaient la matière de ces conversations auxquelles vous avez tous assisté, et de se sonder soi-même et [46] les || autres; et qu'une vie ignoble et obscure ne doit³⁸¹⁾

370) V, M <, >
D <, >

371) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——romprai-je]

372) V, D promettai-je

M [最初 promettai と書き, ついで promett の上の行間に r を書き加えて, promettrai にする。]

373) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——inconvénient, puisque]

374) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——ne me permettra]

375) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——un parti qui peut-être]

376) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——je montrerais un grand]

377) V, D et à charge, que vous

M [et à charge の右端欄外に au point を書き加える。]

378) D dans un autre [dans une autre の誤記。]

379) V, D Mais il y a

M [最初 V, D のテキストとおなじに書き, ついで Mais を線で消して, Il y a にする。]

380) V [最初 on のあとに一語を書き, ついでこれを線で消して, 上の行間に croira を書き加える。]

être qu'un objet de mépris, vous me trouverez bien autrement ridicule et vous me croirez bien moins encore. Voilà pourtant les choses comme elles sont. Mais, Athéniens, il n'est pas aisé de vous faire goûter ces raisons.³⁸¹⁾ Si j'avais des richesses, je satisferais à votre jugement, en vous abandonnant tout ce que j'en pourrais posséder, et je n'aurais aucun regret de les avoir perdues, mais je n'ai presque rien pour le présent; je ne puis vous offrir que très peu de chose, c'est à vous à voir si vous pouvez vous en contenter. J'ai, je crois, environ une mine d'argent.³⁸²⁾ Si elle suffit pour lever la peine portée par votre jugement, a la bonne heure.³⁸³⁾ Mais voilà Platon, Criton, Critobule et Appollodore qui me pressent de vous en offrir trente qu'ils s'engagent de vous payer.³⁸⁴⁾ Voyez || si vous accepterez cette somme, ils sont bons | pour elle; ô Athéniens [,] que vous vous êtes pressés de donner prise à ceux qui cherchent à vous calomnier < ! > Ils diront que vous avez fait mourir Socrate qui était un homme sage. Je sais bien [,] il n'en est rien. Mais ceux qui vous en veulent, qui s'étudient à vous [47] noircir, ne manqueront pas de la [sic] supposer et de le dire; j'allais mourir sans que vous vous en mêlassiez. Il ne fallait attendre qu'un instant. Considérez ma vieillesse [sic];³⁸⁵⁾ car [,] à mon age, on est bien loin de la vie et bien près de la mort. Ceci, Messieurs, ne s'adresse point à vous tous, c'est seulement à ceux qui m'ont condamné. Ce qui suit n'est encore que pour eux.³⁸⁶⁾ Vous croyez peut-être³⁸⁷⁾ que j'ai succombé sous mes accusateurs, parce que les discours capables de vous persuader, m'ont manqué; détrompez-vous, Athéniens, c'est l'argent et l'opinion qu'il || me fut permis de tout dire et de tout faire pour être absous < ; >³⁸⁸⁾ ce n'était point disette d'élocution, mais bien d'audace et d'impudence. C'est que je n'ai pu me résoudre à vous dire ce qu'il vous aurait plu d'entendre. Il eût fallu pleurer, gémir, dire et faire des choses indignes de moi, et telles que vous avez l'habitude de les entendre et de les voir faire à d'autres.³⁸⁹⁾ Mais j'ai commencé par me persuader qu'il ne convenait

381) V [最初 *ces raisons* のあとに数語を書き, ついでこれを線で消す。]

382) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——*une*]

383) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——*jugement*]

384) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——*Appollodore*]

385) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——*de vous payer*]

386) V *vous vous êtes pressé*

387) V, D, M < . >

388) V, D, M [*la* は *le* の誤記。]

389) V, D, M [*vieillesse* は *vieillesse* の誤記。]

390) V [最初 *pour eux* のあとに数語を書き, ついでこれを線で消して, 上の行間に *Vous croyez* を書き加える。]

391) V [最初 *peut-être* のあとに数語を書き, ついでこれを線で消す。]

392) V, D < . >

M < , >

393) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——*entendre*]

point d'éviter un péril en faisant quelque chose d'indécent, et je ne me repens point à présent de la manière dont je me suis défendu. J'aime mieux mourir après une défense pareille, que de survivre à une autre. Il n'est permis ni à moi [,] ni à personne [,] d'user en justice et en guerre de tous les [48] moyens d'éviter la mort. On peut se conserver la vie après une défaite, en jetant ses armes, et se précipitant aux genoux du vainqueur. Il est encore dans || tous les autres dangers des moyens d'esquiver la mort pour ceux à qui il n'en coûte rien pour tout dire et tout faire. Le difficile, Messieurs, si vous voulez bien y faire attention, n'est donc pas d'éviter la mort, mais la méchanceté qui marche bien plus vite qu'elle. Elles se sont attachées chacune à ce qui leur convenait : la mort qui marche à pas lents à moi que les années ont rendu tardif, et la méchanceté qui va vite, à mes accusateurs qui sont gens emportés et prompts. Vous m'avez condamné à la mort et j'y vais. Mais eux sont condamnés par la vérité et ils | resteront soumis à l'injustice et à la méchanceté ; il paraît que nous acquiesçons tous à cette sentence [,] eux et moi. Il fallait que les choses fussent ainsi, et il ne me paraît pas qu'elles soient si mal. Quoiqu'ils en pensent, je suis bien aise de faire une prédiction à || ceux qui m'ont condamné ; car me voilà arrivé au moment où les hommes prophétisent, celui où ils sont sur le point de mourir. Je vous annonce donc, ô Athéniens, que si vous me faites mourir, les dieux ne tarderont pas à venger ma mort ; et que le [49] châtiment qu'ils en prendront, sera bien plus terrible que la peine que j'aurai soufferte. En vous délivrant de moi, vous n'aurez plus personne qui vous demandât compte de vos actions et vous reprochât vos injustices. Le contraire vous arrivera. Tous ceux que je réprimais, sans que vous vous en aperçussiez, s'élèveront et vous poursuivront avec d'autant plus de vivacité, qu'ils sont

394) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——faisant]

395) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——la]

396) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——une]

397) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——moyens]

398) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——en]

399) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——Il]

400) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——n'est]

401) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——bien plus]

402) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——qui leur convenait :]

403) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——les années ont rendu]

404) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——mes accusateurs qui]

405) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——m'avez condamné à la mort]

406) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——condamnés par la vérité et ils]

407) D une prédiction à à ceux [à が重複。]

408) V, D vous n'auriez

M [n'auriez の上から n'aurez と書き直す。]

409) V [最初 demand のあとに語尾の数文字を書き, ついでこれを線で消し, そのあと上の行間に ât を書き加えて demandât にする。]

plus jeunes : deux motifs qui vous les rendront encore plus insupportables. Si vous avez
prétendu écarter⁴¹⁰⁾ par ma mort⁴¹¹⁾, le blâme des hommes, vous vous êtes bien trompés⁴¹²⁾ < . >⁴¹³⁾
Cette || voie, pour réussir, n'est ni assez sure, ni assez honnête. Il en est une autre qui ne
vous eût jamais manqué : laisser les autres en paix et travailler à se rendre meilleur.
e Voilà ce que j'avais à vous prédire [,] à vous qui m'avez condamné < . >⁴¹⁴⁾ Quant à vous
qui m'avez absous, nous avons le temps de nous entretenir ensemble de ce qui vient de
se passer, si vous le jugez à propos. Car les magistrats sont occupés, et je ne vois point
encore où il faut que je meure < ; >⁴¹⁵⁾ ainsi rien n'empêche⁴¹⁶⁾ que nous ne continuons la
40 conversation. Vous êtes mes amis, et je veux vous traiter ainsi en vous développant le
sens de tout ce qui vient de m'arriver. Ô mes juges, car vous méritez [50] particulière-
ment ce nom, ce qui vient de m'arriver est surprenant. Ce démon, cette voix divinatrice
qui se faisait entendre si fréquemment jadis, qui m'avertissait subitement, qui m'arrêtait
lorsque j'étais || tenté de dire ou de faire quelque chose qui ne convenait pas, eh, [sic]⁴¹⁷⁾ 70
bien [,] dans ces conjonctures où vous me voyez⁴¹⁸⁾, que bien des gens regarderaient comme
b les plus fâcheuses, cette voix divine⁴¹⁹⁾ m'a laissé sortir de la maison, paraître devant les
juges, parler sans m'arrêter⁴²⁰⁾, sans m'intimider, sans m'interrompre en aucun endroit de
mon discours < , >⁴²¹⁾ elle qui [,] dans mille autres occasions [,] m'a | subitement coupé⁴²²⁾ 33
la parole et fermé la bouche. J'ai dit et fait sans éprouver de sa part la moindre con-
tradiction [,] Quelle peut être la raison de son silence ? Vous allez l'apprendre. C'est
qu'apparemment ce qui vient de m'arriver, est un bonheur. Ce n'est pas là tout à fait
c l'avis de ceux qui regardent la mort comme un grand mal ; mais c'est qu'ils en jugent
mal. Sans cela je ne doute nullement que ce signe qui ne m'a jamais abandonné ne m'eût
averti. S'il s'est tu, c'est que ce que j'allais faire, || était bon. En effet, n'avons-nous pas 71

410) V [prétendu のあと, 上の行間に, écarter を書き加える。]

411) V [最初 par ma mort のあとに一語を書き, ついでこれを線で消す。]

412) V bien trompé

D [trompé のあとの余白に s を書き加える。]

413) V < . >

D, M < , >

414) V < . >

D, M < , >

415) V, D < . >

M < , >

416) V, D continuions

417) V, D, M [eh のあとの virgule はとる。]

418) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——voyez]

419) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——voix divine]

420) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——parler sans]

421) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——endroit de]

422) V, D, M < ; >

bien des raisons de croire qu'il est bon de mourir? La mort [51] est une de ces deux
 choses et il arrive ou qu'on n'est plus rien du tout et qu'il ne reste aucune⁴²³⁾ des sensations
 qu'on avait, ou que ce n'est, comme on dit, qu'une transmigration, un passage de l'âme
 d'un lieu dans un autre. S'il ne reste aucun sentiment, si la mort est un long sommeil
 d dans lequel on ne fait aucun rêve, il y a tout à gagner à mourir. J'imagine que si l'on
 compare ce repos dans lequel on ne fait seulement pas un mauvais rêve, avec les jours et
 les nuits de la vie, passées avec le plus de douceur et d'agrément, on trouvera qu'à peine,
 je ne dis pas le particulier, mais le plus grand⁴²⁴⁾ roi, le roi le plus heureux en pourrait
 e compter quelques-un⁴²⁵⁾ [sic] d'aussi⁴²⁶⁾ bons. Si c'est là la mort, on gagne donc à mourir; et
 le temps qui reste, n'est plus qu'une longue nuit. Mais || si la mort est une transmigration⁴²⁷⁾
 de l'âme d'un lieu dans un autre et qu'il soit vrai⁴²⁸⁾ qu'il y ait un lieu où tous les morts
 41 sont rassemblés <⁴²⁹⁾, > quelle espérance plus flatteuse pourrions-nous concevoir que celle
 de sortir promptement d'ici, que de s'éloigner de ces gens qui se disent des juges, pour
 en aller trouver qui le soient, Minos, Rhadamangos, Éac, Triptolène, et tous ces semi-
 dieux qui ont⁴³¹⁾ mené une vie si juste <⁴³²⁾? > Cette transmigration est-elle donc si fort à⁴³³⁾ [52]
 mépriser? Est-il donc si fort à redouter d'aller où l'on doit⁴³⁴⁾ trouver Orphée, Musée,
 Hésiode, Homère, et tant d'autres dont⁴³⁵⁾ la plupart d'entre nous rachèteraient la vie aux
 b dépens de la sienne? Ah⁴³⁶⁾ [!] si cela est, je sacrifierais plusieurs vies, si je les avais <⁴³⁷⁾
 je vous avoue⁴³⁸⁾ [,] Messieurs, que je me fais d'avance l'image la plus douce et la plus⁴³⁹⁾
 agréable de cette société. Je verrai là Palamède, Ajax⁴⁴⁰⁾ [,] fils de Télamon, et tous les
 anciens qui ont || subi des jugements⁴⁴¹⁾ | et une mort injuste⁴⁴²⁾. Je leur ferai mon histoire; je 73

34

423) V [aucune のあと, 上の行間に des を書き加える。]

424) V [紙片破損, 次の部分を欠く。—grand]

425) M [quelques-un の語尾に s 脱落。]

426) V [紙片破損, 次の部分を欠く。—d'aussi]

427) V [紙片破損, 次の部分を欠く。—temps]

428) V [n'est plus のあと, 上の行間に qu' を書き加える。]

429) V [紙片破損, 次の部分を欠く。—vrai]

430) V, D, M <; >

431) V [紙片破損, 次の部分を欠く。—ont]

432) V, D, M <. >

433) V [紙片破損, 次の部分を欠く。—si]

434) V [紙片破損, 次の部分を欠く。—doit]

435) V [紙片破損, 次の部分を欠く。—d'autres dont]

436) V [紙片破損, 次の部分を欠く。—dépens de la sienne? Ah]

437) D ;

M <, >

438) V [紙片破損, 次の部分を欠く。—je les avais, je vous avoue]

439) V [紙片破損, 次の部分を欠く。—l'image la plus douce et la]

440) V [紙片破損, 次の部分を欠く。—là Palamède, Ajax]

441) V [紙片破損, 次の部分を欠く。—qui ont subi des jugements]

442) V [injuste の語尾に書き加えられた文字があるが, 不明。s かもしれない。]

comparerai mes aventures avec les leurs. Oh, combien cela me sera doux ⁴⁴³⁾ [!] Ajoutez à cela la satisfaction de vivre comme je vivais ici, d'examiner chacun, de discerner ceux qui sont sages d'avec ceux qui ne le sont point et qui croient cependant l'être. Combien je me promets de plaisir à interroger ce chef qui conduisit devant Troyes une si grande armée, et Ulysse, et Sysiphe, et tant d'autres [,] tant hommes que femmes [,] dont le nombre est si grand que je ne peux les nommer tous ⁴⁴⁴⁾ < ! > N'est-ce pas un bonheur d'un prix inestimable de pouvoir conférer et juger ces illustres morts ⁴⁴⁵⁾ < ? > Ajoutez que ceux qui vivent là, ne meurent plus ⁴⁴⁶⁾ < , > plus heureux [53] que nous en beaucoup de choses, mais surtout en celle-là, s'il est vrai, qu'ils soient immortels [,] comme on le dit. Croyez, Messieurs, que vous n'avez rien à craindre de || la mort, et qu'il ne peut jamais 74 arriver de mal à un homme de bien [,] mort ou vivant, et qu'il n'est point négligé des dieux. Ce qui vient de m'arriver, n'est donc point une chose indifférente, un pur effet du hasard. C'est qu'il est temps que je meure, et que mes travaux cessent. Voilà pourquoi le signe divin m'a laissé faire sans aucune opposition. Ainsi ne suis-je que médiocrement indigné contre ceux qui m'ont accusé, et les autres qui m'ont condamné, quoique leur dessein ne fût pas de m'obliger, et qu'ils aient eu l'air de me faire grand mal, en me e privant de la vie. Voilà toute la raison que j'aie de m'en plaindre. Je reviens donc encore à eux et voici ce que je leur dis [:] « Messieurs, je n'ai qu'une grâce à vous demander, c'est de traiter mes enfants comme moi, lorsqu'ils seront grands, si leur présence vous est aussi fâcheuse que la mienne ⁴⁴⁷⁾ < , > surtout si vous vous apercevez || qu'ils préfèrent le 75 soin d'amasser des richesses ou d'acquérir d'autres choses semblables, à celui de faire des progrès dans la [54] vertu. S'il leur arrivait, n'étant rien, de s'estimer quelque chose, souvenez-vous ⁴⁴⁸⁾ des reproches que je vous faisais, et faites leur honte de ce ⁴⁴⁹⁾ qu'ils ne font point ce qu'il importe de faire, et qu'ils ont quelque ⁴⁵⁰⁾ estime d'eux-même ⁴⁵¹⁾ [sic] tandis qu'ils n'en méritent de personne. Si vous en agissez ⁴⁵²⁾ ainsi, nous obtiendrons de vous, moi 42 et mes fils ⁴⁵³⁾ [,] la récompense que nous aurons ⁴⁵⁴⁾ méritée. [>>] Mais il est temps que j'aie

443) V, D, M < . >

444) V, D, M < . >

445) V, D, M < . >

446) V, D, M < . >

447) V, D, M < . >

448) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——souvenez-vous]

449) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——de ce qu'ils]

450) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——quelque estime]

451) V, D, M [d'eux-même の語尾に s 脱落。]

452) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——Si vous en agissez]

453) V [紙片破損, 次の部分を欠く。——la récompense]

454) M [...mérité のあと引用符を閉じていない。]

| mourir et que vous alliez vivre. Il n'y a que dieu qui sache si votre sort est préférable 35
au mien, ou le mien au vôtre.

Fin de l'Apologie⁴⁵⁵⁾

Natura, sine amoris labore, has vix perficit.

Dialogue

[55] | || Criton ou de ce qu'il faut faire

36
76

43 Socrate [—] Pourquoi êtes-vous venu de si bonne heure ? Il me semble qu'il ne fera pas jour sitôt.

Criton [—] Cela est vrai.

Socrate [—] Croyez-vous que le jour se fera attendre encore longtemps <?⁴⁵⁶⁾>

Criton [—] Oui, car l'aurore est encore loin.

Socrate [—] Je suis étonné que le géolier vous ait ouvert.

Criton [—] Je suis venu si souvent ici que nous avons fait connaissance ; et puis je lui donne de temps en temps quelque chose.

Socrate [—] Ne faites-vous que d'arriver ? ou y a-t-il longtemps que vous êtes venu ?

Criton [—] Il y a déjà quelque temps.

b Socrate [—] Pourquoi donc s'asseoir sans dire mot <?⁴⁵⁷⁾>

455) V [最初 *Fin de l'Apologie* の下の線の直下に数語を書き、ついでこれを線で消す。]

456) V, D, M <. >

457) V, D, M <. >

第Ⅱ章 徳行の模範としてのソクラテス

入獄 ディドロの生き方とソクラテスの生き方との類似を最初に指摘して、ディドロに「ソクラテス・ディドロ」という渾名をつけたのはヴォルテールであった（1749年7月30日付、レナル神父あての手紙）。それ以来このディドロを指示するシンボルは、同時代人によってしばしば使用されたのであったが、ディドロ自身もまた、自分の生き方を——特に危機に直面した場合の決断の仕方を——常にソクラテスをモデルにして反省してきたのであった。私は以下に、ディドロの生涯においてこのソクラテスがもちえた意味の問題を、まずディドロの「徳行の模範としてのソクラテス」という視点から、ついで彼の「作品にあらわれたソクラテスのイメージ」という角度から、順次検討していきたいと思う。

すでにのべたように、ディドロが『ソクラテスの弁明』と『クリトン』（冒頭の一節）の翻訳を行なう直接の機縁をつくったのは、彼のヴァンセンヌ入獄であった。その前後の事情から考察していこう。

1749年7月22日、国璽尚書兼副大法官ダルジャンソン伯爵は、警察代理官ペリエに、「『盲人の書』〔『盲人書簡』〕の著者、ディドロ氏（le Sr. Diderot [sic]）を、ヴァンセンヌに投獄するよう命令をくだせ」と指示した¹⁾。

ペリエは、直ちにその秘書デュヴァルにたいして、「彼〔ディドロ〕の原稿を押収し、かつその場で、この本〔前記『盲人の書』、すなわち『盲人書簡』〕と、『哲学断想』、『お喋りな宝石』、『思想の小道』〔『懷疑論者の散歩』〕および、おとぎ話『白い鳥』にかんして、彼を訊問する」よう厳命した²⁾。

翌23日、警察代理官の命令は、「高等法院の弁護士、国王顧問官、パリのシャトレ警察署長」ミジェ・ド・ロシュブリュンヌに伝達される一方、ディドロにたいする勅命逮捕状が、ヴァンセンヌの城塞司命官、F・ベルナール・デュ・シャトレに急送される³⁾。

7月24日、警察署長ロシュブリュンヌは、警視デムリを伴い、午前7時半、「ヴィエーユ・エストラパッド、3階」にあるディドロの住居にあらわれる。数名の警官が家宅捜索を行なう一方、ロシュブリュンヌはディドロを訊問、訊問調書を作製、ついでデムリが、「国王の命により、ヴァンセンヌの小塔までディドロ氏に同行し、ここに送りこむ」⁴⁾。

7月31日、警察代理官ペリエは、自らヴァンセンヌにおもむいて、ディドロを訊問。しかしディドロは、『哲学断想』、『盲人書簡』、『お喋りな宝石』、『白い鳥』を執筆したという罪状を否認。ただし、『懷疑論者の散歩』だけにかんしては、自分がその筆者であることを認めたが、同時に、その原稿は焼却したと主張する⁵⁾。この訊問の様子はすでにアンドレ・ビーによって詳しく、その

1) CORR, t. I, p. 80.

2) Ibid.

3) Ibid.

4) Ibid., t. I, pp. 80-81.

5) Ibid., p. 81.

『ディドロ伝』中に再現されている通りである¹⁾。

8月10日、ディドロは、ほとんど哀訴に近い次の2通の手紙を書く。

第1の手紙——大法官ダゲッソーあて²⁾

〔1749年8月10日〕

閣下

大臣の不興をこうむるという不幸に遭遇いたしました正直な男〔ディドロ自身をさす〕が、閣下の御寛容と御庇護におすがりいたします。彼が、20日前から拘禁され、肉体の苦しみと、精神の痛みの余り、まさに死にたえんばかりになっておりますヴェンセンヌから、閣下の足下に身をなげだし、釈放を懇願いたすものでございます。彼は、犯した罪科に絶望し、今後は決して他の罪科を犯すまいと固く決心いたしております。彼にとがめうるものといましては、ただ精神の慎しみのなさすぎないのでございます。彼は、政府にたいして、なんら罪あるものではございません。——彼は政府にたいして、これまでいかなる場合にも、全幅の服従と忠誠のしるしをしめしてきたのでありますから。また、国王と大臣方にたいしましても、なんら罪あるものではございません。——彼はこれらの方々にたいしまして、今までつねに、彼の言説と著作において、もっとも深甚なる、もっともこまやかなる尊敬の念を表明してきたのでありますから。

ディドロはこれにすぐ続けて、自分の「庇護者、知人、ないし友人として」デュ・デファン侯爵夫人、ド・ボンバルド、サリエ神父、ビュフォン、クレロ、ドーバントン、フォントネル、ダランベールの名をあげ、彼らが「彼〔ディドロ〕の性格の善良さ、几帳面な正直さ、品行の正しさ、ならびに彼の妻と子どもたちが現に彼を必要としていること」を証拠だててくれるだろうとのべ、もし自分に再び「自由」が与えられ、「生命」が救われるなら、その2つを『百科全書』の完成にささげ、この「フランスの名誉とイギリスの恥辱のために」はじめられた仕事を、「文芸と、文芸にたずさわる人士の保護者たる大臣」に献呈したい、と結んでいる。

第2の手紙——警察代理官ベリエあて³⁾

〔1749年8月10日〕

1週間前の金曜日、私は生涯にはじめて法廷に出頭いたしました。そして、裁判官が、たとえどれほどの寛容さをおもちであるといたしましても、正直な人間にとりましては、訊問

1) A. BILLY, *Vie de Diderot*, pp.84-88. ディドロが体験したさまざまな事件を、ディドロの内面的思想発展の歴史のなかで意味づけているヴェントウリの『ディドロの青年時代』にくらべる時、このビーの伝記はたんなる事件の叙述にすぎないという点で不満のこることはいうまでもない。しかし事実の叙述にかなする限り、ビーはきわめて資料に忠実であって、その小説的手法のゆえに、これを全然顧みないことは誤りであろう。

2) CORR, t.I, pp.82-83.

3) *Ibid.*, t.I, pp.83-88.

がこの世でもっともつらいものであるということを実感いたしました。それゆえあの訊問の際に、以前書面で閣下にお願いいたしておきました特別のおはからいについて、口頭で再度お願いすることを忘却いたしておりましたことは、けだし当然でございましょう。その特別のおはからいと申しますのは、ペン、インク、紙、書物を入手し、私の房に隣接する広間で歩行することを許していただくことでございます。

これにすぐ続けて、ディドロは、留守宅に残された妻と子どもの生活にたいする懸念を表明し、妻との面会の許可を「目に涙をうかべ、閣下の膝をだきしめながら」懇願している。ついで、18歳の時にパリにでてきて以来、文筆に頼ってどのように生計をたててきたかをのべ、しかもそれらの仕事は、すべてフランス国家の利益をめざしたものにほかならなかったと釈明している。このあと、自分の「品行」の正しさを、警察の2人の秘書デュヴァルとギヨットを証人として、弁明し、また自分の「正直」なことを、前掲ダゲッソーあての手紙にあげた諸名士、ならびにエルヴェジウス、シャトレ侯爵夫人、デュクロ、ヴォルテールなどを証人として、主張したうえ、「以上が、閣下のおもとめになりました全面的告白なのであります」と結んでいる。

手紙の末尾では、自分は犯した「あやまち」を最大限に後悔しており、これを改めたいが「しかしそのためには、生きねばなりません。釈放していただかねばなりません。もし私の釈放がさらに遅延いたしますならば、私は長く生きながらえうと思えないのであります」と書いている。そして、再度妻との面会を懇請したあとに、次の文章が続いている。

なにとぞ、私の房に隣接する部屋を使用する自由と、書物数冊を入手し、閲読する自由とを、お与えください。私がこれら特別のおはからいのうち、第1のものをお願いいたしますのは、両腿と両脚とに疼痛を感じており、歩行する際に現在よりやや広い空間が与えられれば、この疼痛もおそらく消失すると考えられるからであります。第2のものをお願い申し上げますのは、いかんともしがたい力で私を圧倒し、なにか不吉な行為にまで私を導くかも知れぬ絶望の動きを、まぎらわさんがためなのであります。

翌8月11日、この請願の手紙はヴァンセンヌの城塞司令官の手を経てペリエに伝達された¹⁾。しかし、その後も、一向に釈放されそうな形跡はなく、ディドロの不安、絶望は増大し続けたものと思われる²⁾。3日後、「肉体は困憊し、精神はうちのめされ、そして魂は苦悩にひたされ」た彼は、ついにほぼ全面的な自白を行なうにいたる。

1) *Ibid.*, t. I, p. 88.

2) 当時のヴァンセンヌの小塔内の監獄の様子が、フランス革命期まで、ほとんど変りがなかったものとするれば、革命直前、この小塔の内部にディドロ同様監禁されたミラボーの証言は、顧慮するに価するであろう。彼によれば、小塔内には図書室の設備はなく、わずかに不揃いな文学書が存在していただけであったという。〈Des lettres de cachet et des prisons d'État〉, dans les *Œuvres de MIRABEAU*, 1828, t. IV, p. 426. (citation faite par J. SEZNEC dans les *Essai sur Diderot et l'antiquité*, p. 1.)

警察代理官ベリエあて¹⁾

〔1749年8月13日〕

閣下

〔前略〕私はここで、長期にわたる入獄と、想像しうるかぎりのすべての苦痛すらもが、私の口から裁判官に白状させないであろうような事柄を、私の尊敬すべき庇護者としての閣下にたいして告白するものであります。すなわち、『断想』、『宝石』、ならびに『盲人書簡』は、精神の慎しみのなさのあまり、つい私が筆をすべらせたものである、という事実であります。けれども私は、自から進んで、私の名誉にかけて（私は現に、名誉を重んずる心をもっておりますが）、この種の著作を今後書くつもりはないこと、またこの種の著作は、上にあげたもの以外に現に存在しないことを、閣下に誓約しうるものであります。私は、『風俗』²⁾と題された書物にたいしましては、直接にせよ、間接にせよ、いかなるかわりあいもっておりません。したがって、私は、この書物を、一般読者とおなじ程度に知っているにすぎないのであります。

この手紙の補遺として、さらに次の数行が付加されている。

『おとぎ話、白い鳥』にかんしてであります。これは、私のものではございません。これは、私がその名をあきらかにしうる——と申しますのも、このひと自身そのことを秘密にしているからであります——ある婦人のものであります。もし私が、この著作に関与した、というるとすれば、それは、恐らく私がその綴字を訂正したためなのであります。〔……〕この作品は、印刷されておられませんし、今後とも印刷されうとは思いません³⁾。

1749年8月21日、ディドロは前記警察代理官ベリエあての「誓約書」を書き、ヴァンセンヌ城内での行動にかんしては「陛下の御命令と御意志」とを完全に守り、万一そむいた場合には「生涯、小塔〔独房のある城内の小塔〕に監禁される」ことに同意するむねベリエに誓約する。この「誓約書」を提出すると同時にディドロの身柄は、小塔の独房から解放され、ヴァンセンヌ城内の城塞司令官邸（現在はもう存在していない）で、いわば軟禁の状態に移される。したがって、城内の中庭の散歩、ならびに訪問者との面会も許可される。すでにのべた有名なルソーの訪問は、この間の8

1) CORR, t. I, pp. 88-89.

2) 「1748年、バナージュという名前で発表されたこの書物は、トゥサンの作品である（ロト）。」 CORR, t. I, p. 89, note 2.

3) 「ある夫人」とは、いうまでもなく、当時のディドロの恋人ピュイジュー夫人のことである。ここでなぜディドロが、自分の恋人に罪をかぶせるようなことをしたのか、なお現在も解決されない問題を残している。A. BILLY, *op. cit.*, p. 88. —CORR, t. I, p. 90, note 4.

ヴァンドゥル夫人は、ディドロが、この著作の筆者であることを認めている。 Madame de VANDREUL, *Mémoires pour servir à l'histoire de la vie et des ouvrages de Diderot*, AT, t. I, p. XLIII. (ただし、ここでは <Pigeon blanc> と書かれているが。)

月25日に行なわれたものと推定されている¹⁾。

その後、ディドロは、9月の中旬と推定される時期に、警察代理官ペリエにあてて、「将来、宗教ならびに良俗にそむくおそれのあることは、一切せぬことを誓約いたします」と明記した釈放請願書を提出している²⁾。しかし軟禁はさらに続く。

10月21日、『百科全書』編集者ディドロにたいする釈放の勅命令状が署名される³⁾。

11月3日、勅命令状がようやくヴァンセンヌに到着。ただちにディドロは釈放される。逮捕されて以来、通算102日目である⁴⁾。

ヴァンセンヌのディドロにとっての『ソクラテスの弁明』の意味 すでにのべたように、ディドロが『ソクラテスの弁明』と『クリトン』（冒頭の一節）を翻訳した期間は、トゥルーソンによって、「1749年8月末から10月末の間」と推定されているのであるが、なぜディドロはヴァンセンヌに軟禁されている間に、特にこのプラトンの2つの著作を翻訳したのであろうか。

ヴァンセンヌ城塞内の居室でたまたまプラトンの対話篇をもっていたということ、翻訳によって暇つぶし——あるいは不安の解消——を試みたということ。これらの偶然的契機があったことはもちろん否定できない。しかし、その翻訳の対象が、特に『ソクラテスの弁明』と『クリトン』であったという点に、ディドロ自身の自覚的な選びが感じられるのである（後述するように、ディドロは入獄する以前から、すでにプラトンのソクラテスには、特別な関心を寄せている）。

アテナイの政界の有力者アニュトスを後楯としたメレトスによって告発されたソクラテスは、『弁明』のなかで、自分にたいしてなされた告発の諸条項を列挙したあと、これにたいして弁明を行なっている。ディドロの翻訳に基づいて説明すれば、いわゆる「昔の告発者」の主張、すなわち「数多くの、しかも古くからの中傷に基づいて形成され、しかも長年にわたって維持されてきた意見」は、次のごときものであった。「ソクラテスは不正な人間であって、天上と地上でおこっていることを本気で調べ、誤った理由を正しい理由だと好んで主張している。しかも他人にもおなじことを教えている。」⁵⁾ また「最近の告発者」の申し立ては、こうであった。「ソクラテスは悪人であって、青年を腐敗させ、国家の認める神々を信ぜず、新らしいダイモンの信仰をひろめている。」⁶⁾

ディドロが翻訳した、このソクラテスにたいする告発状の内容を読む時、私は『盲人書簡』、『哲学断想』、『お喋りな宝石』などの著者として告発されたディドロの立場が、『弁明』中のソクラテスの立場と、ある意味で重なりあうものであることに気づかざるをえない。なぜなら、『盲人書簡』は、「天上と地上でおこっていることを本気で調べ」た書物にほかならないのであるし、物質とその運動によって全宇宙の生成を説明をしようとする作中人物ソンドラスンのことばは、当時の正統的思想家たちの眼には「誤った理由を正当な理由だと好んで説明している」ものと映ったに相違ない

1) CORR, t. I, p. 91.

2) *Ibid.*, pp. 95-96.

3) *Ibid.*, p. 97.

4) *Ibid.*

5) 以下、『ソクラテスの弁明』からの引用は、ディドロの翻訳による。19b-c.

6) 24b-c.

からである。また『盲人書簡』も、『哲学断想』も、「国家の認める神々」（すなわちキリスト教の神、あるいは既成の数々の教義）を信ぜず、「新らしいダイモン」すなわち、ある意味では「物質」への、ある意味では「情念」への信仰をひろめているのであるし、また「お喋りな宝石」を含めた上記すべての作品が、当時の政治・宗教権力者にとっては、「青年を腐敗させ」るものと考えられていたに相違ないからである。

『弁明』においてソクラテスは、アテナイ市民にたいして次のようにいう¹⁾。

それゆえ、もし諸君が、私を放免することにきめて、私にこういとしたら、——「われわれは、アニュトスの告発をとりあげないことにする。彼の訴えから君を釈放しよう。だが、それには、次の条件にしたがってもらわねばならない。つまり、これまで従事してきた探求生活はもうしないこと、知を愛し求めることはあきらめること、そしてもし君がもう一度こんなことをやるような場合には、死をもって罰せられるだろうという条件で」。もし諸君が、以上のこととひきかえに、私の釈放をもちかけたとしたら、私は諸君にこう答えるでしょう。——「アテナイ人諸君、私は諸君に親しみと愛情を感じている。しかし、諸君に服従するよりは、むしろ神々に服従するほうがよいのだ。私の息の続く限り、私にそれができる限り、私は知を愛し求めていくだろう〔哲学し続けるだろう〕。私の前にあらわれるすべての人にむかって、私の流儀にしたがって、勧告し、説明し続けながら……」

キリスト教徒の殉教に比肩されるべき、哲学者の殉教のモデルが、哲学者がしたがうべき、実践的徳行の模範がここにある、とディドロはこれを訳しながら感じたに相違ない。

なぜなら、ヴァンセンヌの独房にいたディドロは、最初は自分が、告発された諸著作の著者であることを否認した。ソクラテスのように、死を恐れない態度とは反対に、釈放されんがために、自説を否認し、穏健な市民としての印象を政府に与えようとした。それでも許されそうにないと気づくや、今度は一転して上記の諸著作を自分のものとして認め、しかも同時に今後の完全な恭順を誓約して、いわば、政府の前に完全に屈服してしまったのであったから。

《ソクラテスの（哲学）》 ディドロのソクラテスについての最初の、しかも体系的な表現は、『百科全書』の項目として執筆された《ソクラテスの（哲学）》である²⁾。

これは、ほぼ次の6部から構成されている——1)ソクラテスの伝記、2)ソクラテスの神にかんする意見、3)ソクラテスのダイモンにかんする意見（ディドロはここで、ダイモンを«*esprits*»,あるいは«*génies tutélaires*»という語で表現している）、4)ソクラテスの魂にかんする意見、5)ソクラテスの道徳哲学の諸原理、6)ソクラテスの死後における弟子たちの系譜と活動。この体系的な全体の構成からも推測されうのように、叙述は客観的解説の調子をおびており、ディドロ自身の生き方とソクラテスのそれとの主体的なかかわりの意識は、ここではほとんどまったく表現されてい

1) 29c-e.

2) «*Socratique (Philosophie)*», ENC, t. XV, pp. 261-265; AT, t. XVII, pp. 151-166.

い⁴⁾。

そして、その点からいえば、グリムの『文芸通信』が、この項目を、当時「無味乾燥な、技巧も才能もない書き方」の伝記と評したことも、あながち無理とはいえないのである²⁾。

先に引用したネジョンの証言は、ディドロの『ソクラテスの弁明』の翻訳は、元来『百科全書』のこの項目のために行なわれたものであると述べているが³⁾（その後、マジェ・デュ・ビーストによって発見されたネジョンの1786年2月17日付、ヴァンドゥル夫人あての手紙も、おなじ事実をのべている⁴⁾）、実際に印刷された項目中には、この翻訳は収められていない。もしこれが項目中に含まれていたなら、それに相応して、ディドロの叙述形式も変化し、ソクラテスにたいする共感がより明確に表現されることになったかもしれない。

ともあれ、ディドロは、この項目によって、一応ソクラテスの生涯と学説の概説を書きあげたのであるが、彼は決して、これで満足していたのではなかった。彼が本当に書きたかったものは、以下にみるようにこれとは違った形式の「ソクラテスの生涯」であり、それを一種の文学的遺書として死後に残したいと考えていたものと思われる。

すなわち、『百科全書』の寄稿家であるジュネーヴの牧師ジャコブ・ヴェルヌが、ディドロのある作品をほめてくれたことに感謝した1759年1月9日付〔ロトの推定〕の手紙のなかで、ディドロは次のようにのべている⁵⁾。

あなたからおほめのことばを頂戴して、どう申しあげていいかわからないほど感激いたしました。〔……〕このおことばは、その職務〔牧師〕と才能によって同胞に徳を説く義務と、資格をおもちの方にふさわしいものでした。私の作品をほめ、その仕事を続けていくよう元気づけてくださって、この方〔ヴェルヌ〕は私をもその職務〔徳を説くという職務〕に加えてくださっているように思えます。このようにして、私は一瞬自分を価値あるものであるかのように思い、うぬぼれ、身内がほてり、無能さにもかかわらず——あなたがこの無能さを忘れさせてくださったのです——、「ソクラテスの死」すら書きあげることができるだろう、と思いあがったほどでした。

善なるひとの称賛が、どれほどひとを魅惑するものであるかがおわかりのことと思います。私はすぐ我にかえり、この主題がどれほど私の力にあまるものであるかを認めざるをえませ

1) セズネックは、この項目において、ディドロがクサンティッペに言及した箇所の最後で、突如自分とソクラテスとを比較している事実注目し、*«Ce retour sur lui-même paraît assez révélateur.»* とのべている。クサンティッペのうちにディドロは自分の教養なき妻の面影を見いだしている、と考えるセズネックの解釈は、おそらく正しいであろう。SEZNEC, *op. cit.*, p. 8.

2) CORR LIT, t. II, p. 69, 14 juin 1751.

3) NAIGEON, *op. cit.*, p. 133, note 1.

4) [1786年] 1月17日付ネジョンの手紙（宛名なし）——*Bulletin de la société historique et archéologique de Langres*, tome douzième, p. 7.

5) CORR, t. II, p. 106. このおなじ手紙は、次の形でも現在残されている。M. Garnier à M. N*** dans *Les pseudo-mémoires de Madame d'Epinay*——*Histoire de Madame de Montbrillant*, éd. par ROTH, t. III, pp. 275–276. 私が引用したテキストとの間に若干の異同が認められる。

んでしたけれども、この仕事を完全に断念してしまったわけではありません。ただ、時期を待つつもりでいます。私はこの作品を書くことによって、文筆と決別したいと思っています。もしいつか実際にこれを書くようなことがありました場合は、作品の前に序説をつけるつもりです。この序説の目的は、一切をよく熟考してみるなら、この世で幸福になる最良の手段は、徳を实践することだと、ひとびとに説得することなのですが、これは、作品自体に劣らず、重要で困難な仕事だと、あなたもお考えになるでしょう。

ディドロはこれに続けて、もしこの試みに失敗するならば、それは「悪徳の弁護」になってしまうだろう、という懸念を表明している。この懸念は、その後一生の間、ディドロの意識から消えなかったものと推定される。晩年においても、『エルヴェジウス著「人間論」にたいする逐条的反駁』のうちに、この懸念が、ヴェルヌアテの手紙とほとんどおなじ言葉で表現されているのである。

付記 項目<ソクラテスの(哲学)>の原稿から削除された部分 周知のように、1761年、ディドロは『百科全書』本文の最終10巻(第8巻から第17巻まで)の編集を全部完了し、1762年からこの部分の印刷が開始される。校正刷はまずディドロのもとに送られて、彼の校正をうけ、ついで出版元ル・ブルトンの手にいったん全部回収される。そのあとル・ブルトンは校正係の助手の協力をえて、編集者ディドロおよび他の執筆者すべての眼をごまかして、当局の検閲にひっかかりそうな箇所に「自主検閲」——削除、付加、変更——を加えていたのである。そして証拠隠滅のために、すべての原稿を焼却してしまう。

ディドロがこのル・ブルトンの裏切り——『「百科全書」に加えられた、もっとも苦しく、致命的な一撃』(グリム、『文芸通信』1771年1月)¹⁾——に気づくのは、2年後(1764年末)に、偶然<サラセン人、あるいはアラビア人(の哲学)>²⁾を参照する必要がある時であった。その時彼は、自分の原稿が完全に改ざんされていることを発見する。怒りと、絶望。「あなたは、私の心臓に短刀をつきさしました」ということばではじまる有名な手紙をル・ブルトンに書くのは、この時である(1764年11月12日付の手紙。³⁾)

しかし、このル・ブルトンの検閲の実態は、真相を究明する資料が残されていなかったため、長く謎であった。

1938年、ダグラス・H・ゴードンは、アメリカの古書販売業者アーサー・ローをとおして『百科全書』のひと揃いと、それに付属した別巻1冊(資料集)を買い入れる。これは、1933年ソヴィエト政府が売りにだし、2〜3人の手を経てからゴードンの手に渡ったものだった。考証の結果、この別巻がル・ブルトンの所有物だったことが判明する。そしてその91ページから408ページまで(合計318ページ、全巻の約3分の1)が『百科全書』の校正刷であった。

この318ページのうち10ページは、当時の出版業監督長官マルゼルブの忠告で削除された項目<憲法>の1部、24ページがル・ブルトン以外の人間の改訂が加えられた項目、残りの284ページがル・ブルトンの改ざんの跡をとどめた項目であった。

1) CORR LIT, t. IX, p. 206.

2) <Sarrasins ou Arabes (Philosophie de)>, ENC, t. XIV, 1765, pp. 664-678; AT, t. XVII, pp. 35-84.

3) CORR, t. IV, pp. 300-306.

この318ページのうち、「純粋に技術的な理由から改訂を加えられた数ページと、内容改ざんの意図なしに手を加えられたその他多くのページ」¹⁾をのぞき、すべての改ざん箇所が、ゴードンとトリーの努力によって復元されている。

なお、この別巻に採録された校正刷のうち、3項目——《威嚇》(ディドロ)、《ソクラテスの(哲学)》(ディドロ)、《主権》(ジョクール)——の欄外には、ル・ブルトンの改ざんを発見したときのディドロの書き入れがある²⁾。

以下私は、ゴードンとトリーにしたがって、ディドロの書き入れと、ル・ブルトンの削除箇所とをしめしておこう³⁾(削除箇所はイタリック体でしめす)。

[ソクラテスを死刑にした裁判官への言及——ゴードンとトリーは、ここに警視総監オメール・ジョリ・ドゥ・フルリーへのあてこすりを読みとっている⁴⁾——を発見した時の欄外への書き入れ——] J'ai revu quand la serpe Ostrogothe eut massacré les articles. Vous tirerez et foutrez par la fenêtre, si vous faites bien.

SOCRATIQUE, PHILOSOPHIE [『百科全書』第15巻, 1765, pp. 261—265] [...] On l'a accusé d'impiété [...] Il méprisa les dieux et les superstitions de la Grece. Il eut en pitié leurs mysteres. Il s'étoit élevé par la seule force de son génie à la connoissance de l'unité de la divinité, et il eut le courage de révéler cette dangereuse vérité à ses disciples. *L'ignominie qui est retombée sur ceux qui l'ont condamné, doit encourager tout philosophe à dire hardiment la vérité, rendre les gens du monde qui prononcent si légèrement sur leur conduite, et qui blâment en nous ce qu'ils admirent en Socrate, plus conséquens et plus circonspects, et effrayer ceux que la Providence a chargés de l'exécution des lois et du soin de la tranquillité publique, par la pensée que les systèmes, qui sont aujourd'hui si vénérables, si merveilleux à leurs yeux, ne deviendront dans les siècles à venir, au jugement de ceux qui en examineront l'absurdité de sang froid, qu'une mythologie très-ridicule et très-méprisable.*

ディドロがいつも繰り返すことば(«L'ignominie qui est retombée sur ceux qui l'ont condamné»)が、ここでもまた発見されることに注意されたい。

エルヴェシウス『精神論』発禁事件 ディドロが、ヴェルヌあての手紙を書く約半年前、1758年7月15日に、エルヴェシウス『精神論』が発売される。これは5月12日付で国王の印刷許可をうけたのであるが、その後6月、著者が友人たちに回読させた未検閲の第一刷を読んだマルゼルブが、

1) Douglas H. GORDON and Norman L. TORREY, *The Censoring of Diderot's Encyclopédie and the Re-established Text*, New York, 1947, p. 35.

なお、この本には、樋口謹一氏の書評がある。——西洋史学会編『西洋史学』16号, 1953年2月5日, pp. 66-71.

2) *Ibid.*, pp. 36-37.

3) *Ibid.*, p. 83.

4) *Ibid.*, p. 37.

危険すぎる箇所を修正するように忠告し、著者エルヴェジウスは、この忠告にしたがって改訂を加えたうえ、印刷発売したのであった。

しかし、8月には、次の決定がくだされる——「今月10日、ひとびとは、大声で国王の顧問会議の決定を叫びたてた。この決定によって、国王は『精神論』という書物の〔印刷・発売の〕特権を撤回し、違反した場合は見せしめの罰として、その販売および流布を禁止することにした」¹⁾（バルビエ）。

すぐこれにつづいて、同月末エルヴェジウス自身によって、『尊敬する***神父にあてた、エルヴェジウス氏の自説撤回の書』が書かれる。そのなかには、たとえば次のようなことばがしるされている。——「私は、〔……〕この著作を読むという不幸にあわれたすべての方々が、この著作からうけた不可避的な印象に基づいて、なにとぞ私を判断なさらないように懇願いたします。」²⁾

後年、ディドロは、ネジョン、ドルバック、シュアール、ベルジェおよびブロンたちと、サン・クルーにピクニックに行った時、この事件——ディドロによれば、「エルヴェジウスの卑怯な振舞い」——について語りあった。その時のことを、ディドロはソフィー・ヴォランあての手紙のなかに書いている（日付不明の断片）³⁾。ディドロは、ピクニックの仲間全部から、彼ひとり「全力をあげて火あぶりになろうとしている」といって嘲笑されたという。

ディドロの考えでは、「大胆な著作」を書いたがゆえに裁判所に召喚された人間は、そこから生じるいかなる危険も顧慮することなく、次のようにいうべきである。「そうです。それを書いたのは私です。私はそのように考えているのであり、したがってそれを取り消すつもりはありません」と。そういう人こそ尊敬に値する、とディドロはいい、さらにこう続けている。

私はいいました。真実を撤回したり、私の思想にしたがって書いたあとで、私の思想に反することを口にしたり、裁判官、同胞ならびに私自身の眼に卑怯者として映ったり、私のすべての発言から一切の権威をとりさったり、百人の狂信者が虚偽にささげたような証言と犠牲とを真実にたいしてこぼんだりして、真実を傷つければ、私の心は痛むだろう、と。〔……〕私は、彼らに反対して、ソクラテスをもちだしましたが、それは、彼を連中の皮肉の前にさらしただけの結果になりました。こんな目にあわせたことをソクラテスに謝りましょう。

かつてディドロがおいこまれたのと、ほぼ類似の状況に、今度はエルヴェジウスもおちこんだのである。そして、ディドロはエルヴェジウスのなかで、かつての自分とおなじ卑怯者の姿を見いだしたのに違いない。手紙のなかでは、自分のヴァンセンヌ入獄への直接の言及はない。しかし、彼が、かつての事件を心のなかで思いうかべていたことはほぼ確実である。なぜなら手紙は突如として、

1) CORR, t. II, p. 64.

2) Ibid.

3) S, t. II, pp. 263-265. この断片は、ロト編『ディドロ書簡集』のなかでは確認できない。

次のような自己反省に向っていくからである。

ああ、真実を擁護すべき職にあるひとたちが、それを証言せねばならなくなった時、尻ごみするとは。私もそんな卑怯なことをやるかもしれません。けれども、そのことで自分を軽蔑するでしょう。自分のことばを認める勇気が自分にないと感じるなら、ただ沈黙をまもるしかありません。私は、好んで死を求めるようなことをしたくはありませんが、死を避けるつもりもありません。ネジョンよ。もし君のセネカとエピクテトスが、君の意見をきいたら、なんというだろう。

ディドロは続けて、真実にたいするあかしよりも、生命の方を尊しとする人間が、「哲学者」と呼ばれることは我慢できないという。民衆は「行為」を見てそのひとの言説を裁く、という。ここにも、後年のディドロの関心をしめる、人間の実践的道德にたいする問題への傾斜がすでに明瞭にあらわれている。彼はいう。

それに、この断固たる行為が、ひとの発言に力強い裏づけを与えないなどと考えられますか。哲学者の血で書かれたページは、また独特の雄弁をもっています。〔……〕ただし私は、私自身の大義を擁護しうる程強い人間であるとは思えません。

ディドロは、「生まれてはじめて、ソクラテス、プラトン、ピュタゴラスが足下にふみつぶされるのをきいた」サン・クルーでの1日の出来事を、彼らをふみにじった人々にたいする怒りのことばとともに、手紙の末尾に書きとめている。彼は、その日ソクラテスのイメージを頭にうかべながら、エルヴェジウスの事件とその意味を反省したのであった。

1776年夏の弾圧の危険 1766年1月1日、当時19歳のジュヴァリエ・ジャン・フランソワ・ド・ラ・パールが、前年の8月9日、宗教を冒瀆したという罪状のもとに、アブヴィルにおいて拷問、死刑に処せられる。彼の所有する書物が搜索され、彼が『百科全書』も、哲学者たちの著作も所有していなかったことが判明したにもかかわらず、国王の顧問官パーキエは、「アブヴィルの瀆聖行為を、フランス国内にひろがっている哲学的精神の不吉な結果として説明し、非常なはげしさをこめて、哲学者たちに敵対する意見をのべた」¹⁾。

すでにその前年、ブルターニュ高等法院の検事総長カラドック・ド・ラ・ジャロテは、デギヨン公爵に反対した罪科と、ジェズイット派に敵対的な報告書を提出した罪科とによって、サン・マロの獄に、ついでバスチーユの獄に、監禁されていた²⁾。

こうした政治的圧迫の危険な徴候を前にして、情勢の変化にきわめて敏感なヴォルテールが、まず反応を起こす。

1) CORR, t. VI, pp. 235–236.

2) Ibid., t. VI, p. 335, note 7.

ネジンは、その『ドニ・ディドロ覚書』のなかで、高等法院の追放事件に、ディドロがまきこまれることを心配したヴォルテールが、ディドロにたいして、「間接的な経路で、参考にすべき覚書形式の手紙」を手渡した、と述べている¹⁾。ロトによれば、この「間接的な経路」とは、ダミラヴィルをさしている²⁾。ヴォルテールは、この時、ダミラヴィルにたいして、書面（7月23日付、スイス領ローヌ河のほとりから）によって「プラトン」（あるいは「ソクラテス」）すなわちディドロがフランスをはなれる「決心をする」よう説得させることにしていたのである。ヴォルテールが予定していた「プラトン」（「ソクラテス」）の逃亡先は、スイス領ラインランドであった³⁾。

この「覚書形式の手紙」には、「ソクラテス・ディドロ」のシンボルが登場している。

ヴォルテールより⁴⁾

ロール、1766年7月23日

メレトス、アニュトスのやからが、血潮のなかに身をひたし、火刑用の薪の山に火をつけている時、ソクラテスにたいして書かざるをえません。あなたのような方は、現在あなたが不幸にも暮しておられる国を、恐怖の念をもってしか見られないはずです。あなたは、望むがままのものを印刷させうるのみならず、いまわしい、血にうえた迷信に反対する意見を、大声で説く自由を完全にもちうる国にいらっしゃるべきでしょう。そこでは、あなたは孤独ではありませんまい。大勢の仲間と弟子とをもたれることになるでしょう。あなたはそこでひとつの講壇を設立されるでしょう。それは真理の講壇となるでしょう。

そして、これを追いかけるように、ヴォルテールは同月25日、続いて28日に、ダミラヴィルに手紙を書き、「プラトン」をフランスから脱出させる具体的方策を指示している⁵⁾。

しかし、ディドロは沈黙を守ったままであった。ヴォルテールは、なおもディドロの脱出に固執し、8月31日付、9月10日付、9月15日付、そして最後に、やや怒りをこめた9月16日付の手紙で、ダミラヴィルに指示し続けている⁶⁾。

10月になって、やっとディドロの返書——前記ヴォルテールの「覚書形式の手紙」にたいする返書——が送られてくる⁷⁾。この返書は、「私にはよくわかっています。野獣が人間の血のなかにひとたび舌をひたすと、血をなめずにいられないということが」という冒頭の一句に始まり、「私にはよくわかっています」という表現を連続して11回反復し、事態の危険はよくわかっているが、それにもかかわらず、自分にはパリを離れる意志がないということを、明確にのべている。そして、そのディドロを支えているものは、やはりあの獄死したソクラテスのイメージなのであった。ディドロ

1) NAIGEON, *op. cit.*, p. 197.

2) CORR, t. VI, p. 236.

3) *Ibid.*

4) *Ibid.*, p. 237.

5) *Ibid.*, p. 238.

6) *Ibid.*, pp. 332-333.

7) *Ibid.*, t. VI, pp. 334-337.

はいう。

私にはよくわかっています。彼ら〔迫害者たち〕は乞食の群にほかならぬがゆえに、正直な人間は、ここでは24時間後に財産を失うかもしれぬことが。法が存在せぬがゆえに、自由を失うかもしれぬことが。暴君たちが一市民の生命をなにもものとも思わず、恐怖をあたえることによって、軽蔑からまぬがれようとしているがゆえに、彼は生命を失うかもしれぬということが。〔……〕

私は、御覧の通り、自分自身にたいして、なにごととも隠しだてしようとは思いません。私の魂は不安にあふれています。私の心の底では、あなたの声と重って、ひとつの声がきこえています。逃げよ、逃げよと。しかしながら、私は、もっとも愚かしい、もっとも理解しがたい惰性にひきとめられております。ですから、私はふみとどまろうと思います。〔……〕万一私がソクラテスの運命にあうとしても、彼に比肩されうするためには、彼のように死ぬだけでは充分でないということをお考え下さい。

この時、ディドロの耳には、あの『弁明』のソクラテスのことばが響いていなかったであろうか。「持場をまもることが名誉だと考えて、その場についていたり、あるいは長上の命令によってそこに配置されたりしているひとは、誰でもそこにふみ止まり、一切の危険を身にひきうけ、もし必要とあれば死なねばならない、そしてただ恥だけを恐れねばならない、と私は考えるのです」¹⁾ということばが。

1766年夏の危機は、幸いディドロの身には波及せず、ただ『百科全書』の出版者ル・ブルトンが、しばらくバステューユに投獄されたにとどまった。

エルヴェシウス『人間論』にたいする反駁 ディドロは、エルヴェシウス『人間論』にたいする反駁を、1773年ロシア旅行の途中、オランダに滞在していた時から書きはじめたが、ロシア旅行からパリに帰った後、1775年になってこれを完成した。

1772年、エルヴェシウスの遺稿としてオランダで出版された『人間論』は、10篇から構成されており、ディドロはこれを最初から最後まで逐条的に反論している。なかでもディドロの反論がもっとも集中的に展開されているのは、第1篇と第2篇であり、特に感覚作用によって、一元的に知覚、推論、判断の形成を説明し、かつ感覚的快によって人間の行為を一元的に動機づける第2篇への反論が、この『エルヴェシウス著「人間論」にたいする逐条的反論』の中心部分をなしている。

ソクラテスにたいする言及は、この第2篇にたいする反論のなかにあらわれる。ディドロは、「ひとなみに、健全な肉体組織をもっている人間は、なんでもできる」というエルヴェシウスの断定に反対し、自分には、執拗にとりくんだけれども解決のできなかった問題があるといい、次のような例をひきあいに出している²⁾。

1) 28 d.

2) AT, t. II, p. 345.

たとえば私は、次のように確信している。うまく成功した悪徳がしばしば喝采され、失敗した美德がほとんど常に嘲笑されるような、このわれわれが生きている混乱した社会においてすら、私は次のように確信している。すなわち、幸福になるためには、結局善き人間である以外に方法はない、ということだ。この問題を解決することは、私の考えでは、もっとも重要で、もっとも興味深い仕事であり、晩年になってもっとも深い満足の念をもって思いおこせるような仕事である。これは、百度におよんで、しかも最大限に精神を集中して熟考した問題である。私には、必要な材料はそろっていたと思う。だが、本当のことをいえば、その第1行を書くためにペンをとる勇気さえなかったのだ。私はいつもこう思っていた。「もしこの企てに成功しなければ、私は邪悪さの弁護者になってしまう。もしそんなことにでもなれば、私は徳の大義を裏切ってしまうだろう。人間に悪徳をけしかけてしまうだろう。いや駄目だ。この崇高な仕事には、私の力量が不足しているように思える。この仕事に一生を捧げるとしても、やはり成功しないだろう。」

あなたは、もっと簡単な問題のほうがいいのか。では、こういう問題にしよう。法の裁きの場に喚問された哲学者は、自分の生命の危険をおかしても、自分の意見をはっきり認めるべきかどうか。

ソクラテスが牢獄にとどまっていたのは、よかったか、それともまずかったか。〔……〕論理の次元より、むしろ人間の性格の次元に属するこの種の問題が、これ以外にもなんとたくさん存在していることだろう。自分の主張を撤回し、かつこの撤回によって自分自身の性格と、自分の属する流派の性格とを傷つけるよりも、むしろ死んだほうがよいと考えるような勇敢でまじめな人間を、あなたはあえて非難する勇気があるだろうか。もしも、この人物の役割が、悲劇や模倣芸術において、偉大で、高貴で、美しいのなら、なぜこの人物は、現実では無分別で、滑稽だと考えられるのだろう。

ソクラテスの名前があらわれるのは、上記引用文の最後の節からであるが、それに先立って一般的な問題として語られている部分においても、ディドロの念頭にソクラテスのイメージが浮んでいることはいうまでもない。

たとえソクラテスの徳行が、どれ程ひとびとの嘲笑をかおうと、なおかつ彼の行為を弁護すること、しかもこのように生きることこそ、人間の幸福にほかならないという真実を、論証すること。これはすでにディドロが16年前、すなわち1759年1月9日付ジャコブ・ヴェルヌアへの手紙で明記していた、ディドロの文学的遺書として書かれるべき『ソクラテスの死』の「序説」にほかならないものであった。

以上の考察を通して、ディドロが一生の間、人間の生き方の問題を——特に自分自身の生き方の問題を——どのようにソクラテスの生き方と結びつけて反省し続けてきたかという点を、ほぼ明らかにしえたものと思う。次に私はこのソクラテスが、ディドロの作品の登場人物として、どのよう

に描きだされているかを検討してみたい。

第Ⅲ章 作品にあらわれたソクラテスのイメージ

1. 哲学者としてのソクラテスのイメージ

『人間の真価と徳論』の注 ディドロが、最初にソクラテスに言及しているのは、ジャフツベリの著作の自由訳『人間の真価と徳論』の注においてであった¹⁾。

この注において、ディドロは宇宙に存在する「善」を3種類に区別している。第1は哲学者が「存在の善」と呼ぶもので、「あるものがあるものたらしめる、属性相互間の一致」をさす。第2は「動物的善」で、「感性をもち、組織に欠陥のない生物なら、どんなものでも自然からさずけられている、情念間の調和」をいう。だから、猟犬が狼のさまたげになるような情念——たとえば臆病、不従順など——をもたず、さまざまな情念を調和させて、「熱心に、利口に、迅速に」行動する時、彼は「よい」犬と呼ばれるのである。

第3が「考える存在に固有な、理性的善」であって、これが一般に「徳」と名づけられている。第1と第2の「善」は、いわば自然的秩序そのものをあらわしているが、第3の「善」、人間の「徳」は、この種の自然的秩序をある意味で越えている。そしてディドロがその例証としてあげるのがソクラテスなのである。ディドロの説明をきこう。

われわれはみな、程度の差はあれ、欠陥のある人間として生まれてくる。あるひとびとは臆病で、野心家で、すぐかっとする。別のひとびとは、けちで、不精で、向う見ずだ。だが、自分の意志とはかかわりのないこういう気質上の欠陥は、それ自体では人間を邪悪にするものではない。それどころか、人間がこの欠陥に打ちかった時、それはかえって人間の価値を高めるのに役だつのだ。賢者ソクラテスは、肉慾にたいする激しい好みをもって生まれたのだった。

この注のなかに、後年のディドロが執拗に追求するソクラテス問題の核心がすでに明瞭に示されている。すなわち、人間の行為の善悪は自然的欲望——生物学的存在としての人間を支配している法則性——を超えたところに求められるという基本的観点である。この点に注目しつつ、次に進もう。

1) AT, t.I, pp.30-31, note 1.

ディドロのこの注は、さらに先で展開される本文の論議の次の一節に対応する。——«Les créatures qui ne sont affectées que par les objets sensibles, sont bonnes ou mauvaises, selon que leurs affections sensibles sont bien ou mal ordonnées. Mais c'est tout autre chose dans les créatures capables de trouver dans le bien ou le mal moral des motifs raisonnés de tendresse ou d'aversion; car, dans un individu de cette espèce, quelque dérégées que soient les affections sensibles, le caractère sera bon et l'individu vertueux, tant que ces penchants libertins demeureront subordonnées aux affections réfléchies [...]» AT, t.I, p.39.

『お喋りな宝石』1748年1月、『お喋りな宝石』2巻が出版される。この作品では、ソクラテスのイメージが2度——1度は、コンゴ国の皇帝マンゴギェルの夢のなかで、もう1度は彼の愛人ミルゾーザの夢のなかで——登場する。

第32章「マンゴギェルの夢、あるいは仮説の国への旅」のアレゴリは次のような内容である¹⁾。——マンゴギェルがある日とうとうしかけている時に、鷲の頭、禿鷹の足、馬の胴体、ライオンの尾をもち、脇腹に長い翼をつけた奇妙な動物ヒポグリフがあらわれ、彼を背中にのせて空中をとんでいく。やがて向うに柱廊と円天井のある建物が空中にうかんでいるのが見える。そこで彼はヒポグリフの脊中から降りて、建物のなかにはいっていくと、大勢の弱りはてた老人たちが、ぼろ切れ1枚を身にまとって暮しているのに出会う。なおも先に進んで行くと、まるで1本の針の上であやうく均衡を保っているような演壇があって、上には蜘蛛の巣の天蓋がついている。演壇の上には長いひげをはやした裸の老人がいて、液体のはいったカップにストローをさしこみ、これを口で吹いて泡玉をとばしている。周囲の見物人も協力してこの泡玉を空に吹きあげようとしている。

わけがわからなくなったマンゴギェルは、横にいた男にここはいったいどこなのか、あの連中はいったいなに者なのかとたずねる。すると男は、自分はプラトンだと名のり、「あなたが今いるのは仮説の国で、あの連中は体系家です」と答える。そして、彼自身はこの柱廊から離れたところに小さな聖殿をもち、体系の迷いからさめたひとびとに「人間を知り、徳を实践し、美の女神に犠牲をささげること」を教えているのだと説明する。彼によれば、この建物は、昔の哲学の殿堂のあとで、ソクラテスの講壇も、かつてはこの付近に存在していたのだという。では、ソクラテスも昔はストローで泡を吹きあげていたのでしょうか、とマンゴギェルは質問する。この問に対して、プラトンは次のように答える²⁾。

彼が生きている間に専心したのは、正しく頭脳をきたえ、立派に心情をしつけることでした。その秘訣は彼の死とともに失なわれてしまいました。ソクラテスが死に、それとともに哲学の黄金時代が過ぎさったのです。あの体系家たちが、誇らしげに身につけているぼろ切れは、彼の衣服の切れはしです。彼が眼を閉じるやいなや、哲学者の称号にあこがれる連中が、彼の衣服にとびついて、づたづたにひきさいたのです。

そしてプラトンは、誰がいったいこのひきさかれたぼろ切れをあつめて「ソクラテスの衣服」を再生してくれるだろうと嘆くのである。だがその時、遠くのほうからひとりの子どもがゆっくり、落ちついた足どりでこちらにやってくるのがみえる。近づくにつれて、彼の体は次第にたくましくなり、やがて見あげるばかりの巨人になる。あの巨人は誰でしょうか、とマンゴギェルはプラトんにたずねる。「あれこそ実験なのだ。実験そのものなのだ」とプラトンは答える。この返事がまだ終らぬうちに、「仮説の国」の柱廊は轟然たる響きをあげてくずれ落ちるのである。

1) AT, t.IV, pp.255-258; OR, pp.114-117.

2) AT, t.IV, p.257; OR, p.116.

このアレゴリの意味するところは明白である。一方に人間の自己意識、徳の実践を中心課題として生まれたソクラテス、プラトンの古代哲学が解体、分化し、それがやがて体系、「仮説」のスコラ哲学に変わっていき、この体系的学校哲学が今や崩壊寸前にあるという認識がある。他方に、やがて必ず「実験」（のちのディドロ自身の言葉を使えば「実験哲学」）の支配がくるといえる予感がある。アレゴリは、この2つの方向の洞察を、明白に象徴している。

それなら、哲学の使命は、すべてがきたるべきこの「実験哲学」のなかに吸収されてしまうのだろうか。

夢のなかのプラトンの姿は暗示的である。「逃げよう。逃げよう。この建物はもう1分もたない」と彼は大声で叫びながら、マンゴギェルを連れて逃げさっていく。2人は「仮説の国」の殿堂と運命をともにするのでもなければ、かといって、直ちに「実験哲学」の信奉者になるのでもない。

ソクラテス、プラトン哲学の倫理的課題を一時そのまま留保しつつ、新しい「実験哲学」の進歩を、1歩はなれた地点から見まもること——これが当時のディドロの立場だったのである¹⁾。

『お喋りな宝石』のなかで、ソクラテスが2度目に登場するのは、第40章「ミルゾーザの夢」であるが、今度は彼の名前は直接にはあらわれてこない²⁾。ミルゾーザがサルタンに話すのをきこう。

ある夜ミルゾーザがうとうとしかけて、ふと気づくと、本がいっぱいつまった書庫に迷いこんでいる。よく見ると、書棚と書棚との間には非常に美しい大理石や青銅の胸像が並んでいる。これはいったい、どういう胸像だろうといぶかしんでいると、脊の高い、堂々たる歩きぶりの、上品な婦人（ミネルヴァ）があらわれて、彼女を案内しようと申しでる。

ホメロス、ウェルギリウス、ピンダロス、ホラティウスの胸像を順次見たあと、2人はソクラテスの胸像のまえに立つ（ただし、ミネルヴァは、それぞれの人物の功績について語るだけで、名前は紹介しない³⁾）。

私は案内の婦人にたずねました。——「唇には誠実さを浮かべ、顔には正直さがあらわれているこのひとは誰でしょう。」

1) 道徳哲学の問題にたいする関心——シャフツベリの翻訳——から出発したディドロは、その興味の中心を次第に「実験哲学」のほうに移してゆき、1753年の『自然の解釈について』にいたって、すべての現象は自然科学的に説明するという確信に達する。そしてそれ以後、道徳の問題もまた、おなじ方法で扱おうという予想のもとに努力をかさねていく。しかし、『お喋りな宝石』の頃には、道徳の問題を新しい「実験哲学」のなかに包摂しようという確信にまでは達していない。その躊躇が「逃げよう」というプラトンのことばに表わされていると、私は解釈する。

これに反してヴェントゥリは次のように主張する。——«Dans son exaltation de l'expérience, il n'oublie pas la morale; bien mieux il représente les progrès de la nouvelle philosophie comme un retour à Socrate et à Platon.» F. VENTURI, *Jeunesse de Diderot*, pp.131-132, 1939. また『お喋りな宝石』の新版編集アダムも、ほぼヴェントゥリの見解にしたがっている。«Préface» de A. ADAM, *Les Bijoux indiscrets*, Collection Garnier-Flammarion, 1968, pp.18-19.

しかし私は、小論でのべた理由から、この時期のディドロが「実験哲学」のうちに、ソクラテス、プラトンの哲学の使命——哲学の倫理的使命——の再生を託したとする意見には賛成できないのである。

2) AT, t.IV, pp.293-295; OR, pp.150-152.

3) ミネルヴァの名前と、胸像の人物の名前にかんしては、アセザートゥルヌ版編者の注記がある。ペナック版編者も、この注記にしたがう。

すると彼女は答えました。——「彼は誠実と正直の友であるとともに、誠実と正直の犠牲になったひとです。一生の間、同国人に知と徳をもたせようと努力したのに、恩知らずな同国人はこのひとの命を奪ってしまったのです。¹⁾」

わずか数行で要約された一生であるが、これが当時のディドロのソクラテス観であった。

『自然の解釈について』と《神知学者》におけるソクラテスのダイモン しかし、1753年の『自然の解釈について』になると、ディドロは、はっきりと「実験哲学」の立場に身をよせる。あらゆる自然現象と超自然的現象とを、この「実験哲学」の一元的方法によって解明すること。——これがこの時期のディドロを特徴づける立場である。

しかし彼は、吟味する前に予断をくだそうとはしない。なぜなら、常識の眼からはいかに超自然的に見える現象でも、それがはたして非合理的な虚偽であるかどうかは、まず吟味しなければわからないからである。

では、ソクラテスの一生にしばしばあらわれて、彼にさまざまな合図を送ったダイモンをどう理解すればよいだろう。ソクラテスはたえずダイモンの合図のもとに行動していたとひとびとは主張しているが、それは信ずるにたりないたわごとなのか。それとも、なにか合理的に説明できる現象をさしているのか²⁾。——ディドロが『自然の解釈について』のなかで主張する意見によれば、ダイモンの合図とは、「予感」のことにほかならない。ただこれが、「靈感」に似た印象をあたえたためにソクラテスはこれを誤って「守護のダイモン」とよんだのだという。

この「予感」（「予想」、「予知」）の能力とはどのようなものか。「守護のダイモンを、理解可能で明晰な観念によっておきかえる」ことをディドロは試みる。

ソクラテスは「人間を観察し、状況を吟味する驚くべき習慣」をもっていた。だから、対象をまえにすると彼の内部には、観察したデータの「すばやく、正確な組み合わせ」が生じる。これが「予想」を生みだす。したがって「予想」は、そのあとで発生するはずの「事実」から、それほどかけ離れてはいないはずである。このように理解されたソクラテスのダイモン——すなわち「予見の精神」——は、たんに对人的判断にあらわれるだけではない。文学作品をまえにした批評家の判断のなかにも、自然現象をまえにした実験物理学者の判断のなかにもあらわれるはずである。

「実験哲学」に即していえば、入門者にたいしては、実験の「手続き」や「結果」よりも、未知の手続き、新しい実験、知られざる結果を「遠くから嗅ぎつける予見の精神」を教えこむべきである。

「予感」とは、「対立、あるいは類比を想定したり、認知したりすることが自由にできる能力」のはたらきをいう。だから、時には病人の悪夢のように、奇妙で、支離滅裂で、「荒唐無稽」としかよびようのない「一連の推測」をうみだすこともありうる（いうまでもなく、この主題を発展させたものが『ドラムベールの夢』である）。しかしわれわれは安心してこの「予感」の能力を信頼

1) AT, t. IV, pp. 294–295; OR, p. 152.

2) AT, t. II, pp. 24–25; OPH, pp. 196–198.

しよう、とディドロは主張している。

『自然の解釈について』のあとで、ディドロはもう一度、ソクラテスのダイモンの問題を取り扱う。それは『百科全書』第16巻（1765年）の項目《神知学者》においてである¹⁾。

ディドロは、ソクラテスを「神知学者」の同類と考えている。「神知学者」とはなにか。それは、世人からは「荒唐無稽」とみなされている「もっとも奇妙な種類の哲学」の信奉者をいう。彼らは「内的、超自然的、神的原理」によって導かれている。この原理が活動すると、彼らのうちの「想像」がめざめ、「神と自然にかんする、もっとも重要で、もっともかくされたものの発見」が成就する。逆にこの原理の活動が停止すると、彼らはもとの愚鈍さに落ちこんでしまう。だから、「神知学者」は、常人からは「さぎ師」と呼ばれ続けてきたのである。

たとえばギリシア人は、もしソクラテスがダイモンを信じているなら「気ちがい」だし、もし信じていないのに、信じるふりをしているのなら「さぎ師」だと主張していた。

ディドロは、これにたいしてソクラテスや「神知学者」のダイモンを弁護する。彼によれば、ダイモンというのは、すべての人間がもっている「予感」のことにほかならない。では「予感」とはなにか。——鋭敏な感受性にめぐまれたひとは、あらゆる「事実」に先行するなんらかの「現象」を感受し、それとともに彼の意識の内部には一連の「印象」がうまれる。その後、この「現象」そのものにかんする記憶は失われてしまっても、機会がくるとその時の「印象」だけがすぐにめざめて、これこれの「事実」がおこるだろう、と予見する。これが「予感」である。「彼らは靈感をうけたように思う。だが彼らは、超自然的、神的な力によって靈感をうけたのではなくて、特殊で非凡な知恵によって靈感をうけたのだ。」この「知恵」とは、現実の状況を、未来に起こりうる「事実」の原因とみなす「推定」をいう。

神は、宇宙全体の秩序を、物質の最小分子のうちにすら認識する。あるめぐまれたひとたちは、この属性をわずかながらも神からうけついでいる。彼らはもっともかけはなれたものを類比によって結びつける。ほかのひとびとが推測をくだすことすらできないところに、ほとんど必然的な関連を認識する²⁾。

したがって彼らは、ひとの人相をみて魂の動きを知る。ひとりの人間のうちで、情念が長く支配すると、表情が固定する。この表情からひとの心を読むのが「人相見」で、「観相術」は「予見」

1) ENC, t. XVI, pp. 253-261; AT, t. XVII, pp. 242-268.

項目《Théosophes》の主な内容は、パラケルススの生涯と業績の紹介であり、私が本論で検討する箇所は、その前書の部分にあたる。なおこの項目が、Jacob BRUCKER, *Historia critica philosophiae*, Leibzig, 1767. t. IV, p. 644 et s. のディドロによる一種の要約であることは、今日実証的に明らかにされている。——Jean FABRE, «Diderot et les Théosophes», *Lumières et Romantisme*, Paris, 1963, pp. 67-83. しかし、あらゆるディドロの翻訳がそうであるように、ここにもまた彼自身の自由な解釈が投入されていることはいうまでもない。

2) ENC, t. XVI, p. 254; AT, t. XVII, p. 244.

術の一部門をなす。情念はこのほか身振り、語調、表現にもあらわれるという¹⁾。したがって当然これらの諸領域においても、「予感」のはたらきが重要性をもつはずなのである。

このようにディドロは、『自然の解釈について』と《神知学者》において、ソクラテスのダイモンを、人間の「予感」の能力と同一視してこれを合理的に解釈し直し、さらにこの能力がはたらく領域を人間の行為の吉凶のみにかかわる狭い分野から、人間精神の全活動領域——自然科学、芸術をも包含した全活動領域——にまで拡張して考察したのである。

ところで、ソクラテスのダイモンは、ディドロが解釈したように、直ちに「予感」一般と同一視できるものだろうか。この点を検討しておこう。まず、ソクラテスのダイモンの合図、あるいは声にかんするプラトンの証言を——ディドロ訳『ソクラテスの弁明』を通して——きいてみよう。ソクラテスは、アテナイの市民をまえにしている²⁾。

私の身につきまっていたあのダイモン、私の耳にきこえてくるあの神の声が——それについては、もうなん度か諸君にお話ししました——私にむかって、そんなこと〔国事にかんすること〕に口をだすな、といつもいっていたのです。メレトスもこのダイモンのことを起訴状のなかでからかっています。しかし神の声が私の振舞いについて忠告し、あることをさせたり、また別のことをさしとめたりする、というのはほんとうなのです。私が公務にたずさわるのを、今までさまたげてきたのは、まさにこの神の声なのです。

さらにソクラテスは、弁明を終えるにあたっていう³⁾。

裁判官諸君、〔……〕私に驚くべきことがおこったのです。例のダイモン、つまりあの予言の声は、これまで大変ひんぱんに私の耳にきこえてきて、突然私に警告をあえたり、また私が行なおうとしていることが当をえない場合には、私をおしとどめたりしてきたのです。ところで、今度私の身に諸君も御覧のとおりのおこりがありました。多くのひとは災厄の最大のものと考えるにちがいありません。それなのに神の声は、私在家をでて、裁判官のまえに出頭するのに反対しなかったばかりか、私が話しはじめても、それをおしとどめたり、怒ったり、弁明の途中でさえぎったりしようとはしませんでした。〔……〕それなら、なにがこの沈黙の原因なのでしょう。私の考えをお話ししましょう。つまり、それは今度私の身におこったことが幸運だったにちがいないからなのです。

-
- 1) この部分が、たとえブルッカーのテキストそのままの翻訳であるとしても、ディドロがこの説に賛成していたことには疑問の余地がない。たとえば、個人の文体を、そのひとの主体的関心—情念—の表出とみるディドロの文体観は、《神知学者》のこの一節とまさに一致する。——中川「ディドロの小説作品における文体について」、日本フランス語学会編『フランス語研究』14・15合併号所収、1957年3月、および中川「ディドロにおける文体の観念」、日本文体論協会編『文体論研究』第14号所収、1969年6月、参照。
 - 2) 40a-b. なお、ディドロはダイモンと、ダイモニン（ダイモンの合図、あるいは声）とを同一視して、すべて <démon> と訳している。
 - 3) *Ibid.*, pp.49-50.

以上引用した例からも明白なように、ダイモンの合図、あるいは声の場合は、具体的な命令、あるいは吉凶両面におよぶ具体的「予感」ではなくて、ただあることを禁止する予示であった。このことはプラトンの他のテキストからも確認できる（たとえば『パイドロス』242b以下、『エウテュデモス』272e）。

そうだとすると、ソクラテスのダイモンの合図、あるいは声を「予感」一般と同一視することには無理があるだろう。しかし、ソクラテスの行為を導いたのは、このダイモンの合図、あるいは声だけではなかった¹⁾。第2に彼が忘我状態のさいに直接見た光景「ホラーマ」(Spectaculum)があり、第3に神託の形式をとった夢の知らせがあった。ソクラテスはこの3者のたえざる干涉のもとに生きていたのである。ところでこの3者のうちで、彼に「予感」をあたえたのは、第1のダイモンと第3の夢の知らせである。たとえば『クリトン』の冒頭(44a—b)——ディドロが翻訳を放棄した節のすぐあと——で、ソクラテスは自分の夢をクリトンに語る²⁾。

ひとりの女性がぼくのところへやって来た。それは白衣をまとって、みめよく美しい姿をしていたが、ぼくに呼びかけて、こう言ったように思うのだ。——ソクラテスよ、そなたは「3日目にして、ゆたけきプティエの土地につくならん」とね。

この夢を解釈して、ソクラテスは自分の死が3日後にせまったと判断する。ダイモンの合図が行為の禁止だけにかかわったのに反して、夢の知らせはむしろ具体的な未来の予見なのである。

だから、ディドロには、ダイモンの合図と夢の知らせとの違いにかんする明瞭な意識がなかったものと考えられる³⁾。おそらく、彼は夢の知らせも、「ホラーマ」も、すべてがダイモンのはたらきであると解釈したのであろう。

なぜディドロはこのような解釈をくだしたのであろうか。あるいは、『饗宴』のなかの次の一節(202e—203a)が、その根拠になっているのであろうか。すなわち、ディオティマがソクラテスにむかって、「このダイモンを通してこそ、すべての予見術、〔……〕さらには予言〔……〕にたずさわる聖職者の術、これらすべてのことがはこぶのです」と語っている一節である⁴⁾。なおディ

1) 以下の解釈は、田中美知太郎『ソクラテス』(岩波新書)の「ダイモンに憑かれて」の章(pp.80-120)による。

2) 44a-b. 田中美知太郎訳『クリトン』, 世界の名著『プラトン』I, p.463.

3) 事実、プラトンの原文によれば、ダイモンは常に禁止の合図しか送っていない。しかし、ディドロ自身は、そのことを明瞭に意識していなかったらしく、『ソクラテスの弁明』の翻訳では、禁止の合図を積極的な命令ととりちがえて訳出している。——前出の第1の引用文中の一節「あることをさせたり、また別のことをさしとめたりする」(傍点箇所)。

ディドロ訳原文(ディドロの誤訳)——*«me poussant aux unes [actions] et m'éloignant des autres.»*
正しい訳——*«elle (la voix divine) me détourne de ce que je suis sur le point de faire, elle ne me pousse jamais [à agir.]»* [chez Diderot, l'action de la voix est positive dans les deux cas.]
Raymond Trousson, «Diderot helléniste», *Diderot Studies XII*, 1969, pp.220-221, note 187.

4) 鈴木照雄訳『饗宴』, 世界の名著『プラトン』I, p.154 (ただし、訳語に変更を加えた)。

ドロは『百科全書』の項目《プラトニズム》のなかで、『饗宴』に言及しており¹⁾、この作品を読んでいたことは、ほぼ確かである。

『基本原理入門』 1763年頃執筆され1798年に出版された『基本原理入門』の第2対話「自から答える改宗者」のなかで、ディドロはソクラテスの宗教にふれ、それを一種の自然宗教であると規定している。

この第2対話の対話者は、「賢者」、啓示宗教を否定する若い「改宗者」、および若者につきそう「代父」の3人である。「代父」、は「賢者」にむかって、若者の宗教をこう説明する²⁾。

彼は心の奥底に書きこまれた宗教を信奉しています。この宗教は、最高存在にたいして、もっとも純粹で、もっともふさわしい敬意をささげます。この宗教はある時代、ある場所には存在しないというようなものではなく、あらゆる時代、あらゆる場所に存在するものです。この宗教はソクラテスやアリスティデスを導びきました。この宗教は時の終りまで続くでしょう。なぜならその教典はひとの心に刻みこまれているからです。これに反してほかの宗教は、人間がつくりだしたすべての制度とおなじように、ただ消滅していくだけです。時の流れがそれをひっさらって、おし流してしまうからです。

こうして、ソクラテスの内面であって、しかも、彼の行為をみまもる神——ある意味で自然自体とわけて考えることができないような神——が、ディドロによって自覺的にとりだされてくる。あとで考察する『ラモーの甥』における「私」のソクラテス観は、このように理解されたソクラテスの自然宗教を背景として考える場合に、もっともよく了解できるだろう。

そしてまた、ソクラテスや「神知学者」にさまざまな予言の声をとどけてきたダイモンは、実はこの「最高存在」——プラトンのことばを使って、これを「神々」とよぶことも、ディドロの《神知学者》のことばを使って、これを「神」とよぶことも、『ラモーの甥』の「私」のことばを使って、これを「自然」³⁾とよぶことも、ともに可能である——の声を、人間に伝える役目をしていたのである。だから『饗宴』(202e)のディオティマは、ソクラテスにむかって、「〔ダイモンは〕神々へは人間からのものを、人間へは神々からのものを伝達し、送りとどけます。〔……〕そして、この両者のまんなかであって、その空隙を満たし、世界の万有をひとつの結合体に行っているものです」⁴⁾と説明したのである。

『運命論者ジャックとその主人』 諷刺と諧謔にみちた作品『運命論者ジャックとその主人』のなかで、「主人」はジャックにむかって、ソクラテスの運命と、この世で「賢者」、「哲学者」と

1) ENC, t. XII, 1765, p. 746; AT, t. XVI, p. 316.

2) <Le Prosélyte répondant par lui-même>, *Introduction aux grands principes*, AT, t. II, p. 81.

3) 『ラモーの甥』全体を、「自然」の観念を中心にした「私」と「彼」の対話として理解することができる。これについては、中川「*Le Neveu Rameau* の対話のひとつの解釈——対話における鍵言葉——」, 日本フランス語フランス文学会編『フランス語フランス文学研究』No. 9 所収, 1966年, 参照。

4) *Ibid.*

して生きることの危険について語る。

ソクラテスはアテナイの賢者だった。ばか者の間で賢者の役をはたすのは、昔から危険なことだった。アテナイの市民たちは、彼を毒人參を飲む刑に処した。〔……〕私にはよくわかっているが、哲学者という人種はお偉がたには憎まれる。彼らはお偉がたのまえでも膝を屈しないからだ。司法官にも憎まれる。彼らは、司法官を偏見の職業的擁護者として攻撃するからだ。僧侶にも憎まれる。彼らは僧侶の祭壇のまえに、めったに顔をださないからだ。詩人にも憎まれる。詩人というのは節操のない連中で、哲学は芸術を倒す斧だと、愚かしくも思いこんでいるからだ。いわんや諷刺と称するいまわしいジャンルに手をだしている奴らから憎まれていることはいうまでもない。諷刺詩人というのは、おべっか使いだからだ。民衆にも憎まれている。民衆というのはいつでも、抑圧者の暴君や、うそつきのさぎ師や、滑稽な道化師の奴隷だからだ。こんなふうに、私には君の職業〔哲学者〕の危険がよくわかっているのだ。

すでにのべたことから明らかなように、ソクラテスのような哲学者として生きることの危険は、ディドロ自身の実感であった。彼は、『自然の解釈について』を中心とする一時期に、「実験哲学者」をモデルとして「哲学者」を理解しようと試みた。だがまもなく、彼のモデルは徳行の実践者ソクラテスのイメージに——獄死したソクラテスのイメージに——もどってくる。そしてこのイメージは、『ラモーの甥』において、さらに明確に、さらに強い調子で表現されている。

『ラモーの甥』 私はすでに別の所で指摘したが²⁾、『ラモーの甥』はそれぞれあいられない世界観をいだく2人の人間——哲学者ディドロである「私」とラモーの甥である「彼」——がとりかわした一連の対話である。2人の対話は時に正面から激突し、時にたがいに同意しあいながら、雑多な主題を追求していく。

しかし2人は、決して根本から同調しあうことはできない。なぜなら2人の論議の焦点は、人間はなんのために生きるかという、それぞれの世界観の根底にかかわる問題に、しばられていくからである。「彼」はひたすら現実生活における快楽を追求する。これに反して哲学者の「私」は、彼にむかって徳ある生活——動物的肉慾をこえた生活——を送ることをすすめる。真に人間らしい人間は、善の実現が時に死を招くものであっても、あえて善を選びとるであろう。たとえばソクラテスのように³⁾。

世間の謬見を打ち破ったり、あるいは偉大な真理を世間に認めさせたりする天才は常にわれわれの崇拜に値する。こういう存在が法律や偏見の犠牲になることがあるかもしれない。

1) AT, t. VI, p. 78; OR, p. 563.

2) 中川, 前掲論文参照。

3) NR, pp. 10-11.

ところで法律には2種類あって、ひとつは絶対に公平で、普遍的な法だが、もうひとつは世人の迷妄とか、ゆきがかかりでやるとききめがあらわれるような気まぐれな法だ。このあとのほうは、それにふれた犯人に、ほんの一時の不名誉をおわせるにすぎない。時がたてばこの不名誉は裁判官や国民のうえにはねかえって、永久にぬぐいされない汚点になる。ソクラテスと、彼に毒人參を飲ませた裁判官たちと、どちらが今日では不名誉だろう。

これにたいして、あくまでも現実の快樂に固執する「彼」は、ソクラテスの獄死をあざ笑う。しかし「私」の考えは変らない。なぜなら、先に考察した、シャフツベリの翻訳の脚注からも明らかのように、ディドロは人間の行為が決して動物的欲望だけに支配されるものではないと確信しているからである。

たとえ獄死したとしても、ソクラテスの名誉はそれによって傷つけられるものではない。なぜなら、「絶対に公平で普遍的な法」が存在しており、それが彼の名誉を必らず回復してくれるからである。

読者は「私」の上の発言のなかに、ディドロの断固としたソクラテス崇拜の主張を読みとることができる。

2. ソクラテスの死のイメージ

「一種の哲学劇について」 今日まで検討してきたソクラテスの姿は、いずれもいわば「哲学者」ソクラテスの断片的イメージにすぎなかった。だが、ディドロの真の希望は、ソクラテスの生涯のうちでもっとも感動的な場面——ソクラテスの死——をとりだして、その具体的イメージを演劇によって描きだすことであった。しかし彼は、この仕事の困難を予感しており、現実に残したのは1758年の『劇作論』における「ソクラテスの死」の2つの劇化プランだけである。

その第1は、第4章「一種の哲学劇について」における1幕5場の作品プラン¹⁾、第2は、第21章「しぐさについて」における1場の作品の粗描である²⁾。

いうまでもなく、「ソクラテスの死」を劇化するのは、容易な仕事ではない。なぜならソクラテス以下、主要人物の動きはほとんどなく、しかもせりふの内容は——プラトンの『パイドン』によれば——魂の不死と、真なる實在、イデアにかんする哲学的論議となるはずだからである。以下、ディドロがどのようにこの難点を克服したか、順次検討していこう。

ディドロは『劇作論』第4章「一種の哲学劇について」の冒頭で、ソクラテスの死は「道徳をじかに説いて、しかも成功しうるような一種の演劇」であると規定している。

彼は、この章に先だつ第3章「一種の道徳劇について」のなかで、舞台上重要な道徳問題——たとえば「自殺、名誉、決闘、財産、位階、その他無数の問題」——を演じる演劇を提唱している³⁾。

1) <IV. D'une sorte de drame philosophique>, *De la poésie dramatique*, AT, t. VII, pp. 314-316; DIDEROT, OE, pp. 198-199.

2) <XXI. De la pantomime>, AT, t. VII, pp. 381-385; OE, pp. 272-277.

3) <III. D'une sorte de drame moral>, AT, t. VII, pp. 313-314; OE, pp. 197-198.

「もしこういう場面が必然性をもっており、全体の基調とうまく合致しており、まえもって予告されており、しかも観客がこういう場면을望むなら、観客はそれにすべての注意をかたむけるだろう。」そして彼らは俳優が口にする断片的な「すぐれた言葉」から深い感動をうけ、それが「魂から発する深い溜息」となってあらわれるはずだという。そしてディドロはこういう「道德劇」の一種として、ソクラテスの死という「哲学劇」を構想しているのである。

自分が徳の鑑とあおぐソクラテスからうけとった道德的感動をそのまま観客に伝達すること。これがディドロの理想である。次に、彼のプランを具体的に紹介しよう。動作のそれぞれの区切りごとに、一連番号をつけておく。

第1場——場面は獄中。(1)鎖につながれた哲学者ソクラテスは藁の上に横たわり、眠っている。アテナイ中が、ソクラテスの死刑の噂でもちきりなのに、正義のひとだけは平然と眠っている。この場面が表現しているのは、ソクラテスの一生の潔白さ、一生を正しく生きた人間の、死を前にした心の安らぎである。

第2場——(2)ソクラテスの目ざめ。親友数人がきていることに気づき、彼らの早朝の訪問に驚く。(3)ソクラテスが今みた夢の話をする。(4)友人たちは、ソクラテスに脱獄をすすめる、すでにその手配がしてあるという。(5)この場面で、自己自身を重んずべきことと、法の神聖さとが論議される。

第3場——(6)牢番がやってきて、ソクラテスの鎖をとく。(7)ソクラテスは「苦痛と快樂にかんする寓話」¹⁾を語る。(8)裁判官、告発者、群衆の場面。(9)告発。(10)ソクラテスの弁明演説。

第4場——この場面は、当時のギリシアの慣習にしたがう。すなわち、(11)告発状が朗読され、(12)ソクラテスは裁判官と告発者と民衆を尋問し、また彼らの尋問に答える。「事柄が実際におこったとおりに上演せねばならない。」それによって情景はより真実に、感動的に、美しくなる。(13)裁判官退席。(14)ソクラテスの友人たちは死刑を予感する。(15)ソクラテスは彼らと語りあい、彼らを慰める。(16)この場面では、魂の不死が論議される。

第5場——(17)判決、死刑の宣告。(18)妻子との面会。(19)すりつぶした毒人参を飲む。(19)死のおとずれ。

全体のプランは以上のとおりであるが、ディドロはこれに若干の注釈を加えている。彼によれば、この戯曲は1幕(5場)しかないが、もし脚色がよければ、普通の戯曲程度の長さになるという。彼はさらにこう続けている²⁾。

1) 「この間、[縛めをとかれた]ソクラテスは、ベッドの上に身体を起こし、膝を曲げて、手で脚をさすりはじめられました。そしてさすりながら、こう言われたのです。——『ねえ君たち、人々が快樂と呼んでいるものは、なんとも奇妙なものようだね。正反対であると思われる苦痛と、なんとも奇妙な関係にあるのだろう！ この二つは、人間に同時にやって来ようとはしないが、一方を追いかけてつかまえると、かならずと言っていいくらい、もう一方もつかまされる。まるで、二つでありながら頭は一つというみたいだね。もしアイソポスがこれに気づいたら、きっと、こんな物語をつくったことだろうね。神さまは、彼らの喧嘩を仲なおりさせようとなさったが、おできにならなかったで、両方の頭を一つにしてしまわれ、そのため、一方がだれかのところにやって来ると、もう一方もかならずあとからついてくる、といったふうだね。』」(『パイドン』60b-c.) 池田美恵訳、世界の名著『プラトン』I, pp. 495-496.

2) AT, t. VII, p. 315; OE, p. 199.

この1幕はなんという雄弁を必要とすることだろう。なんという哲学的深さ、なんという自然、なんという真実を必要とすることだろう。この哲学者の強く、飾りけがなく、平静で、明るく、高貴な性格がはっきり把握できれば、それを描くことがどれほどむづかしいかわかるだろう。〔……〕もし構想したとおりに戯曲が書ければ、私は満足して死ぬるだろう。

ディドロは、さらに続けて、この戯曲のなかに「哲学的でひややかな一連の演説」だけしかみようとしない批評家は、あわれむべきだとつけ加えている。

ただ、この最後の付言にもかかわらず、ディドロ自身はこの構想を実現することの困難——観客の感興をそぐような「一連の演説」に堕しかねない危険——を自覚していた。なぜなら、『劇作論』第21章では、「ソクラテスの死」を上演するさいには、せりふよりも、むしろ「しぐさ」を重視すべきことを強調しているからである。

「一種の哲学劇」とプラトンの著作との関係 ところで、ディドロは「一種の哲学劇」、すなわち「ソクラテスの死」のプランの素材をどこからとったのだろうか。彼が使った事実はすべて、プラトンの『ソクラテスの弁明』と2つの対話篇『クリトン』、『パイドン』のうちに語られている。ただし、ソクラテスの裁判から処刑までの間に実際は1ヵ月以上の時が流れている。場所は法廷から牢獄に移っている。したがってこの間の史実全部を劇化することは到底不可能であり、ディドロは事実に若干の変更を加えて「ソクラテスの死」の場面を再編成したのである。

次に、このディドロの劇化プランがプラトンの3つの作品とどのように対応しているかを表でしめしておこう。(ディドロのプランの動作の区切りは、先につけた一連番号でしめす。)

プラトンの作品名	事件の時と場所	プラトンが物語る事実	ディドロのプラン	ディドロのプランがプラトンと異なる点
『ソクラテスの弁明』	ソクラテスの公判の日、法廷	原告側の申し立て 〔これは、ソクラテスの弁明演説の前にすでに終わっている〕 ソクラテスの弁明演説 〔この間、次のことがおこなわれる〕 証人の証言 有罪の票決 ソクラテスの量刑の申し立て 死刑の票決	(8) (9) (11) (10) (12) (13) (14) (15) (17)	裁判官、告発者、群衆の登場 告発 告発状の朗読 ソクラテス、裁判官と告発者と民衆を尋問し、また彼らの尋問に答える 裁判官退席 ソクラテスの友人たち、死刑を予感 ソクラテス、友人たちと語りあい、彼らを慰さめる
『クリトン』	公判から約1ヵ月後、獄中	睡眠中のソクラテス クリトン、早朝の訪問 ソクラテス、夢の話 クリトン、脱獄のすすめ ソクラテス、自己自身を重んずべきことと、国法の神聖さを説く	(1) (2) (3) (4) (5)	〔以下、裁判も、弁明も、すべては獄中でおこる〕 友人数人、早朝の訪問〔『クリトン』の場面を、『パイドン』の情景——「友人数人、訪問」——と統合する。したがって(2)から(5)まではソクラテス対クリトンではなく、ソクラテス対友人数人の情景に変更される〕

『パイドン』	クリトンの 訪問の翌々 日，獄中	—11人の刑務委員，ソクラテスの縛めをとき，死刑の執行を申しわたす	(6)	—牢番，ソクラテスの鎖をとく
		—ソクラテス，子どもをだいた妻クサンティッペと再会	(18)	
		—友人数人，訪問	(2)	
		—ソクラテス，苦痛と快樂にかんする寓話を語る	(7)	
		—魂の不死を説く	(16)	
		—すりつぶした毒人參を飲む	(19)	
		—死のおとずれ	(20)	

プラトンの作品によれば，クリトンとその仲間は，約1カ月間毎日獄中のソクラテスを訪問している。特に死刑の前々日にはクリトンが脱獄をすすめにきており，また死刑当日には数人の友人（アポロドロス，クリトブッロス，クリトン，ヘルモゲネス，エピゲネス，アイスキネス，アンティステネス，クテジッポス，メネクセノス——『パイドン』59b）が，それぞれ訪問している。しかしディドロは特に，最後のこの2日間におこった事柄を1日の出来事として演劇化している。そればかりでなく，ソクラテスの裁判，弁明，判決さえも，この処刑当日に，しかも獄中でおこなわれたことにして，全体の劇的緊張を高めているのである。

そしてディドロは，天才がこのプランを利用すれば，観客の涙をそそる，もっとも感動的な劇が作れるはずだとのべている。

「しぐさについて」 次に『劇作論』の第21章「しぐさについて」のなかで展開されるもうひとつの「ソクラテスの死」の粗描をみてみよう。

これは前項で検討した「ソクラテスの死」のプランのうち，ソクラテスの死の直前から，死にいたる場面だけをぬきだしたものである。先のプランでは，プラトンの3著作が物語る事実に大幅な変更を加えていたが，今度は，『パイドン』1作に依拠して，事件の細部に若干の創作を付加しただけである。ディドロ自身，「ほとんどそのまま史実に依拠しよう」と書いている。

この劇全体を支配する感情——それは友人の死に際して通常ひとが感ずる「あわれみ」の気持ではない。なぜなら，ソクラテスは死ぬことに幸福を感じていたのだから（たとえば『パイドン』84e—85b，あるいはディドロ訳『ソクラテスの弁明』40e以下）。弟子たちの心を支配する「異常な感情」には，ソクラテスの言説からうまれた「心の安らぎ」と，師を失なうという思いから生じる「苦痛」とが入りまじっている。

情景——弟子たちが獄中にはいる（以下の情景は『パイドン』60a以下に対応する）。ソクラテスはちょうど縛めをとかれたところで，傍には子どもをだいたクサンティッペが座っている。彼は妻にはほとんど語りかけないが，子どもについては，なにか感動的な言葉をのべてもよい。

クサンティッペは，ソクラテスの弟子を見て絶望的に叫ぶ。ソクラテスはクリトンに，妻を連れて帰らせてくれ，と頼む。妻と子は連れだされる。彼女の悲痛な叫び声。

そのあと，哲学者は晴れやかな顔で寝台に腰かけ，鎖をとかれた足を折りまげ，静かにそれをさ

すりながら、「快樂と苦痛はなんと接近しているものだろう。もしアイソポスがこのことに気づいていれば、美しい寓話をつくりだしたにちがいない」という。それから弟子にむかって、自分が死んだあと、エウエノスにすぐあとから来るように伝言してくれと頼む。この言葉をきっかけに、魂の不滅にかんする論議がはじまる。

弟子にかこまれて死ぬソクラテスは、子どもたちにかこまれて死ぬ父親に似ている。ソクラテスの話が終ったところから、いよいよ最後の場面がはじまる。これは『パイドン』の結末部分(115b—118a)の要約である¹⁾。

まず、ソクラテスとクリトンの対話、ソクラテスと刑の執行をつげる刑務委員の配下との対話、ソクラテスと毒盃をはこんできた奴隷(ただし『パイドン』では、この役目を果すのは、下級役人であって、「奴隷」ではない)との対話。

ついでソクラテスは片手に盃をもち、視線を空にむけていう。——「私を呼ぶ神々よ、どうかこの世からあの世への旅が幸せでありますように。」それから一瞬の沈黙。盃を飲みほす。

ディドロは、これを見まもる弟子たちの態度——「しぐさ」——を『パイドン』にのべられていない細部までも書き加えて以下に詳しく指示している。ある者はマントで顔をおおう。クリトンは叫び声をあげて室内を歩きまわる。他の者は涙にぬれたまま、身動きもせずにソクラテスを凝視し

1) ジョルジュ・メは、『パイドン』におけるソクラテスの死の場面が予想外の影響をディドロの作品にあたえたことを示唆している。Georges MAY, *Diderot et "La Religieuse"*, New Haven et Paris, 1954, pp.229-230.

第1——『修道女』の修道院長マダム・ド・モニの臨終の場面におよぼした影響(ソクラテス、マダム・ド・モニ両者とも、その死は第三者——パイドンとジュザンヌ——の口から報告され、死にゆく人物は、さびしい部屋で、泣きぬれた友人たちにかこまれている。そして、みなに泣きやむように説得する)。

La Religieuse

Elle nous reprocha des larmes qui semblaient lui envier un bonheur éternel. «Mes enfants, votre douleur vous en impose ...»

C'est en prononçant ces dernières paroles que trépassa cette femme rare, qui a laissé après elle des regrets qui ne finiront point.

Phédon

«Qu'est-ce que vous faites là? s'écria-t-il alors; vous êtes extraordinaires! Si pourtant j'ai renvoyé les femmes, c'est pour cela surtout, pour éviter de leur part semblable faute de mesure; car on me l'a enseigné, c'est avec des paroles heureuses qu'il faut finir. Soyez calmes, voyons! ayez de la fermeté.»

Telle fut, Échécrate, la fin que nous avons vu faire à notre compagnon, à l'homme dont nous pouvons bien dire qu'entre tous ceux de son temps qu'il nous fut donné de connaître il fut le meilleur, et en outre le plus sage et le plus juste.

ただし、メはこの影響関係を示唆するにとどめている。——«Le parallèle est à peine indiqué et il n'y aurait sans doute pas même lieu de le mentionner si l'on ne connaissait, par ailleurs, la véritable fascination qu'exerçaient sur Diderot les dialogues de Platon et, en particulier, le *Phédon* et l'*Apologie de Socrate* dont il a laissé une traduction de sa main.

第2——『盲人書簡』のソンドサスの臨終の場面(彼と牧師ホームズとの会話におよぼした影響)。

第3——そのほか『劇作論』と『運命論者ジャック』中の主人のことばにたいする影響。

しかし、私の考えからすれば、メの指摘する第1, 第2の例とも、影響関係を示唆するには——ただ示唆するだけのことにしても——両者の関係があまりにも漠然としすぎているように思われる。

つづける。アポドロスは寝台の足もとに坐り、ソクラテスに背をむけ、両手で口をおさえて、嗚咽をこらえている。

ディドロはこの「ソクラテスの死」全体を、「ひと続きの画面」とであるといっているが、上の情景こそ、「しぐさ」によって描きだされた「画面」にほかならない。

その間ソクラテスは、毒のまわりをはやめるためにあたりを歩きまわり、ひとりひとりを慰め、はげます。ある者には、「心の強さ、哲学、徳はどこへいってしまったのかね」という。また別の者には、「女たちを帰させたのは、こんなことにならないようにするためだったのに……」という。それから、みなにこういう。——「さて、アニュトスもメレトスも、私に苦しみをあたえることはできなかったのだ。……諸君、あの世でまた会おう。……そんなに悲しんでいるようでは、再会を信じていないのだね。」

彼の両足は次第に重くなり、寝台に横になる。

自分の死後の名誉を友人に委ね、こういう。「もう私は死ぬ。のちのひとびとは、諸君の生き方をみて私の正・不正を裁くだろう。諸君がアテナイ人に私を殺したことを非難するつもりなら、諸君の生活を神聖にすることによってそうしてほしい。」

友人たちは答えようとするが、答えられない。寝台の下にいた奴隷が、ソクラテスの足を強く押えてみるが感覚がなくなっている。眼から光が消え、唇や鼻が生気を失い、手足の力がなえ、死の影がソクラテスの全体にひろがる。呼吸は混乱して、ほとんどききとれない。

彼はクリトンに頼んで体を抱きおこしてもらう。眼の光が輝きをとりもどす。「今、地上と極楽の間にいる」という。一瞬後、眼を閉じ、「もう眼が見えない、……話してくれ……これはアポドロスの手ではないか」という。みながそうだとすると、その手を握りしめる。

全身に痙攣が走る。深い溜息とともに意識を回復し、クリトンを呼ぶ。そして彼にこういう。——「クリトン……健康の神に生贄をささげてほしい……私はなおった。」これが最後のことばだった。正面にいたケベスが彼と最後の視線をかわし、クリトンが眼と口をとぎした。

以上が「ソクラテスの死」の筋書の全部である¹⁾。

1) この「ソクラテスの死」を演劇化するうえで、一番大事なことはなにか。——「論議を少なく、動作を多くすること。」すなわち、「しぐさ」に充分の役割りをはたさせることである。

ディドロはすでに『聾啞者にかんする手紙』（1751年）のなかで「身振り」の重要なことを指摘している（いうまでもなく、「身振り」は「しぐさ」の一般概念であり、舞台上の「身振り」を特に「しぐさ」とよぶ）。彼によれば、「身振り」を完全に「ことば」でおきかえることは不可能である。「なぜなら、どれほどの雄弁をもってしても表現できない崇高な身振りが存在するからである。」（『リチャードスン頌』において、ほぼおなじ見解が表明されている。「身振りは、時としてことばとおなじほど崇高である。」AT, t. V, p. 218; OE, p. 35.）そして舞台における「崇高な身振り」——ディドロは、「崇高な身振り」が表現する舞台の全体を「場面の崇高性」とよぶ——の例を4つあげる。たとえば、マクベス夫人の場合を見よう（ジェイクスピア『マクベス』第5幕第1場）。夢遊病にとりつかれたマクベス夫人が沈黙のうちに舞台を歩む。両手を洗うしぐさ。20年以上もまえに、のど首をかき切った国王の血で、まだ両手が汚れているかのように。「私はこの女の沈黙と両手の動きほど感動的なものが、ことばで表現された例を知らない。」

ディドロが、「ソクラテスの死」の舞台で特に強調したかったのは、ソクラテスを中心とする諸人物の「崇高な身振り」、すなわち、「場面の崇高性」にほかならない。

では、この場面を支配する法則はなにか。ディドロはいう。——「絵画的な構図の法則をしぐさに適用

「ソクラテスの死」にたいする反響 デイドロの『劇作論』がでると、第21章「しぐさ」の「ソクラテスの死」のプランにたいする反響が、早速あらわれはじめる。

まず『百科評論』1759年5月15日号は、デイドロのプランが「ソクラテスの死」という「ただ一枚のカンバス」のなかに、重要な思想をもちこんだ点に特徴があると指摘したあと、こう続ける¹⁾。——「もし彼の天才によって、この主題が劇化できれば、この芝居はすばらしい効果を——少なくとも哲学者たちの集りで上演された場合は——生みだすことだろう。」

グリムの『文芸通信』1759年7月1日号は、この「1場」の「ソクラテスの死」をとりあげ、「この劇が表明している観念ほど崇高なものはない。作者が構想したとおりに、この作品を上演することほど、偉大で、高尚で、感動的なことはないだろう²⁾」とのべている。さらにこの主題をあつかうのに必要な「文体の気品、力、たくましさ」をデイドロほどそなえている人間はないという。しかし「ソクラテスの死」を書くにはそれだけでは充分ではない。なぜなら、「たとえ最大の天才をもってしても、もしギリシア哲学の認識が欠けていれば、そのひとは失敗するにちがいない」からである。その点デイドロほど古代哲学に詳しい人間はいないのだから、彼こそ「ソクラテスの死」を演劇化するのにふさわしい人間だと保証している。

ついでグリムは、ヴォルテールの「ソクラテスの死³⁾」にかなりのページをさき、それが「ド・ヴォルテール氏にふさわしくない」作品であり、「そこでは一切がおざなりで、力もなければ真実もない、〔……〕筋は凡庸で、構想が悪い」と酷評している。

その後、グリムは『文芸通信』1759年8月1日号⁴⁾でヴォルテールの「ソクラテスの死」をもう

したまえ。そうすればこの法則が同一だということがわかるだろう。」すなわち現実の世界で数人の人物がある行為をする時、彼らは「もっとも真実な状態」に並ぶはずである。しかし、この自然のままの「状態」をそのままがきだすことが、ただちにより絵をうみだすことにはならない。「ここから、画家が自然の状態を変更し、それを人為的な状態に変形する必要がうまれる。舞台の上でもおなじことではあるまいか。」

デイドロは、自分があれほど感動した歴史的事実——ソクラテスの死——の「崇高性」を演劇として観客に伝えるには、演劇の虚構が不可欠であると考えていたのである。

- 1) *Journal encyclopédique*, 15 mai 1759, p.137. ただし、この引用はトゥルーソンによる (Raymond Trousson, *Socrate devant Voltaire, Diderot et Rousseau*, p.49).

なおトゥルーソンは、デリル・ド・サル⁵⁾の賞讃のことばも紹介している (*Ibid.*).—*«L'auteur du Père de famille a fait l'esquisse d'une Mort de Socrate, où il y a de la chaleur, du mouvement et des tableaux du plus grand pathétique.»* (Delisle de SALES, *Œuvres dramatiques et littéraires*, t.II, p.121.)

- 2) *CORR LIT*, t.IV, pp.120-123.

- 3) デイドロは、ヴォルテールが「ソクラテスの死」を書いたということをきくや、はげしい関心を示した。——*«Ne m'avez vous pas dit qu'on imprimoit à Genève le Socrate de de Voltaire? Si cela est, ne pourriez-vous pas nous en dépêcher un exemplaire par la poste?» Lettre à Grimm*, 13 juillet 1759, (*CORR*, t.II, p.169.)

この作品について、ル・グラはこのべている。——*«Il [Voltaire] écrit un drame en prose, Socrate, claire transposition des événements parisiens. Socrate, c'est Diderot; le grand prêtre Anitus, Omer Joly de Fleury. Et l'on reconnaît en Chomos, Chaumeix, en Bertillos, le P. Berthier, et en Grafios, le Jésuite Nonoti, ennemi personnel de Voltaire. C'est une satire aiguë des mœurs, des idées et des arguments en faveur dans le parti dévot.»* Joseph Le GRAS, *Diderot et l'Encyclopédie*, Amiens, 1928, p.130.

- 4) *CORR LIT*, t.IV, pp.128-131.

一度とりあげ、今度はその文体上の欠点——「俗っぽく、下品な表現」——を、ひとつひとつとりあげて批判している。

結論として、グリムはこういっている。——「このソクラテスの最後の場面と、ディドロがおなじ主題で粗描した場面とを比較すれば、ド・ヴォルテール氏には全然勝目がないといえそうだ¹⁾。〔……〕だが、ド・ヴォルテール氏の天才はあまりにもすばらしく、また人類は余りにも多くのものを彼に負っているから、こんな些細な失敗は見のがすこともできる。」

『サロン』における、「ソクラテスの死」を主題とする絵画の批判 18世紀の半ば頃から、「ソクラテスの死」を主題とする絵画が、続々と製作されはじめる。

もちろん、ソクラテスが絵画の主題として登場するのは、この時代が最初ではない。一種滑稽な奇人、あるいはクサンティッペに頭のあがらぬ無能な亭主、あるいは一種の魔術師、占師として、彼はしばしば画面に姿をあらわしてきた。このような伝統的ソクラテス像を改新し、真理の殉教者としてのソクラテスをはじめて提示したのが、1753年のサロンの出品作、ダンドレ・バルドンの大エスキスだった²⁾。この新しいソクラテス解釈の流れのなかに、ディドロを満足させる作品があらわれてきた。

それは、ジャルル・ミケランジュ・ジャールが1761年のサロンに出品した縦6ピエ6プース（2メートル11センチ）横8ピエ（2メートル60センチ）の作品である³⁾。表題——「ソクラテスは、アテナイ人によって毒人参を飲む刑に処せられ、平然と盃をうける。その間友人と弟子は、はげしい苦悩にうちひしがれる」。

ディドロがこの絵画でもっとも感心した点は、全体が「ソクラテスの死」という場面にふさわしい古さ——「古代の浅浮彫」を模写したような古代的雰囲気——をもっていることだった。

画面全体、および特に古代の人物らしく描かれたソクラテスの姿のなかに、「素朴さ、安らぎ」が支配している。「ソクラテスは裸体で、ひざを組んでいる。盃をもち、話をしている。平素哲学を説いている時とおなじように、いささかも興奪していない。もっとも崇高な冷静さだ。」ソクラ

1) このあとグリムは、ヴォルテールの作品とディドロの作品におけるソクラテスの死の直前のことばを対照し、ディドロの優越を証明している。CORR LIT, t. IV, pp. 130-131.

Voltaire

Socrate—«Voici le breuvage de l'immortalité. Ce n'est pas ce corps périssable qui vous a aimés, qui vous a enseignés, c'est mon âme seule qui a vécu avec nous, et elle vous aimera à jamais...»

Socrate—«Recevez mes tendres et derniers adieux, les portes de l'éternité s'ouvrent pour moi.»

Diderot

Criton—«Comment voulez-vous qu'on dispose de vous?»

Socrate—«Criton, tout comme il vous plaira si vous me retrouvez...»

[Puis se tournant vers les philosophes en souriant:]

«J'aurai beau faire, je ne persuaderai jamais à notre ami de distinguer Socrate de sa dépouille...»

Socrate—«Criton, sacrifiez au dieu de la santé, je guéris...»

2) SEZNEC, *op. cit.*, p. 18, planche 3.

3) AT, t. X, pp. 128-129; SAL, t. I, p. 89, pp. 124-125, p. 140.

テスだけが前面にうかびあがり、嘆き悲しむ哲学者たちは薄暗い背景にひっこんでいる。ソクラテスの最後のことばを筆記板に書きとめている子どもは大変美しい。

ディドロは最後に、もしひとがこの絵を近くでみれば、「いったいどうして、こんな美しい絵がジャールに描けたのだろう」と叫ばずにはいられないだろう、とつけ加えている。

これに反して、ディドロが『絵画論』（1765年の『サロン』の続篇）のなかではげしく非難した「ソクラテスの死」がある。ディドロはこの作品の作者を明示していないが、セズネックはサネであろうと推定している¹⁾。

ディドロがサネを非難する点は何にか。——それは作者がソクラテスの一生を支配していた、あの素朴さ、飾り気のなさを理解していないことである。そこから「この種の構図がもちうる一切の滑稽さ」がうまれる。「作者はギリシア中でもっともきびしく、もっとも貧しい哲学者をきらびやかな寝台の上で死におもむかせる。この画家は、徳と純潔が、牢獄の奥で、わらぶとんと粗末なベッドの上でまさに息をひきとろうとしている光景が、どれほど感動的で崇高な絵になるかということを理解していなかったのである。」

ディドロにおける「ソクラテスの死」のイメージは王侯の葬儀のイメージではありえない。なぜなら神々の住むあの世に旅だつソクラテスの魂にとって、この世の富はいかなる意味ももちえなかったにちがいないからである²⁾。

ディドロにおけるソクラテスの意味 紀元前 399 年、70歳で処刑されたアテナイの哲学者の運命は、ある意味で18世紀フランスの哲学者たち全体の受難のシンボルであった。この時代の重大事件のいくつかを思いうかべてみよう。——ディドロの入獄、『百科全書』にたいするたえざる圧迫、『社会契約論』、『エミール』の発禁、等々。

これらの自由と寛容の敵にたいする戦いのなかで、ソクラテスは、ディドロの内部で真理のために殉教することを恐れない哲学者の生き方の象徴となった。

ソクラテスは、なによりもまず、困難な実践的状況のなかでディドロを導いていく。そして、この徳行の模範としてのソクラテスを、ディドロは作品のなかにしばしば登場さす。そればかりではなく、彼は、ソクラテスからうけた強い感動を、非言語的シンボル——演劇、特にそのしぐさ——

1) AT, t. X, p. 484; OE, pp. 695-696.

アセザートゥルヌッ版テキストでは、この箇所の冒頭が <On a exposé cette année dans le Salon un tableau de la Mort de Socrate> となっているが、ヴェルニエールは、これを <On a exposé dans le Salon un tableau...> と変更したうえ、こう注記している。——<Les manuscrits qui prétendent qu'une Mort de Socrate fut exposée au Salon de 1765 font erreur; la Collection des livrets des anciennes expositions (Paris, Liepmannssohn, 1869-1870) confirme sur ce point la Table des peintures exposées aux salons du XVIII^e siècle de J. Guiffrey (Paris, 1910). Selon Jean Seznec (Essais sur Diderot et l'antiquité, Oxford, 1957, p. 123), Diderot penserait au Socrate de Sané, hors-concours pour le prix de Rome de 1762 (cf. *ibid.*, planche 6).>

なお、1732年のローマ賞の課題は、「ソクラテスの死」であり、一等サン・カンタン、二等アリザールだった。サネはコンクールには出品しなかったが、この課題の画をかき、コジャンとブーシェのすすめにしたがって、それをローマに送った。原画は今日行方不明であるが、ダンゼンによる版画が残されている。

2) このあと、「ソクラテスの死」はなおも各国の画家によってとりあげられる。SEZNEC, *op. cit.*, pp. 19-20. フランス——ペロン、ダヴィド。イタリア——チニヤロリ。ドイツ——ズイク、ローデ。

によって表現しようとした。

これらのすべてのことを、私は今までに検討してきたのであったが、最後にもう一度、ソクラテスの存在と彼の死が、ディドロの良心にとってどういう意味をもっていたかを改めて考えてみたい。

ディドロの初期の思想的関心は、自然の認識の問題であった。——自然のあらゆる現象のなかに原因、結果の無限の連鎖を追求すること（「あるひとつの分子が位置を変えたとしよう。分子は決してひとりでに位置を変えたのではない。この変動の原因はほかにまた原因をもつ。この原因は、また別の原因をもち、こうして無限に続く。時間の流れのなかでは、次々につながる原因には自然の限界がない。」 また「あるひとつの分子が位置を変えたとしよう。この変動がひとつの結果をうむ。この結果は、また別の結果をうみ、こうして無限に続く。時間の流れのなかでは、次々におこる結果には自然の限界がない」¹⁾、自然の認識から目的因を追放すること（「物理学者のつとめは知識をあたえることであり、ひとに教えるをたれるのではないから、なぜという問をすてて、どのようにという問だけに専心すべきだ。どのようにには存在したものからひきだされ、なぜはわれわれの悟性からひきだされる」²⁾。

しかし、人間存在のあり方をこのような自然認識の方法で把握することは可能だろうか、とディドロは考える。もし人間をたんなる自然的存在にまで還元してしまえば、すなわちエルヴェシウスのように「肉体的感性から有機体へ、有機体から存在へ」³⁾と一元的につらぬく自然的原因・結果の連鎖を追求すれば——人間の行為の原因は、すべてその肉体的欲望のうちにひそんでいるという帰結しかうまれてこない。

「そうだ、それが真実だ」と『ラモーの甥』の「私」はいう。——「さあ、哲学万才、ソロモンの知恵万才。いい葡萄酒を飲み、うまい料理をたらふく食べ、きれいな女たちのうえをころがりまわり、ふんわりしたふとんのうえで休む。これ以外のことは、空の空ですよ。」⁴⁾

だが、はたしてそうか。「動物の行動一般の条件を人間とよばれる一種の動物の個体の行動の動機とみなすこと⁵⁾」は誤りではないのか。人間の行為の説明には、別種の説明原理を必要とするのではないか。そうでなければ、すべての天才の行為は——そして、実践的行為者としてのすべてのディドロの努力もまた——「空の空」になってしまうにちがいない。

このディドロの大きな疑問に、決定的な解答をあたえるもの——それがソクラテスの存在と彼の自発的な死の選びであった。

かつてアナクサゴラスの自然哲学のなかに、事物の原因と必然性とを説明する真の原理を見いだそうとして、その希望を裏切られたソクラテスは、死の直前にいう⁶⁾（『パイドン』98c—99b）。

1) *De l'interprétation de la nature*, AT, t. II, pp. 52–53; OPH, pp. 234–235.

2) AT, t. II, p. 54, OPH, pp. 236–237.

3) *Réfutation suivie de l'ouvrage d'Helvétius intitulé l'Homme*, AT, t. II, p. 300; OPH, p. 564.

4) NR, p. 40.

5) AT, t. II, p. 302; OPH, p. 567.

6) 池田美恵訳『パイドン』、世界の名著『プラトン』I, pp. 556–557.

〔アナクサゴラスの立場にたつひとは〕 ぼくの行為のひとつひとつの原因を説明する段になると、こんなふうにするのだ。つまり、ぼくがいまここに坐っている原因については、まず、ぼくの肉体が骨と腱からできていて、骨は硬くて関節によってたがいに分かれ、腱は伸び縮みして肉や皮膚といっしょに骨をつつみ、この皮膚がこれら全部がばらばらにならないようにまとめている。そこで、骨はそのつぎ目でゆれ動くから、腱を弛めたり縮めたりして、ぼくはいま肢を曲げることができ、そしてこの原因によって、ぼくはここにこうして膝を曲げて坐っているのだと。〔……〕 真の原因とは、すなわち、アテナイの人たちがぼくに有罪の判決を下すのを善しとし、それゆえぼくのほうもここに坐っているのを善しとし、とどまって彼らの与える罪をうけるのがより正しいと思ったという、このことなのだ。〔……〕 骨とか、腱とか、その他ぼくのもっているいろいろなものをもつことなしには、ぼくは自分の考えを実行することができないと言うのなら、それはほんとうだろう。しかし、ぼくが行為するのは——しかも知性によって行為するのであるのに——そのようなもののゆえであって、最善のものを選んでではないというのなら、それはまったくもって、いいかげんな議論と言うべきだろう。真の原因であるものと、それがなければ原因が原因たりえないものとを、区別することができないとはね。多くの人たちが、まるで暗闇を模索するようにして、不当にも原因という名で呼んでいるものは、じつは、このようなものではないかとぼくには思われる。

ディドロが『パイドン』のこの一節を記憶にとめていたかどうか、彼がこの箇所から直接影響を受けていたかどうかは、第一義的な問題ではないであろう。なぜなら、ソクラテスの生涯と、彼の死の選びこそが、このことばの実践的帰結だったのだから。

なるほど、ソクラテスは善を選んだがために死んだ。しかし、彼の魂は不滅であり、『パイドン』後半のミュトスが語る神々の住むあの世へと旅だっていく。そしてこの魂の不滅にたいする確信が、ソクラテスの言説と行動に、あの安らぎをあたえていたのである。

しかし、と『ラモーの甥』の「彼」はいうだろう。——「死人には鐘の鳴るのも聞こえやしません。〔……〕 大理石の下で腐ろうと、土の下で腐ろうと、腐ることに変わりはありません。」¹⁾

「彼」だけではない。ディドロもまた神々の存在とあの世の存在とを——要するにすべてのミュトス、「形而上学のあらゆる空想²⁾」を——否認したはずだ。それならディドロにとってもまた、すべては死とともに消滅してしまうのではないのか。すべては結局「空の空」ではないのか。

「否」と恐らくディドロは、『ソクラテスの弁明』のなかの、ソクラテスのことばを借りていうであろう。死の判決を受けたソクラテスは最後に、彼のために有罪の投票をしたひとたち——不当に彼を罪におとし入れたひとたち——にむかって堂々とかう主張する³⁾。

1) NR, p. 25.

2) *Pensées philosophiques*, AT, t. I, p. 132; OPH, p. 17.

3) 39c-d.

おお、アテナイ人諸君、諸君に予言しておきたいと思います。諸君は私に死の決定をくだしましたが、私の死後まもなく神々が仕返しをしたまうであります。神々の懲罰は、私がこれからはめる苦しみよりも、諸君にとってもっと恐ろしいものとなるでしょう。諸君は私から解放されれば、諸君の行為の責任を問い、諸君の不正に非難の声をあげる人間がいなくなっていることでしょう。しかし、実際の結果は正反対になるに違いありません。諸君は気づかなかったでしょうが、私が今まで若者をひきとめていたのです。その若者たちが一致して立ちあがり、諸君を追求するでしょう。私より一層若いだけに、彼らの追求はそれだけ激しいものとなるに相違ありません。

偉大なる魂は決して死滅するものではない。もちろんそれは、『パイドン』のミュトスが語っていたように、ハデスをめざして旅だっていくものではないけれども、のちの世代の若者の心のなかに生き続け、その若者の手をかりて、現世でこうむった不正の恥辱を未来の世界において——超越的なあの世ではなくて、この歴史に内在する未来の世界において——そそぐであろう。ひとは後世の世代にたいするこの確信をもち続けられる限り、死を恐れることなく真理を語り続けることができる。——これが、ディドロがソクラテスの死を通して学んだ教訓の意味であった。

第Ⅳ章 「後世」の意味

1. 『百科全書』の項目《不死》

ディドロの「不死」観と「後世」 ディドロの内部に、前章で検討したような、ソクラテス信仰が成立していくのと平行して、「後世」にたいする期待の感情が次第に成熟していく。その成熟のあとを、『百科全書』の項目《不死》とファルコネとの論争書簡のうちにあとづけていこう。

1765年12月に発行された『百科全書』第8巻の項目《不死》のなかで¹⁾、ディドロはまず、伝統的な「不死」の観念を次のように紹介する。「神は不死である」（傍点は原文イタリック体の語）、「人間の魂は不死である。それは、魂が精神的なものであるからではなくて、善人と悪人が、現世の行ないにふさわしい運命にあの世でであうことを望んだ神が、魂が肉体から分離してからも、なお生き続けるように決定し、あるいは決定せざるをえなかったからである。神が魂を無からひきだした。だから魂が再び無に帰らないのは神が魂を保存しておくことを望んだからなのだ。²⁾」

ディドロは、以上のように伝統的な「魂」の「不死」説を紹介しているのであるが、彼自身はむしろこれを信じているわけではない。彼が確信している「魂」の「不死」説は、この項目後半に展開された、合理的な——伝統的な「魂」の「不死」の観念を世俗的に解釈し直したという意味で合

1) <Immortalité, immortel>, ENC, t. VIII, pp. 576–577; AT, t. XV, pp. 183–185. (ただし、AT版では、この項目の前半——伝統的「不死」の観念の説明の部分——は省略されている。)

2) ENC, t. VIII, p. 576.

理的な——観念であって、この「不死」の観念は、「われわれが、〔後世の〕ひとびとの記憶のなかで獲得する生命の意味に理解される。¹⁾」

われわれは、心のなかで、同胞がいつかわれわれにささげるであろう賛辞をききながら、一身を捨てる。生命を犠牲に捧げ、彼らの記憶のなかで生きるためにこの世に存在することをやめる。もし、この見地から見た不死が、幻想であるならば、それは偉大な魂の幻想だ〔傍点は、原文でイタリック体の語〕。

だが、未来の称賛の声をききつつ死んでいった、この偉大な魂の偉大な事跡は、いったいどのようにして、後世に伝えられることが可能であろうか。「絵画、彫刻、建築、歴史および詩」を媒介にして、とディドロは答える。「アガメムノンの前にも王たちはいたが、彼らを不死にまで高める神聖な詩人をもっていなかったから、忘却の大洋の底に、みんな沈んでしまった。²⁾」（このことばは、後述する『フェルコネとの論争書簡』中にも引用されている。ディドロはこの項目では断っていないが、これはホラティウスの次の詩句を典拠としている。<Vixere fortes ante Agamemnona / Multi; sed omnes illacrimabiles / Urgentur, ignotique longâ / Nocte, carent quia vate sacri.> Horace, *Odes*, IV, 9.³⁾）

もし詩人や歴史家が、偉大な人物の事跡を顕彰しなければ、彼らの名前はさまざまな帝国の交代とともに失われてしまうであろう。詩人や歴史家（および一般に芸術家）のみが、時間と空間の狭い枠を突破して、彼らの名をすべての時代と、すべての民族に伝えることができるのである。「偉大な人物は、文学者の手によって、はじめて不死になる。だが文学者は彼らがいなくても不死になりうるであろう。」（なぜなら文筆家は、すぐれた人間の行為をたたえなくても、自然の変遷、神々の暮しを歌うことによって、自己の名声を不死にすることができるからである。）だから文学者を軽蔑するひとは、直ちに「後世の判断」を軽蔑することになるであろう⁴⁾。

いったい「不死」の観念なしに生きられる人間——未来の世代の評価を気にせずに生きられる人間——がいるだろうか。「私にはいるとは思えない」とディドロは答える。われわれの「うぬぼれ」が、「まだ存在しない人間」（「後世」のひとびと）を「無」からひきだして、その評価にききいたり、その評価の前でおののいたりするのである⁵⁾。

ディドロは、この項目の最後を、次の意味深長なことばで結んでいる。これはすでに、彼が後年、なぜ『セネカ論』初版と第2版のなかに、ルソー攻撃文を挿入せねばならなくなるかという心理的動機を予告しているといえるだろう⁶⁾。

1) ENC, t. III, pp. 576-577; AT, pp. 183-184.

2) ENC, t. III, p. 577; AT, p. 184.

3) DF, p. 51; PC, p. 54.

4) ENC, t. III, p. 577; AT, p. 183.

5) *Ibid.*

6) *Ibid.*

もしある男が、私にむかってこういったとしよう。「屋根裏部屋におしこめた箱のなかに、後世のひとびとの眼に、私を極悪人、破廉恥漢と判断させかねない書類が残っていると仮定しよう。さらに、この箱は、私の生前には絶対に開かれない、という確実な根拠を私がにぎっていると仮定しよう。そうすれば私はわざわざ、2階にまで登って行って、箱を開き、書類をひっぱりだして焼くような面倒なことはしないだろう」と。

私はこの男にこう返事するだろう。「君は嘘つきだ」と。

2. ファルコネとの論争書簡と「後世」

論争の発端 デイドロは、今検討した項目《不死》のなかで、「後世」の評価を気にしない人間が存在するとは考えられない、と書いたのであったが、この断言にもかかわらず彼の友人のなかに、この種の人物が出現してくる。彫刻家（ただし彼は好んで「彫像家」と自称した）エティエンヌ・モリス・ファルコネがそれである。

デイドロとファルコネとの間に、「後世」の問題をめぐる書簡論争がまきおこる¹⁾。この論争の発端にかんして、ファルコネは次のように記録している。

哲学者デイドロと、彫像家ファルコネとは、タランヌ通りの暖炉の傍〔デイドロの書斎〕で、次の問題を論じあった。「後世への顧慮が、もっとも偉大な行為を実現させ、もっとも立派な作品を制作させるかどうか。」2人はお互いに自分の立場を主張し、論議し、別れた。こうした場合に常にそうであるように、それぞれ自分こそ正しいと確信しながら。彼らはいつも朝の短信のなかに、挑発的なことばをひとことはさんでおいたので、それがきっかけでよく議論が再燃した。だがとうとう忍耐の限度がきて、2人は書簡の交換を行なうにいたった。

デイドロ自身も、これとほぼおなじ内容の事柄を、ソフィー・ヴォランあての手紙（日付不明の断片）に書きとめている²⁾。また論争が開始されたころ、彼女にだした手紙（1765年11月21日付）

1) デイドロとファルコネの論争書簡の版本としては、『デイドロ全集』(AT, L), 『デイドロ書簡集』(CORR)のほかに、ディークマンとセズネック編集の版本とブノ編集の版本の2つが存在する。——DF: DIDEROT et FALCONET, *Correspondance—Les six premières lettres, texte en partie inédit, établi et présenté avec variantes, notes et introduction* par H. Dieckmann et J. Seznec, Frankfurt am Main, Vittorio Klostermann, 1959. (もっとも厳密な校訂テキストであるが、デイドロの最初の手紙3通、ファルコネの最初の手紙3通〔計6通〕を収録するにすぎない。ただし、両者の主要論点はこの6通中に出そろうている。) PC: DIDEROT et FALCONET, *Le pour et le contre—Correspondance polémique sur le respect de la postérité, Plaine et les anciens, auteurs qui ont parlé de peinture et de sculpture, édition critique avec une introduction et des notes* par Y. Benot, Paris, Les Éditions Français Réunis, 1958. (デイドロの手紙12通、ファルコネの手紙13通を収録した、もっとも包括的な版本であるが、テキストの編成に若干の疑義がある)。

2) DF, p. 8.

3) SV, t. II, p. 267.

のなかでも、「彫刻家ファルコネが口にした冗談のために、私は、本気で不死の感情と後世への顧慮の念とを擁護せざるをえなくなりました」とのべている¹⁾。

こうしてディドロとファルコネとの間の論議は、まず「炉辺」対話にはじまり、やがて「短信」の交換を対話間に介在させた段階をへて、ついに本格的書簡論争にまで発展していく。この書簡論争が行なわれたのは1765年12月4日から1767年の春にかけての1カ年余りの期間である²⁾。

私は以下において、この書簡論争の中心主題——「後世への顧慮が、もっとも偉大な行為を実現させ、もっとも立派な作品を制作させるかどうか」——をめぐるディドロ、ファルコネ両者の主張の要点を検討し、それによって、『セネカ論』初版と第2版のなかに結晶していく、ディドロの「後世」と「不死」の観念が、どのように形成されていったかを検討してみたい。

人間の魂を真に満足させるものはなんだろうか。——ディドロは論争書簡の最初にこういう問を提出し、それは「後世」の称賛であると答えている³⁾。

われわれをとりかこむ空間のひろがり、ひとびとがわれわれを賛美しているその場の空間的ひろがり、われわれが生存し、称賛を耳にしている時間のひろがり。われわれにふさわしい賛辞を、直接われわれにのべてくれるごく限られた数の人間。これら一切は、われわれの野心的な魂が包みうる対象としては小さすぎるのです。

もちろん彼は、同時代人の称賛を拒否するわけではない。しかし、その称賛の数は有限である。われわれの精神——「常に無限にむかって飛翔する精神」——を真に満足させうるのは、未来の「この限りない崇拜者の群」以外にありえない⁴⁾。そして、未来の諸世紀の称賛がわれわれにあたえられるだろうというこの内的な確信が、われわれに感覚的な、したがって「現実的なよろこび」をもたらす⁵⁾。（ディドロは、未来の称賛を、遠くからとぎれとぎれにきこえてくるフルートの合奏にたとえている。われわれは、このとぎれとぎれの音を「想像力」によってつなぎあわせ、ひとつの曲を再構成し、その曲に陶醉する。この陶醉は、われわれ自身の主体的はたらきかけが曲の構成に加わっているのだから、それだけ一層甘美なものとなる⁶⁾。）

ファルコネは、このようなディドロの主張のうちに、現実の名声だけに満足せず、未来のそれまでも要求する極度のうぬぼれを読みとろうとする⁷⁾。それにしても、「まだ存在していないひとびとが、いつかわれわれを賛美するだろう」という哲学者の断定は、はたして合理的根拠をもちうるだろうか。ファルコネは、「否」という。なぜなら、この断定が成立するためには、われわれの作

1) CORR, t. V, p. 190.

2) かりに、PC にしたがうとすれば、1765年12月4日（パリ）付のディドロの手紙にはじまり、1767年4月28日（ペテルブルグ）付のファルコネの手紙に終る。（ただし、終結の日付にかんしては疑義がある。）

3) DF, pp. 41-42; PC, p. 47.

4) DF, p. 42; PC, p. 47.

5) DF, p. 44; PC, p. 49.

6) DF, p. 41; PC, p. 47.

7) DF, p. 46; PC, p. 51.

品が、未来の諸世紀に伝えられるという現実的保証——歴史の「永続性」——が、確認されていない。だが、今までの歴史はその逆証にみちている。たとえば、アレクサンドレイア図書館の炎上、ローマの荒廃¹⁾。

これにたいしてディドロは、この「永続性」は今日では十分保証されている、という。偉大な仕事をなした人物の名は、今では大理石の碑文のなかに、否それよりももっと確実に、文学者の作品のなかに永遠に記録される。そして、その作品は、近代の2大発明——郵便馬車の制度と印刷術——によって大量に地球上にひろめられる。だから、これらの人物の事跡は地球全体が破壊されない限り、永久に後世に残されるという²⁾。

しかし、彫刻家ファルコネは、自分たちの未来の名声が、文学者の筆に依存しているという考えに我慢がならない。なぜなら、文学者の芸術批評ほど信頼できないものはないからである。たとえば、パウサニアスやプリニウス³⁾。その上、彫刻家のすぐれた作品が消滅し、愚作だけしか残らないという証拠がどこにあるか。だから現実主義者ファルコネはいう⁴⁾。

私は今これを書きながら、庭の小鳥のさえずりを両耳できいていますが、このおなじ両耳に後世の称賛の声がきこえてくれば、その称賛を実感できるでしょう。

歴史の連続性の意識としての「後世」の観念 このようにファルコネの意識のなかでは、現在と過去、現在と未来の間には、それぞれ越えがたい断絶がある。これに反して、ディドロにおいては、過去・現在・未来の連続性が主張され、この連続性の意識がまず「後世」の観念に内包されている。ではこの観念は、どのような心理的・哲学的根拠によってディドロのうちに成立したのか。

(1) 歴史の連続性の意識の心理的根拠

ディドロは、古典ギリシア・ローマ時代の芸術家（たとえばアペレス、プラクシテレス）、文学者（たとえば大プリニウス、パウサニアス）、哲学者（たとえばソクラテス、キケロ、セネカ）たちに深い尊敬と愛情をいだいていた。この感情の強さに即応して、彼の内部に次の確信が芽ばえる。——もし自分が彼らにひとしい仕事を残せば、今自分が彼らを称賛しているのとおなじように、自分の死後必ずだれかが自分を賛美してくれるにちがいない。

こうして、「私」(<moi>) 対「古代（のひとびと）」(<antiquité>) の心理的牽引力関係が、そのまま未来に移行されるとき、それと類比的に「後世（のひとびと）」(<postérité>) 対「私」(<moi>) の牽引関係が想定される。

この心理的メカニズムを、ディドロの書簡の一節にもとづいて検討してみよう。彼はこう書いて

1) DF, p. 47; PC, p. 52.

2) DF, p. 51; PC, p. 54.

3) DF, p. 60; PC, p. 62. 古代文学者——特にパウサニアスとプリニウス——の、芸術批評家としての能力の問題が、この論争の重要な副主題をなしている。

4) DF, p. 61; PC, p. 64.

いる¹⁾。

確かに、この後世が私のことをすっかり忘れてしまうなら、恩知らずだといえるでしょう。
この私は、後世のことを、ちゃんとおぼえていたのですから (moi qui me suis tant sou-
venu d'elle)〔傍点中川〕。

最後の傍点の部分は、明らかに誤りであるようにみえる。なぜなら、まだ姿をあらわさぬ「後世」にかんして、「おぼえている」(«se souvenir»)という動詞の複合過去形を使用することは、論理的に不可能なのだから。正しくは、「この私は、後世のことをちゃんと気にしていたのですから」(«moi qui me suis tant soucie d'elle»)と書かねばならない(事実ディドロは、別の個所でそう書いている²⁾)。

しかし、この部分は、はたして「気にする」(«se soucier»)と「おぼえる」(«se souvenir»)のとりちがえとして説明されるべきものだろうか³⁾。

むしろ、前文の「後世」対「私」の関係のなかに、「私」対「古代」の心理的牽引関係が、無意識に投入された結果、この一節が書かれたとみるべきではなからうか。すなわち、この句は誤りではなく、「私は古代(のひとびと)のことをちゃんとおぼえていたのですから」(«moi qui me suis tant souvenu de l'antiquité»)を意味していたと考えるのが妥当ではあるまいか。

いずれにせよ、こうしてディドロの内部に、«moi»を媒介として、過去と未来をつなぐ時間的連続性の意識、すなわち伝統、歴史の意識としての«postérité»の観念が成立する。私は次に、この観念が、どのように哲学的に根拠づけられているかを調べてみよう。

(2)歴史の連続性の意識の哲学的根拠

第1、自我の拡張の欲求——歴史の連続性の意識としての「後世」の観念、すなわち人間は過去・現在・未来の連続性のなかで生き、過去の偉大な行為のすべてが「後世」の記憶のなかで生きつづけるという観念は、まず自我の拡張の欲求から生まれてくる。

人間がある作品を創造するとは、どういうことだろうか、とディドロは問う。たとえば、彼の哲学的思索の表現、あるいはフェルコネが大理石からつくりだす彫刻とはなにか。——「私が書きとめる思想は、私です。君が生命を与える大理石は、君です。君の最上の部分です。」すなわち、創造とは外界への自我の投入、拡張にほかならない⁴⁾。

そしてその時、この哲学者や芸術家は、彼の自我が、「今ここに」ある1点からひろがって、永遠の未来と無限の空間——ロンドン、北京、土星および「不変で、広大で、無限で、永遠の空間」

1) DF, p.44; PC, p.296.

2) ディドロの第2 信への挿入文中の一節。DF, p.54, l. 8.

3) たとえば、ロトはそうように説明する。«Comment peut-on se souvenir de la postérité? Diderot n'a-t-il pas voulu écrire se soucier?» CORR, t.V, p.209, note 8.

4) DF, p.53; PC, p.57.

——に遍在することを望む¹⁾。ディドロが、自分は「後世」の称賛を望んでいると語るとき、それはこの願いを表現している²⁾。

第2、魂の不死の願望——この自我の拡張の欲求は、同時に魂の不死への願いに結びつく。創造によってひとは自我を拡張したいと思う。さらに、この自我は、自分の肉体の消滅ののちも、肖像や、アカデミーの碑文のなかに、その姿をとどめたいと思う³⁾。これらは、いずれも魂の不死への願望をあらわしている。「後世」の記憶のなかで永遠に生きつづけること。——この希望だけがひとを死の恐怖から救う⁴⁾。

こうして、魂の不死の欲求をあらわす「後世」の観念は、この問題を哲学的・修辭的表現の主題においた、古典ギリシア・ローマ以来の哲学的・文学的潮流——ディドロ自身が引用した名前をあげれば⁵⁾、アナカルシス、ソロン、大カトー、キケロ（とくにその哲学的対話篇『トゥスクルム論議』）、サルスティウス、ウェルギリウス、ホラティウス、セネカ、タキトゥス、小プリニウス——に直接結びついていく。

第3、人類の進歩への確信——しかし、いうまでもなく、ディドロにおける魂の不死の願望としての「後世」の観念はプラトンの『パイドン』にみられたような神話的表象をはぎとられ、今や完全に近代化されている。したがって、それは同時に人類の進歩にたいするディドロの確信とも合致する。

人類に進歩をもたらしたものはなにか。それは文字の発明である。文字を媒介として、偉大な人間の業績・徳行の模範と、あらゆる時代の作品・計画・実験・発見とが「後世」に伝達され、蓄積され、こうして人類は進歩の階段を常に登りつづけていく。そして「後世」にたいする人間の関心こそ、人間に文字を発明させ、人類に進歩をもたらした原動力だったのである⁶⁾。

(3)人間の生存の場としての歴史

ところで、「後世」への顧慮——および「古代」への関心——は、ただ人間だけに許された特権である。感覚だけに支配される動物は、過去と未来、すなわち歴史、をもちえない⁷⁾。

動物は瞬間のうちにしか生存していない。瞬間を越えて、なにも見ることはできない。人間は、過去と現在と未来に生きる。〔……〕先への展望、計画、あらゆる種類の期待によって自己の存在を拡大することは、人間の自然〔本性〕に属している。

1) DF, p. 52; PC, p. 56.

2) この自我の拡張の欲求は、のちに彼が、『エルヴェシウス著「人間論」にたいする逐条的反駁』のなかで「縮小的幸福」と対比して、「拡張的幸福」と規定したものに相当する。AT, t. II, p. 306.

3) DF, p. 54; PC, p. 58.

4) DF, pp. 54–55; PC, p. 58.

5) PC, pp. 158–162. (CORR, t. VI, pp. 265–268, および AT, t. XVIII, pp. 186–189 は、いずれも PC のテキストの前半の一部分だけを採録している。) ファルコネは、次の返信で、おなじく古典に依拠して、「後世」の観念の仮空性をついている。PC, pp. 162–168.

6) DF, pp. 55–56; PC, p. 59.

7) PC, p. 151.

したがって、「後世」への関心を拒否するファルコネの立場は、「展望」、「計画」、「期待」を未来に投げかけて生きるという人間の「自然」の否定につながる。それは人間を動物の次元にひきずりおろす哲学を教え、ひとを「エピクロス（<un pourceau du troupeau d'Epicure>）」の豚、すなわち享樂的放蕩者にしてしまうに遠くないからだ¹⁾。人間が生存する場は、感覚的世界ではない。それは歴史という場なのだ、とディドロは主張するのである。

歴史に内在する法としての「後世」の観念

(1) 歴史に内在する法

ところで、「後世」の観念は、ただたんに歴史の連続性の意識をあらわしているだけではない。さらに、歴史に内在する法をもあらわしている。

ディドロは長く、一切の原理——真・善・美の原理——は、狭義の「自然」に内在していると考えていた。しかし彼はしだいに、人間の主体性が関与する道德と芸術の領域においては、その原理が狭義の「自然」のなかに見いだせないことに気づきはじめる。では、この道德と芸術の原理——規範・法——をどこにもとめればよいのか。ディドロはそれを歴史のなかにもとめる。その時、「後世」は、美的価値の規範——「すぐれた美的趣味」すなわち、「決して滅びない抽象的存在」——と同一視され²⁾、あるいは真・善・美の法そのものと考えられるにいたるのである³⁾。

結局のところ、存在し続けるのは真と善と美だけです。ですから私は、死後の私の名声を傷つけかねない称賛や報償を現在獲得するよりも、死後に私の名に栄光を与えてくれるような迫害を、今この身にこうむるほうが好ましいのです。

したがって、ディドロが、すぐれた作品や正しい行為は、「後世」への顧慮によってうみだされる、と主張するとき、それはわれわれの実践が、歴史に内在する美的・道德的法への合致をめざしているということを意味している。しかし、ファルコネは、ディドロの真意を理解せず、次の3点から彼に反論を加える。

(2) ファルコネの反論

第1、制作の原因は、同時代人の非難であるという反論——ファルコネは、芸術家にすぐれた作品をうみださせる「刺戟」は、同時代人の非難、およびそれに加えて職人氣質・契約・世間の噂などだという⁴⁾。しかし、彼があげるこれらの諸原因は、すべて行為の偶発的棧因であって、ディドロにおける必然的原因に対置されるべきものではないだろう。

第2、制作の規範は「先行者」(*<antériorité>*)であるという反論——ファルコネは、規範としての「後世」の観念の空虚さを攻撃する。そして、それに代わる観念として「先行者」——たとえ

1) DF, p.56; PC, p.297.

2) DF, pp.44-45; PC, p.49.

3) PC, p.84. 真・善・美の絶対的支配という考えは、ディドロの基本的主張のひとつである。たとえば、『ラモーの甥』を見よ。NR, p.82.

4) DF, p.48; PC, p.52.

ばラファエロ——をもちだす¹⁾。しかし、ここでもファルコネの攻撃は的をはずれている。なぜなら「後世」の観念は、そのなかに「古代」の伝統を包含しており、先人の業績をモデルにすることは、けっしてこの観念と矛盾しないのだから。

第3、制作の唯一の原因は、天分であるという反論——さらにファルコネは、天分——「自然のこの純粋なたまもの」——こそが、偉大な作品の「唯一の原因」であると反論する。²⁾しかし、ここで「原因」ということばを使うことは適当でないだろう。なぜなら、天分は制作のための一般的前提条件というべきもののなのだから。そして、その意味においてなら、ディドロもまた天分の必要性を認めており、したがってファルコネの反論は、これまた的をはずれている。

(3)歴史に内在する審判者としての法

私は、今歴史に内在する法としての「後世」の観念を検討した。だが、その法は、たんに沈黙する宇宙を支配する無言の法のごときものではない。それは、歴史における究極的な審判者としてその姿をあらわす³⁾。

愚かしい人民の犠牲になった、あの哲学者、聖職者、真実を語るひとたちの心のうちには、死にのぞんで、どのような慰めが残されていたでしょう。それは、偏見がやがて消えさり、後世が、自分たちの敵の上に恥辱を投げ返してくれるだろうという慰めです。おお、迫害された不幸な人間を支える神聖な後世よ。あなたは正しい。なにびともあなたを腐敗させることはできない。あなたは善行のひとのうらみをはらし、偽善者の仮面をはぎとり暴君を倒してひきずっていく。——この正しく、慰めにみちた観念は、私を見捨てることはありません。哲学者にとっての後世は、宗教家にとってのあの世にほかなりません。

したがって、この「後世」の観念は、キリスト教が説く、最後の審判者としての神を歴史に内在化させたものである。引用の最後の一節がこのことを明瞭に示している。そして、このように合理的に解釈しなおされた本来宗教的な審判者の観念は、歴史のなかで、具体的な人間の姿——正しい判断力をそなえたひとびとからなる「小数の羊の群」(«petit troupeau»)の姿——をもってあらわれる。ディドロはこの「羊の群」を「見えない教会」(«église invisible»)ということばでよんでいる⁴⁾。

「羊の群」、「見えない教会」という語の宗教的色彩は暗示的である。これらのことばは「後世」の観念がもつ、なかば宗教的ともいえる理想的性格をなによりも雄弁に物語っている。

1) DF, p. 68; PC, p. 68.

2) DF, p. 69; PC, p. 68.

3) PC, p. 78.

4) PC, pp. 215-216. なおディークマンは、「見えない教会」と題するディドロの断片——ただし、内容はこの書簡中のテキストと若干異なる——を公刊している。INV, pp. 233-234. 「見えない教会」とは、アウグスチヌスの用語であって、「神が救いを予定した、現に生きている、すでに死んだ、これから生まれようとしている、すべての人間を包含する」「純粋な」教会である。(キリスト教の信仰を告白した現存の人間だけを含む、「必ずしも純粋であるとはいいい切れない」「見える教会」と対比されている。) E. S. MORGAN, *Visible Saints—The History of a Puritan Idea*, Cornell University Press, Ithaca, New York, 1965, p. 3.)

「感情の真理」としての「後世」の観念 したがって当然、歴史に内在する法——「後世」——にたいする確信は、合理的論証の枠をこえるだろう。だがまずディドロは、可能なかぎりの合理的説得によってファルコネの賛成をえようとする。それが、一種の賭けの説ともいうべき算術計算である¹⁾。

(1)賭け

今、一方に、「現金」、すなわちわれわれの仕事に与えられた同時代人の称賛と是認がある（有限の現実的幸福）。他方に、死後に支払われる予定の金、すなわち「後世」の称賛と是認がある（無限の可能的幸福）。ディドロは、ファルコネにたいして、なぜ後者に手をだすことをこぼむのか、「有限の金額」と「無限の金額」の双方が手に入るというのに、「有限の金額」だけしかほしがらないというのは、合理性を欠く、とせまる²⁾。（しかも、ディドロの意識においては、「後世」の称賛と是認がえられるという感情は、けっして約束手形ではなく、それ自体ですでに現実的幸福、すなわち「現金」にほかならないのである³⁾。）

だが、ファルコネはこの説を容認できない。なぜなら、彼にとって、現在の問題と未来の問題を同一の次元に並列することは不可能なのだから。だから彼はいう。——未来の称賛と是認とは、自分の死後に抽籤がおこなわれる富籤のようなものだ。どうしてそんなものに貴重な金を賭けることができようか、と⁴⁾。

(2)「感情の真理」

こうして、賭けの説によるディドロの説得は失敗に終る。だがこれはむしろ当然である。問題は本来、合理的論証の外にあるものであるから。

ディドロは、おそらく『パンセ』のパスカルを意識しながら、次のように書く⁵⁾。

感情の真理にかんして、知性を完全に納得させることは、しばしば不可能であるが、それにもかかわらず、この真理は、われわれの魂のなかで、厳密な論証の真理以上に揺ぎのないものである。感情の真理について提出されたすべての証拠は、ひとつひとつをとりだせば、反論が可能であろう。しかし、それらが束になると、うち砕くことができない。

さらにディドロは、ファルコネにむかって、自分のことばはあなたの「強情な精神」に抵触するだろう。だが私はあなたの「心情」を感動させることだけをねらっているのだ、とのべている⁶⁾。

ディドロにおける「後世」の意味 しかし、ついにディドロの真意はファルコネに理解されないまま、論争は終結する。ここで、最後にもう一度、ディドロにおける「後世」の観念の意味をふり

1) これはもちろん「賭けにおける分け前の理論」、すなわち確率論的論証とは違うけれども、おそらくディドロ、ファルコネ両者の間に、パスカルの記憶があったものと考えられる。

2) DF, p.44, p.51; PC, p.49, p.54.

3) DF, p.64; PC, p.64.

4) DF, p.47, p.58; PC, p.52, p.61. これにたいしてディドロはさらに反論を加えている。PC, pp.84-85.

5) PC, p.100. なお、ジョルジュ・メは、この一節における «le vocabulaire de Pascal» に注意をはらっている。G. MAY, *Quatre visages de Diderot*, Paris, Boivin, 1951, p.146.

6) PC, pp.139-140.

かえつてみよう。

彼がこの論争書簡で使用した「後世」ということはきわめて多義的である。それはまず、人間が生きる場所としての時間——歴史の連続性——にたいする自覚をあらわす観念であった。ついで、この観念は、その歴史に内在する法、ひいてはこの法を体現した未来の審判者の群を意味するにいたった。

だが、経験的合理主義の枠内でしか事態を判断しないファルコネにとっては、この「後世」の観念がもつ、理念的意味が理解できない¹⁾。

ディドロは、問題は「厳密な論証」にかかわるものではない、という。それは、心情の直観によって把握されるような「感情の真理」なのである。

私が、『セネカ論』初版と第2版について分析したディドロの道徳的判断は、すべて今検討した、この「感情の真理」への確信によって支えられていたのである。「感情の真理」は論証できない。だが、ディドロは、この「感情の真理」を自ら生きて、その正しさを証明したひとつの实在のモデルをもっている。それがあの『弁明』のソクラテスだったのである²⁾。

ソクラテスは、アテナイのひとびとの前で、彼らの名誉の大義を弁護するために、自分の生命の立場を念頭においていませんでした。ソクラテスは、彼らにこういいました。「アテナイ人諸君、どうすれば諸君の同情をひき、どうすれば諸君の心をなごませ、どうすれば諸君の赦免をえられるか、私にはよくわかっています。けれども、他人の場合なら非難しようとは思いますが、私の性格とはあいられないこういう手段にうったえるより、私は死ぬ方が望ましいのです。諸君が、私の振舞いと、言説を思いおこすのは、もはや私がこの世にいなかった時なのです。アテナイ人諸君、諸君はその時、私を哀惜するでありましょう。」

ディドロにとって、ソクラテスこそは、「後世」が実現してくれる正しい法の裁きを確認して死んだ徳の鑑であった。彼のように生き、彼のように死にたいというひそかな願い。——これが、「後世」論争における、ディドロのすべての主張の、もっとも深いかくされた動機だったのである。

そして、この動機によって、ディドロの内部では、彼のソクラテス崇拜と「後世」信仰とが完全に融合しているといえるであろう。

結 論

ソクラテス、「後世」と『セネカ論』 すでにのべたように（第四部、第Ⅱ章、「『ソクラテス

-
- 1) ディドロと似た問題意識から出発したカントは、「実践理性の要請」として、一方に自由、他方に魂の不死と神の存在とをたてる。ディドロの「後世」の観念が、彼独自の——しかもある意味では、カントよりも合理化された形における——魂の不死の要請であったことは、もはやいうまでもあるまい。
 - 4) PC, p. 84. ディドロのこの文章は、彼の『ソクラテスの弁明』の翻訳にはよっていない。原文 34c-35d までの一種の要約であると考えられる。

の(哲学)》」の項の後半参照),ディドロがジュネーヴの牧師ジャコブ・ウェルヌにあてた手紙(1759年1月9日付)によれば、彼の多年の念願は、戯曲『ソクラテスの死』とその「序説」にあたる道徳論を、生涯の最後に文学的遺書として書き残して、文筆生活に決別することであった。「(「序説」の道徳論の目的は、「一切をよく熟考してみるなら、この世で幸福になる最良の手段は、徳を実践することだ」と読者を説得することである。)

彼はこの手紙を書く前年には、戯曲『ソクラテスの死』の2つのプランを『劇作論』のなかで発表していたのであったが(第四部、第三章、2参照)、ついにこの劇の脚本そのものには手をつけることなくその生涯の最後の時期にさしかかろうとしていた。他方、「序説」の道徳論にかんしては、『エルヴェンヌ著「人間論」にたいする逐条的反駁』(1773—1775年)のなかで、「私には必要な材料はそろっていたと思う。だが本当のことをいえば、その第1行を書くためにペンをとる勇氣さえなかったのだ。私はいつもこう思っていたい。『[……]いや駄目だ。この崇高な仕事には、私の力量が不足しているように思える。この仕事に一生を捧げるとしても、やはり成功しないだろう』」と書き、この仕事の困難さを嘆息するばかりであった。

こうしてディドロは、ついに彼の文学的遺書には手をつけることなく、63歳をむかえようとしていた。ちょうどその頃、ラ・グランジュがほぼ完成した『セネカ著作集』の原稿を残したままで急死してしまう(1775年9月)。ドルバックとネジョンは、直ちにこの遺稿の出版を計画し、それと同時に、ディドロにたいして、『セネカ著作集』の別冊として、このネロの宮廷の哲学者・大臣の伝記と作品解説を執筆することを依頼したのであった。

この仕事を承諾して、タキトゥス『年代記』とともにセネカの著作を集中的に読みはじめたディドロの内部で、ソクラテスの生涯とセネカの生涯との間に存在する類似性が次第に強く自覚されはじめてきたものと思われる。——2人の徳行の生涯、徳ある生活を送るよう勧告し続けたその当の相手(アテナイの市民とネロ)からうけた迫害、彼らによる強制された死、死にのぞんでの泰然たる態度、「後世」によって必ず自分が理解されるであろうという確信、しかも今なおあとをたたない中傷と迫害。

この類似性をとおして、ディドロの意識の底でソクラテスのイメージとセネカのイメージとが完全に融合する。彼は今までソクラテスにたいして抱き続けてきた崇拝の念をすべてセネカに轉移し、このローマの哲学者の魂の核心に、アテナイの哲学者のそれを投げいれたのであった。

確かにディドロは、ウェルヌに書き送った決心にもかかわらず、『ソクラテスの死』も、その「序説」も書くことはできなかった。しかし彼が『セネカ論』初版を執筆しはじめるうちに、ついに『セネカ論』それ自体が、この書かれるべき戯曲とその「序説」とまったく同一の意味と価値を、ディドロにたいしてもちはじめたものと思われる。

『セネカ論』初版——およびそれに続く第2版——は、ディドロの意識の内部で、恐らく次の2点において、戯曲『ソクラテスの死』とその「序説」を代理している。

第1、『セネカ論』は、ソクラテスの死ときわめて類似したセネカの死の情景を含んでいる。——この部分は、ディドロ自身が語るように「タキトゥスの『年代記』の翻訳」であって、決して演

劇作品ではないけれども、彼を信頼する弟子たちにとり囲まれ、「知恵の教え」を説きながら従容として死んでいく場面は、ソクラテスの死と同様に感動的である。そしてセネカは、ソクラテスとおなじように、弟子たちに贈る「もっとも貴重な」「贈物」として、彼が「この世で生きた姿」を残したのであった。そればかりではない。セネカはソクラテスとおなじように——死にいく白鳥は神のみもとへ飛び立とうとして喜びの歌を歌っているのだと教えた、あの『パイドン』（84e—85b）のソクラテスとおなじように——魂の天上への飛翔を確信していたのであった。

第2、『セネカ論』は、戯曲『ソクラテスの死』の「序説」である道德論を含んでいる。——もちろん、『セネカ論』の道德的考察は、決して体系的に展開されているわけではない。だが晩年のディドロは、「感情の真理」である道德は、「厳密な論証の真理」である自然科学とは異なることを自覚するようになっていたのであって、この時期の彼にとっては『セネカ論』の道德論がもつ「断片的」性格は、すべての道德論が本来もつべき必然的性格にほかならなかった。

しかし、『セネカ論』は以上のようにただたんに、戯曲『ソクラテスの死』とその「序説」を代理しているだけではない。戯曲の部分が与える感動と「序説」がもつ説得力とをともにそなえたようなジャンル——道德論の展開にもっとも適合したジャンル——を老年期のディドロがついに『セネカ論』によってつかまえたものと考えられる。すなわち、個々の人間が現実生きた歴史をとおしての道德の探求という形態である。このジャンルにおいて、歴史と道德論とが、すなわち現実生に与えられた条件の洞察と道德的善悪の考察とが融合する。人間の行為の善悪にかんする判断は、もはや決して抽象的な世界で——超経験的な論証の世界で——くだしうるものではない。行為の善悪は、必ず主体と、その主体が苦しみつつ生きていく具体的状況とのかかわりあいのなかで問われなければならない。

道德論はしたがって、人間の行為の歴史というテキストに付けられた、テキスト解説者の傍注としてしか成立しえないであろう。『セネカ論』が、モンテーニュに連なる *«essai»* という形式を選ばざるをえなかった、必然的理由がここにある。このようにして、『セネカ論』初版と第2版は、ディドロが書くべき文学的遺書、戯曲『ソクラテスの死』とその「序説」を代理すると同時に、究極的にはそれを越えて、彼の生涯において、現実生に書かれた唯一の文学的遺書としての意味を獲得するにいたったのである。そしてディドロは、この遺書をとおして、永遠に「後世」に語りかけている。彼にとっては遺書を書く行為そのものが、「後世」における不死への確信のあかしにほかならなかった。その意味で、『セネカ論』初版と第2版とは、ディドロのセネカ観の集約であると同時に、彼のソクラテス観、「後世」観の総括的表現でもあったのである。

『セネカ論』初版と第2版との相違点と一致点 私は、セネカの晩年の4年間にわたる意識の変容の表現として、『セネカ論』初版と第2版とを小論において比較したのであったが、そのさい私はディドロが、この2つの版本のそれぞれにおいて叙述しているセネカの生涯の諸事実、ネロの宮廷とローマ世界の諸事件、あるいはセネカの著作・言説の個々の内容を紹介するという道はとらなかった（もしこの方法をとれば、多様な、雑然たる、反復の多い、そしてしばしば矛盾した主張の大海にのみこまれてしまっていたことであろう）。

もちろん私は決してこれらの諸事実の検討を避けたわけではなかった。しかし、小論の目的は、これらの事実、あるいは主張そのものの紹介にあるのではなくて、ディドロがこれらの事実あるいは主張の表現をとおして、どのような仕方に対象的世界の全体を把握しようとしているかを、理解することであった。問題は、ディドロの意識の全体の構造——考え方、感じ方、信念のあり方（あるいは信仰）の全体が形成する構造——とその全体を構造化している深層の意識を把握することであった。

私はそのことを、『セネカ論』の2つの版本のテキストの分析によって解明しえたように思う。その結果、析出しえたのは、ディドロの意識全体をその基底において構造化しているひとつの絶えざる傾向——共感する対象、特に不当に苦しめられている存在と同一化したいという絶えざる傾向——であった。

このようにして私は、ディドロの意識の深層にあるこの同一化という根本的な対象関係（世界全体とのかかわり方）の次元に視点を据えてみる時、あれほど多様な、あれほど雑然とした彼の主張のかずかず——道徳、政治、にたいする彼の批判的主張と、中傷された徳行のひとたちの不死への確信——がすべて一貫した整然たる秩序のもとに、その姿をあらわすことを理解しえたのであった。

この基本的な世界の把握の仕方にかんする限り、『セネカ論』初版と第2版の意識の構造は完全に一致しているといえるであろう。しかしこの一致にもかかわらず、1778年の初版と1782年の第2版との間には、大きな内容上の変化があらわれてくる（第2版のテキストの分量は、初版のそれに比して1.7倍増加しているが、ここでは分量それ自体は問題ではない）。

第1、ディドロは、第2版にいたってはじめて、彼が作中に描きだそうとしているのが、「物語中に姿をあらわすさまざまな人物の魂であると同時に、私自身の魂でもある」という事実を、明示的に告白したのであった。もちろん、『セネカ論』初版もまた、ディドロのセネカにたいする同一化の意識を媒介にして、潜在的には、ディドロ自身の魂を表出していた、といえるであろう。しかし初版では、ディドロはまだそのことを明確には自覚しておらず、少なくともそのことを公表していない。すべてが自覚され、顕在的に明らかにされるのは、ディドロが第2版において、昔の自己を批判し、かつての自分が人生経験の欠如のゆえにセネカにくだした誤った断罪を撤回する時である。そのとき老ディドロは、「運命の裏切りがわれわれを巻きこむ恐ろしい二者択一の経験」をすでに生きてきた人間として、おなじ経験を生きたセネカの「賢者の苦悩」を自己自身の主体の内面において理解する。そして『セネカ論』第2版のセネカのイメージのなかに、ディドロ自身の姿が自覚的に投入されるにいたる。『セネカ論』第2版は、今やセネカのための弁明から、ディドロの自己自身のための弁明に転化する。

第2、『セネカ論』初版を執筆中のディドロを支配していたのは、1776年アメリカ革命のために蜂起した人民にたいするはげしい共感、1775年前後から政府にはいりはじめた開明的政治家たち——テュルゴ、マルゼルブたち——にたいする強い期待、およびこれらの要因に触発された現実の政治的改革にたいする燃えあがる熱情であった。だが、初版から第2版までの間に、ディドロをとりまくフランスの現実には大きな転換がおこる。彼自身と理念をともにしえた改革派の政治家たちは、

すべて政府から退陣してしまう（1776年5月13日のテュルゴの下野にはじまり、1781年5月19日のネッケルの下野に終わる）。あとには、「弱い国王」と、「背徳的な」「廷臣」と、「いやしい」「人民」だけが残る。そして、このような危機的状況のなかで、かつては自分と「一身同体」であるとさえ考えていたグリムすら彼を裏切る。政治への幻滅と、友情への幻滅が、『セネカ論』第2版全体を包みこんでいる。

第3、しかし、現実へのこの深い幻滅にもかかわらず、あるいはこの深い幻滅のゆえに、ディドロの意識の深層では、セネカ、ソクラテスとの連帯感と、彼らとともに自分もまた「後世」のひとつとの記憶のなかで永久に生き続けていくという確信がますます強まっていく。『セネカ論』初版の表層を支配していた、現実改革への関心が消えさることによって、ディドロの意識の深層を支配しているこの内面的信念が、今や第2版固有のテキストの中心主題として浮かびあがってくるのである。

だが、『セネカ論』初版から第2版にかけてのこの内容の変化にもかかわらず、そこには決して矛盾はない。なぜなら、人間は経験によって次第に変容成熟し、時間と経験によって少しずつ賢明になっていくということこそ、『セネカ論』初版と第2版とが、われわれに語り続けてきた教えだったからである。

かつて32歳のディドロは、文学者・思想家としての生涯を、古典（ジャフツベリ）の読解と注解の仕事によって開始した。そして今、69歳の老ディドロは、文筆家としての長かった生涯を、再び古典（セネカ、タキトゥス）の読解と注解の仕事によって終えようとしている。ジャフツベリに導かれて道徳の省察からはじめたディドロは、当時として、およそ考えられうる限りの知的遍歴——哲学、数学、物理学、生理学、政治学、経済学、歴史、言語学、小説と演劇の創作、文学批評、美術批評、音楽理論など——をへたのちに、もう一度道徳の問題の根本的検討にもどって、生の円環を閉じようとしている。この一生の遍歴をへて、ディドロはその道徳論になにを加えたであろうか。——それは道徳の問題は、生きて苦しんだ各人の経験の内省をぬきにしては論じることができないという洞察であった。

この洞察によって、ディドロは生の経験のまっただなかに立つ。だが彼の視線は、同時に、この経験の世界を越えてあるなにもものかの上にそそがれている。もし誤解さえなければ、このあるなにもものかに向かう視線を「奇妙な魂」と呼ぶことも、あるいは「宗教的精神」と呼ぶこともともに可能であろう。事実ディドロはそれを「奇妙な魂」（『ラモーの甥』）とも「宗教的精神」（断片「見えない教会」）とも呼んでいる。

『セネカ論』第2版の最後で、ディドロは、彼を論駁する大勢の批評家に呼びかけていう。「もし、最後に語るものが正しいというのであれば、批評家諸君、今度は君たちが語りたまえ。そして正しくありたまえ」と。

現実のこの経験の世界にとどまる限り、ディドロはもはや決して、批評家たちに勝つことはないであろう。ちょうど、ソクラテスがアテナイの現実には破れ、セネカがローマの現実には破れたのとおなじように。だが、徳あるひとたちの不死と彼らの最終的勝利への確信を、『セネカ論』の2つの

版本によって生の最後の時に語り終わった彼にとって、この現実の世界で、論争の最後の発言者になることにいったいいかなる意味がありえたであろうか。「もし人間が、人間的なものを越えることがなかったなら、人間はなんと軽蔑すべきものであらう」とセネカは『自然の問題』（序文）のなかで語っている。——この信念によって、今やディドロは一切の論敵から解放される。そして彼は、この生涯の落日の瞬間にあたって、彼の生き方と仕事のすべてを、時の判定にゆだねたのである。

中傷された才人、迫害された賢者は、後世のひとびとの手で恨みをはらしてもらおうのを待っています。不正な裁判官は目覚めたひとびとや、大胆な著作家を恥辱にまみれさせたこともありました。後世のひとびとは、この恥辱を裁判官のうえに投げかえます。ソクラテスは、アテナイのひとびとにむかっていました。「私が弁護しているのは、私の立場ではありません。それは諸君の立場なのです。私の死後、みなが諸君のことをなんというか、今からこの耳にありありときこえてきます。同胞市民諸君、諸君自身のことを考えてください。諸君は、他国のひとびとと、未来の世代の人間の眼に、諸君自身の名誉を汚そうとしているのです」と。ボワローは、ラシーヌの『アタリー』の上演が失敗したあと、彼にむかってこういいました。「しばらくお待ちなさい。遅かれ早かれ、みなはあなたのもっとも美しい作品を口笛でやじりたおしたということに気づくでしょう」と。そして、ラシーヌの生前、彼をなぐさめた詩人の予言は、死後に実現しました。アイスキュロスがソフォクレスに敗れた時、彼は後世の判定に訴えました。「私は自分の戯曲を時にささげる」と彼はいっています。きたるべき時代に訴えるというのは、偉大な魂だけができることなのです（『ファルコネあての論争書簡』第2信）。

付録 『セネカ論』第2版の反響

反響 1782年1月に『セネカ論』第2版が刊行されるや、すぐにメーステールの書評が『文芸通信』3月号にあらわれる¹⁾。

彼はまず、「大規模に増補された」この「新版」が「概して初版よりもずっと好意的に読者に迎えられたように思われる」とのべ、続いて次のように報告する。ディドロは、反哲学者的立場をとるジャーナリストたちが初版に加えた「反論」の若干を選びだし、これらの「反論」と、それにたいする彼自身の「回答」とを、「作品本文」中に編入した。これによって「セネカの弁護はより完全に、あるいは少なくとも、より巧妙になった」と。

また初版が発表されたとき、読者をあれほど「憤激」させた「J.-J. ルソー攻撃文」は、第2版において非常に拡充されたのであるが、ディドロは今度はそのなかで、ルソーを非難する具体的理由を詳細に説明したために、かえって「はげしさも弱まり」、「醜悪さもへった」と。

1) CORR LIT, t. XIII, pp. 103-105.

第2版は、初版テキストの全体に大量の付加文が挿入されて成立したものであるから、そのために全体の構成に「混乱」が生じたことは否定できない。しかし、メーステールによれば、「この混乱すら、作品の独創性も、興味深さもへらしてはいない」のである。彼はまた、『セネカ論』第2版の文体は、タキトゥスの翻訳の部分も、ディドロ自身の文章の部分も、ともにタキトゥスそのひとの文体のように美事であるという。だから、「タキトゥスの手法にもっとも通じた読者」ですら、ディドロの文章とタキトゥスのそれとを、「簡単にとり違え」てしまうだろうと評している。

メーステールは最後に、ディドロが「初版で削除せざるをえなかった多数の文章」が、第2版に付加されたと指摘し、その例として、クラウディウスの若干の発言をあげている¹⁾。読者はこれを読めば、すぐさまそれが、あるフランス国王〔ルイ15世〕の有名な発言であったことに気づくだろう、という。

『セネカ論』第2版のこの種の大胆な内容のせいであろうか、1782年3月頃、ディドロはこの本の流通が、しばしば税関で妨害されることに悩んでいる²⁾。

ほぼこの頃、ディドロの宿敵フレロンもまた『文学年報』1782年第11信で、『セネカ論』第2版をとりあげる³⁾。彼によれば、この第2版は「〔初版の誤りを〕全然訂正せずに、くだくだしいおしゃべりで内容をふくらました新版」にすぎず、「首都の住民」も、「宮廷人」も、ともに「著者の無礼な尊大さとぶしつけな調子」に憤激の念を新たにしているという。そして「身分のあるひとたち」は、「自称ソクラテスたち」のひとりであるディドロの「尊大な調子と哲学的たわごと」に応酬するために、「現代のアリストファネス」（パリッソ）の喜劇『哲学者たち』を再演させようとしている、と報じている。

第1巻の内容にかんしては、まず大きな2つの矛盾を指摘する。――第1、セネカの言動の矛盾（哲学者は孤独の生活にひきこもるべきだと説いておきながら、ネロの宮廷に止まり続けたこと）。第2、ディドロの言動の矛盾（ネロの宮廷の愛妾の権力を攻撃しておきながら、彼の愛妾「ポッパエア」にも比すべき女〔ポンパドゥル夫人〕の好意にすがり、彼女が死ぬやいなや今度は一転して、きわめて道徳的な、きわめて一貫性のない教え）を説きはじめたこと）。ついで、第2版中の「もっとも注目すべき、もっとも面白い付加文」としてルソー攻撃のそれを、また「愉快的挿話」としてディドロの自己批判文（『人間の真価と徳論』の訳注におけるセネカ非難）の取り消しとをそれぞれ紹介する。

第2巻については、まずディドロがエカテリーナ2世にむかっていった、「私は奴隷の国と呼ばれている所で私の心のなかに自由人の魂を見だし、自由人の国と呼ばれている所で、奴隷の魂を見いだしました」ということばをとりあげ、これこそ「外国の宮廷」で自分の祖国を侮辱した発言

1) *Ibid.*, p.105. この点にかんしてはすでに説明した。

2) *CORR*, t.XV, p.292. ディドロは、1782年3月頃（正確な日付不明）、徴税請負人ジャン＝ロベール・トロンシャンにあてた手紙で、「所帯用品」しかはいていない「荷物」が半月前から「税関吏」にさしおさえられてしまっていると苦情をいい、暗にトロンシャンの介入を要請している。ヴァルロットは、この荷物が危険物（すなわち『セネカ論』第2版）を含んでいたのだろうと推測している。

3) *L'Année littéraire*. 1782, <Lettre XI>, pp.217-251.

だといって彼を弾劾する。ついで『ルーキーリウスあての書簡集』、『怒りについて』、『寛仁について』、『摂理について』、『ヘルウィア慰藉文』、『人生の短さについて』、『賢者の恒心について』、『自然の問題について』、および巻末に収録された、初版にたいする非難への反論、をとりあげてそれぞれにきびしい批判をくだしている（ただし、ディドロが引用した『摂理について』の一節にかんしては、「万事に公平であるために」、その美しさに贅辞を呈している）。

フレロンは、この書評の最後に結論としていう¹⁾。

このように、頑固なD***氏は 若干の訂正が必要な初版のテキストに、——そしてわれわれは、機会があるごとに、多かれ少なかればげしい調子で、遠慮なく同氏に訂正の必要を説いてきたのであったが——ヴィルギュルひとつ変更しようとはしなかった。それどころか、今度はかえって、もともと常規を逸した、怪物的作品の奇妙さ、支離滅裂さ、破廉恥さ、図々しさを強めるようなことをしたのである。だからこの作品は、諸君を教化したり、楽しませたりする代わりに、憤慨させ、あるいは驚かしさえるのである。

フレロンが『文学年報』の上記書評ですでに報じているとおり、ディドロに敵対する宮廷人や文学者の一派は、『哲学者たち』の上演を計画していた。これについて、メーステールは、『文芸通信』1782年5月号のなかで、次のように書いている²⁾。「いったいどういう新しい利害の出現、あるいは権力ある保護者の介入が、パリッソ氏とフランス座とを突如として和解させたのか、私は知らない。ただ確実なことは、20年以上も同氏を忘却の淵に放置しておいたくせに、今やフランス座はもはや彼しか問題にしないようなふりをしているということだ。」

しかし、この試みは失敗であった。『文芸通信』1782年6月号において、おなじメーステールは「『哲学者たち』の再演〔6回連続公演〕は、〔その直前に行なわれたおなじパリッソの〕『後見人たち』、『危険な男』の再演同様、成功していない」と書いている³⁾。

回避された危機 『セネカ論』第2版の反響の輪が次第にひろがっていくにつれて、ディドロの身に危険が迫りはじめる。

すでにメトラは、『秘密通信』4月4日の項に次のように記録している⁴⁾。

ディドロ氏は、クラウディウス帝にかんする試論のために、しばらくはバステューユ〔投獄〕を恐れた。国王は国璽尚書〔ミロムニル〕にむかってこういわれた。「私は、この本のなかに、デュ・バリ夫人の愛人である国王〔ルイ15世〕の振舞いをあてこすった記事を見つけた。著者をうんと叱りつけるがよい。ただし痛い目にはあわせないように。」

1) *Ibid.*, p. 251.

2) CORR LIT, t. XIII.

3) *Ibid.*, p. 157.

4) CORR, t. XV, p. 300. メトラからの引用は、ヴァルロットによる。

このルイ16世の発言の現場に立会っていた警察代理官ル・ノワールは、より詳細な記録を残している¹⁾。

彼〔ディドロ〕は、パリの某書店から、『クラウディウスとネロの治世論』という表題をもつ、近作のひとつを売りだした。この書店は前もって原稿を検閲に提出していた。……検閲官は、そのなかの宗教を傷つける箇所を削除しておいたのだが、ディドロは訂正していない原稿の写しを外国に送り、削除なしで印刷させてしまった。外国で出版された本〔ベルギーで印刷させた『セネカ論』第2版〕の包みが、国境で地方書籍組合によって差し押さえられたので、著者は私に会いにきた。勅命逮捕状の危険が身に迫っているというのが、彼のいい分だった。

事実、国璽尚書は〔この件で〕国王の命令をあおいだ。すると陛下は、宗教の敵である哲学者は、処罰しなければならぬ、といわれたが、それ以上はなにも積極的な意見をのべられなかった。ド・ミロムニル氏は、ディドロが老齢であることを顧慮して、まず彼から事情を聴取したいと思われた。それで同氏は、私の立会いのうえでディドロを喚問し、断固たる威厳をもって、彼に思うところを語られた。彼は恐縮した様子で、即座に一種の謝罪のことばを私にむかってのべて、跪ずいた。彼は、国璽尚書にむかって、昔ヴァンセンヌに投獄された時の経験を語り、そのあと、次のことばを口にした。「私は老年の誤ちのゆえに、昔の無法な行為以上に処罰されるのが当然であると思います。どうか、この罪の告白と、悔悟の行為を、おうけ下さい。」

この事件にかんして、ヴァルロットは、警察代理官ル・ノワールが、テュルゴとともに入閣した開明派のひとりであり、フリー・メーソンのメンバーとして、出版の自由を擁護しつつ哲学者をかばい、特にディドロのためには『セネカ論』第2版のパリ通関の便宜をはかることまでした人物であったという事実を想起すれば、「彼が報告した情景」が実は「喜劇の1場」にすぎなかったことが判明するはずだ、と説明している²⁾。

この事件の噂は、たちまちパリにひろがりはじめたらしく、バジョーモン『秘密回想録』5月15日の項は、「現代のタキトゥスにむかう大嵐」の襲来を記録している³⁾。

ディドロは、恐らくル・ノワールの忠告をいれて、5月中旬から下旬の間に、彼あてに正式に次の手紙を書く⁴⁾。

1) *Ibid.*, p. 301. ル・ノワールからの引用は、ヴァルロットによる。

2) *CORR*, t. XIII, p. 302.

3) *Ibid.*, p. 300.

4) *Ibid.*, pp. 302-303.

あなたの統治制度を熟慮すればするほど〔……〕そこではわれわれの身体と財産とが完全に保護されていることがますますよくわかってまいります。若いとき、私は5階の部屋に住んで、ばかげたことを書いておりました。そして『お喋りな宝石』のために、ヴァンセンヌの小塔に拘禁されました。財産と名声をえた私は、2階にまでおりてきて、現在そこに住んでいますが、その部屋で以前よりもっと危険な作品を書いたことをここに告白いたします。私は正当で思いやりのある教訓をいただきました。私は今後死ぬまで行ないを改めます。

ル・ノワールは、「哲学者は、きびしい叱責をうけただけです」と記録している¹⁾。なお彼によれば、ディドロは警察の事情聴取にも出頭して、上の申し立てをくり返したという²⁾。『セネカ論』第2版を出版し、文学的遺書を「後世」に残した以上、ディドロはもはや無用の抵抗の必要を認めなかったのであろうか。この事件は、2～3週間で終わり、『セネカ論』第2版は次第に歴史の大海のなかに沈みこんでいった。

前 号 の 訂 正 表		
	前 号 の 原 文	訂 正
p. 45 (目次)	第三部『セネカ論』第2版の意識の構造	第三部『セネカ論』第2版の意識の構造——初版の意識の構造との一致と差異
p. 45 (目次)	第四部 ディドロの生涯における、ソクラテス、セネカ、後世の意味	第四部 ディドロの生涯におけるソクラテスと「後世」の意味
p. 49, l. 1	グリム	メーステール
p. 49, l. 3	グリム	メーステール
p. 98, l. 17	『文学通信』	『文芸通信』
p. 159, l. 8	グリム	メーステール
p. 159, l. 9	グリム	メーステール
p. 159, l. 15	グリム	メーステール

1) *Ibid.*, p. 303. ル・ノワールからの引用はヴァルロットによる。

2) *Ibid.*, p. 303, note 3.